厚真町
浜厚真（はまあつま）3遺跡

—日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成14年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

厚真町

浜厚真（はまあつま）3遺跡

―日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成14年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

遺跡と遺跡周辺の空中写真（国土地理発行のものを複製したものである）1975年9月撮影

1　調査区完掘状況（西から）

1　調査風景（南西から）

2　Tピット検出状況（西から）

1　ＴＰ－73（手前）・74（奥）検出状況（東から）

2　基本土層Ｈ45区（南西から）

3　基本土層Ｐ31区（北東から）

例　　言

1．本書は国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部が行う日高自動車道厚真門別道路工事に伴い財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成14年度に実施した厚真町浜厚真3遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は第1調査部第4調査課が担当した。

3．本書の執筆は第Ⅰ章；遠藤香澄・山中文雄、第Ⅱ章；笠原　興・山中、第Ⅲ章；鎌田　望・山中・芝田直人、第Ⅳ章；山中・鎌田・芝田、第Ⅴ章；鎌田・芝田、第Ⅶ章；山中が担当し、鎌田が編集を担当した。文責は文末に記してある。

4．現地調査時の写真撮影、整理作業時の遺物撮影および写真整理は笠原が行った。

5．炭化物の放射性炭素年代については(株)地球科学研究所に依頼した。

6．Ｔピット内堆積物等の花粉分析および植物珪酸体分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

7．土器、石器などの実測・トレースは藤内まゆみ、河崎まなみが行った。

8．調査報告終了後の出土資料および記録類については厚真町教育委員会が保管する。

9．調査にあたっては下記の諸機関、各位からご協力、ご指導を頂いた（順不同、敬称略）。

北海道教育委員会、厚真町教育委員会、鵡川町教育委員会、早来町教育委員会、明治カルチェ・ヴィヴァン文化講座、日高山脈館、厚真町教育委員会　長橋政徳・乾　哲也・乾　希、門別町図書館郷土資料館　川内谷　修・橋本　晋、苫小牧市勇武津資料館　佐藤一夫、苫小牧市立博物館　赤石慎三・宮夫靖夫、苫小牧市教育委員会　兵藤千秋・工藤　肇、浦河町教育委員会　川内　基、平取町沙流川歴史館　森岡健治・長田佳宏、静内町郷土館　藪中剛司、鵡川町四季の館まなびランド図書室　高地美穂子、浦河町立浦河第二中学校　菊池　哲、苫小牧民報社　川村省二、厚真町　阿部栄乃進

記号等の説明

1．本文中の遺構の表記は以下に示す記号を使用し、原則として確認順に番号を付した。
　ＴＰ：Ｔピット　Ｐ：土坑　Ｆ：焼土
2．遺構図の方位は真北を示す。遺構平面図の＋はグリッドラインの交点で、傍らの名称記号は右下のグリッドを示している。遺構平面図の小数字とセクションレベルは標高（単位m）である。
3．掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。各図にはスケールを付けている。
　遺　構　１：40　　土器拓本１：３　　剥片石器１：２　　礫石器　１：３　　石　斧　１：２
4．遺構の規模については以下の要領で示した。なお、一部破壊されているものについては現存長を（　）、不明のものは－で示した
　Ｔピット・土坑
　確認面での長径×短径／床面・底面での長径×短径／確認面からの最大深さ（単位m）
　焼土
　確認面での長径×短径／確認面からの最大厚さ（単位m）
5．土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の覆土についてはアラビア数字で表した。
6．石器の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」（単位cm）で示した。なお、破損しているものについては現存最大値を（　）で示した。なお、実測図中でたたき痕は「∨―∨」、すり痕は「｜―｜」で範囲を示した。

目　　次

口絵カラー
例　　言
記号等の説明
目　　次
挿図目次
表 目 次
図版目次

Ⅰ　調査の概要
1　調査要項 …… 1
2　調査体制 …… 1
3　調査にいたる経緯 …… 1
4　調査の経過と概要 …… 5
5　調査結果の概要 …… 7
Ⅱ　遺跡の位置と環境
1　位置と環境 …… 8
2　地　　形 …… 8
3　歴史的環境 …… 10
4　周辺の遺跡 …… 14
Ⅲ　調査の方法、遺物の分類
1　調査区の設定と調査の方法 …… 23
(1)　調査区（グリッド）の設定 …… 23
(2)　調査の方法 …… 25
2　土層の区分 …… 27
3　遺物の分類 …… 32
(1)　土　　器 …… 32
(2)　石 器 等 …… 33
(3)　土製品・石製品 …… 33
Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物
1　概　　要 …… 34
2　Ｔピット …… 34
3　土　　坑 …… 112
4　焼　　土 …… 112
Ⅴ　包含層出土の遺物
1　土　　器 …… 116
2　石　　器 …… 122
Ⅵ　自然科学的手法による分析
1　放射性炭素年代測定　　㈱地球科学研究所 …… 127
2　浜厚真３遺跡の古植生について　　パリノ・サーヴェイ株式会社 …… 131
3　浜厚真３遺跡のフローテーション資料 …… 140
Ⅶ　成果と問題点
1　浜厚真３遺跡のＴピットについて …… 141

写真図版
引用・参考文献
報告書抄録
奥　　付

挿　図　目　次

Ⅰ　調査の概要
図Ⅰ－１－１　厚真町の位置と遺跡の位置 …… 2
図Ⅰ－１－２　日高自動車道と浜厚真３遺跡の位置 …… 4
Ⅱ　遺跡の位置と環境
図Ⅱ－１－１　遺跡位置図 …… 9
図Ⅱ－３－１　５万分の１地形図(1) … 12
図Ⅱ－３－２　５万分の１地形図(2) … 13
図Ⅱ－４－１　厚真町の遺跡分布図(1) …… 16
図Ⅱ－４－２　厚真町の遺跡分布図(2) …… 18
図Ⅱ－４－３　厚真町の遺跡分布図(3) …… 19
図Ⅱ－４－４　厚真町の遺跡分布図(4) …… 20
図Ⅱ－４－５　苫小牧東部工業地帯遺跡分布図 …… 22
Ⅲ　調査の方法、遺物の分類
図Ⅲ－１－１　調査区設定図 …… 23
図Ⅲ－１－２　調査範囲と周辺の地形図 …… 24
図Ⅲ－２－１　土層模式図 …… 28
図Ⅲ－２－２　土層断面図(1) …… 30
図Ⅲ－２－３　土層断面図(2) …… 31
Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物
図Ⅳ－２－１　Ｔピットの分類 …… 35
図Ⅳ－２－２　地形断面図 …… 36
図Ⅳ－２－３　Ｔピット分布図 …… 37
図Ⅳ－２－４　Ｔピット底面における長径・短径の相関図 …… 40
図Ⅳ－２－５　Ｔピット長短比・深さの相関図 …… 42
図Ⅳ－２－６　Ａ１－Ｌ型Ｔピット分布図 …… 45
図Ⅳ－２－７　Ａ型Ｔピット分布図 … 46
図Ⅳ－２－８　Ｂ型Ｔピット分布図 … 47
図Ⅳ－２－９　Ｃ型Ｔピット分布図 … 48
図Ⅳ－２－10　ＴＰ－１～３ …… 49
図Ⅳ－２－11　ＴＰ－４～６ …… 50
図Ⅳ－２－12　ＴＰ－７～９ …… 51
図Ⅳ－２－13　ＴＰ－10～12 …… 52
図Ⅳ－２－14　ＴＰ－13～15 …… 53
図Ⅳ－２－15　ＴＰ－16・17 …… 54
図Ⅳ－２－16　ＴＰ－18～20・81 …… 55
図Ⅳ－２－17　ＴＰ－21～23 …… 56
図Ⅳ－２－18　ＴＰ－24～26 …… 57
図Ⅳ－２－19　ＴＰ－27・28 …… 58
図Ⅳ－２－20　ＴＰ－29～31 …… 59
図Ⅳ－２－21　ＴＰ－32～34・80 …… 60
図Ⅳ－２－22　ＴＰ－35～37 …… 61
図Ⅳ－２－23　ＴＰ－38・39 …… 62
図Ⅳ－２－24　ＴＰ－40～42 …… 63
図Ⅳ－２－25　ＴＰ－43～45 …… 64
図Ⅳ－２－26　ＴＰ－46・47 …… 65
図Ⅳ－２－27　ＴＰ－48～50 …… 66
図Ⅳ－２－28　ＴＰ－51～53 …… 67
図Ⅳ－２－29　ＴＰ－54・55・57 …… 68
図Ⅳ－２－30　ＴＰ－56・58・78 …… 69
図Ⅳ－２－31　ＴＰ－59～61 …… 70
図Ⅳ－２－32　ＴＰ－62～64 …… 71
図Ⅳ－２－33　ＴＰ－65～68 …… 72
図Ⅳ－２－34　ＴＰ－69～71 …… 73
図Ⅳ－２－35　ＴＰ－72～74 …… 74
図Ⅳ－２－36　ＴＰ－75～77 …… 75
図Ⅳ－２－37　ＴＰ－79・82・83 …… 76
図Ⅳ－２－38　ＴＰ－84～86 …… 77
図Ⅳ－２－39　ＴＰ－87～89 …… 78
図Ⅳ－２－40　ＴＰ－90～92 …… 79
図Ⅳ－２－41　ＴＰ－93～95 …… 80
図Ⅳ－２－42　ＴＰ－96～98 …… 81
図Ⅳ－２－43　ＴＰ－99・100 …… 82
図Ⅳ－２－44　ＴＰ－101～105 …… 83
図Ⅳ－２－45　ＴＰ－106～108・113 … 84
図Ⅳ－２－46　ＴＰ－109～111 …… 85
図Ⅳ－２－47　ＴＰ－112・117～121 … 86
図Ⅳ－２－48　ＴＰ－114～116 …… 87
図Ⅳ－２－49　ＴＰ－122～127 …… 88
図Ⅳ－２－50　ＴＰ－128～130 …… 89
図Ⅳ－２－51　ＴＰ－131～133 …… 90
図Ⅳ－２－52　ＴＰ－134～137・169 … 91
図Ⅳ－２－53　ＴＰ－138～140 …… 92
図Ⅳ－２－54　ＴＰ－141～143・158 … 93
図Ⅳ－２－55　ＴＰ－144～146 …… 94
図Ⅳ－２－56　ＴＰ－147～149 …… 95
図Ⅳ－２－57　ＴＰ－150～152 …… 96
図Ⅳ－２－58　ＴＰ－153～155 …… 97
図Ⅳ－２－59　ＴＰ－156・157・159 … 98
図Ⅳ－２－60　ＴＰ－160～162・171 … 99
図Ⅳ－２－61　ＴＰ－163～168 …… 100
図Ⅳ－２－62　ＴＰ－170・172・173、Ｐ－１ …… 101
図Ⅳ－２－63　Ｔピット出土の土器 … 110
図Ⅳ－２－64　Ｔピット出土の石器 … 111
図Ⅳ－４－１　焼土分布図とＦ－１～３・７ …… 113
図Ⅳ－４－２　Ｆ－４～６・８～14 … 114
Ⅴ　包含層出土の遺物
図Ⅴ－１－１　包含層出土土器分布図(1) …… 117
図Ⅴ－１－２　包含層出土土器分布図(2) …… 118
図Ⅴ－１－３　包含層出土の土器(1) … 119
図Ⅴ－１－４　包含層出土の土器(2) … 120
図Ⅴ－２－１　包含層出土石器等分布図(1)

……123
図Ⅴ－2－2　包含層出土石器等分布図(2)
……124
図Ⅴ－2－3　包含層出土の石器　……125
Ⅵ　自然科学的手法による分析
図1　花粉化石群集　……134
図2　植物珪酸体群集　……136
図3　分析試料採取位置　……138
Ⅶ　成果と問題点
図Ⅶ－1－1　Tピット底面における長径・短径の相関図（厚真・静川台地）　……142

表　目　次

Ⅰ　調査の概要
表Ⅰ－5－1　検出遺構数一覧　……7
表Ⅰ－5－2　出土遺物点数一覧　……7
Ⅱ　遺跡の位置と環境
表Ⅱ－3－1　厚真町の遺跡一覧　……17
表Ⅱ－3－2　苫小牧東部工業地帯遺跡一覧
……21
Ⅲ　調査の方法、遺物の分類
表Ⅲ－2－1　土層観察表　……29
Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物
表Ⅳ－2－1　Tピット分類結果　……35
表Ⅳ－2－2　Tピット分類別規模一覧
……41
表Ⅳ－2－3　Tピットの重複一覧　…43
表Ⅳ－2－4　Tピット一覧　……102
表Ⅳ－2－5　Tピット出土遺物一覧
……109
表Ⅳ－2－6　Tピット掲載土器一覧
……110
表Ⅳ－2－7　Tピット掲載石器一覧
……111
表Ⅳ－4－1　焼土一覧　……112
表Ⅳ－4－2　焼土出土遺物一覧　……115
表Ⅳ－4－3　焼土掲載土器一覧　……115
表Ⅳ－4－4　焼土掲載石器一覧　……115
Ⅴ　包含層出土の遺物
表Ⅴ－1－1　層位別出土土器点数一覧
……116
表Ⅴ－1－2　包含層出土掲載土器一覧
……121
表Ⅴ－2－1　層位別出土石器一覧　…122
表Ⅴ－2－2　包含層出土掲載石器一覧
……126
Ⅵ　自然科学的手法による分析
Ⅵ－1　表1　厚真町浜厚真3遺跡放射性炭素年代測定分析試料一覧
……128
Ⅵ－2　表1　分析試料　……131
表2　花粉分析結果　……133
表3　植物珪酸体分析結果　…135
Ⅵ－3　表1　浜厚真3遺跡フローテーション資料一覧　……140
Ⅶ　成果と問題点
表Ⅶ－1－1　「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」Tピット一覧　……144

図　版　目　次

口絵1　遺跡と遺跡周辺の空中写真
口絵2　1　調査区完掘状況（西から）
口絵3　1　調査風景（南西から）
2　Tピット検出状況（西から）
口絵4　1　TP－73（手前）・74（奥）検出状況（東から）
2　基本土層H45区（南西から）
3　基本土層P31区（北東から）
図版1　1　調査風景（南西から）
2　Tピット検出状況（北から）
図版2　1　Tピット検出状況（西から）
2　西側拡張部Tピット検出状況（北西から）
図版3　1　調査区完掘（西から）
2　東側拡張部完掘（北から）
図版4　1　西側拡張部完掘（北から）
2　調査区全景（南西から）
図版5　1　基本土層（南西から）
2　基本土層拡大
3　南北土層断面（南から）
図版6　1　西側拡張部調査区全景（北から）
2　西側拡張部南北土層断面（西から）
3　西側拡張部東西土層断面（北から）
図版7　1　TP－1土層断面（南東から）
2　TP－1完掘（南東から）
3　TP－2土層断面（南東から）
4　TP－2完掘（南東から）
5　TP－3土層断面（南東から）
6　TP－3完掘（北から）
7　TP－4土層断面（南東から）
8　TP－4完掘（北西から）
9　TP－5土層断面（南から）
図版8　1　TP－5完掘（南西から）
2　TP－6土層断面（南西から）
3　TP－6完掘（南西から）
4　TP－7土層断面（南から）

	5	ＴＰ－７完掘（南から）
	6	ＴＰ－８土層断面（南東から）
	7	ＴＰ－８完掘（南東から）
	8	ＴＰ－９土層断面（北東から）
図版９	1	ＴＰ－９完掘（南から）
	2	ＴＰ－10完掘（南から）
	3	ＴＰ－11土層断面（南から）
	4	ＴＰ－11完掘（南から）
	5	ＴＰ－12土層断面（南から）
	6	ＴＰ－12完掘（南から）
	7	ＴＰ－13土層断面（南から）
	8	ＴＰ－13完掘（南から）
	9	ＴＰ－14土層断面（南から）
図版10	1	ＴＰ－14完掘（南から）
	2	ＴＰ－15土層断面（南から）
	3	ＴＰ－15完掘（南東から）
	4	ＴＰ－16土層断面（東から）
	5	ＴＰ－16完掘（南東から）
	6	ＴＰ－23土層断面（南から）
	7	ＴＰ－23完掘（南から）
	8	ＴＰ－24土層断面（南から）
	9	ＴＰ－24完掘（南から）
図版11	1	ＴＰ－25土層断面（南から）
	2	ＴＰ－25完掘（南から）
	3	ＴＰ－27土層断面（南から）
	4	ＴＰ－27完掘（北西から）
	5	ＴＰ－28土層断面（東から）
	6	ＴＰ－28完掘（西から）
	7	ＴＰ－29土層断面（南西から）
	8	ＴＰ－29完掘（南西から）
	9	ＴＰ－31土層断面（南から）
図版12	1	ＴＰ－31完掘（南から）
	2	ＴＰ－32土層断面（南から）
	3	ＴＰ－32完掘（南から）
	4	ＴＰ－33土層断面（南西から）
	5	ＴＰ－33完掘（南西から）
	6	ＴＰ－34土層断面（東から）
	7	ＴＰ－34完掘（東から）
	8	ＴＰ－35土層断面（南から）
	9	ＴＰ－35完掘（南から）
図版13	1	ＴＰ－37土層断面（西から）
	2	ＴＰ－37完掘（西から）
	3	ＴＰ－47土層断面（南東から）
	4	ＴＰ－47完掘（南東から）
	5	ＴＰ－48土層断面（南東から）
	6	ＴＰ－48完掘（南東から）
	7	ＴＰ－50土層断面（東から）
	8	ＴＰ－50完掘（北西から）
	9	ＴＰ－54土層断面（南から）
図版14	1	ＴＰ－54完掘（南から）
	2	ＴＰ－56土層断面（南から）
	3	ＴＰ－56完掘（南西から）
	4	ＴＰ－57土層断面（南から）
	5	ＴＰ－57完掘（南から）
	6	ＴＰ－58土層断面（南から）
	7	ＴＰ－58完掘（南から）
	8	ＴＰ－59土層断面（南東から）
	9	ＴＰ－59完掘（南東から）
図版15	1	ＴＰ－62土層断面（南から）
	2	ＴＰ－62完掘（北西から）
	3	ＴＰ－63土層断面（南から）
	4	ＴＰ－63完掘（南から）
	5	ＴＰ－66土層断面（西から）
	6	ＴＰ－66完掘（南から）
	7	ＴＰ－67土層断面（西から）
	8	ＴＰ－67完掘（西から）
	9	ＴＰ－70土層断面（南から）
図版16	1	ＴＰ－70完掘（南から）
	2	ＴＰ－72土層断面（北から）
	3	ＴＰ－72完掘（北から）
	4	ＴＰ－75土層断面（南から）
	5	ＴＰ－75完掘（南から）
	6	ＴＰ－76土層断面（北東から）
	7	ＴＰ－76完掘（北東から）
	8	ＴＰ－78土層断面（南から）
	9	ＴＰ－78完掘（南東から）
図版17	1	ＴＰ－82土層断面（東から）
	2	ＴＰ－82完掘（東から）
	3	ＴＰ－85土層断面（北東から）
	4	ＴＰ－85完掘（北東から）
	5	ＴＰ－88・89土層断面（南から）
	6	ＴＰ－88完掘（西から）
	7	ＴＰ－89完掘（北から）
	8	ＴＰ－91土層断面（南から）
	9	ＴＰ－91完掘（南から）
図版18	1	ＴＰ－97土層断面（南から）
	2	ＴＰ－97完掘（南から）
	3	ＴＰ－99土層断面（南から）
	4	ＴＰ－99完掘（南から）
	5	ＴＰ－100土層断面（南から）
	6	ＴＰ－100完掘（南から）
	7	ＴＰ－102土層断面（南から）
	8	ＴＰ－102完掘（南西から）
	9	ＴＰ－103土層断面（南から）
図版19	1	ＴＰ－103完掘（南から）
	2	ＴＰ－104土層断面（南から）
	3	ＴＰ－104完掘（南から）
	4	ＴＰ－108土層断面（東から）
	5	ＴＰ－108完掘（西から）
	6	ＴＰ－111土層断面（南から）
	7	ＴＰ－111完掘（北から）
	8	ＴＰ－113土層断面（北から）
	9	ＴＰ－113完掘（南から）
図版20	1	ＴＰ－114土層断面（南から）
	2	ＴＰ－114完掘（北から）
	3	ＴＰ－121土層断面（南から）
	4	ＴＰ－121完掘（北から）
	5	ＴＰ－125土層断面（北から）
	6	ＴＰ－125完掘（北から）
	7	ＴＰ－127完掘（北から）
	8	ＴＰ－128土層断面（南から）
	9	ＴＰ－128完掘（北から）

図版21　1　ＴＰ－130土層断面（北から）
2　ＴＰ－130完掘（北から）
3　ＴＰ－131土層断面（北から）
4　ＴＰ－131完掘（北から）
5　ＴＰ－132土層断面（北から）
6　ＴＰ－132完掘（北から）
7　ＴＰ－134土層断面（東から）
8　ＴＰ－134・169完掘（北西から）
9　ＴＰ－135完掘（南から）
図版22　1　ＴＰ－136土層断面（西から）
2　ＴＰ－137土層断面（西から）
3　ＴＰ－138土層断面（南から）
4　ＴＰ－138完掘（北から）
5　ＴＰ－139土層断面（南から）
6　ＴＰ－139完掘（北から）
7　ＴＰ－140土層断面（東から）
8　ＴＰ－140完掘（東から）
9　ＴＰ－141・158土層断面（南東から）
図版23　1　ＴＰ－141・158完掘（南東から）
2　ＴＰ－142土層断面（南から）
3　ＴＰ－142完掘（南から）
4　ＴＰ－143土層断面（南から）
5　ＴＰ－143完掘（南東から）
6　ＴＰ－144土層断面（南から）
7　ＴＰ－144完掘（南から）
8　ＴＰ－145土層断面（南から）
9　ＴＰ－145完掘（南から）
図版24　1　ＴＰ－146土層断面（東から）
2　ＴＰ－146完掘（東から）
3　ＴＰ－147土層断面（南東から）
4　ＴＰ－147完掘（南東から）
5　ＴＰ－148土層断面（南東から）
6　ＴＰ－148完掘（南東から）
7　ＴＰ－149土層断面（南東から）
8　ＴＰ－149完掘（北西から）
9　ＴＰ－150完掘（東から）
図版25　1　ＴＰ－150杭跡土層断面(南から)
2　ＴＰ－151完掘（北から）
3　ＴＰ－153土層断面（南から）
4　ＴＰ－153完掘（北から）
5　ＴＰ－159土層断面（南西から）
6　ＴＰ－159完掘（南西から）
7　ＴＰ－160土層断面（南から）
8　ＴＰ－160完掘（南から）
図版26　1　ＴＰ－161土層断面（南から）
2　ＴＰ－161完掘（南から）
3　ＴＰ－165土層断面（南西から）
4　ＴＰ－165完掘（北から）
5　ＴＰ－167完掘（北から）
6　ＴＰ－168完掘（南から）
7　ＴＰ－170完掘（南から）
8　ＴＰ－170杭跡土層断面（南西から）
図版27　1　Ｆ－１検出（南東から）
2　Ｆ－１土層断面（南東から）
3　Ｆ－５検出（西から）
4　Ｆ－９・10・11検出（西から）
図版28　1　Ｔピット出土の土器
図版29　1　Ｆ－11出土の土器
2　包含層出土の土器(1)
図版30　1　包含層出土の土器(2)
図版31　1　Ｔピット出土の石器
2　焼土出土の石器
3　包含層出土の石器(1)
図版32　1　包含層出土の石器(2)
Ⅵ章－２
図版１　花粉化石・植物珪酸体

Ⅰ　調 査 の 概 要

1　調 査 要 項

事 業 名：日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委 託 者：国土交通省北海道開発局室蘭開発建設部
受 託 者：財団法人北海道埋蔵文化財センター
遺 跡 名：浜厚真(はまあつま)３遺跡（北海道教育委員会登載番号：Ｊ－13－72）
所 在 地：勇払郡厚真町字浜厚真(ゆうふつぐんあつまちょうあざはまあつま)525－１ほか
調査面積：3,390㎡
受託期間：平成14年４月１日～平成15年３月31日
発掘期間：平成14年７月29日～平成14年10月25日
整理期間：平成14年11月１日～平成15年３月31日

2　調 査 体 制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

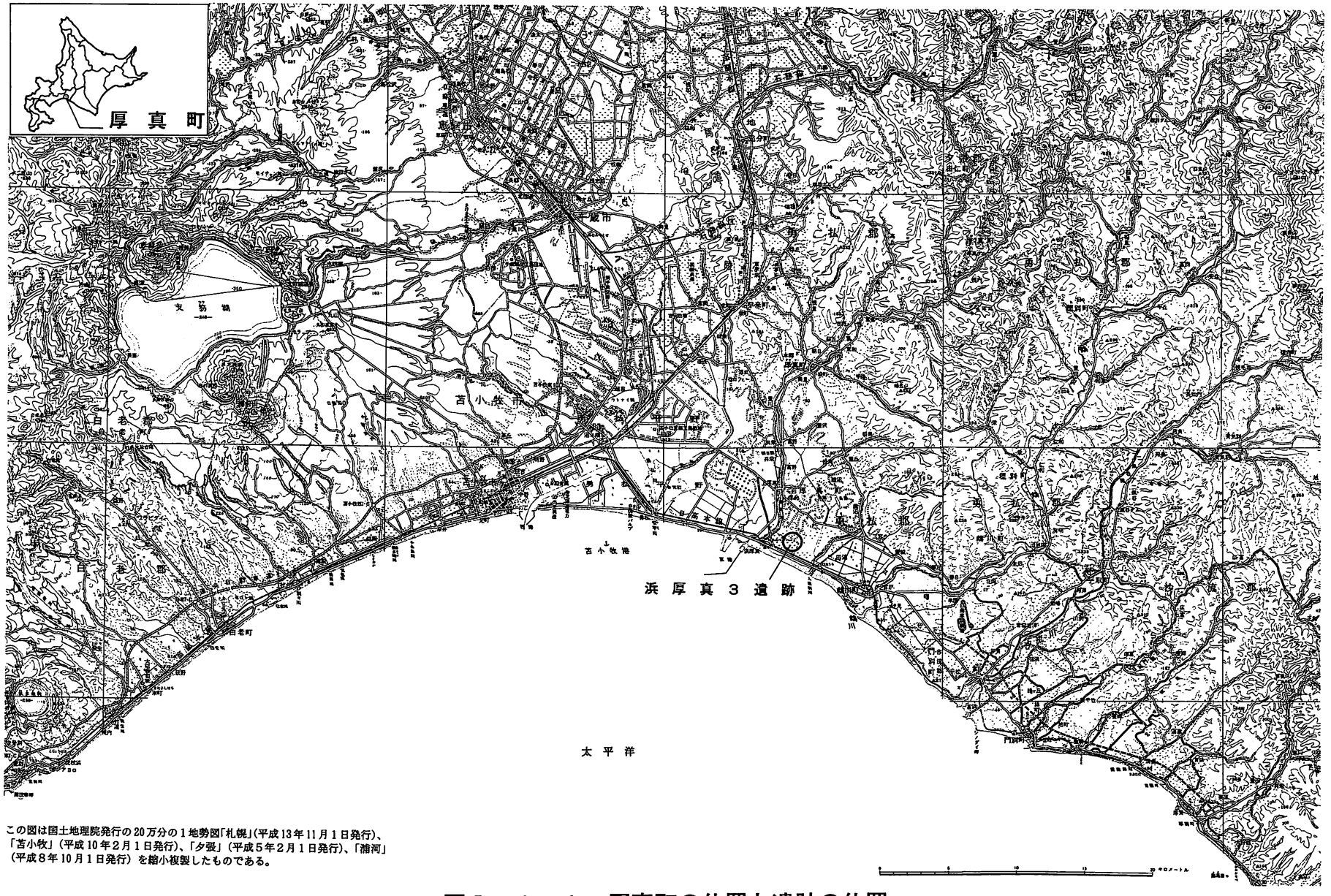
理　事　長	大澤　満	（６月31日まで）
	森重　楯一	（７月１日から）
専 務 理 事	宮崎　勝	
常 務 理 事	畑　宏明	（６月１日から）
第１調査部長	畑　宏明	（兼務）
第４調査課長	遠藤　香澄	（発掘担当者）
主　　査	鎌田　望	（発掘担当者）
主　　任	中田　裕香	
主　　任	笠原　興	
主　　任	芝田　直人	
文化財保護主事	山中　文雄	（発掘担当者）

3　調査にいたる経緯

日高自動車道は苫小牧市から浦河町まで、日高地方太平洋岸の町を通る総延長120㎞の高規格幹線道路である。建設事業は昭和63（1988）年度から着手され、この間平成10（1998）年７月には苫小牧東ＩＣから沼ノ端西ＩＣまでの４㎞が、続いて同10月には厚真ＩＣに至る15．７㎞が開通し、いずれも暫定供用区間となっている。厚真静内間の55㎞が着工準備を含む事業区間で、その先浦河までは計画区間である。現在、厚真門別間20㎞の建設工事が進められており、このうち厚真ＩＣ～鵡川ＩＣ(8.6㎞）間は平成15（2003）年夏に供用開始の予定である。

この厚真門別間の道路建設にかかる埋蔵文化財包蔵地に関しては平成５（1993）年６月に北海道開発局室蘭開発建設部と北海道教育委員会（以下道教委）の間で事前協議がなされた。これを受けた道教委文化課では平成５年８月に所在確認調査を実施し、平成８（1996）年８月以降、平成11（1999）年、平成12（2000）年および平成13（2001）年に厚真町、鵡川町、門別町内の遺跡について順次試掘による範囲確認調査を行っている。

範囲確認調査を行った遺跡で工事計画の変更が困難で発掘調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地は厚



この図は国土地理院発行の20万分の１地勢図「札幌」(平成13年11月１日発行)、「苫小牧」(平成10年２月１日発行)、「夕張」(平成５年２月１日発行)、「浦河」(平成８年10月１日発行)を縮小複製したものである。

図Ⅰ－１－１　厚真町の位置と遺跡の位置

真町内1か所（浜厚真3遺跡）、鵡川町内4か所（宮戸3遺跡、宮戸4遺跡、米原3遺跡、米原4遺跡）、門別町内2か所（チャシコツパナクシナイ遺跡、コムカラ遺跡）の計7か所である。

平成12（2000）年度より、室蘭開発建設部から財団法人北海道埋蔵文化財センターが委託を受け発掘調査を実施している。これまで平成12年度に鵡川町の4か所の遺跡を、平成13（2001）年度には宮戸4遺跡の調査を行い、それぞれ報告書が刊行されている（北埋調報153、北埋調報168）。このうち宮戸3遺跡と米原3遺跡の調査はすべて終了している。

浜厚真3遺跡については平成8年8月に最初の試掘調査が実施されている。今年度拡張調査した「西側部分」を含む37,500㎡を対象に行われているが、遺構・遺物ともに検出されていない。その後、工事計画が進展する中、平成13年6月には前回調査した東側に連続する範囲7,700㎡についての試掘調査が実施された。土壙、Tピットと土器片、フレイク等が検出され、この結果をもとに発掘調査を要する範囲約2,600㎡が提示された。

第3年次にあたる平成14（2002）年度の日高自動車道関連の調査については鵡川町宮戸4遺跡と米原4遺跡の2遺跡合わせて7,600㎡を対象に行う計画に基づき、5月7日から開始した。両遺跡ともに継続調査である。浜厚真3遺跡については平成15（2003）年度に調査を予定していた。

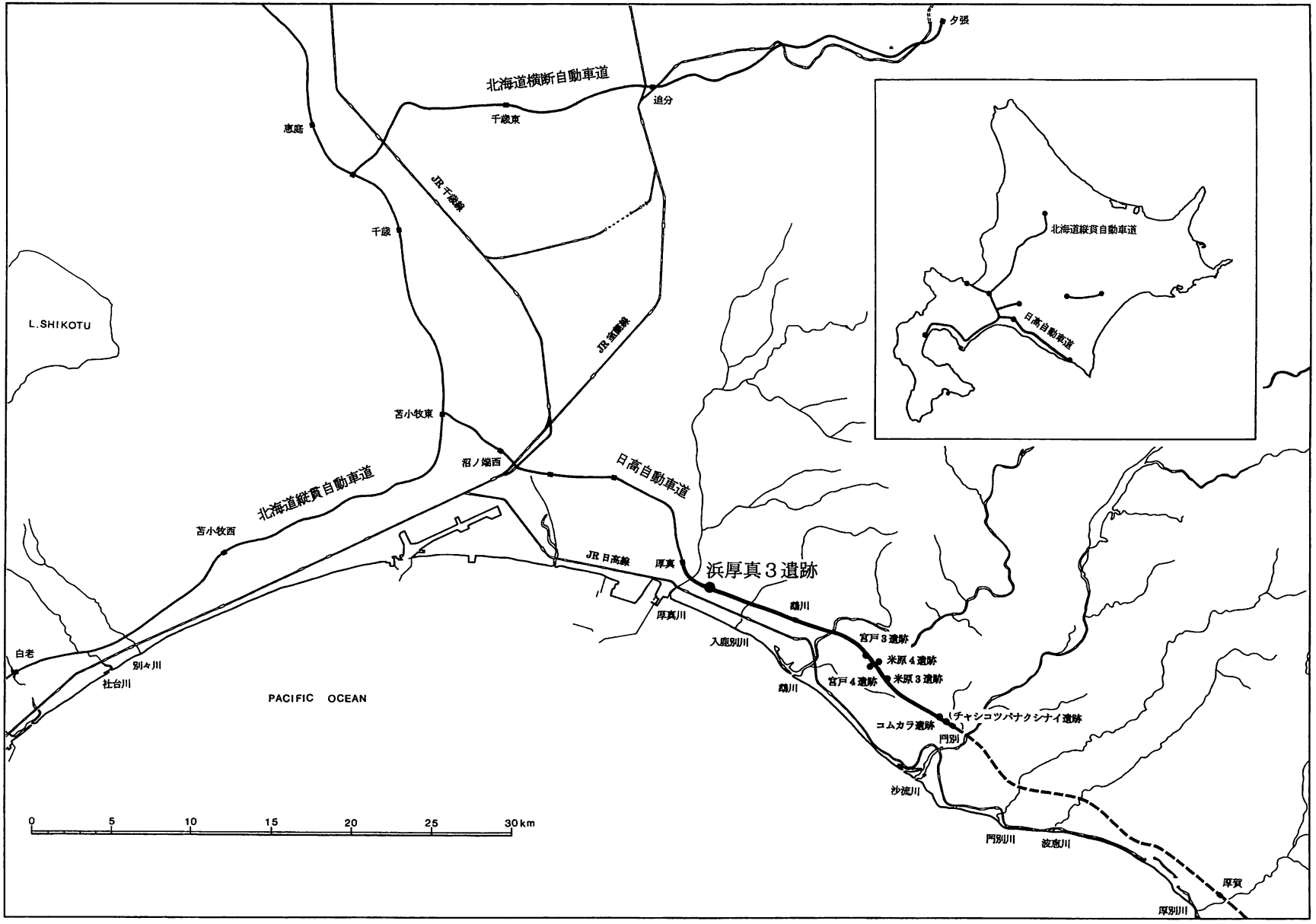
調査が順調に進む6月中旬、室蘭開発建設部苫小牧道路事務所（以下道路事務所）と埋文センターとの間で発掘進捗状況の報告等について打合せが行われた。この際、今年度調査予定の宮戸4遺跡「樹林部分」の調査にあたっては、樹木の伐採の前にイモッペ川の改修と町道切り替えの終了が前提条件であることが示された。樹木伐採については対外交渉が難航しており、7月中の伐採は困難な状況であった。5月、6月での調査の進捗状況から、8月中には2か所の現道部分を残し宮戸4遺跡と米原4遺跡の調査が終了する見通しであった。この時点で道路事務所側からは樹木の少ない範囲を調査する方法の検討等が提案された。

現地での打合せ後、調査担当者（埋蔵文化財センター）からの報告を受けた道教委文化課では道路事務所と協議を行った。宮戸4遺跡「樹林部分」の調査方法や着手時期については、不確定要素が多いこと等から、文化課ではこの段階で浜厚真3遺跡の調査を新たに取り込む内容の検討を道路事務所に打診している。発掘調査が進展する中、「樹林部分」等の取り扱いについては引き続き両者間で調整がなされていた。

7月4日、道路事務所から「樹林部分」については次年度以降に先送りし、浜厚真3遺跡（当初計画では2,600㎡）を取り込む内容が提示された。7月中旬には、宮戸4遺跡の樹林部分（1,300㎡）は次年度以降と決定された。

以上のような経過で、7月下旬から宮戸4遺跡の調査と並行して浜厚真3遺跡の表土、火山灰除去を始めとした設営準備や周辺の環境整備を始めている。本格的調査は宮戸4遺跡水田部分の調査が終了した9月上旬から開始した。包含層の残存状態は良くはなかったが、予想をはるかに上回る数のTピットが検出されたことから、調査中の9月下旬には道教委文化課の指導のもと、範囲確認の再試掘調査を実施している。この結果、Tピット群が当初予定範囲の東側と西側の両方向にさらに拡がっていることが確かめられたことから、これらの区域も今年度調査を行うこととした。最終的な調査面積は3,390㎡である。このような調査の経過は今年度刊行の宮戸4遺跡・米原4遺跡の報告書においても説明してある（北埋調報185）。

このほか、今年度は門別町内の遺跡について門別町教育委員会が、9月～11月にチャシコツパナクシナイ遺跡の調査を実施し、早期・中期の遺物とTピット9基が検出されている（発掘担当者；文化財係長川内谷　修氏）。



図Ⅰ－１－２　日高自動車道と浜厚真３遺跡の位置

4　調査の経過と概要

浜厚真３遺跡は厚真町市街地の15㎞ほど南西に位置する浜厚真地区にある。二級河川厚真川の下流域左岸にあたり、現海岸線から直線距離にして２㎞ほど内陸、標高７ｍ～12ｍの台地縁辺部にある。調査前は農地で主に牧場として利用されていた。

前述のように浜厚真３遺跡に関する協議が進む７月中旬、室蘭開発開発建設部苫小牧道路事務所と現地打ち合わせを行い、８月上旬からは重機を導入して攪乱層を含む表土や残存部では厚さ40㎝～50㎝で堆積する火山灰（樽前ａ・樽前ｂ・有珠ｂ降下火山灰）層を除去する作業を開始した。

調査区のほぼ中央の平坦部では牧場として造成されていたため、(あるいはそれ以前の耕作による)削平がほぼ全域で認められた。北側では土砂採取により２ｍ以下の深部まで掘削されており、大型ゴミが埋め立てられている攪乱部分もあった。平坦部から続く南東側は急激に落ち込む斜面で火山灰が１ｍ以上もあり、泥炭層が厚く堆積する低湿地であった。掘り下げていくと常に水が溜まる状態であった。

表土、火山灰層除去の結果、上位の包含層（縄文時代晩期～アイヌ文化期）であるⅢ層はＩラインよりも北側の11ｍ～８ｍの斜面とそれに続く平坦部のごく限られた範囲にのみ残存していた。そして、調査区中央部の標高７ｍ～８ｍの平坦面ではほぼ全域において、縄文時代の包含層であるＶ層の中位（Ｖｂ～Ｖｃ層）まで削平されている状態であることが分かった。また、調査範囲の西端(35ライン)に２か所３本、南東端（44ライン）にも１本電柱があり、さらに調査区東側の一部をエゾヤマザクラの記念植樹域が占めていた。いずれも表土掘削のできない状態であったことから、苫小牧道路事務所と道教委文化課に状況を報告した。これらの取り扱いについては将来的に「電柱」の移設計画が無いこと、「植樹部分」についても現状を保つ旨の回答が道路事務所側から示され、文化課の判断により、今年度の調査範囲から除外することとなった。

縄文時代の遺物包含層の残存状態は不良であったが、上部が削平されていることは遺構の有無の確認という観点からは好条件であった。平坦部では黒色土や黄褐色土の溝状や長楕円形を呈する落ち込みが密集して検出され、その形状からＴピットが相当数あることが分かった。調査開始までの段階で確認できたＴピットは75基余であり、当初予想をはるかに上回る数であった。

８月下旬、宮戸４遺跡の調査が現町道部分を残しほぼ終了した時点で、調査員、作業員ともに浜厚真３遺跡へ移動し、９月２日から本格的調査に着手した。終了予定は10月24日である。調査区全域をジョレンで清掃した後、北側斜面に残る包含層（Ⅲ層～Ｖ層）の調査と南東部泥炭層の堆積する低湿地の調査、および平坦部にある40数基のＴピット精査を開始した。

北側斜面の包含層（Ⅲ層～Ｖ層）からは遺物はほとんど出土せず、Ｔピット数基が検出される程度であった。平坦部ではＴピットの精査と並行して残存するＶ層の掘り下げを行った。Ｖ層中からは主に縄文早期後葉の遺物が散点的に出土する状態であった。全体として遺物が稀薄なことから遺構調査に主力を注ぎ調査を進めていった。

調査開始から10日ほど経過した９月中旬には、すでに90基を上回る数が検出されおり、そしてＴピットの連なりが当初予定範囲の東西両方向にさらに拡がっていることが予測できた。このような遺跡の状況については道教委文化課と苫小牧道路事務所の双方に報告した。文化課からはＴピットの分布範囲の拡がりを確認するため１、２週間中に範囲確認の再試掘調査を実施したい旨が調査事務所に伝えられた。

調査事務所の報告を受け、９月26日には道教委文化課と苫小牧道路事務所および埋蔵文化財センターの三者で浜厚真３遺跡の調査範囲等についての打合せが行われた。この際「電柱」と「記念植樹」

部分の取り扱いについて、将来的な工事計画の有無を再度確認した。調査が進む中、「電柱」を保存した範囲とその周辺からTピットの一部分（P－94）が検出されていたからである。

再試掘調査については遺構検出が可能となるⅦ層まで重機で掘削する方法で実施することとなり、現地において文化課担当者と大まかな調査範囲についての確認を行った。後日、図面において調査が必要な範囲を示された。「西側部分」は25～34ライン間の約600㎡、「東側部分」はHライン以北の43～48ライン間約150㎡の範囲である（図Ⅲ－1－1）。

翌27日から、重機を導入しⅦ層またはⅧ層までの掘削を開始した。その後人力で掘削面を精査した結果、「西側部分」からは30基以上、「東側部分」からは20数基の落ち込みが検出された。「西側部分」ではTピットは丘状の微地形の裾部を取り巻くように検出され、Mラインよりさらに北側へも拡がることが充分に予想できた（図Ⅳ－2－2）。また、26ライン以西の範囲においても同様であった。しかし、Mラインよりでは掘削は遺構の輪郭が捉えられる最小範囲に留めている。調査の進捗を予測すると、これ以上の広範な面積を掘削することは、10月下旬が調査終了予定であることから判断して無理な状況であった。また、すぐ傍らは排土の運搬通路にあたっていた。

この再試掘の結果については、10月上旬に掘削範囲と検出状況の図面を添えて文化課と道路事務所に報告した。道路事務所からは「西側部分」が最優先であることが先の打合せの際に伝えられていた。10月下旬までの発掘期間内にこの部分の遺構調査は概ね可能と判断できたことから、直ちに調査に着手した。標高の低い地点のTピットは掘り下げる度に水が溜まり、底面まで完掘できない状態でやや手間取ったが、調査は順調に進み、中旬には「東側部分」の遺構についても着手している。

調査日程を1日延長し、10月25日の発掘期間内に検出されたすべてのTピットの調査を終了した。最終的な調査面積は790㎡増の3,390㎡で、検出されたTピットは173基である。

なお、発掘調査期間の終了前日に、道路事務所から「本線に近い電柱2本（33ラインと36ライン間）の移設を行う予定である」との連絡が調査事務所に入った。先の打合せの場では移設計画が無いとのことから、調査対象から除外した部分である。このため、移設する場合は発掘調査が必要であるが、この件に関しては現地で対応することはできない旨を道路事務所側に伝え、同時に道教委文化課へはこの内容について連絡した。

冬季整理作業が進む平成14年12月上旬、道教委文化課から浜厚真3遺跡の来年度以降の発掘範囲について調査担当課としての試案を求められた。発掘範囲については、①33ラインと36ライン間にある電柱部分、②今年度拡張した調査区の西端である26ラインからさらに西側へ50mほど延長した北東へ延びる道路部分までの範囲、③Mラインより北側では工事用地範囲内の全域を調査対象とするのが望ましいとの見解をまとめ、図面を添えて報告した。（遠藤香澄）

5　調査結果の概要

遺構はＴピット173基、土坑１基、焼土14ヵ所が検出された。

Ｔピット（ＴＰ－１～173）の大半は台地と低湿地の間にある平坦部で検出された。形態は長径1.5～２ｍの溝状が大半を占め、底面が幅広のものは全体の１割程である。後者の殆どには杭跡がみられ、杭跡どうしの重複例もある。Ｔピットどうしの重複は15件あり、土層断面で確認された限りでは、いずれも短い方が後に構築されている。覆土は自然埋没とみられるものが殆どであるが、埋め戻されたと考えられるＴピットが３基確認された。規模や長軸方向の類似するＴピットには、２基１組等、配列の想定されるものがある。時期の特定はできないが、厚真川を挟んで位置する「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」での調査結果から類推すると、縄文時代中期後半～後期初頭の可能性がある。なお、Ｔピットが構築されたとみられる土層（Ｖａ層等）について、花粉分析・植物珪酸体分析を依頼したところ、当時の遺跡周辺はキク亜科やイネ科等の生息する開けた草地であったと推測されている（Ⅵ章－２参照）。

土坑（Ｐ－１）はⅢ状の形態であり、Ｔピットと判断されなかったものである。

焼土は白頭山-苫小牧テフラより上位のⅢ層で１ヵ所、Ｖｃ層上面・上位で13ヵ所検出された。Ⅲ層の焼土（Ｆ－１）は検出された層位から擦文時代～アイヌ文化期、Ｖｃ層の焼土（Ｆ－２～14）は周囲の遺物から、縄文時代早期後半、東釧路Ⅱ式期とみてよいであろう。Ｖｃ層の焼土（Ｆ－８・11）から採取した炭化クルミ殻、炭化材について放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）を依頼したところ、どちらも6,890±40（ｙＢＰ）と測定されている（Ⅵ章－１参照）。

遺物は土器780点、石器等1,868点、合計2,648点が出土している。土器は縄文時代早期後半、東釧路Ⅱ式に相当するものがＶｃ層から多く出土している。他の東釧路式系や、縄文時代中期後半、同後期初頭・後葉、続縄文時代後半のものもあるが少ない。石器等の大部分は黒曜石製の微細なフレイクで、焼土（Ｖｃ層）の周囲から出土したものが多い。Ｖｃ層からは石鏃、石錐、スクレイパー等の他、２点ではあるが石錘が出土している。これらの石器はＶｃ層における土器の出土状況からみて、縄文時代早期のものであろう。（山中文雄）

表Ⅰ－５－１　検出遺構数一覧

遺構種別	Ｔピット	土　坑	焼　土
基　数	173	1	14

表Ⅰ－５－２　出土遺物点数一覧

土器			石器等					
分類	点数		分類	点数		分類	点数	
	遺構	包含層		遺構	包含層		遺構	包含層
Ⅰ群ｂ－１類	82	321	石鏃	3	40	石斧	2	1
Ⅰ群ｂ－３類	1		石槍・ナイフ	1	3	たたき石		4
Ⅰ群ｂ－４類	18	2	石錐		4	くぼみ石	1	
Ⅰ群ｂ類細分不能		66	スクレイパー		7	すり石	2	1
Ⅲ群ｂ－２類		11	ピエス・エスキーユ	1		石錘		2
Ⅲ群ｂ類細分不能		3	Ｒフレイク	9	30	砥石		3
Ⅳ群ａ類タプコプ式		87	Ｕフレイク	15	47	加工痕のある礫		4
Ⅳ群ｃ類		183	石核・原石	3	5	礫・礫片	11	22
Ⅵ群ｂ類		1	フレイク	423	1224			
分類不能		5						
小計	101	679	小計				470	1398
合計							571	2077

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　位置と環境

遺跡の所在する厚真町は、北海道胆振地方の東部を流れる厚真川流域の町である(図Ⅰ－1－1)。同川の中・下流域では早くから水稲栽培が行われ、現在では胆振管内有数の米作地帯として知られている。河口一帯は浜厚真と呼ばれ、かつては勇払原野から続く湿地帯であった。

浜厚真3遺跡は厚真川の河口から東北東へ約3㎞、現標高7～12mの台地縁辺部に位置する（図Ⅱ－1－1)。旧地形図をみると、遺跡から現海岸線までは湿地帯となっており、遺跡が地形の境界部分に立地していることがわかる（図Ⅱ－3－1)。5万分の1地形図から割り出した位置（世界測地系）は北緯42度36分36秒、東経141度51分37秒である。

旧地形図では遺跡付近の湿地帯からトッポ、パンケシュプン等の小川が流れ出している（図Ⅱ－3－1)。安政5（1858）年、厚真川下流の右岸を通った松浦武四郎は、トッポについて「トツホ（右小川)、此邊菟地（やち）多し」と記している（『東蝦夷日誌』)。なお、『厚真村史』によれば、トッポは「子・沼」「小沼」、パンケシュプンは「下流のシュプン川」（シュプンはウグイ）の意味とされる。パンケシュプンには昭和42（1967）年、大量のアカハラ（産卵期のウグイ）が遡上してきたという（『厚真の旧地名を尋ねて』)。

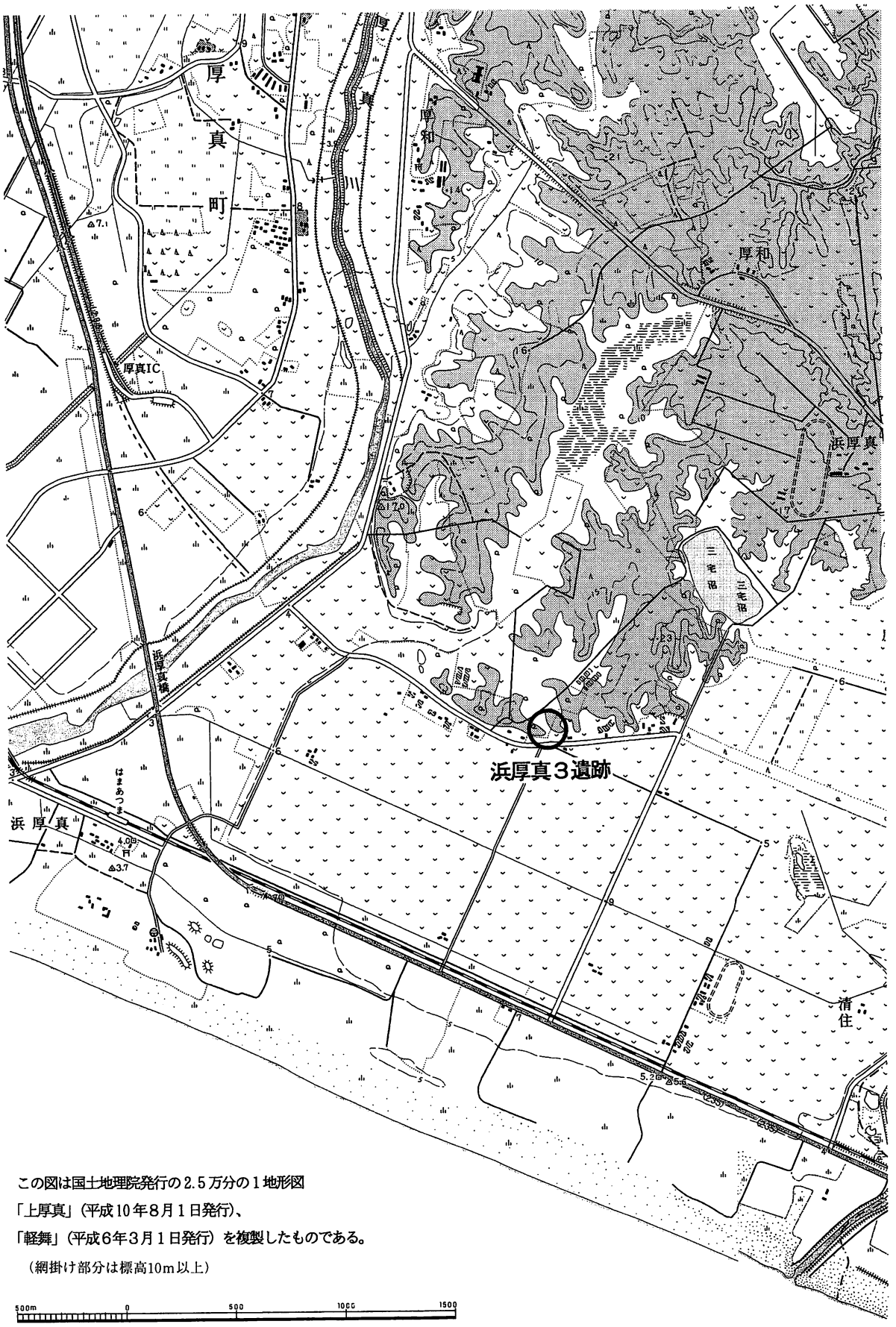
浜厚真の気候は、太平洋沿岸に位置するため、夏に海霧が発生し易い。このため日照時間も短く、農業にはあまり適さないようである。反面、秋と冬は晴天の日が多く、積雪は20ｃｍ前後と日本海側に比べ少ない。産業は明治期から牧畜・酪農が多く営まれている。水産業は一時隆盛を極めたものの戦後になって不漁が続いたため、ホタテガイ等の養殖が行われるようになった。昭和51（1976）年、苫小牧東部工業地帯の建設に関連して、苫小牧港（東港）の築港が開始された。同55（1980）年には北海道電力苫東厚真火力発電所の運転開始、東港の一部が供用される等、厚真川河口付近の変貌ぶりは著しい。

2　地　　形

本遺跡とその周辺は勇払平野の東部に位置し、地形は台地と沖積低地に大別される。上述したように、遺跡はこれらの地形の境界部分に立地している。

台地は約4.1万年前（許ほか2001）と考えられている支笏第1テフラ（Spfa-1）から成る火山灰台地である。海水準変動（海進・海退）や、河川により開析され、現在は海側へ半島状に取り残された格好になっている。浜厚真での頂部高は標高約15m、沖積低地との比高は約5ｍである。台地の縁辺は侵食により樹枝状に入り組んだ形態を呈している。

沖積低地の大部分は湿地帯で、かつては苫小牧市勇払から鵡川付近にまで広がっていた。厚真川の現河口から勇払、ウトナイ湖にかけての一帯が湿地化した過程は、以下のように推定されている（池田ほか1995)。すなわち、約6,000年前の縄文海進において、勇払－沼ノ端間に砂州が形成され、その内陸側（勇払－沼ノ端より東側）は次第に内湾的環境となった。約3,000年前、内陸側の閉塞は一段と進み、この結果、湖(現在の弁天沼周辺)と泥炭の堆積する低湿原へ移行した、というものである。調査区の南東部分では、約2,500～3,000年前とされる樽前ｃテフラの下位に泥炭層が1ｍ以上堆積しており、遺跡周辺でもおおむね同様の変遷が考えられる。（山中）



この図は国土地理院発行の2.5万分の1地形図
「上厚真」（平成10年8月1日発行）、
「軽舞」（平成6年3月1日発行）を複製したものである。
（網掛け部分は標高10m以上）

図Ⅱ－1－1　遺跡位置図

3　歴史的環境

胆振東部地帯の勇払は、近世の頃には東部第一の漁場といわれた所である。遺跡のある厚真町はこの勇払原野の東部にあり、開拓以前はハンノキやタモ、ヤナギ、カツラ、ナラ、タモ等が多くあり、クルミの密生した所もあったという。「ユウフツ」の語義については以下のような説がある。

永田方正による『北海道蝦夷語地名解』（初版1891年：明治24年）の復刻版（1984年）には次の様に記してある。胆振国勇払郡の項である。Yup putu　ユープ　プト゜温泉川口と書かれている。また、『アイヌ語地名資料集成』のなかの上原熊次郎による「蝦夷地名考并里程記」では次のように注記されている。「夷語ユウブツ゜の略語なり。則、温泉の口と云ふ事。扨、ユウとは温泉の事。ブツ゜とは水口の事にて、此川の枝流所々に温泉のあるゆへ、地名になすといふ。扨又、此所より西地イシカリ江川傳通路、休泊地名左の通」。（後略）となっている。同じく山田秀三の『アイヌ語地名の研究2』でも、「勇払は松浦氏も永田氏も、ユー・プッ「Yu-put 温泉（川）の・口」と訳しているが、古図には「イフツ」「イブツ」の形が多く、疑問である。ユープツは後世の転訛した音に、解をとりつけたものらしい」。と記載されている。さらに「だいぶ前に、鵡川のアイヌ系古老とたちと川歩きをした。その老人たちに勇払のことを尋ねるとイブッ、あるいはイブチと答える。I-put（それの・口）、あるいはI-puchi（それの・その口）であったこと、疑いを容れない」。（中略）「つまり、鮭のよくとれた千歳地方、さらに進めば石狩川、日本海に行くその大切な交通路線の入口が勇仏なのであった。それで、そこをただイプチ（それの・その入口）と呼び、誰にでも通用していたと見るべきではなかろうか。あるいは、昔この川の筋が大沼だったので、その沼の口の意味で呼んだものだろうか」。と書かれている。また、勇武津資料館発行の案内には「アイヌ語の「イ・プツ」（それの・入口）を意味し、“それ”はシコツ（現在の千歳市）を指す。当時千歳川は蝦夷地最大の鮭の産地で、秋になるとたくさんの鮭が日本海から石狩川にのぼり、千歳川に遡上した。新巻などに加工された鮭は美々川、ウトナイ沼、勇払川を丸木船で下り、勇武津の湊に運ばれて、北前船で関西や江戸へ運ばれた。勇払の地名は、初め片仮名でユーブツ・イプツなどと表記されていたが、後に漢字で表された」。と説明されている。

すなわち「イ・プツ」とは重要なところ（シコツ）への入り口をさすという解釈が適切であろう。

厚真（アツマ）の地名は寛文9（1669）年のシャクシャインの戦い以後の松前藩の記録に「商場、あつまへつ」として表れる。藩政時代にはシコツ十六場所のうち、上アツマとアツマの二場所があった。

『北海道史』によれば、17世紀中葉の寛永17（1640）年の6月に駒ケ岳が噴火し、「津波により舟百余艘破損、民夷溺死七百余人、降灰越後に及ぶ。」と記されている。この時、山麓に居住していたアイヌ約三十余戸が難を逃れ浜厚真に移り住んだと伝えられている。

その後、寛政11(1799)年の幕領化までにアツマ場所として統合され、勇払会所の支配下にあった。

安政5（1858）年の夏には松浦武四郎が厚真川流域を踏査し詳細を「安都摩日誌」の項に残している。

中略「扨此編は六月廿一日ユウフツを出立して、アツマフトより入りて、川岸の東よりキムンコタン、チケツベ等の村を見、トンニカ村に入りて止宿し、翌二日滞留、カヒウの少し上まで上り帰りて、廿三日ムカワ川すじのニワンえ越せし紀行」なれども（後略）。

このように、当時の厚真川流域には多くのコタンが存在し、集落に戸数の多い事や、キムンコタンなどではすでに畑作が盛んであった事等が記録されている。

明治初期の勇払郡の村区画を見ると三四ヵ村からなっており、厚真村は四ヵ村に分かれていた。

これらを明治6(1873)年に厚真村として行政上一村に統合したものが現在の厚真町の前身である。

原名「アッマ」については次のようないくつかの語原説がある。すべてほぼ原文のまま引用する。永田方正による『北海道蝦夷語地名解』(初版1891年：明治24年)の復刻版(1984年)には以下の様に記してある。

Atomap, =at oma-p　アトマプ　オヒョウ楡アル處　「アッ」ハ「アットシ」ヲ織ル樹ノ名「オマ」ハ有、「プ」ハ處ノ義「プ」ノ発音殆ント無聲ナリ故ニ和人ハ「アヅマ」ト訛ルナリ舊説「アツマ」ハ　鼠(むさゝび)ガ川ヲ泳ギシ處ノ義又「アツ」ハ木鼠(りす)ノ義ナドアルハ誤リナリ今厚眞(アツマ)村ト稱ス

『アイヌ語地名資料集成』の上原熊次郎による「蝦夷地名考并里程記」では「アヅマ」は以下の様になっている。

小休所　川舟渡　夷語アツマなり。則、もゝがの游くといふ事。扨、アツとはもゝがと申獣の事。マーとは游く、又は焼る等と申事にて、昔時もゝが此川を游き渡りしを夷人見しより地名になすと云ふ。

また、Ｊ・バチェラーの「アイヌ地名考」では次の様である。

「ＡＺＵＭＡ」(厚真)－At-ma。次のどちらかの意味であろう。「輝く潟」「輝く半島」。ＭＡは、水地についていわれる場合は「潟」、陸地についていわれる場合は「半島」の意。しかし、ＡＴのほうは「輝く」「革紐」という三(ママ)つの意味を持っていると思われる。この川の河口の内部はとても長く、浅く、広く、水の流れがゆっくりしている。そして、勇払と鵡川の海岸線に沿って砂丘の中を流れているので、水がとても澄んでおり、陽の光にきらめいている。」

山田秀三『アイヌ語地名の研究２』「厚真川」の項では　国鉄浜厚真駅の西を流れる川。｛松浦氏「東蝦夷日誌」｝昔モモカ(むささび)という獣が游ぎ越せしを以てなづけしと。アツは獣の事にて、マは渡る義也と。又アツは木鼠(りす)の事とも云えり。(註、at　ばんどり。ma　泳ぐ)

｛永田地名解｝アトマプ「At-oma-P　楡(オヒョウ)・ある・処」。ｐの発音殆ど無声なり。故に和人はアヅマと訛るなり。

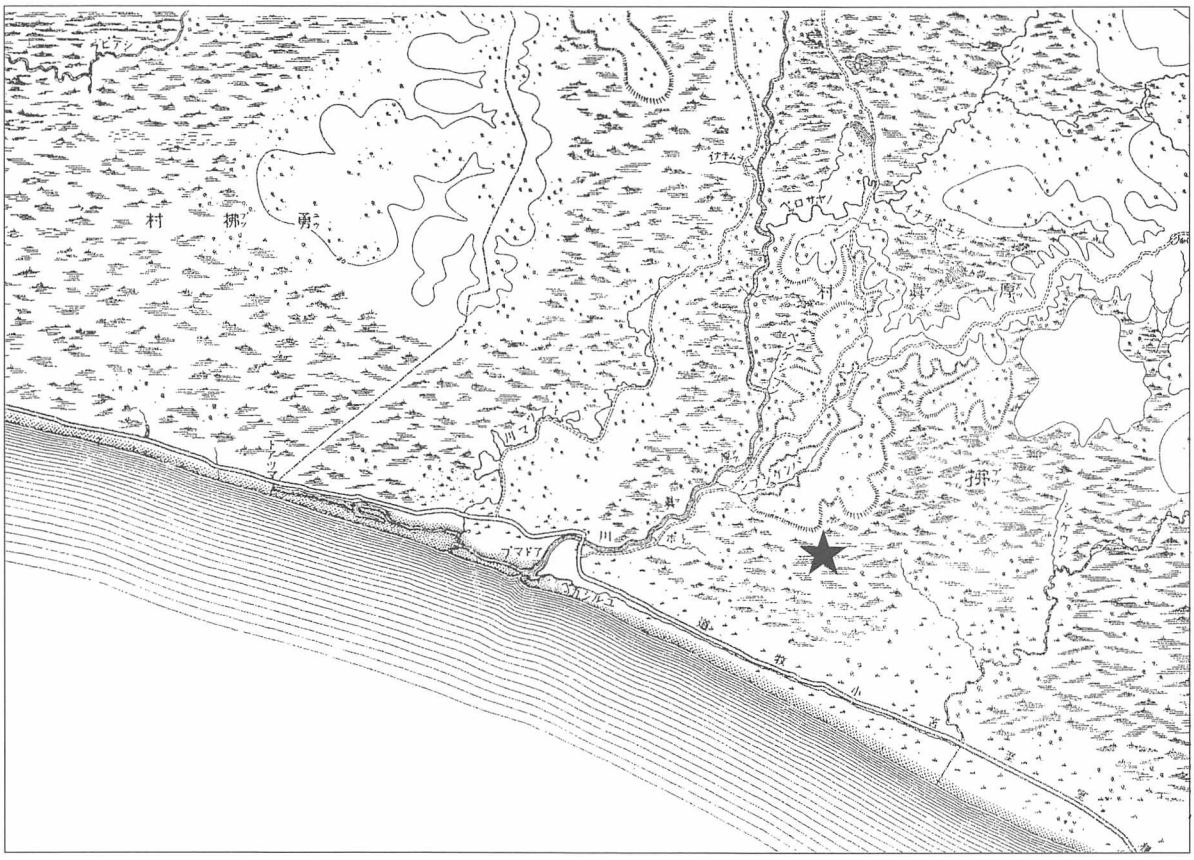
「駅名の起源」の項では、永田氏と同解、一応は穏当な考え方である。ただしこの意味ならばAt-ush(おひょう・多い)がふつうの形である。

あるいはアットマム At-tomam→ar-tomam(向う側の・やち)のような地名だったのかも知れない。(arはｔの前につくとatとなる)。

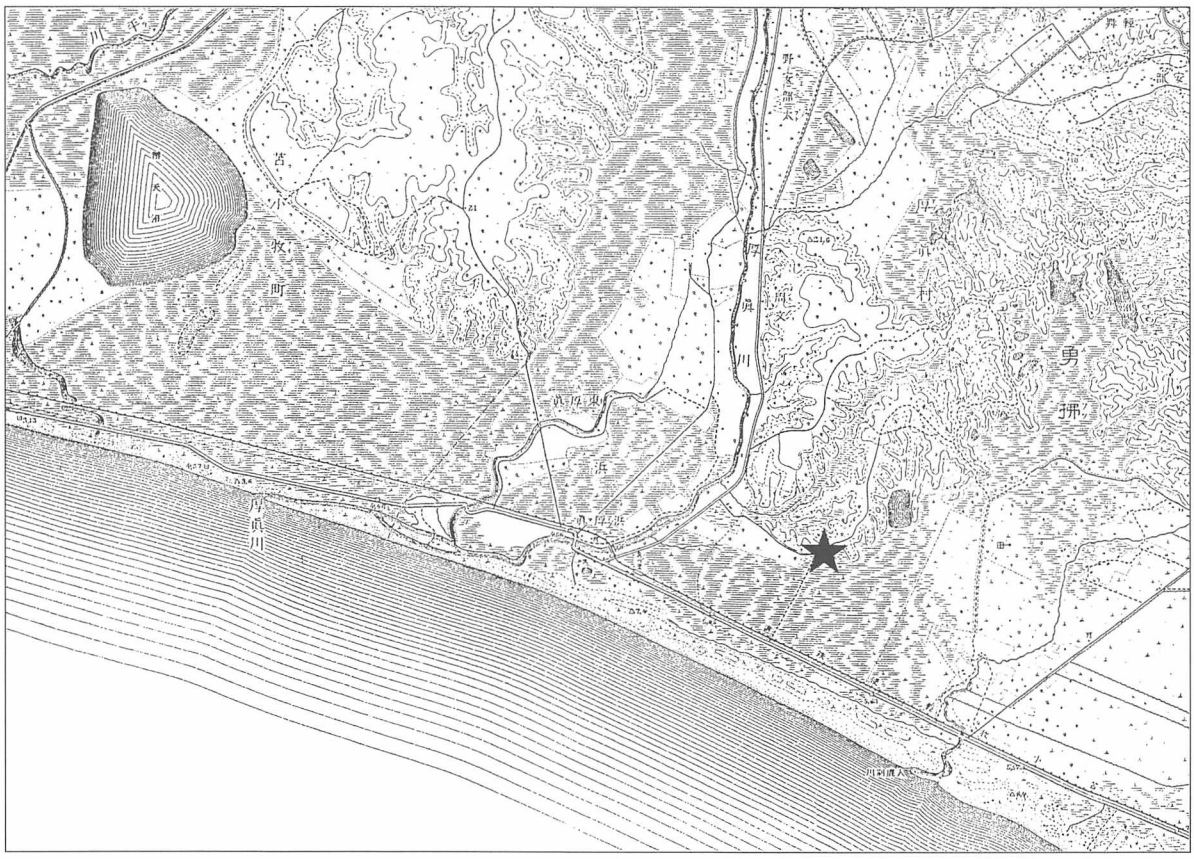
厚真(アツマ)についての解釈は以上のようなものである。

厚真町は大きく南部の海岸地帯、河川の平野部、さらに北西部の山岳地帯に分ける事ができる。町の中央を貫流する厚真川流域は肥沃な農耕適地であり、現在では「厚真米」の名とともに胆振地方の穀倉として知られている。南部の海岸部では往時は漁獲量も多かったが、いまでは減少の傾向を示している。山間部からは木材や薪炭材、さらに坑木等が産出されていた。大正７・８年頃が最も多く木炭が生産された時代でもあった。

(笠原　興)

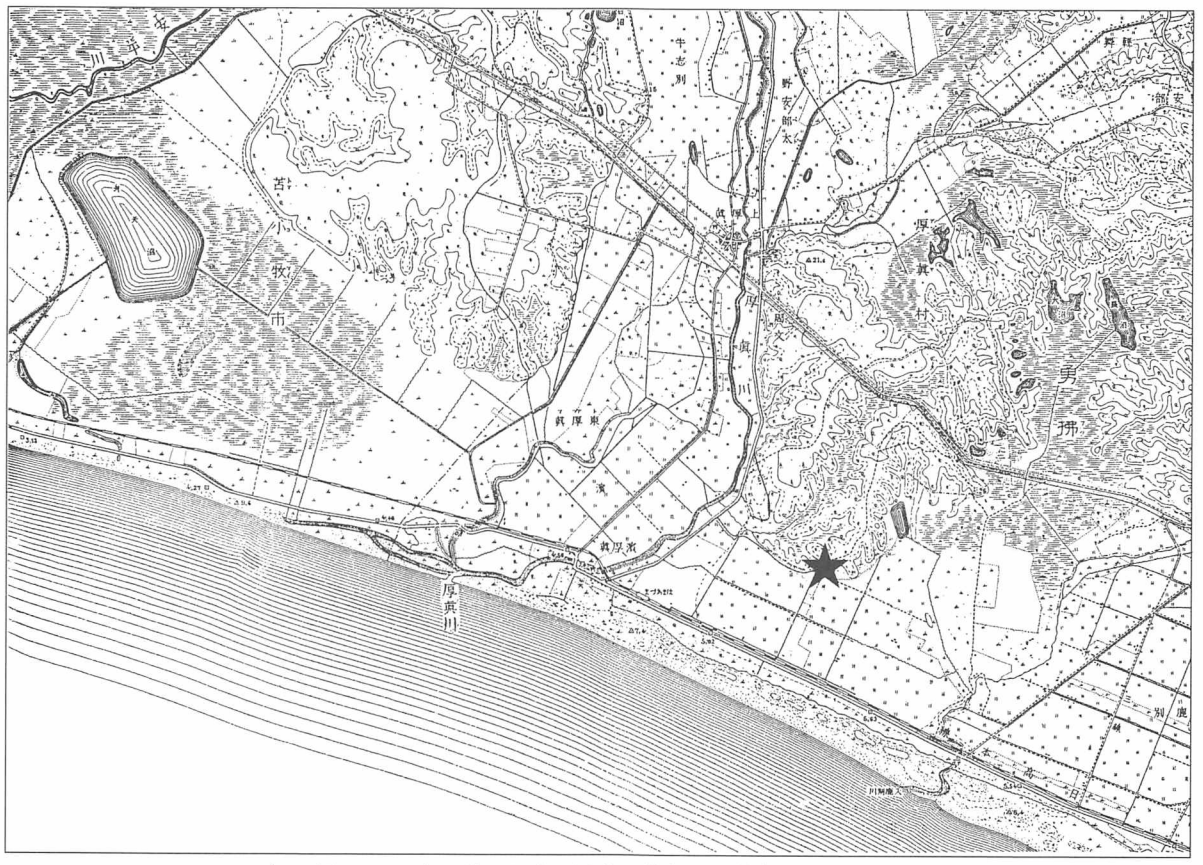


（この図は 1896 年、陸地測量部製版の「鵡川」を複製したものである）

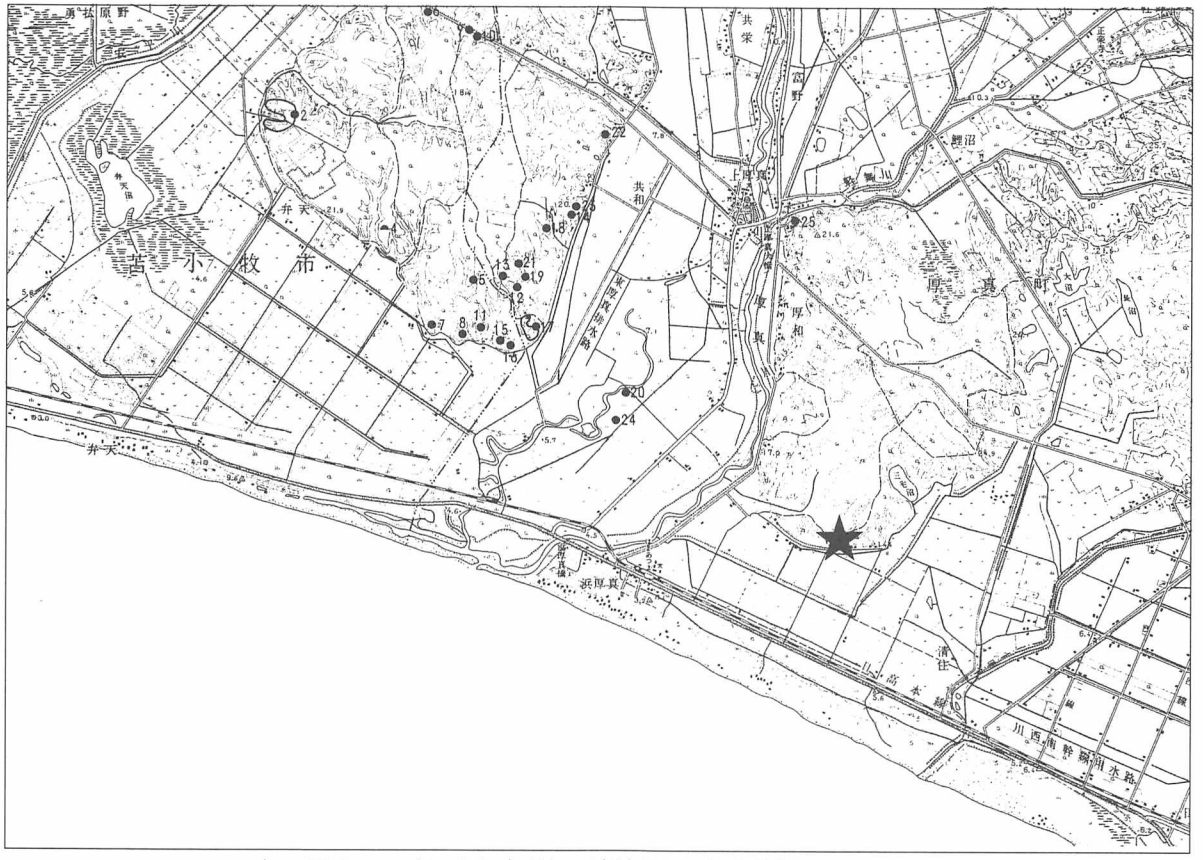


（この図は 1921 年、大日本帝国陸地測量部発行の「鵡川」を複製したものである）

図Ⅱ－3－1　5万分の1地形図（1）　★…浜厚真 3 遺跡



（この図は 1949 年、地理調査所発行の「鵡川」を複製したものである）



（この図は 1979 年、文化庁刊行の遺跡地図を拡大複製したものである）

図Ⅱ－3－2　5万分の1地形図（2）

4　周辺の遺跡

厚真町内では平成14年現在、当遺跡を含め、75ヶ所の埋蔵文化財包蔵地が知られている（表Ⅱ－３－１）。早い時期に開墾が進んだ北西部では、かなり内陸部まで遺跡の分布が見られ、山林等で分布が不明であった南東部でも、近年の土砂採取等で包蔵地の分布が明らかになってきている。

町内の先史遺跡の調査は小学校教育の一環として昭和初期に始まり、昭和28年には「厚真村郷土研究会」も発足され、町内各所の分布調査が行われている。また「厚真村郷土研究会」は昭和37年に朝日遺跡や共和遺跡の発掘調査等も実施している。

「厚真村郷土研究会」と「厚真村教育委員会」によって昭和31（1956）年に刊行された『厚真村古代史』には当時の遺跡の状況が以下の様に記されている。

「明治38年に振老用水路設置のための工事中に、相当量の土器が出土した」と伝えられている。その後の「大正９年に同地点を通過する厚真・幌内間の森林軌道敷設工事中にもこれと類似の遺物が多く出土した」とも書かれている。現在これらの遺物は残されていない。

地域別に遺跡の概要を見ると南部地区では浜厚真・上厚真・周文・上周文・軽舞・当麻内・西周文の各地区から多くの遺物や住居跡等が発見され報告されている。

周文地区からは円筒上層式土器片等の他に土壙墓や食料貯蔵庫跡等の遺構もあったとの記述がある。昭和20年の上厚真小学校運動場増設工事の際には、数多くの土器や石器が見つかり、軽舞川のほとりの台地上からも多くの遺物が出土している。主体は縄文時代中期と後・晩期のものと思われる。

また、当麻内からは原形に近い擦文式土器が出土し、住居跡と思われるものもあったと書かれている。当麻内を除く他の地域の遺物は、いずれも縄文時代中期のものが多いようである。

中部地区では振老・仁達幌・上振内・振内・東老軽舞の各地域から遺物等が出土している。

上振内からは村公営住宅建設の際に円筒上層式土器片のほか、竪穴らしきものや、副葬品を伴うアイヌ文化期の土壙墓も見つかっている。また、上振内朝日ヶ丘中央小学校校庭付近から「野幌式土器」（縄文時代後期）の完形土器が２点出土している。

北部地区は様々な伝説や物語の発祥地として名高い地域である。楢山・幌内・頗美宇の各地区からは、円筒上層式を主体とした土器や石器等が見つかっている。頗美宇は厚真川の支流流域でこの地域はその昔、追分や紅葉山方面へ越す通路となっていたらしいことなどから、生活に適していた場所であった事が予想される。

その後、昭和48（1973）年から苫小牧東部工業地帯の開発に伴う埋蔵文化財分布調査が始まり、昭和51年からの発掘調査（静川１・厚真１遺跡）によって、これ以後まとまった考古学的な知見が得られている（表Ⅱ－３－２）。なかでも、昭和57年に行なわれた静川遺跡の調査では、縄文時代中期の環濠など非常に貴重な遺構が発見され、国指定史跡として保存されることに至っている。

この苫東地区での調査結果を要約すると以下のようになる。

静川５・８・14遺跡は厚真台地上にあり、縄文時代早期末の集落や副葬品を伴う墓群等が検出され、静川14遺跡からは旧石器時代の遺物も出土している。

縄文時代前期の遺跡には静川30・柳舘遺跡がある。海岸線に面する静川台地の縁辺部に位置し、集落や貝塚が形成されている。

縄文時代中期前半では厚真１遺跡・柏原18遺跡がある。柏原18遺跡は柏原台地の西端にあり、集落跡や墳墓等が見つかっている。

縄文時代中期後半から後期初頭にかけては遺跡が内陸部まで広く分布し、多くの住居跡等が見つかっている。厚真７・８・静川５・25・37遺跡等があり、静川遺跡の環濠もこの時期のものである。

縄文時代後期中葉以後は集落の分布がやや希薄になる。柏原５遺跡からは台地上ではない川沿いの低地部から住居跡や土壙墓等が見つかっている。また苫東調査以前より周知の遺跡であった網木遺跡では、縄文晩期の土壙墓を主体とした複合遺跡であることが明らかにされている。

続縄文時代・擦文時代も集落遺跡は少ない。続縄文時代では静川22・ニナルカ遺跡があり、擦文時代の遺跡には厚真町の共和遺跡がある。

厚真町域で苫東関連の調査対象となった遺跡は昭和51年から昭和55年にかけて行なわれた厚真川右岸の厚真１・２・３・７・８・10・12・13遺跡と共和遺跡の９ヶ所である。

厚真１遺跡は、静川台地の東端に近い沢に面した北東向きの丘陵部に位置している。

昭和51年に発掘調査が行なわれ、縄文時代中期中葉の住居跡２軒、Ｔピット12基が確認されている。出土遺物も縄文時代中期が主体である。

厚真２遺跡は厚真１遺跡から100ｍ程北東寄りの沢の奥に立地する。昭和52年に調査が行なわれた。その結果、Ｔピット８基のほか14の遺構と僅か15点の遺物が出土している。

厚真３遺跡は静川台地の東端で、共和遺跡の南側に位置している。昭和53・54年に調査が行われＴピット31基、土坑39基、焼土跡16ヶ所の計86の遺構が確認され、狩猟の場を主体とした性格の遺跡であることが報告されている。

厚真７遺跡は沢を挟んで厚真３遺跡の西側に位置し、昭和52・53年に調査が行なわれた。結果は縄文時代中期末の住居跡８軒、Ｔピット79基、土坑33基、焼土跡46ヶ所等、167の遺構が検出され、縄文中～晩期を主体とした遺物が出土している。

厚真８遺跡は静川台地の南東端から入った沢の奥にあり、南東向きに突き出た舌状部の先端に位置している。昭和52年に発掘調査が行なわれ、縄文時代中期後葉の住居跡４軒、土坑19基、焼土跡23ヶ所など55の遺構が検出された。遺物の主体は縄文時代中～晩期と続縄文時代のものである。

厚真10遺跡は厚真８遺跡に隣接し、沢に面した丘陵部の縁辺に位置している。昭和52・53年に調査が行われ、Ｔピット３基、土坑３基、焼土跡１ヶ所の遺構が検出された。遺物の主体は縄文時代中期と晩期である。

厚真12遺跡は静川台地の最も南側に位置している。昭和54年に調査が行なわれ、続縄文時代の土坑墓４基、土坑10基など18の遺構と縄文～擦文時代にかけた遺物が出土している。

厚真13遺跡は共和遺跡の北側にあり、舌状台地の最先端部に立地している。昭和55年に調査が行なわれ、狩猟場として報告がされている。縄文早期・前期・晩期・擦文期の遺物が出土している。

共和遺跡は厚真３遺跡と厚真13遺跡に挟まれるように位置している。古くから「西周文遺跡」という名前で知られていた。『厚真村古代史』によれば「厚真川の下流右岸の段丘地帯に在る三条氏の宅地内から前北式土器の破片が多数発見された」。との記述がある。昭和53年の発掘調査時には、この地域ではじめて擦文時代の住居跡が2軒見つかっている。その他に土坑27基、焼土跡23ヶ所など63の遺構が検出され、約70,000点の遺物が出土した。この遺物の殆どは縄文時代晩期の所産である。

このほかの苫東関連以外の発掘調査には、平成11年の鯉沼２遺跡と平成12年の豊川１遺跡がある。鯉沼２遺跡からは18の遺構が検出され、内訳は縄文時代のＴピット13基、焼土が５ヶ所である。豊川１遺跡からは縄文時代中期の竪穴住居跡１軒と、晩期と思われる土壙が１基検出されている。

（笠原）

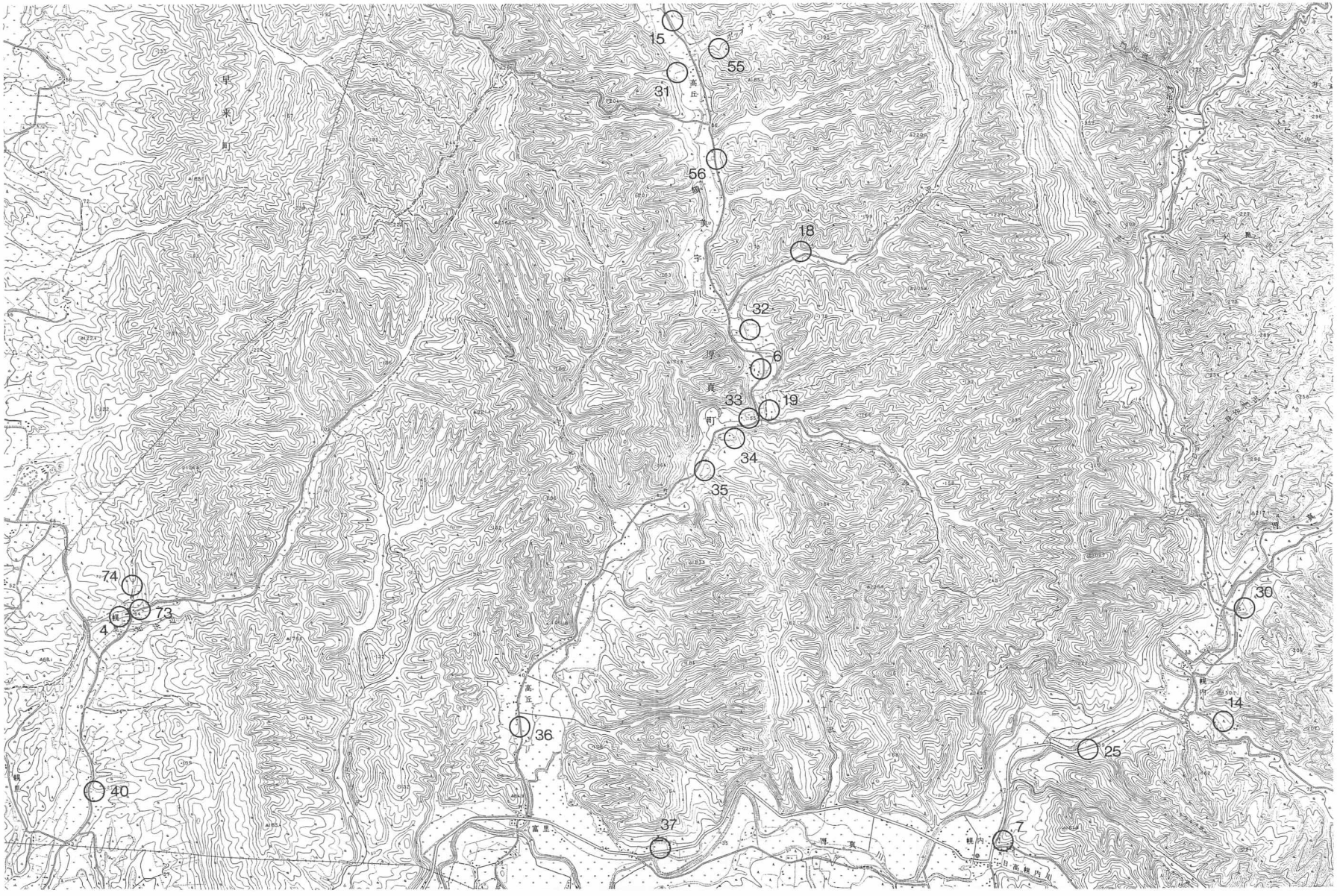
図Ⅱ－4－1　厚真町の遺跡分布図（1）　★…浜厚真3遺跡

（この図は国土地理院発行の5万分の1地形図「鵡川」「早来」を複製したものである）

表Ⅱ－3－1　厚真町の遺跡一覧

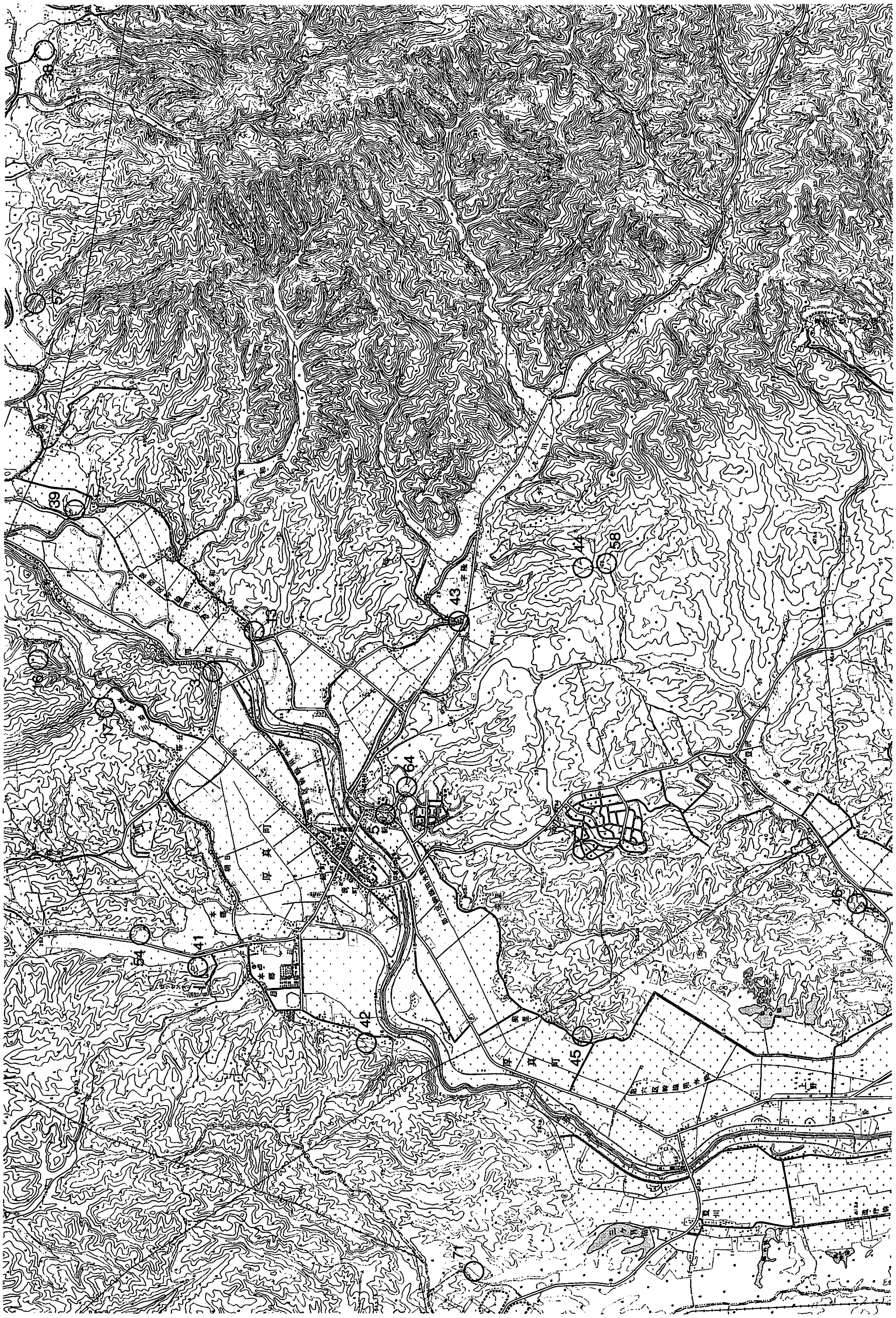
No.	種　別	遺　跡　名	所　　在　　地	時　　期
1	遺物包含地	上厚真遺跡	厚真町字厚和66,70～72,74,79,81,82	縄文中期（円筒上層式）、縄文後期（北筒式）、恵山式、後北式、擦文式
2	遺物包含地	軽舞遺跡	厚真町字軽舞205,206,211,212	円筒上層式、前北式
3	遺物包含地	朝日遺跡	厚真町字朝日209-1･3～5,210,211-1,212-1～3～7･8,214-1･2	縄文後・晩期、恵山式、擦文式
4	遺物包含地	幌里１遺跡	厚真町字幌里151-1,154-2,156-2,157-1･3	円筒上層式、前北式
5	遺物包含地	新町遺跡	厚真町字新町88-1･4,92-1･2,95-24～45	円筒上層式、前北式
6	遺物包含地	高丘１遺跡	厚真町字高丘208-2,213,222,224～226,227-1･2,230	円筒上層式、前北式、恵山式
7	遺物包含地	幌内１遺跡	厚真町字幌内616-1･5	円筒上層式、前北式
8	遺物包含地	共和遺跡	厚真町字共和110-1,115-1	縄文晩期
9	遺物包含地	浜厚真遺跡	厚真町字浜厚真214	
10	遺物包含地	厚真10遺跡	厚真町字共和125	
11	遺物包含地	厚真11遺跡	厚真町字共和88-2,93-1･2,95-2	縄文晩期
12	遺物包含地	豊沢１遺跡	厚真町字豊沢339,340,379,380	後北式
13	遺物包含地	東和遺跡	厚真町字東和404,405,411～413,440,441	前北式
14	遺物包含地	幌内２遺跡	厚真町字幌内438-2～6･8･9	円筒上層式
15	遺物包含地	高丘３遺跡	厚真町字高丘40,41,46～1･2･4,58	円筒上層式
16	チャシ跡	桜丘チャシ跡	厚真町字桜丘73-1,76	
17	遺物包含地	桜丘１遺跡	厚真町字桜丘139,142	縄文晩期（タンネトーL式）
18	遺物包含地	高丘２遺跡	厚真町字高丘176-1,182-20･22	
19	遺物包含地	高丘３遺跡	厚真町字高丘237･2～4	
20	遺物包含地	厚真１遺跡	厚真町字共和126	
21	遺物包含地	厚真２遺跡	厚真町字共和126	
22	遺物包含地	厚真３遺跡	厚真町字共和110-2,126	
23	遺物包含地	厚真４遺跡	厚真町字共和137,138-2,140	
24	遺物包含地	厚真５遺跡	厚真町字共和128,129-1,136-1,137,138-1･2	縄文前・中・後・晩期、続縄文（恵山式、後北式）擦文
25	集落跡	厚幌１遺跡	厚真町字幌内487-1･9･15	余市式
26	遺物包含地	厚真７遺跡	厚真町字共和116,117,118-1	縄文前・晩期
27	遺物包含地	厚真８遺跡	厚真町字共和125,126	
28	遺物包含地	厚真９遺跡	厚真町字共和815	
29	遺物包含地	厚真12遺跡	厚真町字共和115-1,118-2,119～121,124	縄文中・晩期、擦文
30	遺物包含地	幌内３遺跡	厚真町字幌内372-1～3	円筒上層式
31	遺物包含地	高丘４遺跡	厚真町字高丘67,68,69-1･2,70～73	縄文
32	遺物包含地	高丘５遺跡	厚真町字高丘187～189	
33	遺物包含地	高丘６遺跡	厚真町字高丘232-1･2,233,235,283,288,291	
34	遺物包含地	高丘７遺跡	厚真町字高丘304～307	
35	遺物包含地	高丘８遺跡	厚真町字高丘329,331	
36	遺物包含地	高丘９遺跡	厚真町字高丘595,597-1,598,601,602,605,605-2,606,612,612-2,614,615,617,619,619-2,621,623-1･2･5･6,628,631	後北式
37	遺物包含地	富里１遺跡	厚真町字富里42-1･4･12･14,43-1･10～12,45-1,48,49,51-1,54-1	円筒上層式、ホッケマ式
38	遺物包含地	幌内４遺跡	厚真町字幌内882-1,883-3,884	縄文中期？
39	遺物包含地	チコマナイ遺跡	厚真町字富里404	
40	遺物包含地	幌里２遺跡	厚真町字幌里214,215,217,299,309	円筒上層式
41	遺物包含地	本郷１遺跡	厚真町字本郷192-1･3	円筒上層式、タンネトーL式
42	遺物包含地	本郷２遺跡	厚真町字本郷438-1～3,439,445,446-1,447,448-1～3,449-1～3,451,452	御殿山式
43	遺物包含地	宇隆１遺跡	厚真町字宇隆無番地	
44	遺物包含地	宇隆２遺跡	厚真町字宇隆268-1,269,270-1～2	前北式
45	遺物包含地	美里１遺跡	厚真町字美里201-1,204	
46	遺物包含地	豊沢２遺跡	厚真町字豊沢584,600～604,606～611	擦文
47	遺物包含地	豊沢３遺跡	厚真町字豊沢355～362	後北式
48	遺物包含地	鯉沼１遺跡	厚真町字鯉沼80-1～9,81-1～4,84-1～3,85-1～4	
49	遺物包含地	鹿沼２遺跡	厚真町字鹿沼106-1,107,108,111～114	円筒上層式
50	遺物包含地	鹿沼１遺跡	厚真町字鹿沼278～281,285,375,383,384	苫別式
51	遺物包含地	厚和１遺跡	厚真町字厚和187～190	円筒上層式
52	遺物包含地	鹿沼３遺跡	厚真町字鹿沼355-1	円筒上層式・タンネトーL式
53	遺物包含地	厚真13遺跡	厚真町字共和111	縄文早期（東釧路Ⅲ式）
54	遺物包含地	本郷３遺跡	厚真町字本郷123	
55	遺物包含地	高丘11遺跡	厚真町字高丘177-1	縄文晩期
56	遺物包含地	高丘12遺跡	厚真町字高丘122-1･2,124,125-1･2,126,128,129-1	縄文
57	墳墓	幌内５遺跡	厚真町字幌内	幕末～明治
58	遺物包含地	豊沢４遺跡	厚真町字豊沢93-1ほか	縄文
59	遺物包含地	厚和２遺跡	厚真町字厚和200,202,字浜厚真398-8	縄文中期
60	遺物包含地	厚和３遺跡	厚真町字厚和205-7	縄文後期（余市式、堂林式）
61	遺物包含地	厚和４遺跡	厚真町字厚和198,字浜厚真417-2	縄文中期
62	遺物包含地	鹿沼４遺跡	厚真町字鹿沼74-30	縄文
63	遺物包含地	厚和５遺跡	厚真町字厚和21-1,22	縄文
64	遺物包含地	新町２遺跡	厚真町字新町19-1	縄文中期？
65	遺物包含地	鹿沼５遺跡	厚真町字鹿沼334-8･29	余市式
66	遺物包含地	厚和６遺跡	厚真町字厚和45	縄文前期（中野式前後）
67	遺物包含地	浜厚真２遺跡	厚真町字浜厚真395-2	縄文早期
68	溝穴遺構	鯉沼２遺跡	厚真町字鯉沼159-1,161-1	縄文
69	遺物包含地	豊丘遺跡	厚真町字豊丘175-1･9	縄文中期？
70	集落跡	厚和７遺跡	厚真町字厚和97-3	縄文後期初頭（タプコプ式）
71	集落跡	豊川１遺跡	厚真町字豊川21,23	縄文晩期（大洞系）
72	遺物包含地	浜厚真３遺跡	厚真町字浜厚真507,523,598	縄文　当報告
73	遺物包含地	ニタッポロ沢遺跡	厚真町字幌里78-2	縄文後期（ホッケマ式）、縄文晩期（美々３式）
74	遺物包含地	幌里神社遺跡	厚真町字幌里78-2	縄文早期（断面三角形の擦石）、縄文後期
75	遺物包含地	入鹿沼遺跡	厚真町字鹿沼217-1のうち	縄文中期？

＊遺跡No.は、北海道教育委員会の埋蔵文化財包蔵地カード登録番号による。



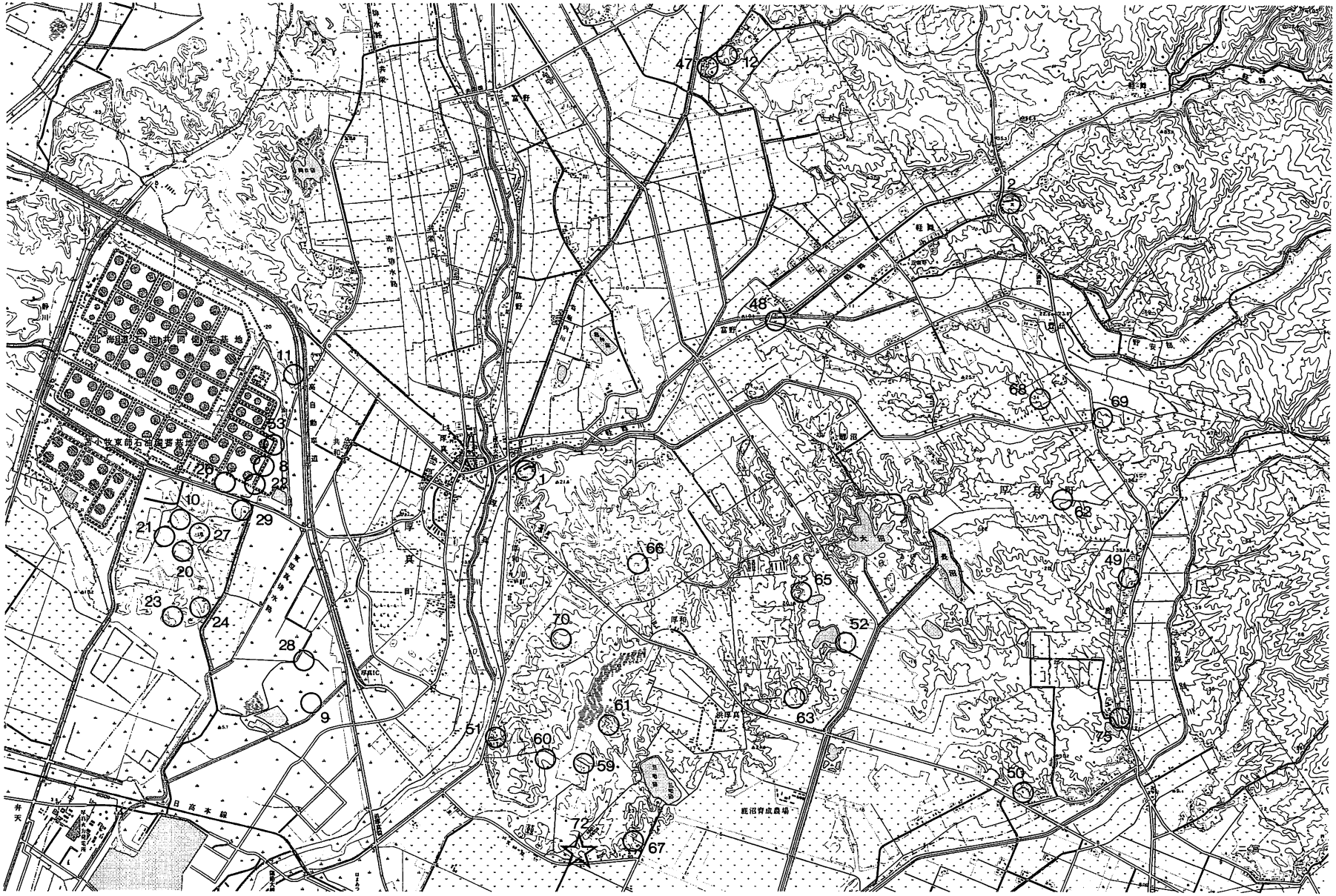
図Ⅱ－4－2　厚真町の遺跡分布図（2）

（この図は国土地理院発行の2.5万分の1地形図「早来」「幌内」「上幌内」を複製したものである）



図Ⅱ－４－３　厚真町の遺跡分布図（３）

（この図は国土地理院発行の2.5万分の１地形図「厚真」「遠浅」「早来」「幌内」を複製したものである）

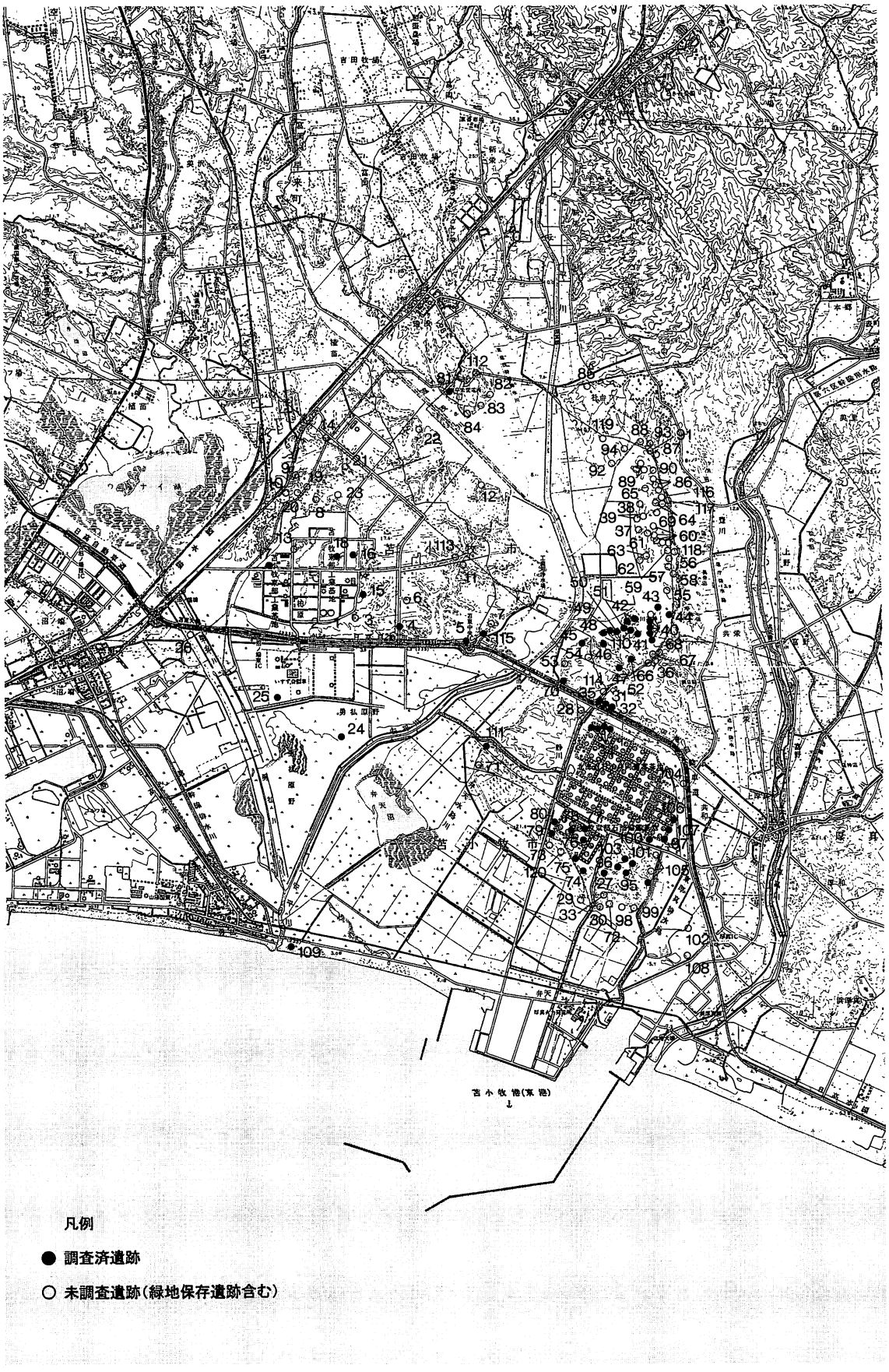


図Ⅱ－４－４　厚真町の遺跡分布図（４）

（この図は国土地理院発行の2.5万分の１地形図「軽舞」「上厚真」「遠浅」「厚真」を複製したものである）

表Ⅱ－3－2　苫小牧東部工業地帯遺跡一覧

No.	種別	遺跡名	所在地	時期	備考
1	遺物包含地	柏原1遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
2	遺物包含地	柏原2遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
3	遺物包含地	柏原3遺跡	苫小牧市	縄文晩期、擦文期	
4	遺物包含地	柏原4遺跡	苫小牧市	縄文晩期、続縄文期	一部調査済
5	集落跡・墳墓	柏原5遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期～続縄文期	一部調査済
6	遺物包含地	柏原6遺跡	苫小牧市	縄文期	
7	遺物包含地	柏原7遺跡	苫小牧市	縄文期	
8	遺物包含地	柏原8遺跡	苫小牧市	縄文後・晩期、続縄文期	
9	遺物包含地	柏原9遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
10	遺物包含地	柏原10遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
11	遺物包含地	柏原12遺跡	苫小牧市	縄文後期	
12	遺物包含地	柏原13遺跡	苫小牧市	縄文前・中・晩期	
13	貝塚	柏原14遺跡	苫小牧市	縄文前期	
14	遺物包含地	柏原15遺跡	苫小牧市	アイヌ期	
15	墳墓	柏原16遺跡	苫小牧市	縄文前期～続縄文期	
16	集落跡	柏原17遺跡	苫小牧市	縄文前期	
17	集落跡・墳墓	柏原18遺跡	苫小牧市	縄文前・中・晩期、続縄文期	
18	狩猟場	柏原19遺跡	苫小牧市	縄文期	
19	遺物包含地	柏原20遺跡	苫小牧市	縄文期	
20	遺物包含地	柏原21遺跡	苫小牧市	縄文期	
21	遺物包含地	柏原22遺跡	苫小牧市	縄文前期	
22	遺物包含地	柏原23遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
23	遺物包含地	中沢遺跡	苫小牧市	縄文期	
24	埋没地点	柏原丸木舟遺跡	苫小牧市	アイヌ期	
25	埋没地点	旧安平川丸木舟遺跡	苫小牧市	アイヌ期	
26	遺物包含地	沼ノ端遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
27	遺物包含地	静川1遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
28	遺物包含地	静川2遺跡	苫小牧市	縄文中～後期	
29	遺物包含地	静川3遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
30	遺物包含地	静川4遺跡	苫小牧市	縄文前・後期、続縄文期	
31	集落跡	静川5遺跡	苫小牧市	縄文早・中～晩期	一部調査済
32	遺物包含地	静川6遺跡	苫小牧市	縄文早・中・晩期	一部調査済
33	遺物包含地	静川7遺跡	苫小牧市	縄文中～晩期	
34	集落跡・墳墓	静川8遺跡	苫小牧市	縄文早～晩期	
35	遺物包含地	静川9遺跡	苫小牧市	縄文早・中期～続縄文期	一部調査済
36	遺物包含地	静川10遺跡	苫小牧市	縄文前期	
37	遺物包含地	静川11遺跡	苫小牧市	縄文中・後期	
38	遺物包含地	静川12遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
39	遺物包含地	静川13遺跡	苫小牧市	縄文中・後期	
40	集落跡・狩猟場	静川14遺跡	苫小牧市	縄文早～晩期	
41	遺物包含地	静川15遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
42	環溝・集落跡	静川遺跡	苫小牧市	縄文早期～続縄文期	
43	遺物包含地	静川17遺跡	苫小牧市	縄文後期、続縄文期	
44	遺物包含地	静川18遺跡	苫小牧市	縄文早・中期	
45	狩猟場	静川19遺跡	苫小牧市	縄文晩期、続縄文期	一部調査済
46	集落跡・狩猟場	静川20遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期、続縄文期	
47	集落跡・狩猟場	静川21遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
48	集落跡・貝塚	静川22遺跡	苫小牧市	縄文早期～アイヌ期	
49	遺物包含地	静川23遺跡	苫小牧市	縄文早～後期、続縄文期	
50	遺物包含地	静川24遺跡	苫小牧市	縄文早～後期、続縄文期	
51	集落跡	静川25遺跡	苫小牧市	縄文中～晩期、続縄文期	
52	集落跡	静川26遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期、擦文期	一部調査済
53	遺物包含地	静川27遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
54	遺物包含地	静川28遺跡	苫小牧市	縄文期	
55	遺物包含地	高安遺跡	苫小牧市	縄文早・中～晩期	
56	遺物包含地	奥井西1遺跡	苫小牧市	縄文早期	
57	遺物包含地	奥井西2遺跡	苫小牧市	縄文早・後・晩期	
58	遺物包含地	奥井西3遺跡	苫小牧市	縄文後期	
59	遺物包含地	山岸遺跡	苫小牧市	縄文中期	
60	遺物包含地	佐伯遺跡	苫小牧市	縄文早～晩期	
61	遺物包含地	安藤沼1遺跡	苫小牧市	縄文早～晩期	
62	遺物包含地	安藤沼2遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期、擦文期	
63	遺物包含地	安藤沼3遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
64	遺物包含地	吉田遺跡	苫小牧市	縄文前・中期	
65	遺物包含地	長橋遺跡	苫小牧市	縄文中期	
66	遺物包含地	亀ヶ森1遺跡	苫小牧市	縄文中期	
67	遺物包含地	亀ヶ森2遺跡	苫小牧市	縄文期	
68	遺物包含地	亀ヶ森3遺跡	苫小牧市	縄文期	
69	遺物包含地	矢幅遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
70	集落跡・墳墓	ニナルカ遺跡	苫小牧市	縄文早～擦文期	一部調査済
71	遺物包含地	亀谷遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期、続縄文・擦文期	
72	集落跡・貝塚	柳館遺跡	苫小牧市	縄文前期	
73	墳墓	綱木遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
74	遺物包含地	静川29遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
75	遺物包含地	静川30遺跡	苫小牧市	縄文早・前・晩期	
76	遺物包含地	静川31遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
77	遺物包含地	静川32遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
78	遺物包含地	静川33遺跡	苫小牧市	縄文期	
79	遺物包含地	静川34遺跡	苫小牧市	縄文晩期	一部調査済
80	遺物包含地	静川35遺跡	苫小牧市	縄文期	
81	墳墓	遠浅1遺跡	早来町	縄文晩期	
82	遺物包含地	遠浅2遺跡	早来町	縄文早・中～晩期	
83	遺物包含地	遠浅3遺跡	早来町	縄文前・中期	
84	遺物包含地	遠浅4遺跡	早来町	縄文後・晩期、続縄文期	
85	遺物包含地	源武1遺跡	早来町	縄文前・中期	
86	遺物包含地	源武2遺跡	早来町	縄文早・中期、擦文期	
87	遺物包含地	源武3遺跡	早来町	縄文前・中・晩期	
88	遺物包含地	源武4遺跡	早来町	縄文期	
89	遺物包含地	源武5遺跡	早来町	縄文早・中期、続縄文期	
90	遺物包含地	源武6遺跡	早来町	縄文早・中期	
91	遺物包含地	源武7遺跡	早来町	縄文早・中期	
92	遺物包含地	源武8遺跡	早来町	縄文中・晩期	
93	遺物包含地	源武9遺跡	早来町	縄文中期	
94	遺物包含地	源武10遺跡	早来町	縄文期	
95	集落跡・狩猟場	厚真1遺跡	厚真町	縄文中期	
96	狩猟場	厚真2遺跡	厚真町	縄文中期	
97	狩猟場	厚真3遺跡	厚真町	縄文早期～擦文期	
98	遺物包含地	厚真4遺跡	厚真町	縄文中・後期、続縄文期	
99	遺物包含地	厚真5遺跡	厚真町	縄文前期～擦文期	
100	集落跡・墳墓	厚真7遺跡	厚真町	縄文早・中・晩期～続縄文期	
101	集落跡・墳墓	厚真8遺跡	厚真町	縄文中～晩期、続縄文期	
102	遺物包含地	厚真9遺跡	厚真町	縄文後期	
103	遺物包含地	厚真10遺跡	厚真町	縄文中・晩期	
104	遺物包含地	厚真11遺跡	厚真町	縄文期	
105	墳墓	厚真12遺跡	厚真町	縄文早・中・晩期、擦文期	
106	狩猟場	厚真13遺跡	厚真町	縄文早・前・晩期、擦文期	
107	集落跡	共和遺跡	厚真町	縄文晩期、続縄文期、擦文期	
108	遺物包含地	浜厚真遺跡	厚真町	縄文期	
109	貝塚	弁天貝塚遺跡	苫小牧市	アイヌ期	一部調査済
110	狩猟場	静川36遺跡	苫小牧市	縄文中～後期	
111	集落跡	静川37遺跡	苫小牧市	縄文中期、続縄文期	一部調査済
112	遺物包含地	遠浅5遺跡	苫小牧市	縄文晩期	
113	遺物包含地	柏原26遺跡	苫小牧市	縄文前・中期	
114	遺物包含地	静川38遺跡	苫小牧市	縄文早期	
115	遺物包含地	柏原27遺跡	苫小牧市	縄文早期	
116	遺物包含地	吉田2遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
117	遺物包含地	吉田3遺跡	苫小牧市	縄文中期	
118	遺物包含地	山岸2遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	
119	遺物包含地	源武11遺跡	早来町	縄文前期？	
120	遺物包含地	静川39遺跡	苫小牧市	縄文中・晩期	



図Ⅱ－４－５　苫小牧東部工業地帯遺跡分布図

（この図は国土地理院発行の５万分の１地形図「鵡川」「苫小牧」「千歳」「早来」を複製したものである）

Ⅲ　調査の方法、遺物の分類

1　調査区の設定と調査の方法

(1)　調査区（グリッド）の設定

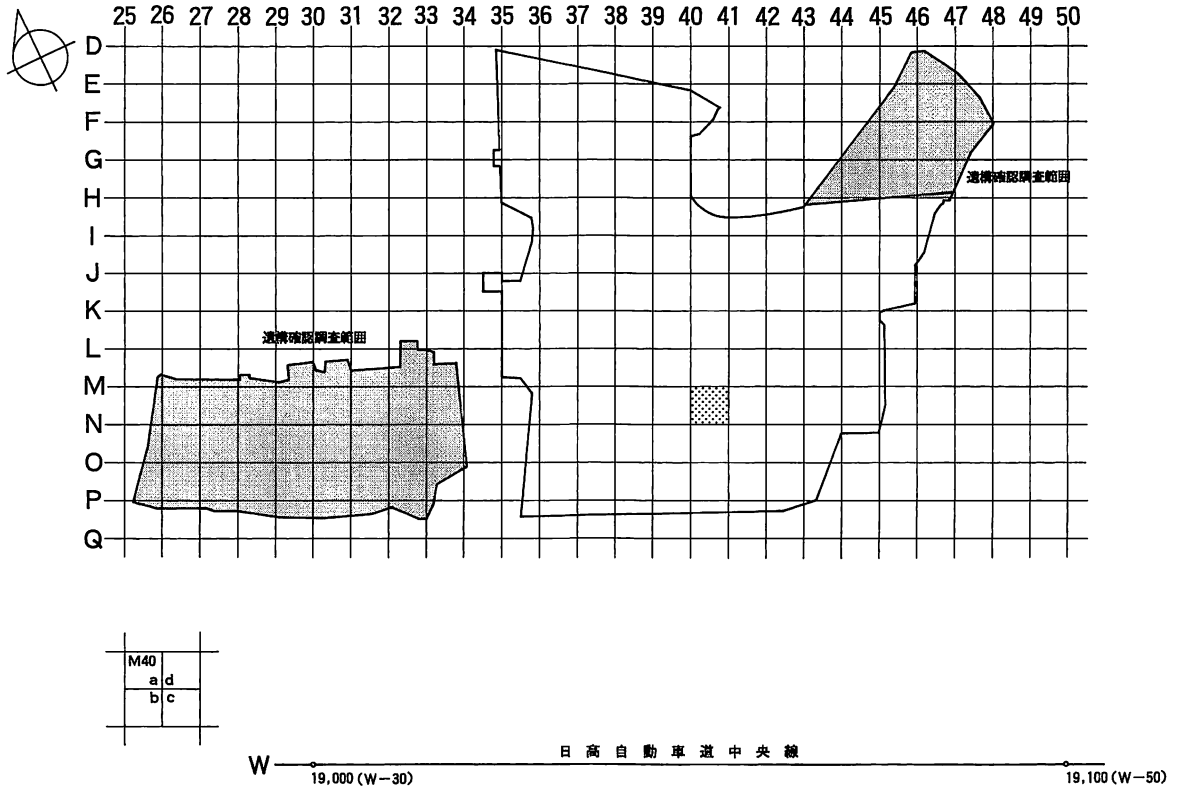
調査区の設定にあたっては、北海道開発局室蘭開発建設部の日高自動車道厚真門別道路工事の用地平面図（縮尺１：1000）を使用した。基軸線は工事予定中央線のＳＴＡ19,000とＳＴＡ19,100を直線で結び、Ｗラインとした。縦方向の基軸線はＳＴＡ19,000のＷラインと90度に直交する線を30ラインとした（従ってＳＴＡ19,000はＷ－30となる）。 調査区は、過年度の日高自動車道発掘調査の例にならい、５ｍ×５ｍの方眼とし、北西端交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称している。例えば、Ｍラインと40ライン交点の南東側がＭ－40区となる。

遺物の取り上げ等にあたっては、５ｍ×５ｍの調査区を４分割して2.5ｍ×2.5ｍとし、反時計回りにａ・ｂ・ｃ・ｄの記号を付して行った（図Ⅲ－１－１）。

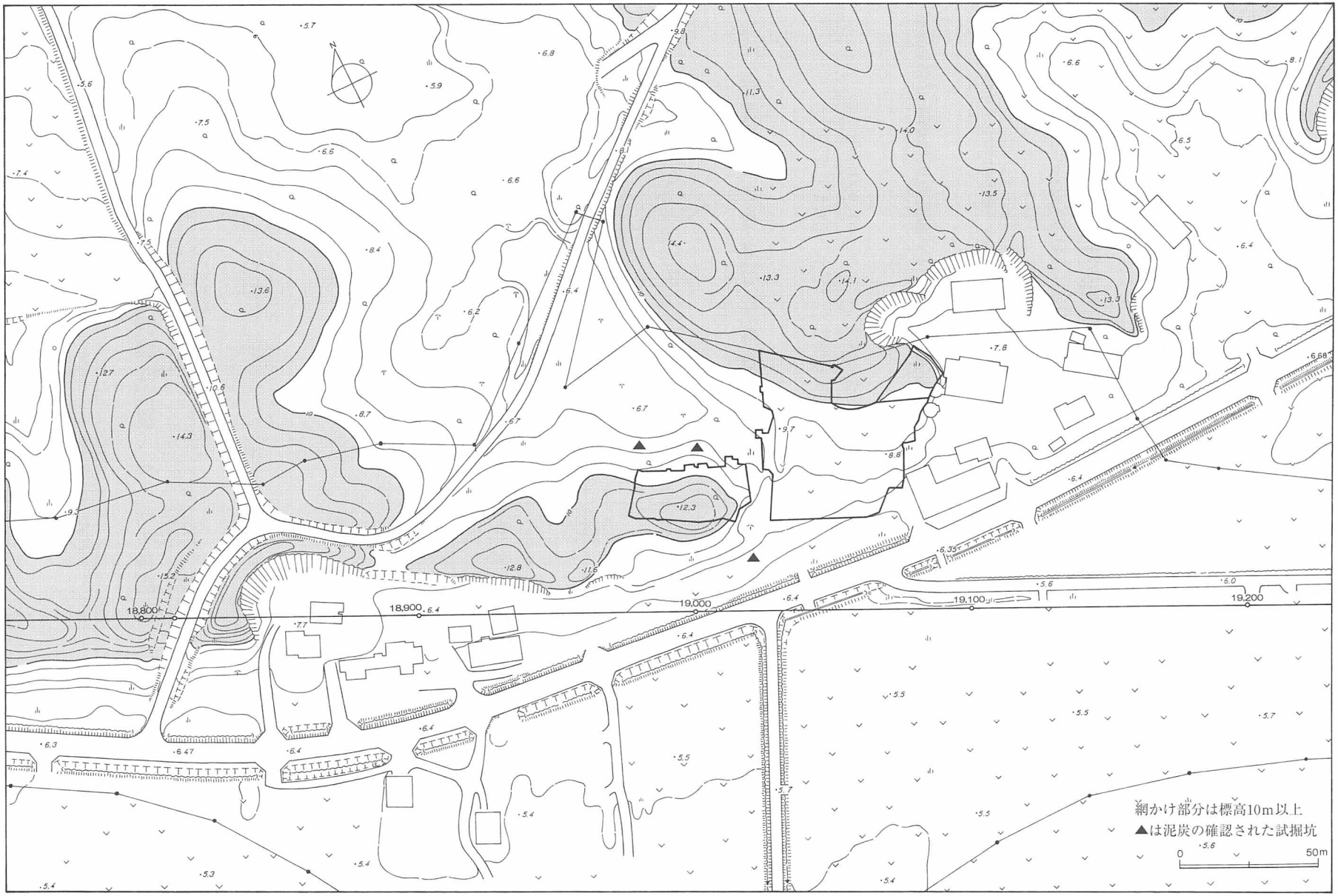
基軸線の基準点に用いた道路センターの座標軸は以下の通りである（平面直角座標第ＸⅡ系）。

ＳＴＡ19,000（Ｗ－30）	Ｘ＝－154,625.589	Ｙ＝－31,660.775
ＳＴＡ19,100（Ｗ－50）	Ｘ＝－154,669.082	Ｙ＝－31,570.729

（山中）



図Ⅲ－１－１　調査区設定図



図Ⅲ－１－２　調査範囲と周辺の地形図

(2) 調査の方法

調査範囲は厚真川下流域左岸、現在の海岸線から約２km内陸にある海に向かって突き出た台地縁辺部の標高７～12mに位置する。南東側は急激に落ち込みかつての湿地帯に続いている。表土および火山灰を除去したところ、縄文時代晩期～アイヌ文化期の包含層であるⅢ層は、Ｉラインより北側の標高８～11mの斜面とそれに続く平坦部の一部、南東側斜面のみに残っていた。調査区中央部の標高７～８mの平坦部では、ほぼ全域が縄文時代の包含層であるＶ層の中位（Ｖｂ～Ｖｃ層）まで削平されていた。また、調査の進展に伴い、Ｔピットがさらに広範囲に拡がると判断され、９月末から再試掘調査を行なった。

北側斜面の調査

北側斜面とそれに続く平坦部の一部では、黒色土層（Ⅲ層）から人力調査を始めた。まず、表土除去・杭打ち後にⅢ層上面に残った厚さ１～５cm程の火山灰をジョレンで除去した。Ⅲ～Ⅵ層の各層については、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら移植ゴテと三角ホーにより２cmずつ掘り下げ、遺構・遺物が確認されなかった部分については、スコップにより深さ５cmの細かい刻み目を入れた後、ジョレンにより土を除去するという方法を繰り返して掘り下げて調査した。斜面部分ではＶｂ層の堆積は見られなかった。遺構の調査については、後述する中央の平坦部と同様に行なった。

中央の平坦部の調査

中央の平坦部分では撹乱層を除去して、ジョレンをかけて清掃したところ、ほぼ全面のＶｂ層からＶｃ層において、Ｔピットの落ち込みを75基検出した。そのため、まずＴピットの調査を終了させ、その後に包含層を掘り下げていった。

落ち込みが確認されたＴピットについては、その短軸で半截して、土層観察用の面を残して掘り下げた。半截する場合には移植ゴテ、鉄製の中華おたま、取って付き容器を斜めに裁断したもの、ジョレンの柄に中華おたまや柄杓、移植ゴテを結合した道具、ロープを結んだバケツなど用いて掘り下げた。Ｖｂ層（褐色の砂壌土、Ⅷ層の二次堆積とされる）のために、Ｔピットは通常よりも上の層で検出することが出来たが、そのために、遺構も深く排土量が多くなった。焼土は、その周囲の同じ面の遺物との関係、焼土同士の関係の把握に努めた。

遺構調査後、Ｖｂ層～Ⅵ層の各層は調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、移植ゴテと三角ホーにより２cmずつ掘り下げ、遺構・遺物が確認されなかった部分については、スコップにより深さ５cmの細かい刻みを入れた後、ジョレンにより土を除去するという方法を繰り返した。縄文時代の主たる遺物包含層であるＶ層については、基本的にはＶａ層（大部分削平されている）・Ｖｂ層・Ｖｃ層の三段階に分けて調査した。

中央の平坦部分から南東側斜面への肩の部分は中央部よりも高くなっており、海側に向かってジャンプ台状を呈している。この部分では、表土・撹乱層を除去したところ、約4.1万年前の降下と推定されている支笏第１テフラ（Spfa-1）の軽石層が露出していた。

南東部斜面の調査

南東部斜面では、厚さ１m以上の火山灰が堆積しており、表土・火山灰を除去して、黒色土層（Ⅲ層）から人力調査を始めた。まず、表土除去・杭打ち後にⅢ層状面に残った厚さ１～５cm程の火山灰をジョレンで除去した。Ⅲ～Ⅵ層の各層は、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら移植ゴテと三角ホーにより２cmずつ掘り下げていき、遺構・遺物が確認されなかった部分については、スコップにより深さ５cmの細かい刻み目を入れた後に、ジョレンにより土を除去するという方法を繰り返して掘り下げて調査した。急激に落ち込んだ下の部分は泥炭層が厚く堆積する低湿地であり、掘

り下げていくと湧水のために常に水の溜まる状態となった。この部分については、毎朝ポンプにより排水し、水が引いてから排水しつつスコップで掘り下げて、遺物の有無を確認した。

拡張部分の調査

調査開始から10日ほど経過した９月中旬、すでに90基以上のＴピットを検出しており、それらの連なりがさらに東西方向に拡がっていると推定されたため、道教委文化課と苫小牧道路事務所に報告した。文化課からは１～２週間のうちに範囲確認の再試掘調査を実施する旨の連絡があり、９月26日に道教委文化課、苫小牧道路事務所、埋蔵文化財センターの三者で範囲確認の打ち合わせを行なった。９月27日からの再試掘調査は、Ⅶ層上面（褐色重埴土～埴壌土層）まで重機で掘削し、その範囲は東側拡張部分ではＨライン以北の43～48ライン間の約150㎡、西側拡張部分では25～33ライン間の約600㎡となった。なお、この段階で、「電柱」「記念樹」の部分は将来的にも工事計画がないとのことで、再試掘調査範囲から除外された。

拡張部分では表土～Ⅵ層の土を除去してジョレンをかけて清掃したところ、東側拡張部分では20数基、西側拡張部分では30基以上のＴピットを検出した。西側拡張部分では、Ｔピットが丘状の微地形の裾部を取り巻いて分布しており、Ｍラインより北側や26ラインより西側にさらに拡がる様相を見せていた。しかし、排土の運搬経路や残りの調査期間の問題で更なる拡張は不可能であった。遺構の調査は中央の平坦部と同様に行なった。西側拡張部分Ｍライン側の標高の低い部分ではＴピットを掘り下げると湧水があり、完掘できないものもあった。

遺物の取り上げ

包含層の遺物は、位置や層位を記録して、小発掘区ごとに取り上げ番号を付け取り上げた。微細な遺物の密集部分や焼土は土壌ごと取り上げて水洗により遺物を採集した。遺構の遺物は覆土の流れ込みの遺物を除いて、実測図により位置、層位、標高を記録して取り上げることとした。出土状況に応じて写真や出土状況図など詳細に記録化に努めた。

遺物整理の方法

出土した遺物は、野外作業と並行して現地で水洗作業、大まかな遺物の分類、カード作成、遺物収集帳作成、注記を行なった。冬期の室内作業では、分類、カード・遺物収集帳・注記の点検や補正、土器の個体識別、接合・復元、石器や黒曜石剥片・礫片の接合、土器・石器の実測・製図、集計、写真撮影、記録類の整理を行なった。土器の接合・復元作業においては、同一個体ごとにまとめて遺構間、遺構と包含層間や層での破片の接合状況を明らかにすることに努めた。

なお、野外作業と並行して現地で行なう整理作業では、カード・遺物収集帳作成や注記作業について不都合があった。現地では水洗作業のみ行い、速やかに遺物を搬送して、その後の整理作業は江別のセンターで行なったほうがよい場合もある。

注記作業の実際

注記については、10円玉より大きな土器片、実測の際に注記が実測を妨げない石器等、有意の礫・礫片を対象とした。ラッカーで下地を塗り、そこに遺跡略号（ハマ３）、調査区・小発掘区または遺構名、遺物番号、層位の順に、白のポスターカラーと面相筆により記入して、その上にラッカーを塗布した。例えば、ＴＰ－80の覆土から出土した遺物番号１番の遺物は、「ハマ３．ＴＰ－80．１．フクド」、M38グリッドの小発掘区ｂのＶｃ層から出土した遺物番号４番の遺物は、「ハマ３．Ｍ－38－ｂ．４．Ｖｃ」と記入される。　（鎌田　望）

2　土層の区分

浜厚真３遺跡の土層模式図と土層断面図を図Ⅲ－２－１・２に、土層の観察結果を表Ⅲ－２－１に示した。土層の観察にあたっては、『白老町　虎杖浜２遺跡（２）』（北埋調報172）の観察項目を用いた。以下に虎杖浜２遺跡の観察項目を掲げる。

観察項目１　**礫**　①岩石の種類、②混入量、③粒径、④形状、⑤風化の程度
観察項目２　**砂、シルト、粘土**　①土性区分、②色調、③粘着性、④堅密度
観察項目３　**層界**
観察項目４　**その他**　特徴的なもの

上記の項目の判定には『土壌調査ハンドブック』（ペドロジスト懇談会1984）、および『新版標準土色帖』（小山・竹原1996）を用いた。以下に各層の概要を「台地～平坦部」、「低湿地」に分けて述べる。なお、厚真川を挟んで位置する「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」（以下、苫東）の基本層序との対応関係についても記載した。

「台地～平坦部」

Ⅰ層：表土。上部は黒褐色、下部は黒色の砂土～砂壌土。苫東の第Ⅰ層に相当。
Ⅱ層：17・18世紀の降下テフラ。苫東の第Ⅱ・Ⅲ層に相当。
　Ⅱａ層：樽前ａテフラ（Ｔａ－ａ）。1739（元文４）年降下。にぶい黄橙色の火山灰。層厚２㎝程でⅡｂ層との間に薄い腐植層がみられる。苫東の第Ⅱ層に相当。
　Ⅱｂ層：樽前ｂテフラ（Ｔａ－ｂ）。1667（寛文７）年降下。にぶい黄橙色の軽石。層厚50㎝程。Ⅱｃ層との間に薄い腐植層がみられる。苫東の第Ⅲ層に相当。
　Ⅱｃ層：有珠ｂテフラ（Ｕｓ－ｂ）。1663（寛文３）年降下。浅黄橙色の軽石。層厚５㎝程。
Ⅲ層：黒色の重埴土～埴壌土。苫東の第Ⅳ層に相当。上位には10世紀降下とされる白頭山－苫小牧テフラ（Ｂ-Ｔｍ）がパッチ状にみられる。Ｂ-Ｔｍより上位で焼土が１ヵ所検出された。
Ⅳ層：褐色～極暗褐色の壌土。土壌化した樽前ｃテフラの可能性がある。台地部分では判然としない。苫東の第Ⅴ層に相当か。
Ⅴ層：黒色の埴壌土。苫東の第Ⅵ層に相当。北側の台地では下位の明度が高い。中位にⅤｂ層が堆積する場合、以下の３層に分けた。
　Ⅴａ層：黒色の壌土～埴壌土。Ｔピットが構築された層。下位にはⅤｂ層が多く混じる。
　Ⅴｂ層：褐色の砂壌土。支笏第1テフラの風成二次堆積と考えられる。南西側の台地上で最も厚く約60ｃｍを測る。北側の台地と南東側の低湿地を除いた調査区全域に堆積する。
　Ⅴｃ層：黒褐色の壌土。上面～上位で焼土13ヵ所が検出された。縄文時代早期の遺物包含層で、東釧路Ⅱ式土器等が出土している。
Ⅵ層：明褐色の埴壌土。Ⅴ層・Ⅴｃ層とⅦ層との中間に位置する層。
Ⅶ層：褐色の重埴土～埴壌土。下位にⅦｂ層が堆積する場合、以下の２層に分けた。
　Ⅶａ層：褐色の重埴土～埴壌土。Ⅶｂ層の上位に堆積するⅦ層の呼称。
　Ⅶｂ層：褐色の壌土中に軽石（Ⅷ層）や砂・小礫のラミナがみられ、水成層と考えられる。
Ⅷ層：支笏第1テフラ（Spfa-１）。約4.1万年前降下と考えられている（許ほか2001）。上部は酸化のため浅黄色、下部は灰白色を呈する軽石層。層厚２ｍ以上。苫東の第ＸⅡ層に相当。

Ⅸ層：褐色の重埴土。層厚10㎝程。

Ⅹ層：クッタラ第1テフラ（Ｋｔ－１）。約4.2万年前降下と考えられている（許ほか2001）。灰黄色の火山灰。基底は確認していない。

南西側台地は土層模式図に示していないが、Ｖｂ層の堆積すること以外は北側台地と同様である。

「低湿地」

「Ⅰ層」、「Ⅱ層」は台地部分と同様である。

「Ⅲ層」に相当する層

①　層：黒色の埴壌土。上位にＢ-Ｔｍがパッチ状にみられる。

①'　層：黒色の重埴土。泥炭を少量含む。上位にＢ-Ｔｍがパッチ状にみられる。

「Ⅳ層」に相当する層

Ｔａ－ｃ層：樽前ｃテフラ（Ｔａ-ｃ）。2,500～3,000年前降下。にぶい赤褐色の火山灰。苫東の第Ⅴ層に相当。

「Ⅴ層」に相当する層

②　層：黒褐色の埴壌土。Ⅷ層の軽石が多く混じる。

②'　層：黒色の重埴土。泥炭を多量に含む。Ⅷ層の軽石は殆ど混じらない。

③　層：にぶい黄橙色の軽石。Ｖｂ層に相当か。

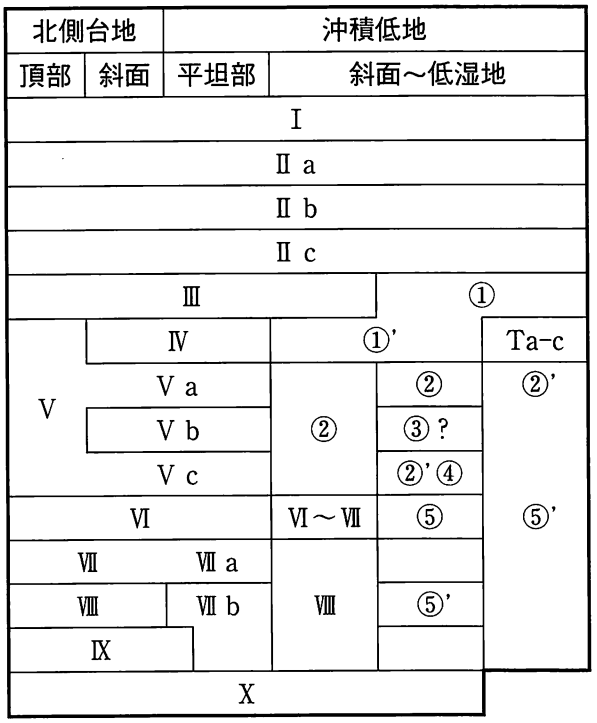
「Ⅵ～Ⅷ層」に相当する層

④　層：黒色の重埴土。

⑤　層：暗褐色の砂壌土。

⑤'　層：暗褐色の泥炭。基底は確認していない。

なお、Ⅸ層は確認されていない。



図Ⅲ－２－１　土層模式図

遺構の土層

遺構の土層についても、『虎杖浜２遺跡（２）』、「遺構の層位」で説明されている「遺構の、ある層を構成する基本層序各層の混在割合　堅密度　その他」という項目の表記を用いた。「混在割合」については、『新版標準土色帖』の「面積割合（%）」を用いて判断すべきであったが、時間的な制約もあって、各調査員が相対的に認識した割合となっている。「堅密度」は『土壌調査ハンドブック』を用いて「すこぶるしょう」、「しょう」、「軟」、「堅」、「すこぶる堅」、「固結」の６段階に区分した。

Ａ主体　Ａが主体となっている

Ａ＋Ｂ　ＡとＢが等量混じる

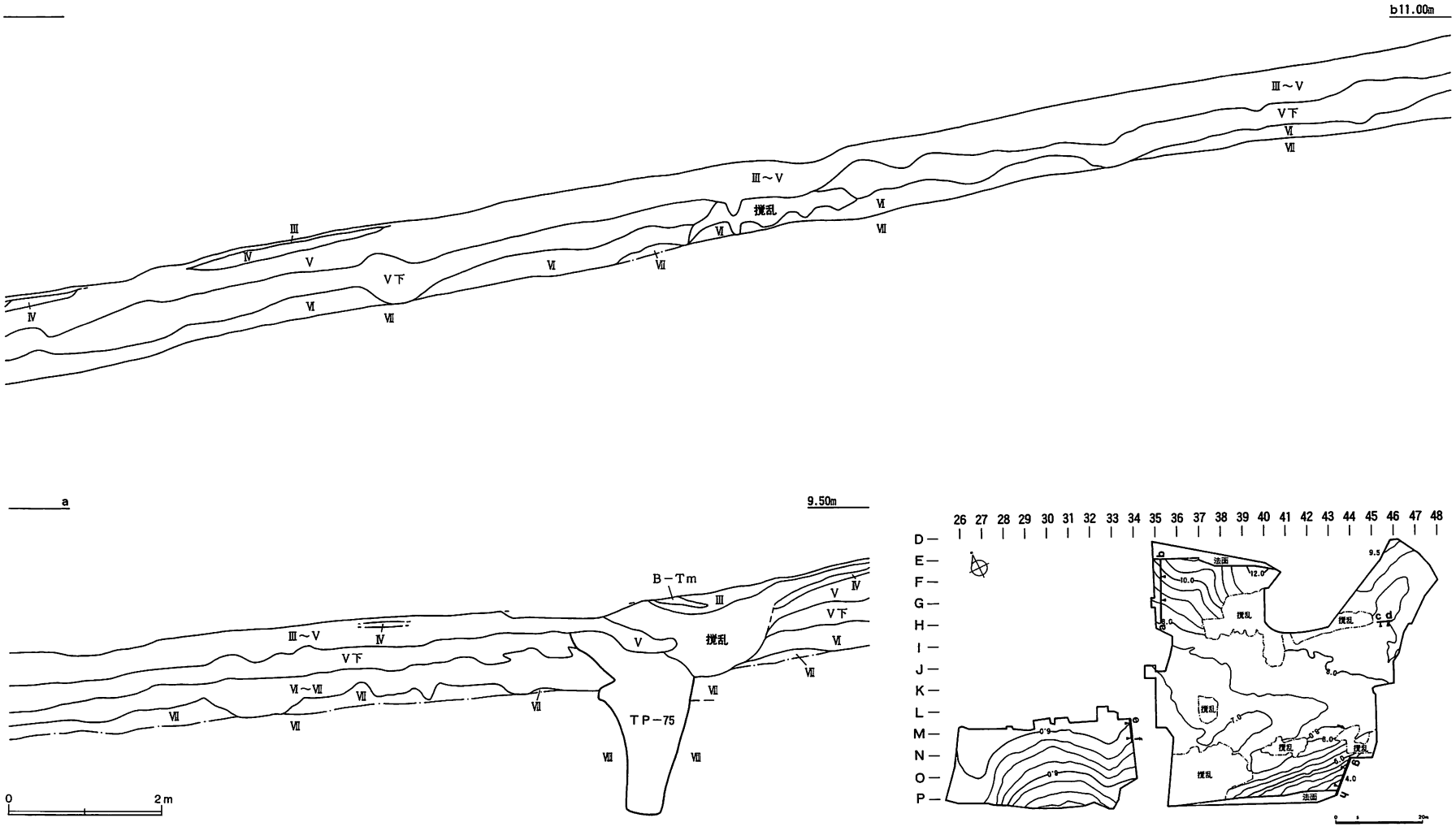
Ａ＞Ｂ　ＡにＢが多量に混じる

Ａ≫Ｂ　ＡにＢが少量混じる

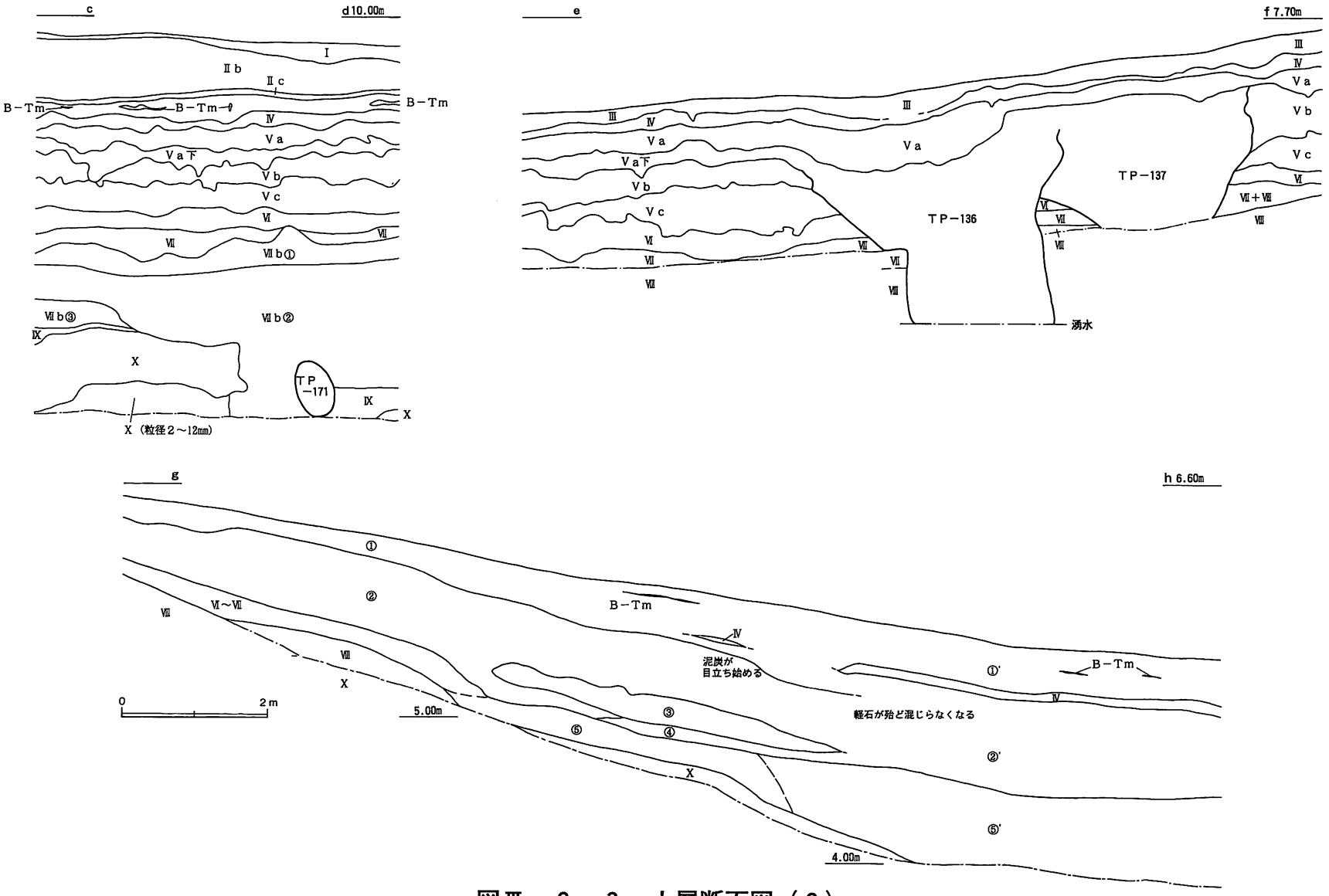
（山中）

表Ⅲ－2－1　土層観察表

地形	層位名	礫					砂・シルト・粘土				層界	その他
		岩石の種類	混入量	粒径	形状	風化の程度	土性区分	色調	粘着性	堅密度		
台地・平坦部	Ⅰ	軽石	15%程度	2～8mm程度	角礫	未風化	砂土～砂壌土	上部7.5YR3/2(黒褐) 下部7.5YR2/1(黒)	弱	しょう	判然	表土
	Ⅱa	－	－	－	－	－	－	10YR7/3(にぶい黄橙)	なし	軟～堅	明瞭	火山灰、Ta-a
	Ⅱb	軽石	－	2～10mm程度	角礫	未風化	－	10YR7/4(にぶい黄橙)	なし	堅	明瞭	Ta-b
	Ⅱc	軽石	－	2～5mm程度	亜角礫	未風化	－	10YR8/3(浅黄橙)	なし	堅	画然	Us-b
	Ⅲ	－	－	－	－	－	重埴土～埴壌土	10YR2/1(黒)	中	軟～堅	明瞭	
	B-Tm	－	－	－	－	－	－	2.5Y5/2(暗灰黄)	なし	軟～堅	明瞭	火山灰、B-Tm
	Ⅳ	軽石(Ⅷ)	1%程度	2mm程度	亜円礫	腐朽	壌土	上部7.5YR2/3(極暗褐)	中	軟～堅	明瞭	Ta-c?
	Ⅴ	軽石(Ⅷ)	3%程度	2mm程度	亜円礫	腐朽	埴壌土	上部7.5YR2/1(黒) 下部10YR3/3(暗褐)	弱	軟～堅	判然	
	Ⅴa	軽石(Ⅷ)	10%程度	2～8mm程度	亜角礫	腐朽	壌土	10YR2/1(黒)	中	軟～堅	判然	
	Ⅴa下位	軽石(Ⅷ)	25～30%程度	2～10mm程度	亜角礫	腐朽	壌土～砂壌土	7.5YR3/2(黒褐)	弱	軟～堅	判然	
	Ⅴb	軽石(Ⅷ)	30～40%程度	2～10mm程度	亜角礫	腐朽～風化	砂壌土	10YR4/4(褐)	弱	軟～堅	明瞭	Ⅷの二次堆積層
	Ⅴc	軽石(Ⅷ)	25～30%程度	2～10mm程度	亜角礫	腐朽	壌土	7.5YR3/1(黒褐)	中	堅	判然	
	Ⅵ	軽石(Ⅷ)	5%程度	2～8mm程度	亜円礫	腐朽	埴壌土	7.5YR5/6(明褐)	中	堅～すこぶる堅	漸変	
	Ⅶ(Ⅶa)	軽石(Ⅷ)	5%程度	2～8mm程度	亜円礫	腐朽	重埴土～埴壌土	10YR4/4(褐)	中	堅～すこぶる堅	漸変	
	Ⅶb	軽石(Ⅷ)	50%程度	2～50mm程度	亜円礫	腐朽	砂土～壌土	10YR4/4(褐)	中	堅～すこぶる堅	－	
	Ⅷ	軽石	－	2～25mm程度	角礫	風化～腐朽	－	上部2.5Y7/4(浅黄) 下部10YR8/1(灰白)	なし	堅	画然	Spfa-1
	Ⅸ	－	－	－	－	－	重埴土	10YR4/4(褐)	中	軟～堅	画然	
	Ⅹ	－	－	－	－	－	－	2.5Y7/2(灰黄)	なし	堅	－	火山灰、Kt-1
低湿地	①	軽石(Ⅷ)	下位に3%程	2～10mm程度	亜角礫	風化～腐朽	埴壌土	10YR1.7/1(黒)	弱	軟～堅	明瞭	
	①'	－	－	－	－	－	重埴土	10YR1.7/1(黒)	中	軟	画然(Ta-c) 判然(⑤')	上位にB-Tm 泥炭多量
	Ta-c	－	－	－	－	－	－	5YR4/4(にぶい赤褐)	なし	堅	明瞭	火山灰、Ta-c
	②	軽石(Ⅷ)	30%程度	2～15mm程度	亜角礫	風化～腐朽	埴壌土	10YR3/2(黒褐)	中～強	軟	明瞭(③)	
	③	軽石(Ⅷ)	－	2～15mm程度			－	10YR6/3(にぶい黄橙)	なし	堅	明瞭(④)	Vb?
	④	－	－	－	－	－	重埴土	10YR1.7/1(黒)	中～強	軟	明瞭(⑤⑤')	
	⑤	軽石(Ⅷ)	7%程度	2～10mm程度			砂壌土	10YR3/3(暗褐)	弱	堅	明瞭(⑥)	
	⑤'	－	－	－	－	－	－	7.5YR3/4(暗褐色)	なし	軟	－	泥炭層


b11.00m
Ⅲ～Ⅴ
Ⅴ下
Ⅵ
Ⅶ
撹乱
a
9.50m
B－Tm
TP－75
0
2m
26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
法面
撹乱

図Ⅲ－２－２　土層断面図（１）


c
d 10.00m
I
Ⅱb
Ⅱc
B－Tm
B－Tm→
B－Tm
Ⅳ
Va
Va下
Vb
Vc
Ⅵ
Ⅶ
Ⅶb①
Ⅶb③
Ⅶb②
Ⅸ
Ⅹ
TP
－171
X（粒径2～12mm）
e
f 7.70m
Ⅲ
Va
TP－136
TP－137
Ⅶ＋Ⅷ
Ⅷ
湧水
g
h 6.60m
①
②
Ⅵ～Ⅶ
泥炭が
目立ち始める
①'
②'
③
④
⑤
⑤'
軽石が殆ど混じらなくなる
0
2m
5.00m
4.00m

図Ⅲ－2－3　土層断面図（2）

3　遺物の分類

(1) 土　　器

分類にあたっては、石狩低地帯、噴火湾～太平洋沿岸での調査結果を基にした分類を踏襲した。出土した土器には縄文時代早期から晩期のもの、続縄文時代のものがある。縄文時代早期の資料をⅠ群とし、以下順次前期、中期、後期、晩期をⅡ群、Ⅲ群、Ⅳ群、Ⅴ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文期のものはⅦ群とした。

Ⅰ群　縄文時代早期に属するもの。

a類：貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。

b類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などのある土器群。

b－1類：東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式に相当するもの。

b－2類：コッタロ式に相当するもの。

b－3類：中茶路式に相当するもの。

b－4類：東釧路Ⅳ式に相当するもの。

Ⅱ群　縄文時代前期に属するもの。

a類：縄文の施された丸底・尖底の土器群。

a－1類：綱文式に相当するもの。

a－2類：春日町式、静内中野式に相当するもの。

b類：円筒土器下層式、植苗式、大麻Ⅴ式に相当するもの。

Ⅲ群　縄文時代中期に属するもの。

a類：円筒土器上層式、萩ヶ岡1式に相当するもの。

b類：円筒土器に後続する土器群。

b－1類：天神山式、萩ヶ岡2式、萩ヶ岡3式に相当するもの。

b－2類：柏木川式、萩ヶ岡4式に相当するもの。

b－3類：北筒式、トコロ6類、煉瓦台式あるいは静狩式に相当するもの。

Ⅳ群　縄文時代後期に属するもの。

a類：余市式、タプコプ式、手稲砂山式、入江式、大津式に相当するもの。

b類：ウサクマイC式、船泊上層式、手稲式、銛澗式に相当するもの。

c類：堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。

Ⅴ群　縄文時代晩期に属するもの。

a類：大洞B式、上ノ国式に相当するもの。

b類：大洞C1式、大洞C2式に相当するもの。

c類：大洞A式、大洞A'式、タンネトウL式に相当するもの。

Ⅵ群　続縄文時代に属するもの。

a類：大狩部式、トニカ式、東歌別式に相当するもの。

b類：恵山式に相当するもの。

c類：後北式に相当するもの。

Ⅶ群　擦文時代に属するもの。

（鎌田）

(2) 石　器　等

平成12・13年度に調査した鵡川町イモッペ川流域の遺跡群（米原３・米原４・宮戸３・宮戸４遺跡）での石器分類（北埋調報153・168）を基本的に踏襲した。石器の特性や機能に直接言及するため、記号は用いていない。それぞれの未製品や破損品、破片、剥片などは本来の分類に含めた。

１）剥片石器

石鏃
石槍・ナイフ
石錐
つまみ付ナイフ
スクレイパー
ピエス・エスキーユ
Ｒフレイク
Ｕフレイク
石核・原石

２）剥片

フレイク・チップ（「フレイク」で統一した）

３）磨製石器

磨製石斧・石斧石材（すべて「石斧」に含めた）

４）礫石器

たたき石
くぼみ石
すり石
石錘
砥石

５）礫・礫片

加工痕のある礫
礫・礫片（人為的な打ち割り・被熱の可能性があるもの）

(3) 土製品・石製品

出土していない

（芝田直人）

Ⅳ　遺構と遺構出土の遺物

1　概　　要

検出された遺構は、Ｔピット173基、土坑１基、焼土14ヵ所である。

Ｔピット（ＴＰ－１～173）の大半は、台地と低湿地の間にある平坦部分で検出された。台地の斜面部分で検出されたものは少ない。形態は長径1.5～２ｍの溝状が多く、底面が幅広のものは全体の約１割である。前者には１ｍ程度の短いものから４ｍを超す狭長なものまでみられる。後者のほとんどには杭跡があり、多いもので15本検出されている。また、杭跡どうしが重複する例もある。Ｔピットどうしの重複は15件ある。このうち先後関係が確認された11件では、いずれも長径の短い方が後に構築されている。覆土の観察から、Ｔピットは壁面の崩落等によって、自然に埋没したとみられるが、埋め戻されたと考えられるＴピットが３基確認された。規模や長軸方向を同じくするものには、２基１組などの配列が想定されることもある。構築時期の特定はできないが、厚真川を挟んで位置する「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」での調査結果から類推すると、縄文時代中期後半～後期初頭の可能性がある。なお、Ｔピットが構築されたとみられる土層（Ｖａ層等）について、花粉分析・植物珪酸体分析を依頼したところ、当時の遺跡周辺はキク亜科やイネ科等の生息する開けた草地であったと推測されている（Ⅵ章－２参照）。

土坑（Ｐ－１）は皿状の形態であり、Ｔピットと判断されなかったものである。

焼土は白頭山－苫小牧テフラより上位のⅢ層で１ヵ所、Ｖｃ層の上面・上位で13ヵ所検出された。Ⅲ層の焼土（Ｆ－１）は、検出された層位から擦文時代～アイヌ文化期のものとみられるが、この時期の遺物は得られていない。Ｖｃ層の焼土（Ｆ－２～14）は２、３ヵ所のまとまりが点在している。周囲からはⅠ群ｂ－１類（東釧路Ⅱ式相当）土器や、黒曜石製のフレイク、炭化したクルミ殻等が出土している。検出された層位と周囲の遺物から、縄文時代早期後半、東釧路Ⅱ式期とみてよいであろう。なお、Ｆ－８の炭化クルミ殻、Ｆ－11の炭化材について、放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）を依頼したところ、いずれも6,890±40（ｙＢＰ）と測定されている（Ⅵ章－１参照）。

2　Ｔピット（図Ⅳ－２－１～63／表Ⅳ－２－１～９）

173基検出された。各Ｔピットの属性は表Ⅳ－２－４に示し、ここではＴピットの分類、地形、確認状況、覆土、形態と規模、杭跡、重複、分布、配列、時期について概括して述べる。

Ｔピットの分類

本遺跡と距離的に近い「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」（以下、苫東）との対比をはかるため、「苫東分類（①底面の長短比、②底面の長径、③杭跡の有無による分類）」によって分類した。その結果、本遺跡のＴピットは苫東のＡ１型、Ａ２型、Ｂ１型、Ｂ２型、Ｃ１型、Ｃ２型にそれぞれ分類された。ただし本遺跡の場合、Ａ１型の中でも長径2.4～4.0ｍにまとまりがみられたことから（図Ⅳ－１－４）、長径2.4ｍ以上のＡ－１型をＡ１－Ｌ型として区別した。また、１基のみではあるが、Ａ１型に杭跡の検出されるものがあり、杭跡のあるＡ１型をＡ１－２型とした。なお分類の変更にあたっては、大泰司（2002）「切り合うＴピット」を参照した。図Ⅳ－２－１は、各分類の形態がわかるよう、それぞれの中で平均に近いＴピットを図示したものである。

A型：長短比が9以上のもの

A１：長径２m以上

A１－L：長径2.4m以上

A１－２：杭跡のあるA１型

A２：規模２m未満

B型：長短比が５～８のもの

B１：杭跡なし

B２：杭跡あり

C型：長短比が４以下のもの

C１：杭跡なし

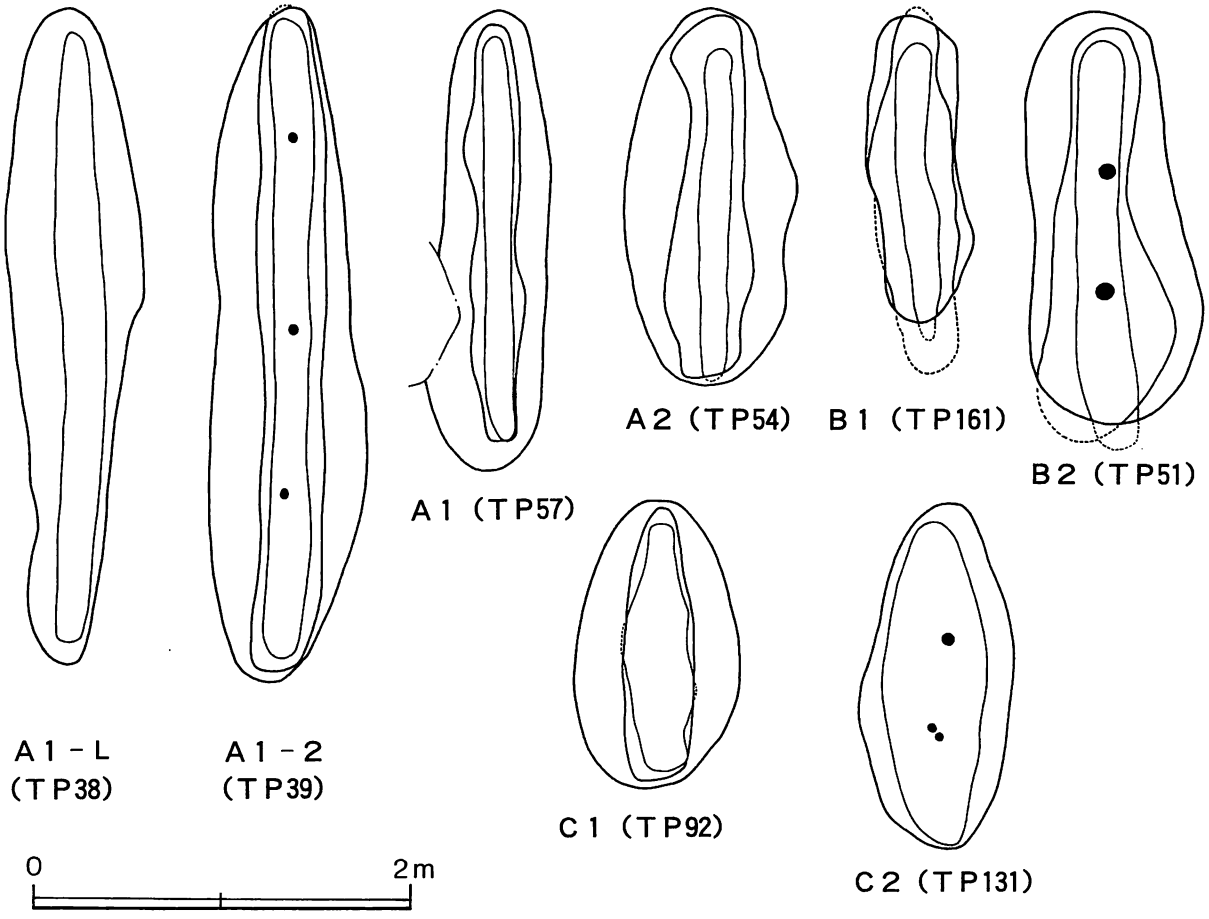
C２：杭跡あり

D型：長さ１m、幅0.2m前後の小規模なタイプで深さ0.5m以下のもの

なお、本遺跡でD型に分類されたものはない。

表Ⅳ－２－１　Tピット分類結果

分類	A型				B型		C型			D型	不　明		合計
基数	56				70		10			0	37		173
細分	A１	A1—L	A1—2	A２	B１	B２	C１	C２	C	D	湧水	撹乱	合計
基数	4	29	1	22	67	3	1	8	1	0	29	8	173
%	2.3	16.8	0.6	12.7	38.7	1.7	0.6	4.6	0.6	0.0	16.8	4.6	100



図Ⅳ－２－１　Tピットの分類

地形

遺跡は台地縁辺部に立地することから、調査区内の地形は台地から低湿地へ連続的に変化しており、台地と低湿地の間には、沖積作用による平坦部が形成されている。

（a）台地

台地は調査区の北側と南西側に位置する。ほとんどは斜面部分であるが、北側台地のＴＰ－73・74の周りは平坦ぎみで台地頂部にあたる。調査終了時の地形であるが、調査区中央部分の南側には、標高８ｍ前後の地形の高まりがみられる。撹乱のためわかりにくいが、南西側台地に連続している。

（b）低湿地

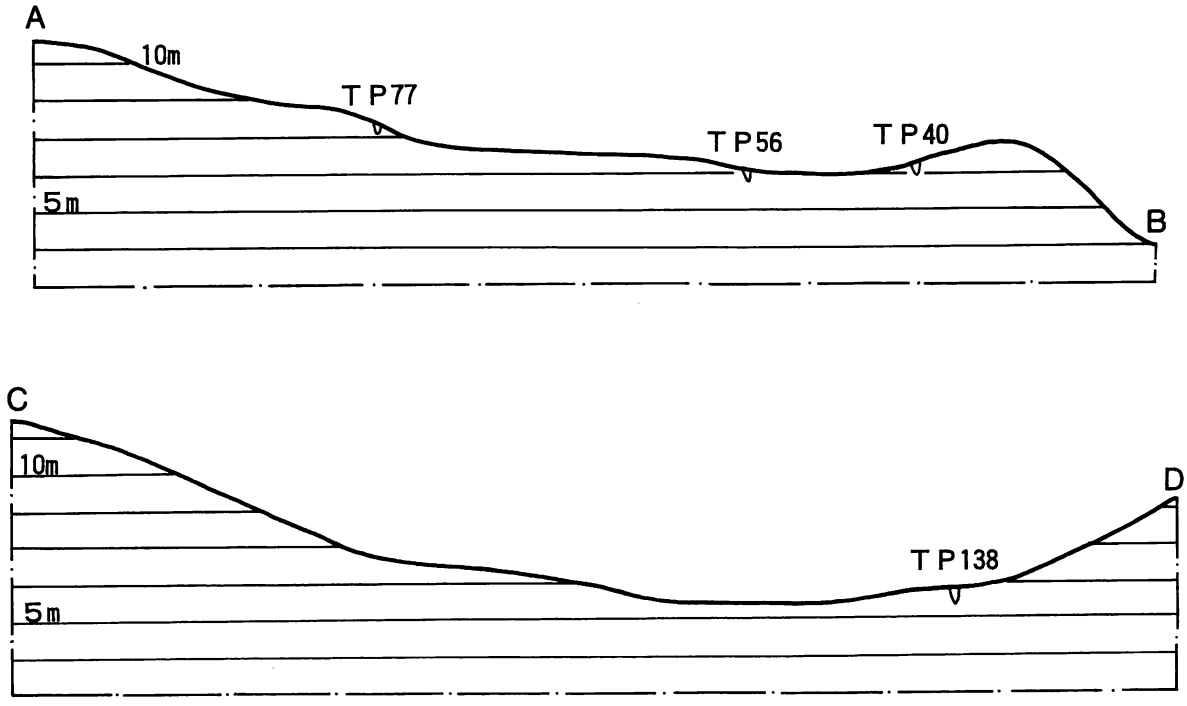
調査区の南東側では、樽前ｃテフラの上下で泥炭の堆積する低湿地が確認されている。地形図（図Ⅱ－３－１、Ⅲ－１－２）から判断すると、低湿地は台地の縁辺に沿って北東側、西側へも広がっているとみられる。本調査前に南西側拡張区の北側（調査区外）にあけられた試掘坑でも泥炭が確認されており、北側台地と南西側台地の間にも低湿地が存在するようである。

（c）平坦部

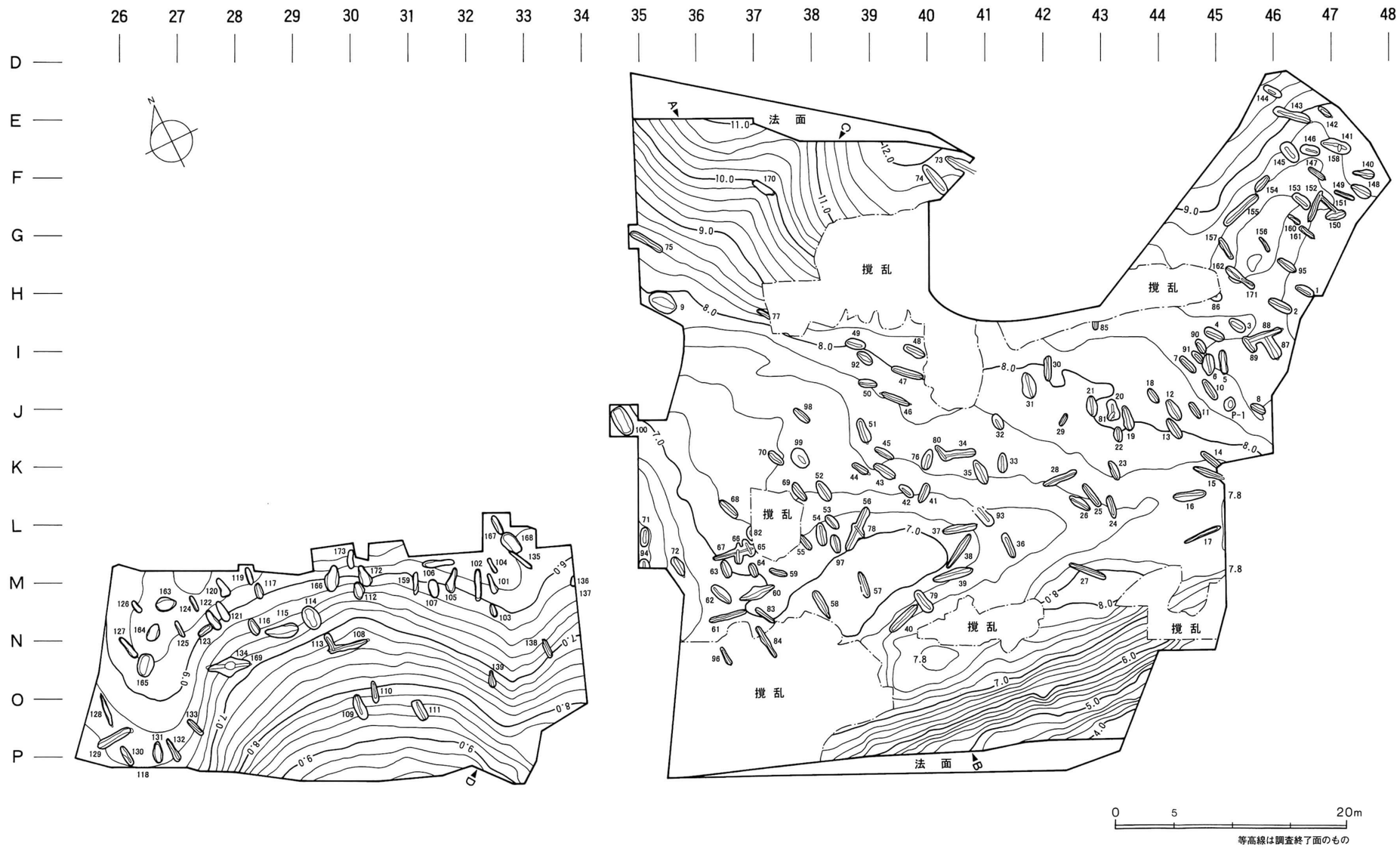
台地と低湿地の間に広がる傾斜の弱い部分で、調査区の中央部分には、浅く幅広な沢状地形がみられる。水成層と考えられる基本土層のⅦｂが堆積する部分に相当する。西側（南西側拡張区の北側）には低湿地の存在が予想されるため（図Ⅲ－１－２）、南北の台地に沿って二股に分かれていくとみられる。

確認状況

削平・撹乱部分が多くみられたため、Ｖｃ層の上面まで重機で除去してから調査が行われた。このためＶｃ層上面で確認されたものが大半である。しかし、調査区の壁面などにかかるもの（ＴＰ－71・



図Ⅳ－２－２　地形断面図



図Ⅳ－２－３　Ｔピット分布図

75・100・118・136・137）では、いずれもＶａ層やＶ層の中ほどまでＴピット壁面の輪郭がみられ、これらから推し測ると、ＴピットはＶａ層やＶ層中位から掘り込まれたと判断される。覆土の平面的な確認状況には、①Ｖｃ・Ｖｂ・Ｖａ層が同心円状にみられるもの、②Ⅶ、Ⅷ層が主体のものなどがみられた。①は土層断面の観察から、Ｔピットが周囲から次第に埋没した状況を示すものである。②はＴＰ－65・74でみられ、隣接するＴピットの掘り上げ土によって埋め戻された状況と考えられる。

北東側、南西側の拡張区は、遺構確認調査範囲とされたため、Ⅶ層またはⅧ層まで重機による鍬取りが行われ、それらの面でＴピットが確認された。なお、南西側拡張区の斜面下、標高約5.5ｍは湧水面にあたり、ＴＰ－173は確認後すぐに水没する状況であった。このため確認面の輪郭しか実測できなかった。

覆土

覆土はＴＰ－９を除き、基本的に短軸で観察した。自然埋没と判断されるものがほとんどであるが、埋め戻されたと考えられるＴピットが３基ある。

（ａ）自然埋没

自然埋没と判断される覆土は、上部と下部に大別される。下部ではＶ層とⅦ・Ⅷ層が混在、または交互に重なり合っており、底部では黒っぽい。堅密度（土層の固さ）は「しょう」、「軟」と判定されることが多い。これらは開口部からの土壌母材（枯葉等）等の流入、壁面（Ⅶ・Ⅷ層）の崩落が繰り返された結果であろう。上部ではＶｃ、Ｖｂ、Ｖａ層の崩落により幅が広くなる状況が観察され、平面ではこれらが同心円状にみられた。堅密度は「堅」と判定されることが多い。特徴的な断面としては、覆土の上部が遺構の下部まで垂下するもの（ＴＰ－31・35・36・38・40・48・57・62・64・76・79）がある。これは両壁がずり落ちたことによって、Ｔピット内にさらに縦長の隙間がうまれ、そこに覆土が堆積していったためであろう（北埋調報70参照）。ずり落ちた層を本来の位置に戻して考えると、Ｔピット本来の形態は、少なくともＶｃ層までは垂直に近いものであったと推測される。この他、ＴＰ－13の覆土中位で焼土が検出されたが（覆土２層）、壁面をなすＶｃ層の焼土（Ｆ－12）がＴピット壁面の崩落により落ち込んだものである。

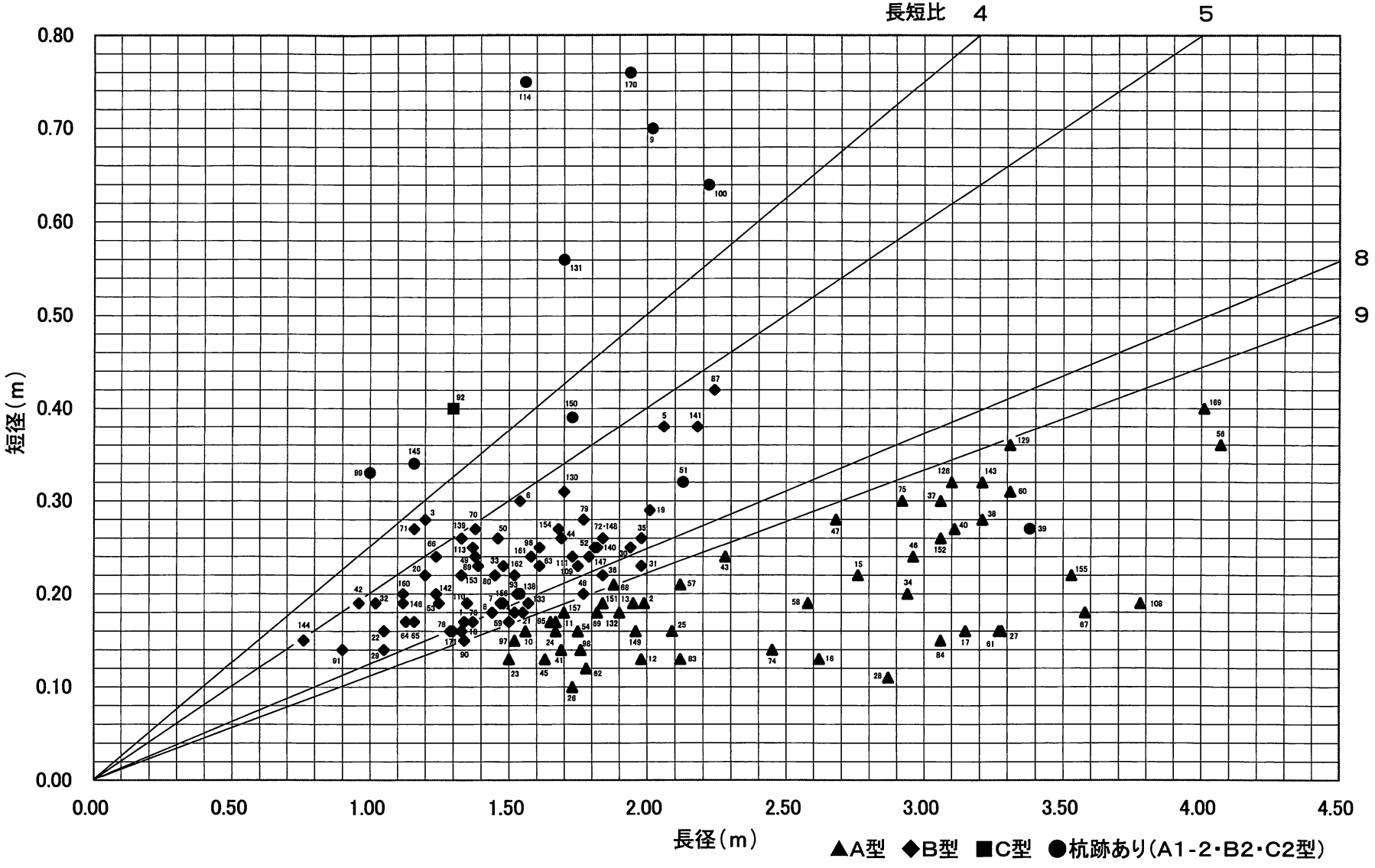
（ｂ）埋め戻し

埋め戻されたと考えられるＴピットは、ＴＰ－65・74・137の３基である。ＴＰ－65の覆土１層はⅦｂ主体、74の覆土１層はⅧ主体である。Ⅶｂ、ⅧはＴピットの壁面中部から底面にみられる基本土層であることから、両者の覆土１層はＴピット構築時の掘り上げ土であろう。覆土１層より下位は、自然に埋没した状況である。掘り上げ土が周囲に置かれていれば自然に流れ込むことも想定されるが、ＴＰ－65に66、74に73が隣接しており、なおかつ両者の覆土１層が埋没途中のＴピットのくぼみに満遍なく堆積していることから、ＴＰ－65の覆土１層は66の、74の覆土１層は73の掘り上げ土と考えられる。なおＴＰ－65・66はともにＢ１型、ＴＰ－74・73はＡ１－Ｌ型であり、規模・形態を同じくするＴピットが隣接している。ＴＰ－137は調査区の壁面で断面の一部が確認された。土層断面の観察では、ほぼ埋没した時点でＴＰ－136に壊されている。ＴＰ－137の覆土１層はⅧが主体で、136の掘り上げ土の可能性が高い。２基とも大部分が調査区外にあるため規模・形態については不明である。

形態と規模

（ａ）平面形

確認面の形態は、底面と比べて幅広になっており、土層断面の観察から、壁面の崩落により広がったと考えられる。斜面の等高線に直交するものでは、上方が下方より大きく崩落したとみられる形態



図Ⅳ－２－４　Ｔピット底面における長径・短径の相関図

がある（ＴＰ－109・139・166・172等）。

底面の形態は、長短比５以上の溝状を呈するもの（Ａ型、Ｂ型）が大半で、長短比４以下の幅広のもの（Ｃ型）は少ない。後者の多くは長楕円形ぎみの形態であるが、ＴＰ－100のように整った長方形をなすものもある。Ｃ型には杭跡のあるＣ２型が多い。

図Ⅳ－２－４をみると、長短比５以上のＡ型、Ｂ型には長径１～２ｍのものが多いが、１ｍ前後の短いものや４ｍを越す狭長なものもある。また、2.4m～4.0mのあたりが比較的まとまっており、Ａ１－Ｌ型として区別している。Ａ型の最長（底面の長径、以下同）はＴＰ－56の4.07m、最短はＴＰ－23の1.50m、Ｂ型の最長はＴＰ－87の2.24m、最短はＴＰ－144の0.76mである。長短比４以下のものは数が少ないこともあってまとまりはみられない。Ｃ型の最長はＴＰ－100の2.22m、最短はＴＰ－99の1.00mである。

短径については、Ａ型、Ｂ型とも0.12m～0.28mの範囲に集中している。Ａ型で最も幅が狭い（底面の短径、以下同）のはＴＰ－26の0.11m、幅広なのはＴＰ－169の0.40m、Ｂ型で最も幅が狭いのはＴＰ－29・91の0.14m、幅広なのはＴＰ－87の0.42mである。Ｃ型はＴＰ－99の0.33mから、ＴＰ－170の0.76mまでまばらにみられ、まとまりはない。なお、表Ⅳ－２－２は分類されたＴピットの平均値である。

（ｂ）断面形

短軸断面形には、①底面から垂直ぎみに立ち上がる「Ｕ」字状のもの（ＴＰ－27等）、②底面から壁面の中位まで垂直に近く、上位で広がる「Ｙ」字状のもの（ＴＰ－３等）、③底面から確認面まで直線的に広がる「Ｖ」字状のもの（ＴＰ－53等）、④壁の左右で異なる形態のもの等がみられる。

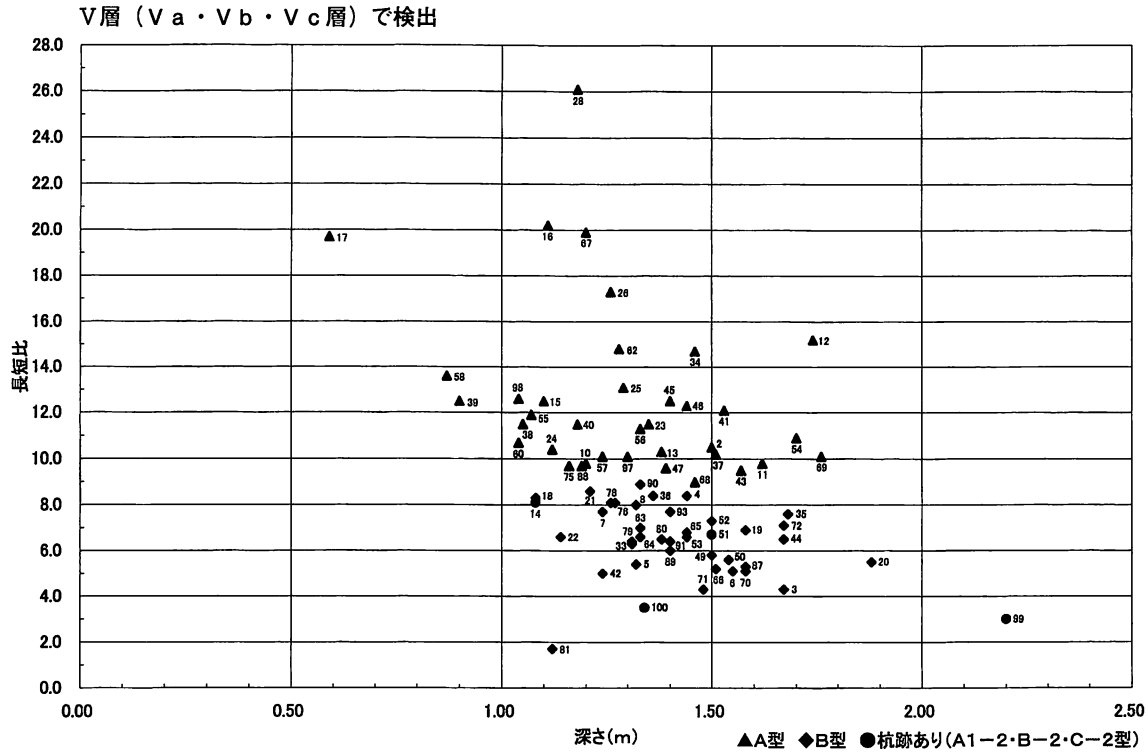
長軸断面形には、①両端がオーバーハングするもの（ＴＰ－152等）、②片端だけオーバーハングするもの（ＴＰ－90等）、③オーバーハングしないもの（ＴＰ－97等）がみられる。各分類の確認面と底面の長径を比べると（表Ⅳ－２－２）、Ｂ１、Ｂ２、Ｃ２型は20cm前後の差があるのに対して、Ａ１、Ａ１－Ｌ型はその差が数cmである。平面図でも目に付くように、Ａ１－Ｌ型ではオーバーハングする断面形態が多いため、平均すると差がほとんどなくなっている。底面では、①平坦なもの（ＴＰ－92等）、②傾斜するもの（ＴＰ－91等）等がみられる。斜面の等高線に直交するものでは、傾斜に沿って下方が深くなっているもの（ＴＰ－110等）、と傾斜しないもの（ＴＰ－109・111等）がある。

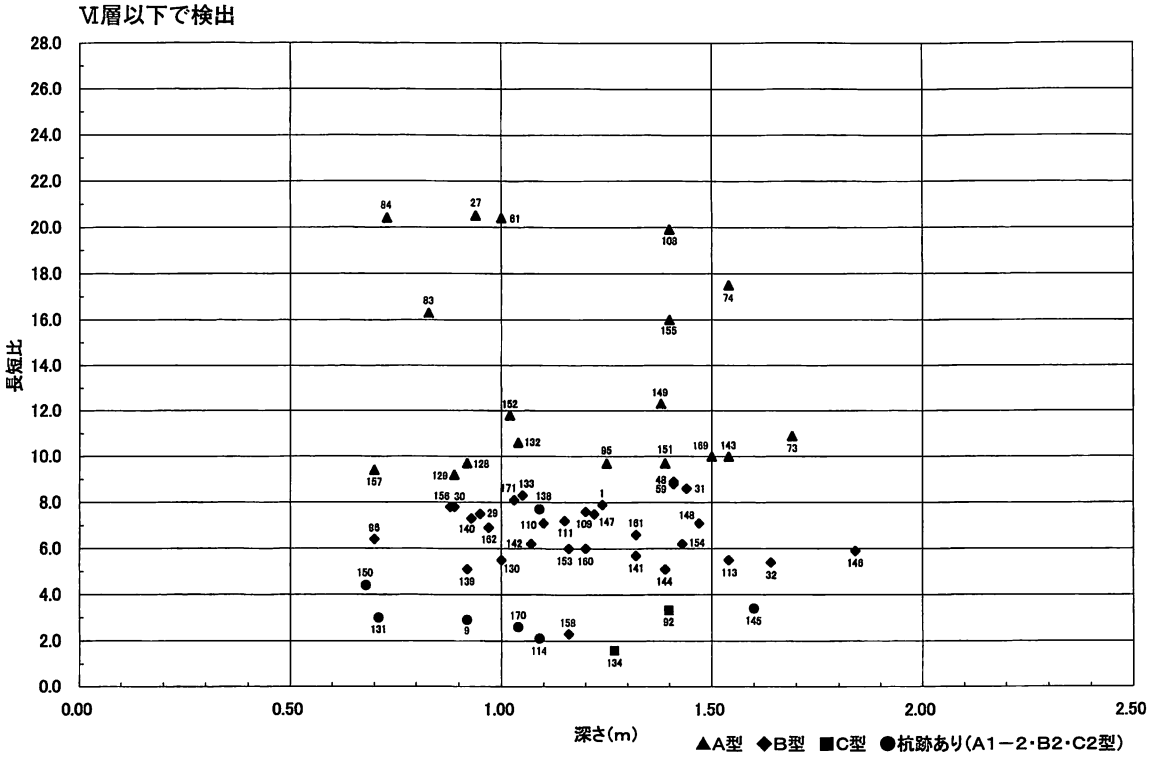
（ｃ）深さ

確認状況で述べたように、ＴピットはＶａ層、Ｖ層中位から掘り込まれたとみられるが、Ｖｃ層以下で確認されたものが大半である。このため深さを比べることは難しいが、Ｖ層とⅥ層以下で確認されたものに大別して、底面の長短比と深さの関係を示した（図Ⅳ－２－５）。Ｖ層で確認されたもの

表Ⅳ－２－２　Ｔピット分類別規模一覧

	確認面		底面		深さ	長短比
	長径（m）	短径（m）	長径（m）	短径（m）	（m）	
Ａ１	2.22	0.58	2.15	0.19	1.23	12.30
Ａ１－Ｌ	3.17	0.73	3.14	0.24	1.19	12.10
Ａ１－２	3.57	0.83	3.38	0.27	0.90	12.50
Ａ２	1.93	0.71	1.76	0.15	1.34	11.40
Ｂ１	1.73	0.75	1.49	0.23	1.32	6.60
Ｂ２	1.98	0.72	1.84	0.25	1.20	7.50
Ｃ１	1.53	0.89	1.30	0.40	1.40	3.30
Ｃ２	2.09	1.27	1.67	0.56	1.20	3.10
Ｃ	(1.76)	1.68	(0.96)	0.64	1.27	1.50
平均値	2.28	0.91	2.10	0.33	1.23	7.80





図Ⅳ－２－５　Ｔピット長短比・深さの相関図

は、長短比が大きくなるごとに浅くなる傾向がみられる。Ⅵ層以下で確認されたものでは、まとまりはみられない。確認面は異なるが、A型の最深はＴＰ－69の1.76m、浅いものはＴＰ－17の0.59m、Ｂ型の最深はＴＰ－20の1.88m、浅いものはＴＰ－96の0.70m、Ｃ型の最深はＴＰ－99の2.20m、浅いものはＴＰ－150の0.68mである。

杭跡

13基で検出された。内訳はＡ１－２型１基（ＴＰ－39)、Ｂ２型３基（ＴＰ－14・51・138)、Ｃ２型８基（ＴＰ－９・99・100・114・131・145・150・170)、不明１基（ＴＰ－82）である。

（ａ）Ａ１－２型

ＴＰ－39は底面の長径が3.38m、短径0.27mの狭長なもので、３本の杭跡が等間隔に検出された。

（ｂ）Ｂ２型

ＴＰ－51で２本検出されている。ＴＰ－14・138の杭跡は壁面の崩落により実測できなかった。

（ｃ）Ｃ２型

Ｃ型は10基検出されているが、そのうちの８基が杭跡のみられるＣ２型である。底面が幅広の形態には杭跡の検出されることが多い。Ｃ２型の杭は１～15本検出されており、ＴＰ－150では10本、170では15本検出されている。杭の位置には、①底面の中央を挟んだ両側にあるもの（ＴＰ－99・100・114・131)、②中央付近にまとまるもの（ＴＰ－９・145)、③長軸に沿って10本ほど並んでいるもの（ＴＰ－150・170）がある。①のＴＰ－114では底面の杭跡から覆土中位にかけて、ややしなった棒状の痕跡がみられた。②のＴＰ－９では太めの１本の周りに５本がめぐる。③のＴＰ－170では15本検出されているが、そのうちの５ヵ所では杭跡どうしの重複がみられる。分類不明のＴＰ－82は底面の端部で杭跡が検出されている。この杭跡は深さ0.46mを測り、本遺跡では最も深い。

重複

重複は15件で確認された（表Ⅳ－２－３)。２基の重複は12件、３基の重複は３件である。このうちの11件で先後関係が確認された。また、縄文時代早期後半の焼土と重複するものが２件ある。

（ａ）同分類の重複

ＴＰ－141と158の１件（Ｂ１型）で、長軸の短いＴＰ－158が後に構築されている。ただし、ＴＰ－158は規模が１m程度と想定され、Ｂ１型の平均より50cm前後小さい。

（ｂ）異なる分類の重複

９件確認された。Ａ１－Ｌ型がＡ２・Ｂ１・Ｃ型に壊される例が８件で最も多く、そのうちの６件がＢ１型に壊される。Ａ１－Ｌ型以外の重複は、Ａ２型がＣ２型に壊される１件のみである。

Ａ１－Ｌ型とＢ型の重複６件をみると、直交ぎみに重複するものが多い。その部分の地形にもよるが、等高線に対してＡ１－Ｌ型が平行に、Ｂ型が直交して構築される傾向にあるためと考えられる。

（ｃ）焼土との重複

縄文時代早期後半の焼土と重複するものは、ＴＰ－13とＦ－12、ＴＰ－57とＦ－14の２件である。Ｔピットは焼土のあるＶｃ層より上位から構築されており、

表Ⅳ－２－３　Ｔピットの重複一覧

後		先	
ＴＰ番号	分類	ＴＰ番号	分類
65	Ｂ１	67	Ａ１－Ｌ
66	Ｂ１	67	Ａ１－Ｌ
78	Ｂ１	56	Ａ１－Ｌ
87	Ｂ１	88	Ａ１－Ｌ
89	Ｂ１	88	Ａ１－Ｌ
113	Ｂ１	108	Ａ１－Ｌ
134	Ｃ	169	Ａ１－Ｌ
151	Ａ	152	Ａ１－Ｌ
150	Ｃ２	151	Ａ２
158	Ｂ１	141	Ｂ１
136	－	137	－
先後関係不明			
ＴＰ番号	分類	ＴＰ番号	分類
20	Ｂ１	81	Ｂ１
34	Ａ１－Ｌ	80	Ｂ１
135	－	168	－
162	Ｂ１	171	Ｂ１

Ｔピットの方が新しい。

分布

Ｔピット南東側の低湿地を除いた調査区全域で検出されているが、地形によって分布密度に差がある。分類ごとのＴピット分布図を図Ⅳ－２－５～８に示した。なお、等高線は調査終了時のものである。

（ａ）平坦部

大半のＴピットは台地と低湿地の間にある平坦部に構築されている。調査終了時の地形にＴピットの位置を重ね合わせると、平坦部の中でも①北東側拡張区の窪地、②調査区中央部分の浅く幅広な沢状地形、③南西側拡張区の斜面下、に多く分布している。①の部分の南東側は、地形図（図Ⅲ－１－２等）から低湿地の存在が予想され、①は北側台地と低湿地の間にある窪地とみられる。Ｔピットの大半（Ａ型、Ｂ型）は等高線に直交する（長軸を台地と低湿地に向ける）が、Ａ１－Ｌ型のＴＰ－152・155は等高線と平行である。②では沢状地形の北側にある西側へ張り出す高まりに多い。等高線との関係は平行するものが目に付くが、高まりの幅が狭いため、見方によっては直交するととれるものもある。Ａ１－Ｌ型が比較的まとまっている。③の北側（調査区外）にあけられた試掘坑では、泥炭が確認されており、③は南西側の台地と低湿地の間にあたる。Ｔピットは等高線に直交する（長軸を台地と低湿地に向ける）ものがほとんどであるが、湧水のため底面の確認ができず、分類は不明である。

（ｂ）台地

この部分で検出されたＴピットは少ない。①頂部に位置するもの、②斜面に位置するもの、がある。①は北側台地の頂部でＴＰ－73・74の２基が検出されている。②では南西側台地のＴＰ－109～111（Ｂ型）のように、沢と沢の間に位置し等高線と直交するもの、北側台地のＴＰ－170のように、沢底に位置し等高線と平行するものがある。Ａ１－Ｌ型はＴＰ－75・108等のように、等高線と平行する。

配列

形態・規模や長軸方向を同じくするＴピット間には配列の想定されるものがある。

（ａ）Ａ１－Ｌ型（図Ⅳ－２－６）

Ａ１－Ｌ型は狭長であることから、他形態との区別が比較的容易で、①15－27、②17－28、③34－37、④38－56、⑤58－84、⑥61－67等のように２基１組の配列が想定される。

（ｂ）Ａ型・Ｂ型（図Ⅳ－２－７・８）

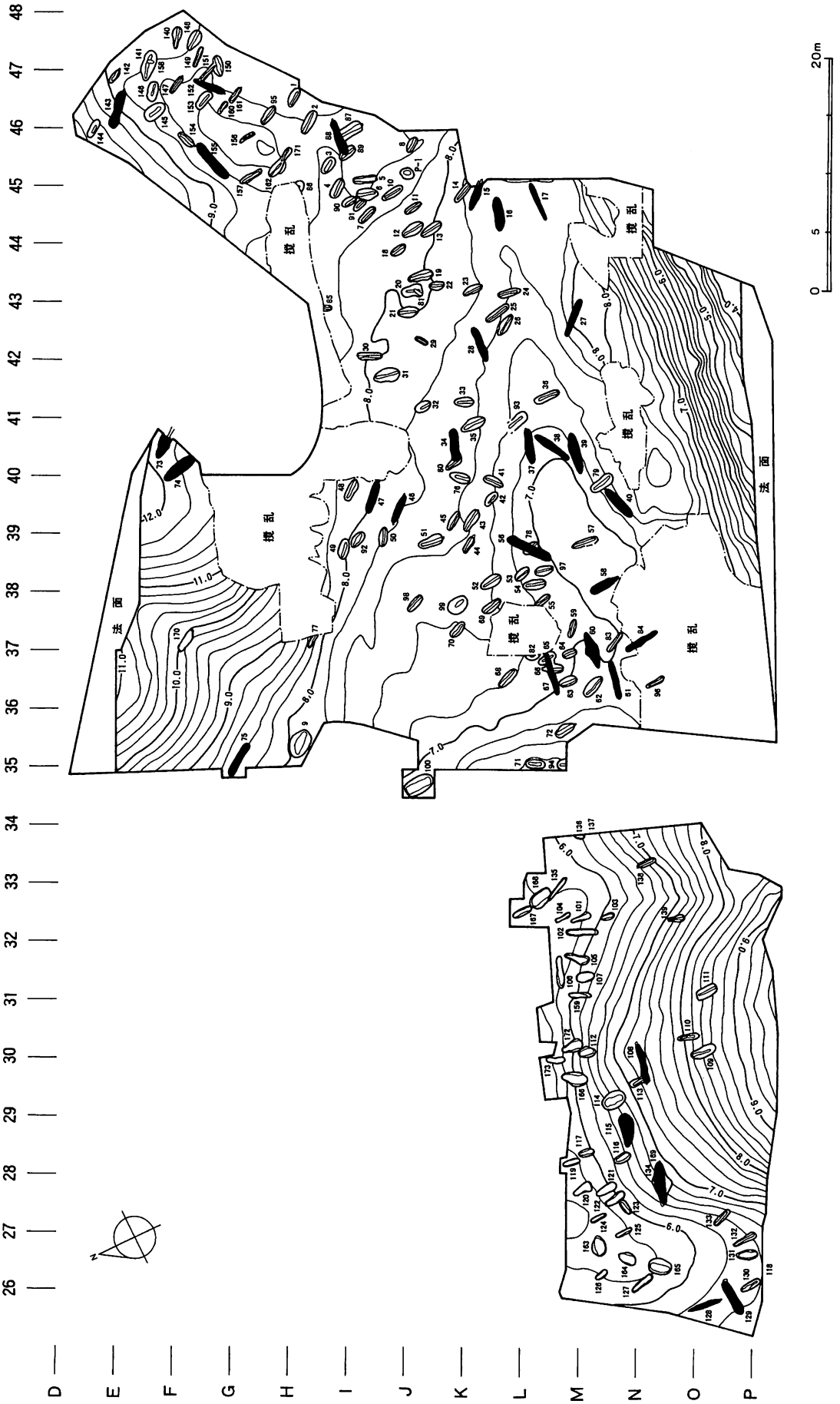
Ａ１－Ｌ型以外のＡ（Ａ１・Ａ２）型とＢ（Ｂ１・Ｂ２）型については、長短比で区別されているが、規模のまとまりがみられるため（図Ⅳ－２－４）、同じく扱うと、72（Ｂ１）－68（Ａ２）－70（Ｂ１）－98（Ａ２）のような２基以上の配列が想定される。この列の南東側や北東側拡張区でも配列が想定されるが、調査区内でも特にＴピットの密度が高いため判然としない。

（ｃ）Ｃ型（図Ⅳ－２－９）

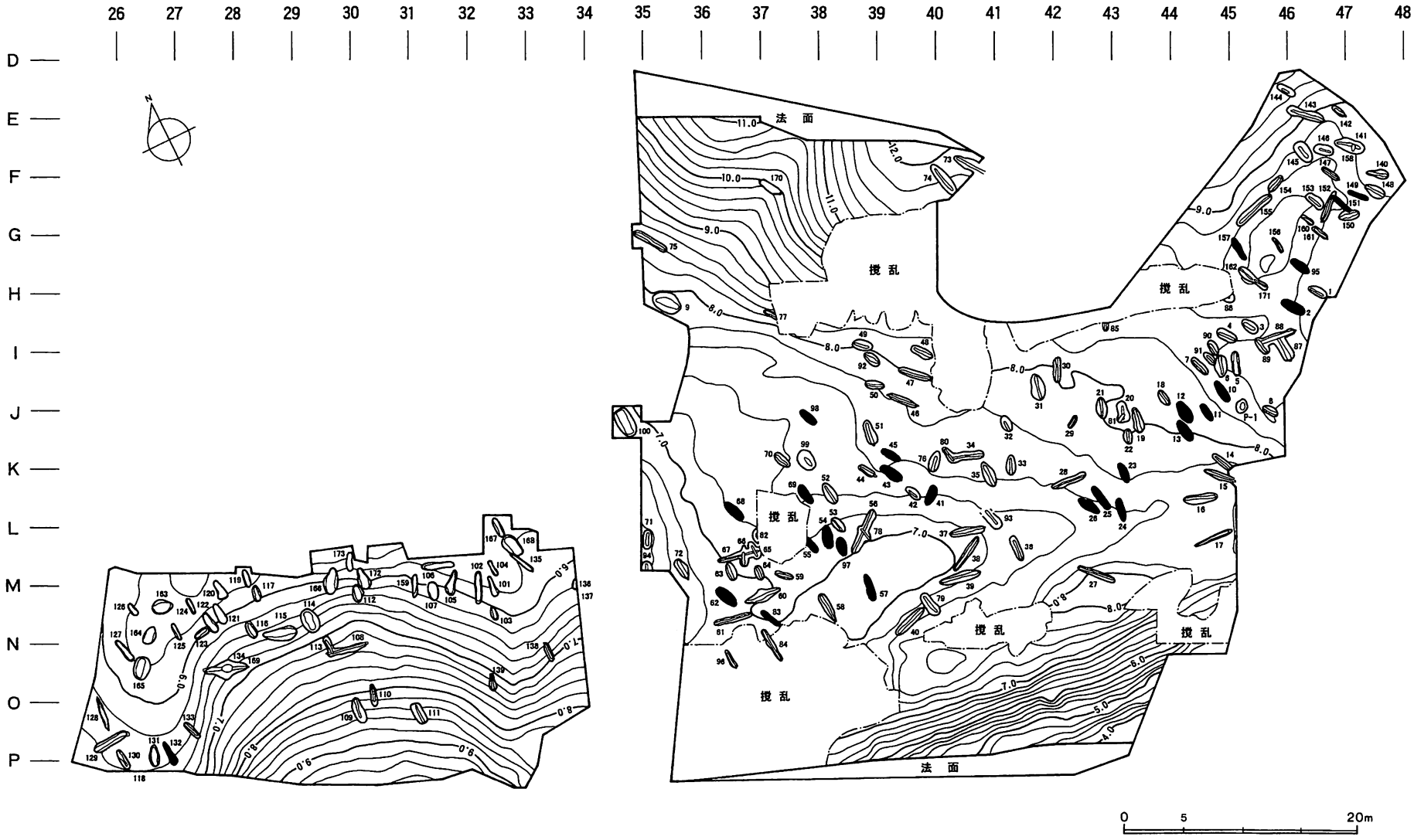
Ｃ型は底面が幅広なため、Ａ１－Ｌ型同様、他形態との区別が容易で、９－170等の配列が想定される。100がこの配列に属する可能性もあるが、周囲の地形が不明であるため判然としない（図Ⅳ－２－９）。

時期

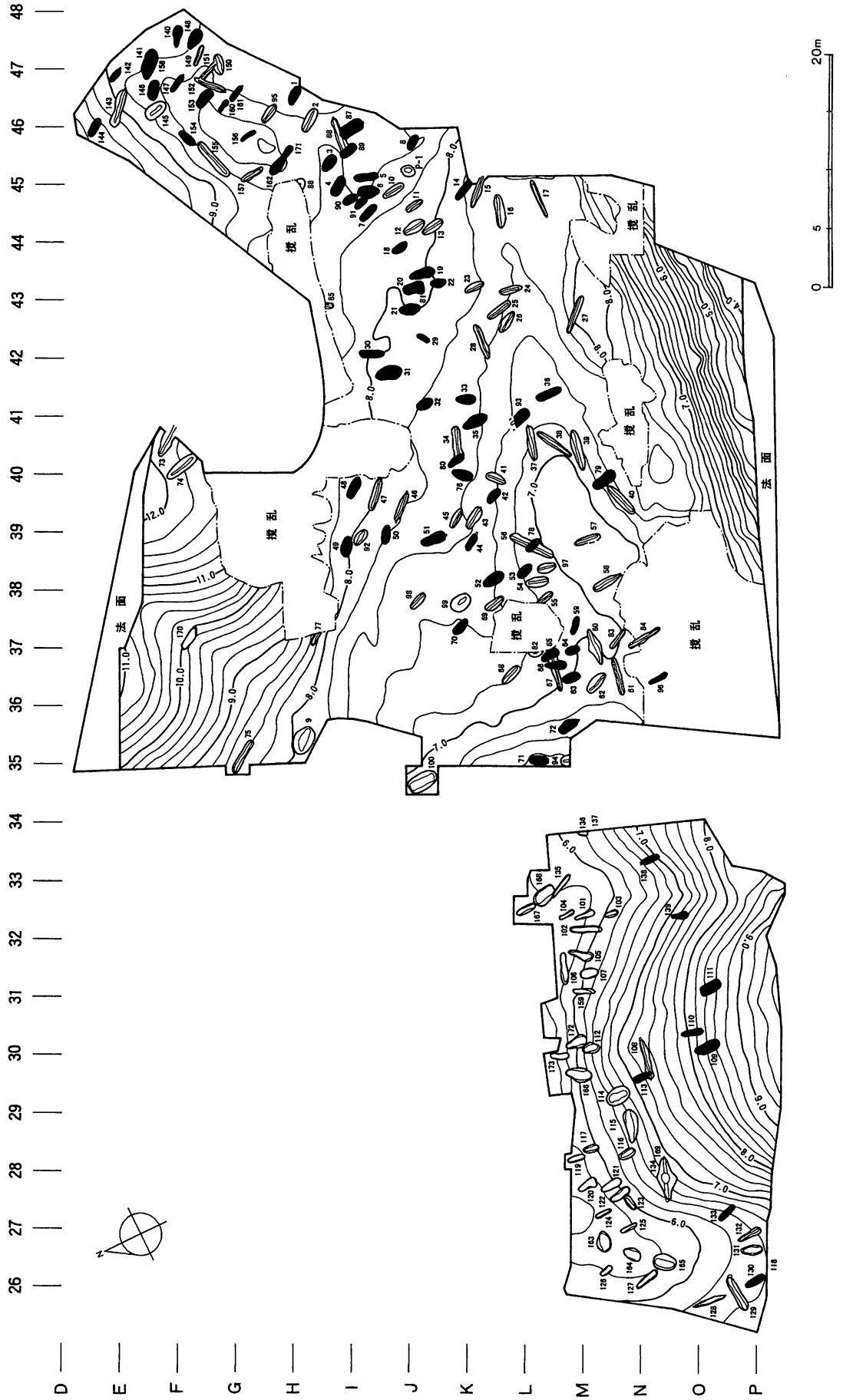
本遺跡では、Ｔピットの構築時期を特定する資料は得られていないが、厚真川を挟んで位置する「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」での調査結果から類推すると、縄文時代中期後半～後期初頭の可能性がある。ただしＡ１－Ｌ型については、上部から土層を観察できるものがなかったため（調査区の壁面等）、他のＴピットと同じようにＶａ層から掘り込まれたか不明である。（山中）



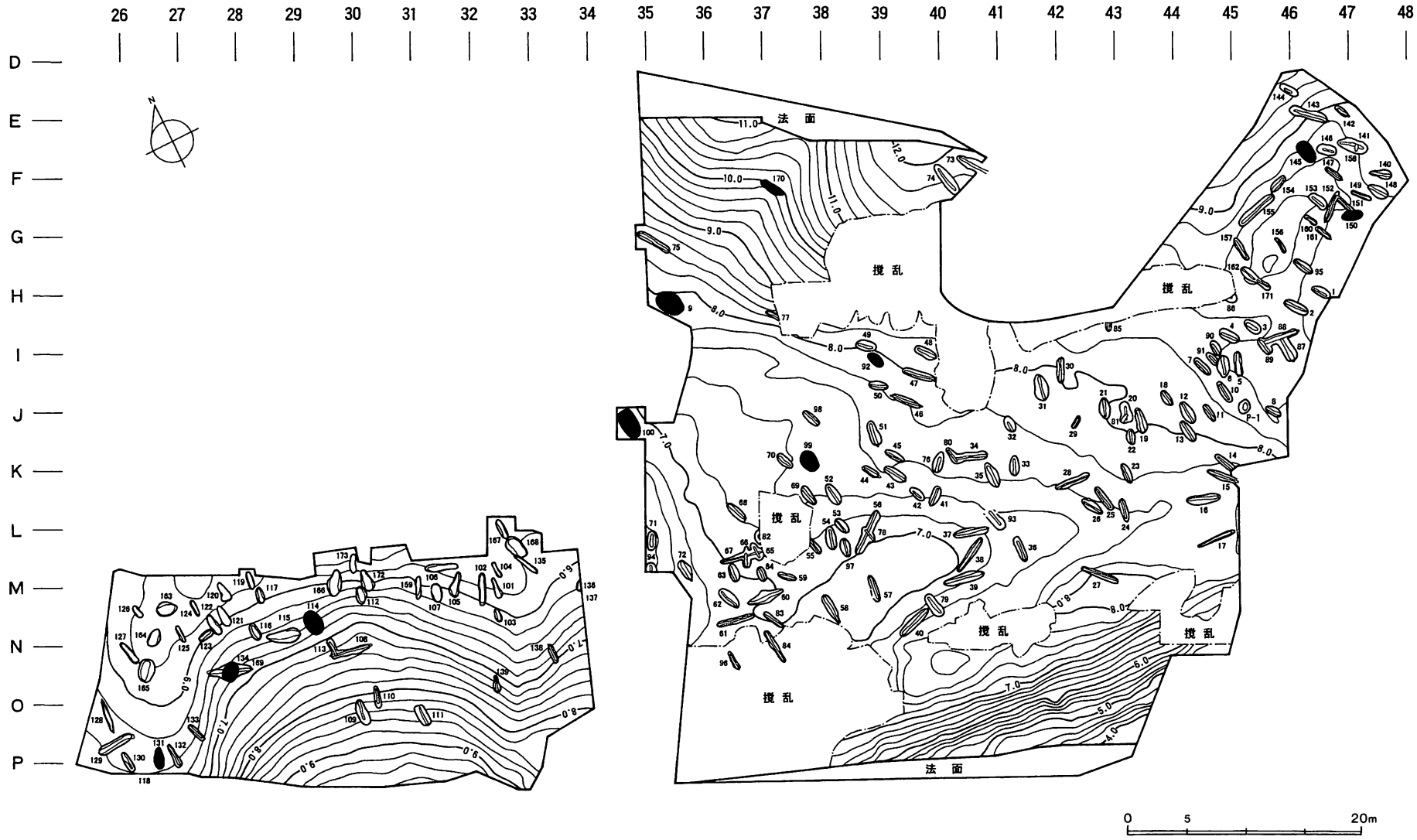
図Ⅳ－２－６　Ａ１－Ｌ型Ｔピット分布図



図Ⅳ－２－７　A型Tピット分布図

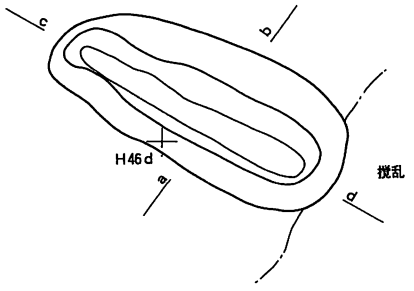


図Ⅳ－２－８　Ｂ型Ｔピット分布図

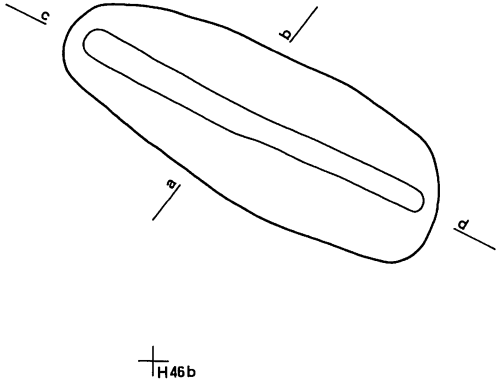


図Ⅳ－２－９　Ｃ型Ｔピット分布図

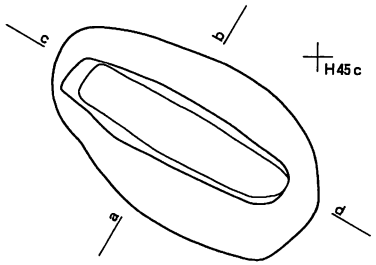
TP－1

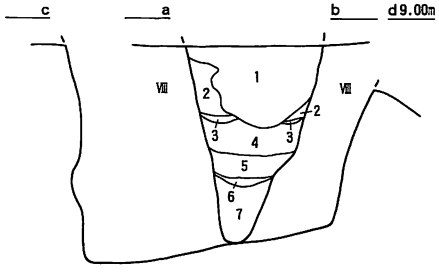


TP－2

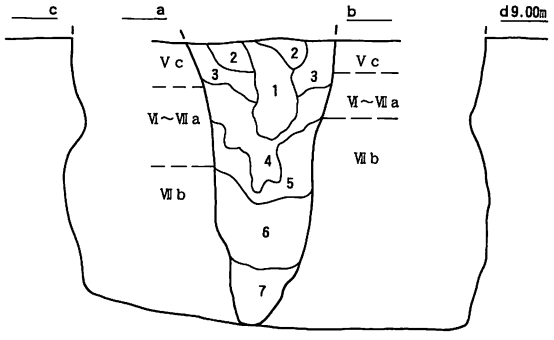


TP－3

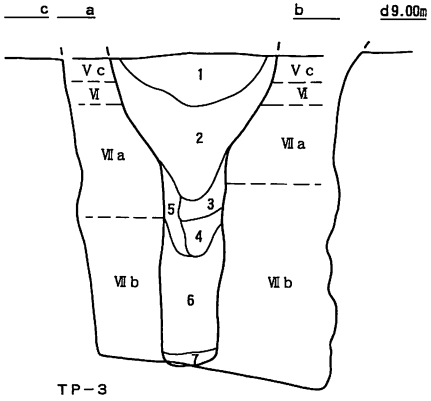




TP－1
1：Vc＞Vb　軟～堅
2：Ⅷ主体　軟
3：V主体　軟
4：V＞Ⅶ・Ⅷ　軟～堅
5：Ⅶ＋Ⅷ　堅
6：Ⅷ＞V　堅
7：Ⅷ 主体（底面は黒っぽい）　堅



TP－2
1：Ⅶ・Ⅷ≫V　軟
2：Va下主体　堅
3：Vb主体　堅
4：Vc≫Vb　軟～堅
5：Ⅶ主体　軟
6：Ⅶb主体　軟
7：VとⅦbの互層　しょう～軟

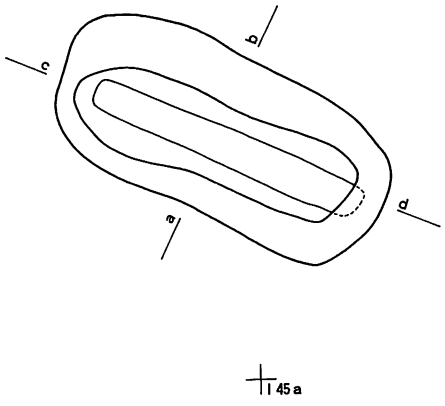


TP－3
1：Va下主体　軟～堅
2：Vc＞Vb　軟
3：Ⅶ≫V　しょう～軟
4：V≫Ⅶ　しょう
5：Ⅶ主体　しょう
6：VとⅦの互層　しょう～軟
7：V主体　軟

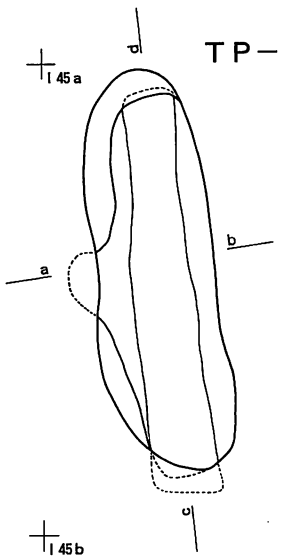
0　1m

図Ⅳ－2－10　TP－1～3

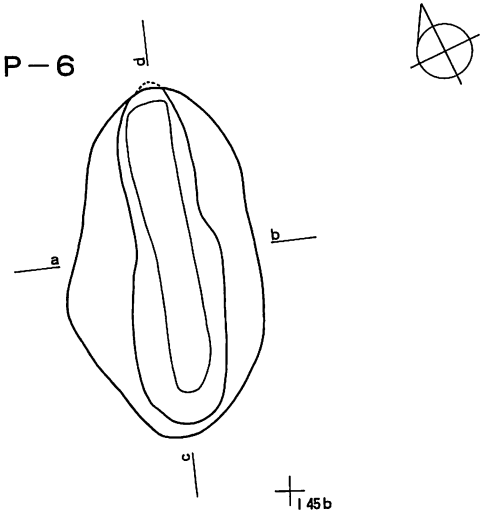
TP－4

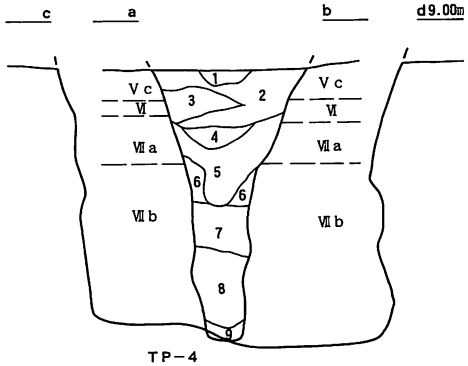


TP－5

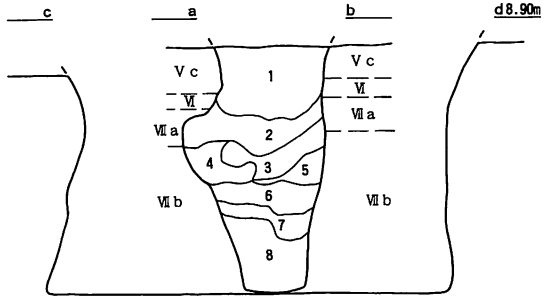


TP－6

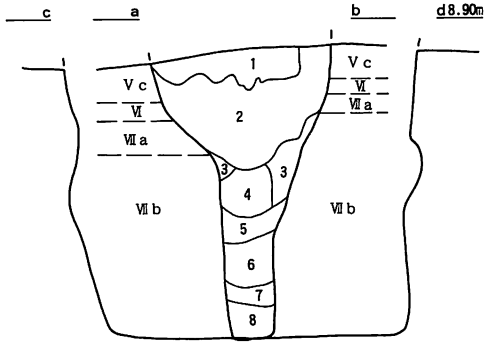




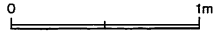
TP－4
1：Va下主体　堅
2：Vc≫Vb　軟～堅
3：Vb主体　軟
4：Vb主体　軟
5：V≫Ⅶ　しょう～軟
6：Ⅶ主体　しょう～軟
7：VとⅦの互層　しょう～軟
8：Ⅶ＞V　しょう～軟
9：V主体　軟



TP－5
1：Vb≫V　軟～堅
2：Vb＞V　軟
3：V主体　軟
4：Vb＞V　軟
5：Ⅶb主体　軟
6：V主体　軟
7：VとⅦbの互層　軟
8：Ⅶb主体（底面に黒色の薄層あり）　軟

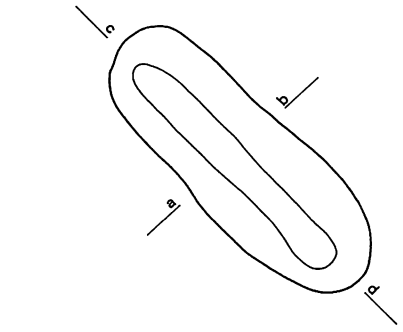


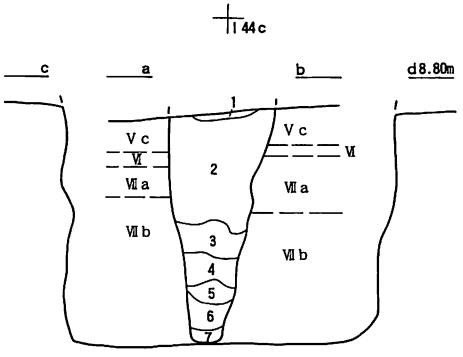
TP－6
1：Vb主体　堅
2：Vc主体　軟
3：Ⅶb主体　軟
4：V主体　軟
5：V≫Ⅶ　軟
6：Ⅶb主体　軟
7：VとⅦbの互層　軟
8：Ⅶb主体（下部はやや黒っぽい）　軟



図Ⅳ－2－11　TP－4～6

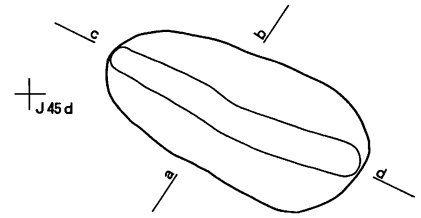
TP－7

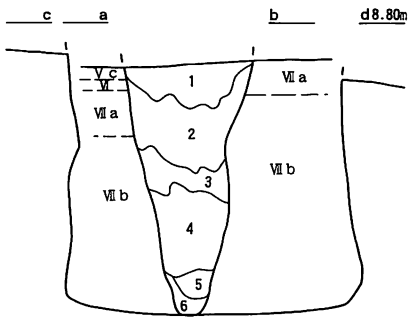




TP－7
1：Vb主体　堅
2：Vc＞Vb　軟
3：V≫Ⅶ　軟
4：Ⅶb主体　軟
5：V主体　軟
6：Ⅶb主体　軟
7：Ⅶb主体（黒っぽい）　軟

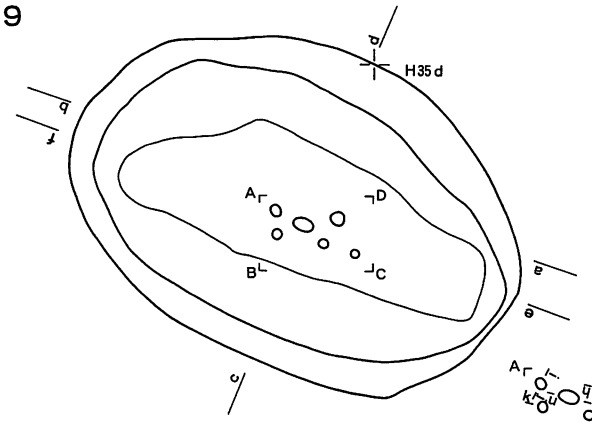
TP－8

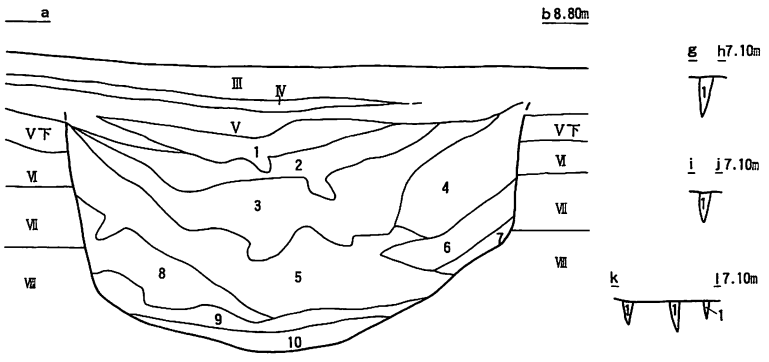


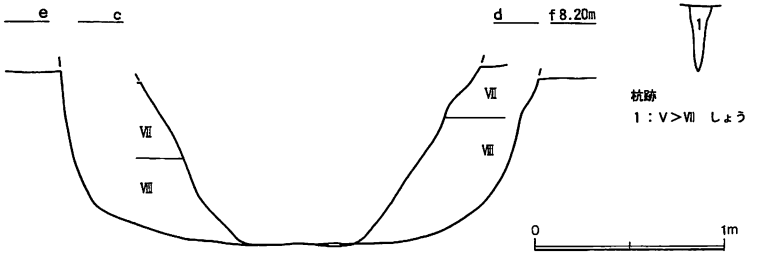


TP－8
1：Vb＞Vc　軟
2：Vc主体　軟
3：Ⅶb主体　軟
4：V＋Ⅶb　軟
5：Ⅶb≫V　堅
6：V＞Ⅶb　しょう

TP－9



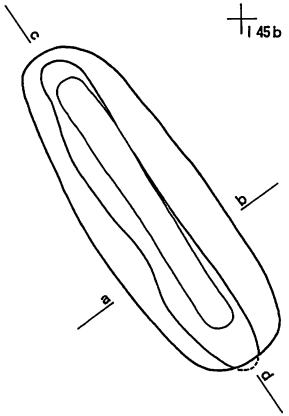


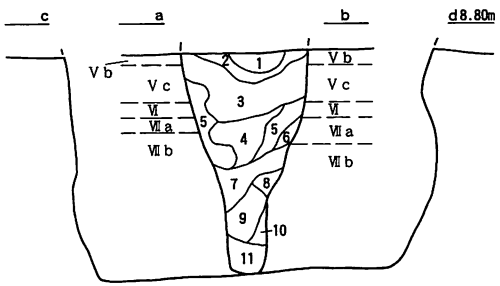


TP－9
1：V＋Ⅶ・Ⅷ　軟
2：V下＞Ⅶ・Ⅷ　軟
3：Ⅶ・Ⅷ＞V　軟
4：V＋Ⅶ・Ⅷ　軟
5：V＞Ⅶ・Ⅷ　軟
6：Ⅶ＞V　軟
7：Ⅷ主体　軟
8：Ⅶ主体　軟
9：Ⅶ・Ⅷ主体　堅
10：V主体　軟

図Ⅳ－2－12　TP－7～9

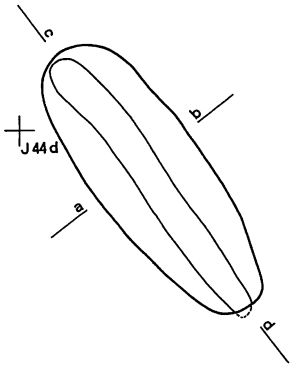
ＴＰ－10

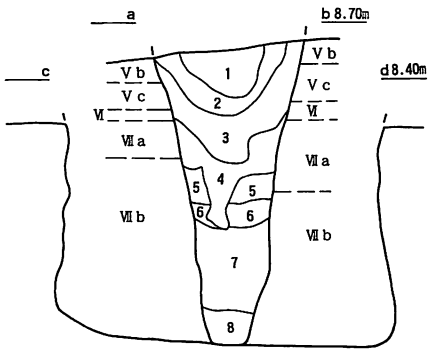




ＴＰ－10
1：Ｖb主体　軟
2：Ｖa主体　軟～堅
3：Ｖb＞Ｖ　軟
4：Ｖb≫Ｖc　軟
5：Ｖ主体　軟
6：Ⅶ主体　軟
7：Ｖ主体　軟
8：Ⅶ主体　軟
9：Ⅶb主体　軟
10：Ｖ主体　軟
11：Ⅶb主体（底面に黒色の薄層あり）　軟

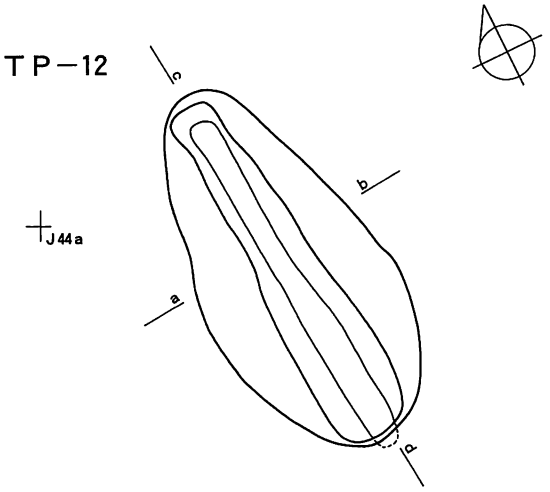
ＴＰ－11

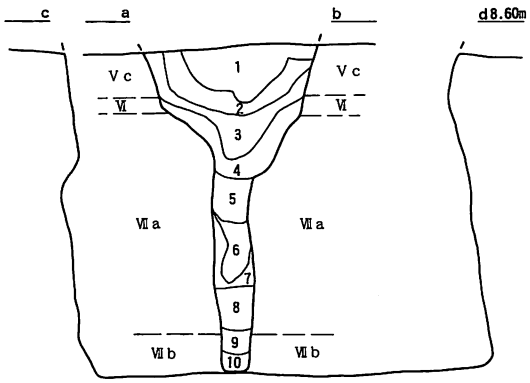




ＴＰ－11
1：Ｖb？主体　軟～堅
2：Ｖa下主体　軟
3：Ｖ＞Ｖb　軟
4：Ｖ主体　軟～堅
5：Ⅶ主体　軟
6：Ⅶb主体　軟
7：Ｖ＞Ⅶb　軟
8：ＶとⅦbの互層　軟

ＴＰ－12

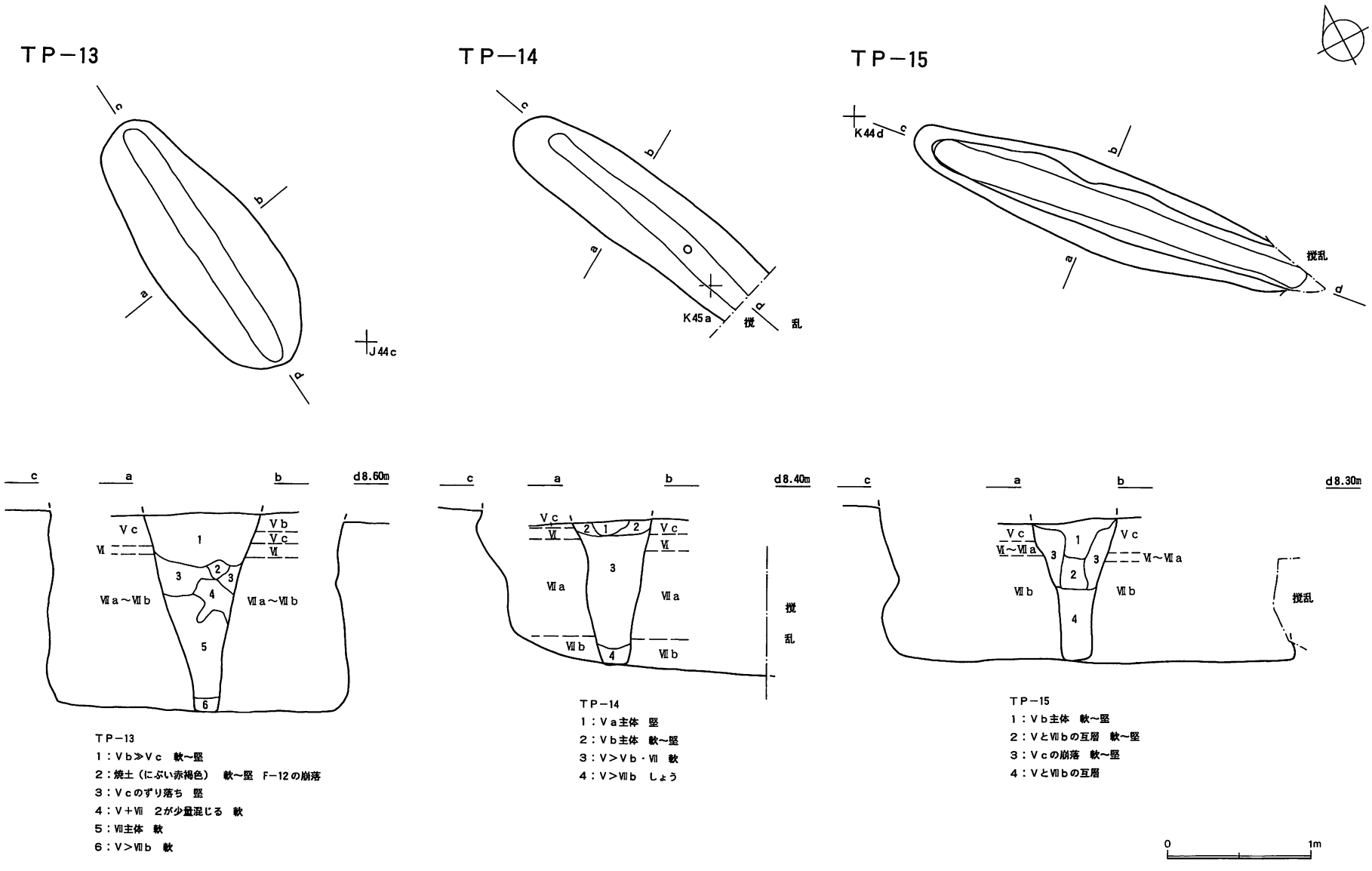




ＴＰ－12
1：Ｖb？主体　軟～堅
2：Ｖ＞Ｖb　軟
3：Ｖc＞Ｖb　軟
4：Ｖc主体　軟
5：Ｖc＞Ｖb　軟
6：Ｖ主体　軟
7：Ⅶa主体　軟
8：ＶとⅦaの互層　軟
9：Ｖ＞Ⅶb　軟
10：Ｖ≫Ⅶb　軟

0　1m

図Ⅳ－２－13　ＴＰ－10～12



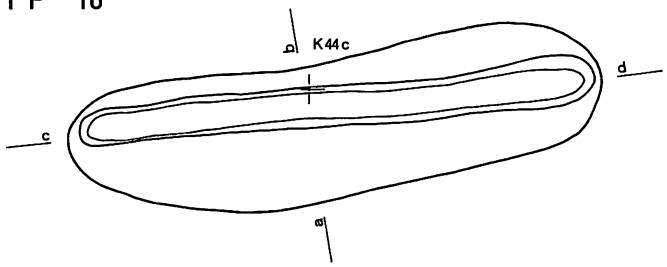
TP−13
1：Vb≫Vc　軟〜堅
2：焼土（にぶい赤褐色）　軟〜堅　F−12の崩落
3：Vcのずり落ち　堅
4：V＋Ⅶ　2が少量混じる　軟
5：Ⅶ主体　軟
6：V＞Ⅶb　軟

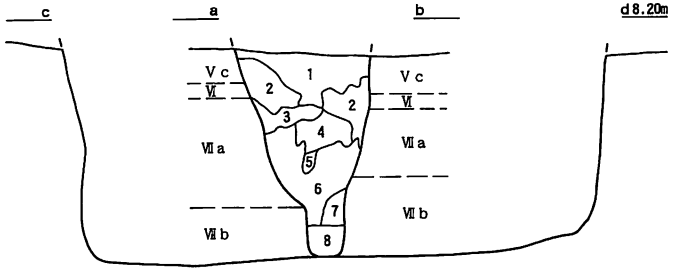
TP−14
1：Va主体　堅
2：Vb主体　軟〜堅
3：V＞Vb・Ⅶ　軟
4：V＞Ⅶb　しょう

TP−15
1：Vb主体　軟〜堅
2：VとⅦbの互層　軟〜堅
3：Vcの崩落　軟〜堅
4：VとⅦbの互層

図Ⅳ−2−14　TP−13〜15

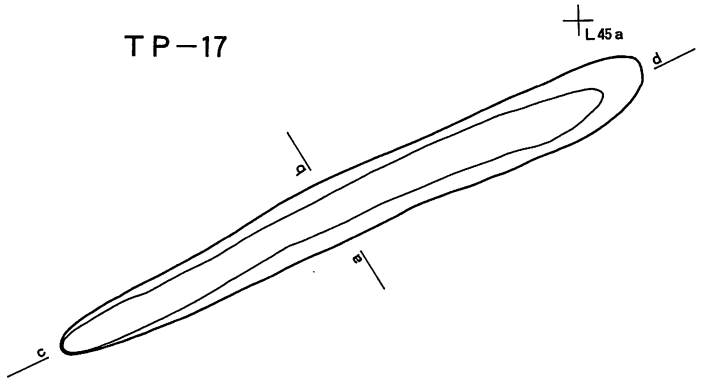
TP－16

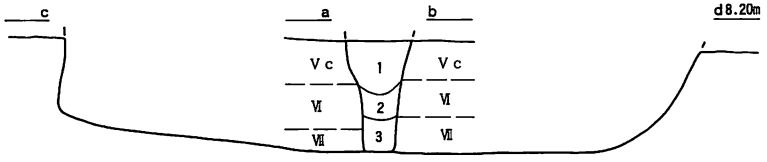




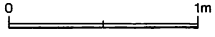
TP－16
1：Vb主体　軟～堅
2：Vcのずり落ち　堅
3：Ⅶ主体　軟
4：Vc＞Ⅶ　軟
5：V主体　軟
6：Ⅵ主体　軟
7：Ⅶb主体　軟
8：Ⅶb主体（黒っぽい）　軟

TP－17

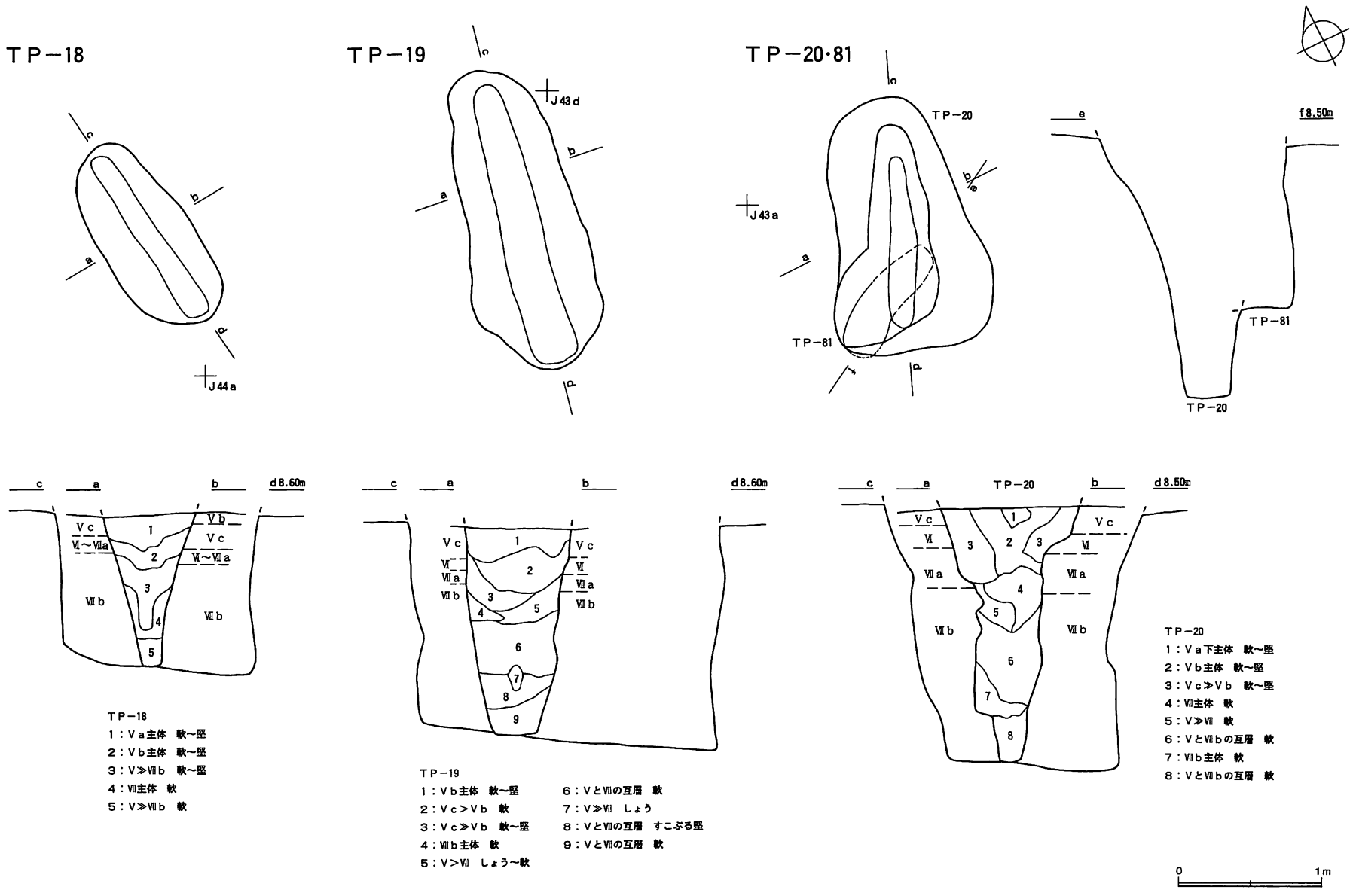




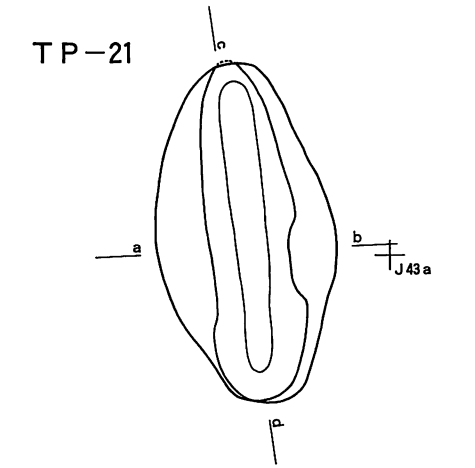
TP－17
1：Vb主体　軟
2：V主体　軟
3：V＋Vb・Ⅶ　軟

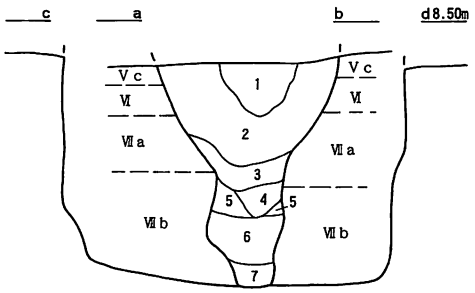


図Ⅳ－2－15　TP－16・17

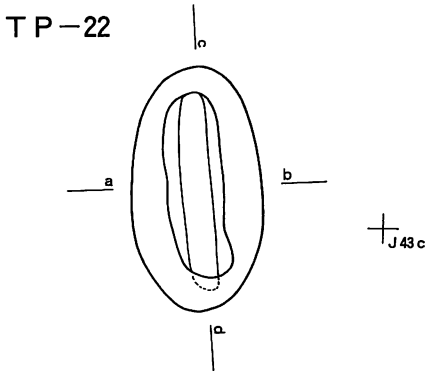


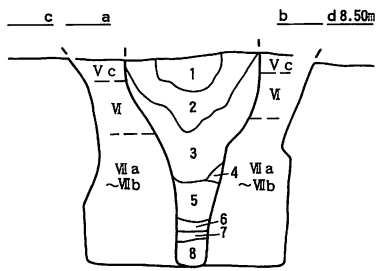
図Ⅳ－２－16　ＴＰ－18～20・81



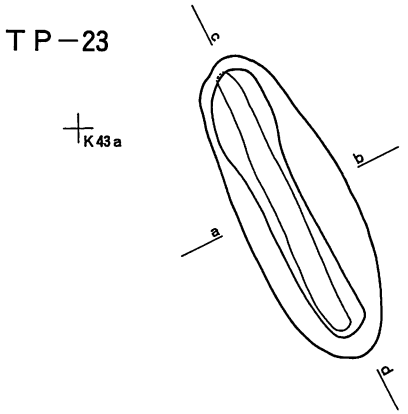


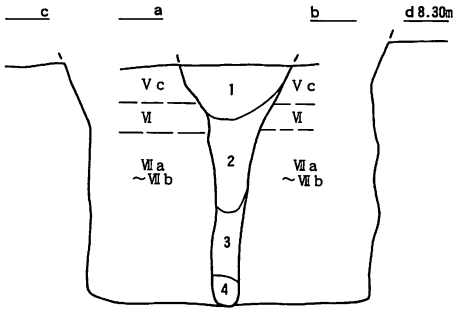
TP－21
1：Vb主体　軟～堅
2：Vc主体　軟
3：Ⅶ＞Ⅴ　堅
4：ⅤとⅦの互層　軟～堅
5：Ⅶb主体　軟～堅
6：Ⅶb＞Ⅴ　軟～堅
7：ⅤとⅦbの互層　軟～堅



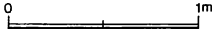


TP－22
1：Va下主体　軟
2：Vb主体　軟
3：Vc＞Vb　軟
4：Ⅶb主体　軟
5：Ⅴ主体　軟
6：Ⅶb主体　軟
7：Ⅴ主体　軟
8：Ⅶb主体（底面に黒色の薄層あり）　軟



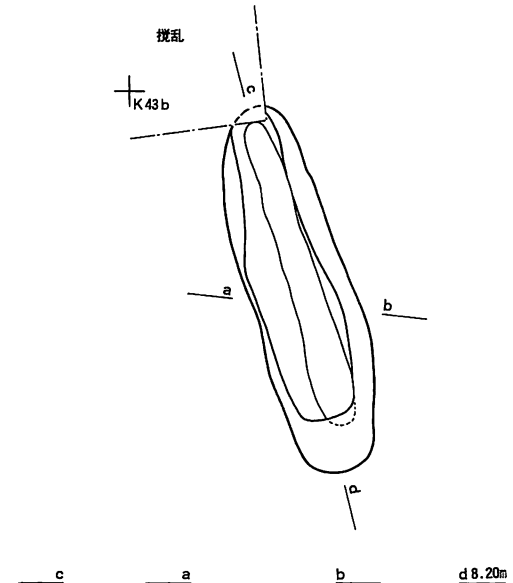


TP－23
1：Vb主体　堅
2：Vc＞Ⅶb　軟
3：Ⅶ主体　軟
4：Ⅴ≫Ⅶb　しょう



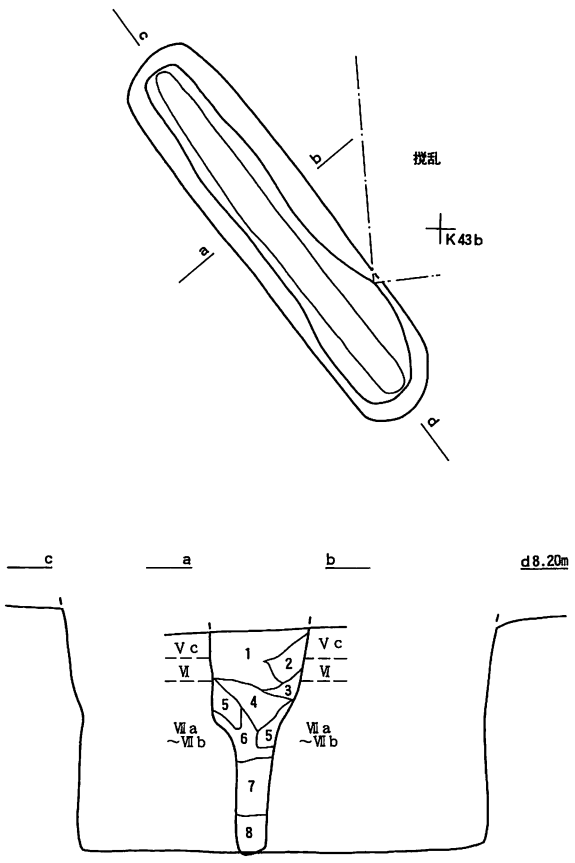
図Ⅳ－２－17　ＴＰ－21～23

TP－24



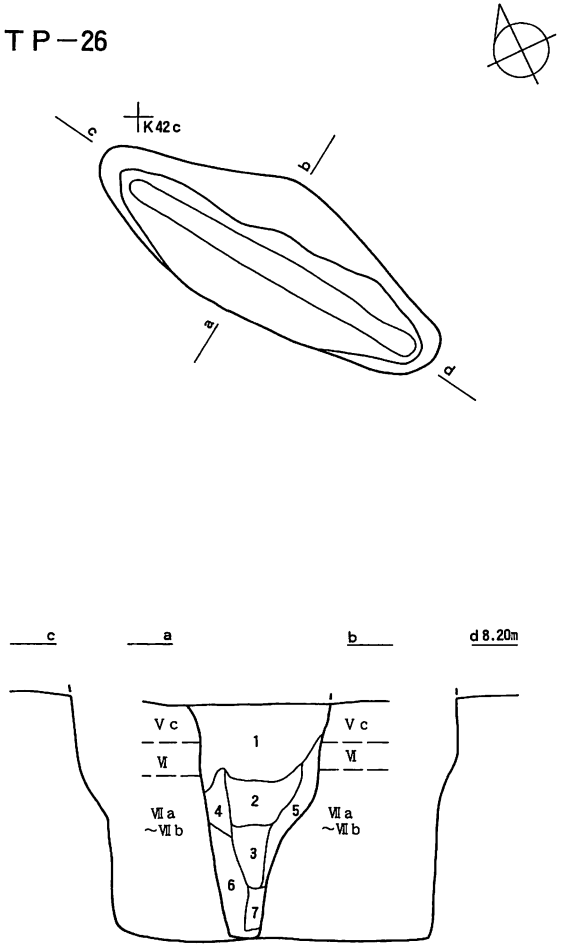
TP－24
1：Vb主体　堅
2：Vc＋Ⅵ　堅
3：Vc＞Vb　軟
4：Ⅶ＞Ⅴ　軟
5：Ⅴ主体　堅
6：Ⅶ主体　軟
7：Ⅴ主体　軟
8：Ⅴ＋Ⅶ　しょう
9：Ⅶ主体　軟

TP－25



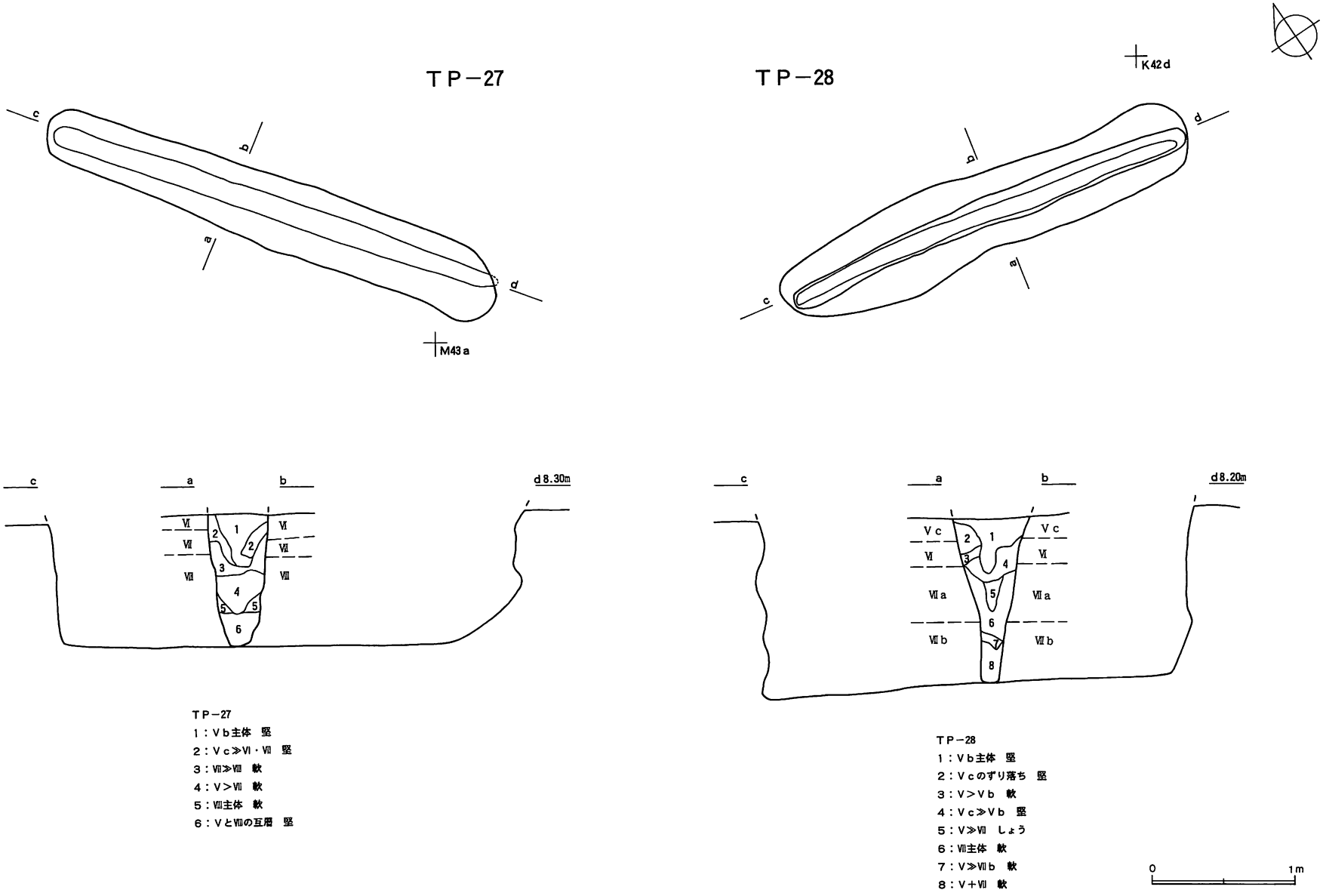
TP－25
1：Vb主体　堅
2：Vcのずり落ち　すこぶる堅
3：Ⅵ主体　軟
4：Ⅴ≧Ⅵ　堅
5：Ⅵ＋Ⅶ　軟
6：Ⅴ≫Ⅵ・Ⅶ　軟
7：Ⅶ≫Ⅴ　軟
8：Ⅴ主体　軟

TP－26

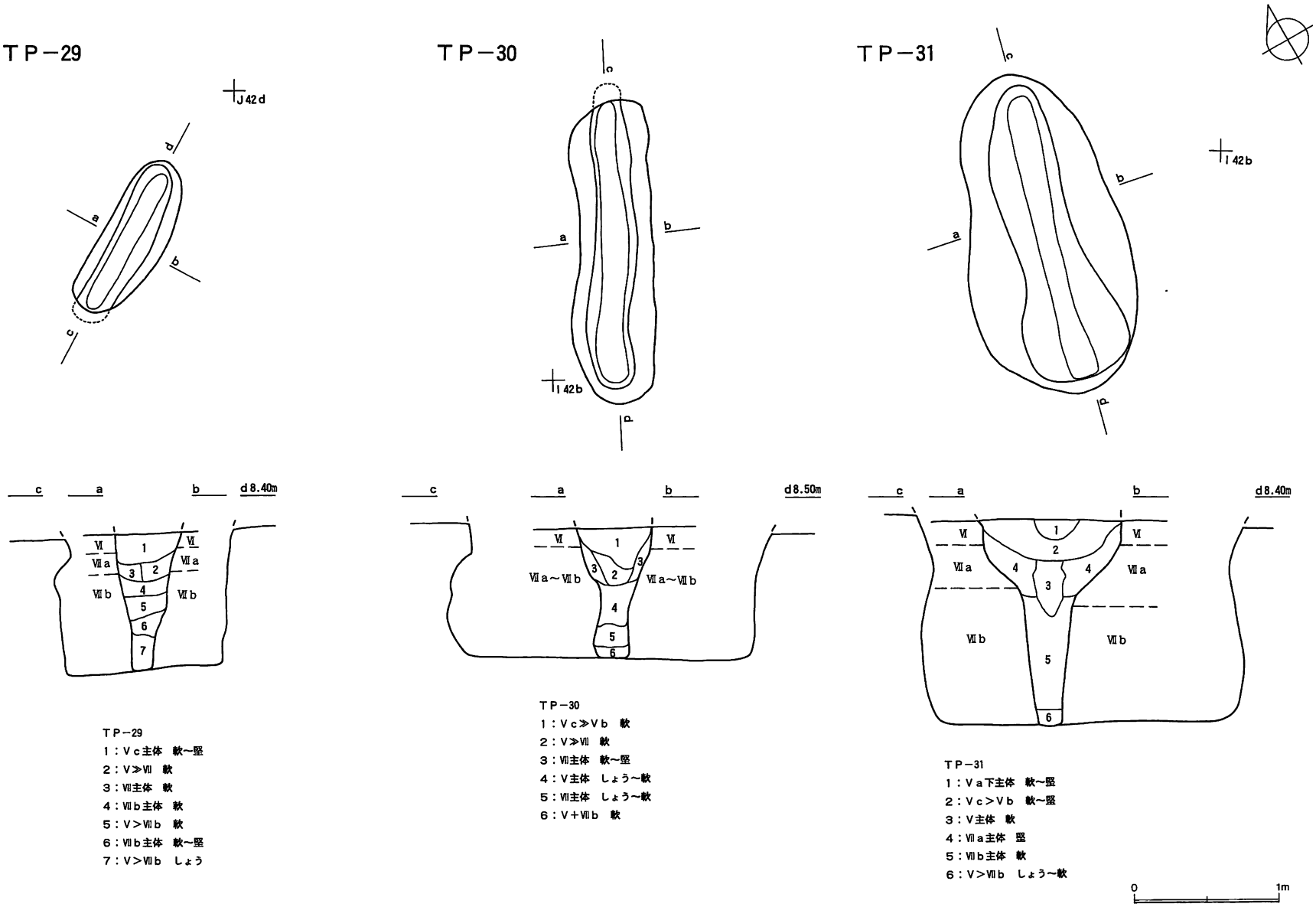


TP－26
1：Vb主体　堅
2：Vc＋Vb　堅
3：Ⅴ＋Ⅵ　軟
4：Vc＞Ⅵ　すこぶる堅
5：Ⅵ主体　軟
6：Ⅵ＋Ⅶ　軟
7：Ⅶ≫Ⅴ　軟

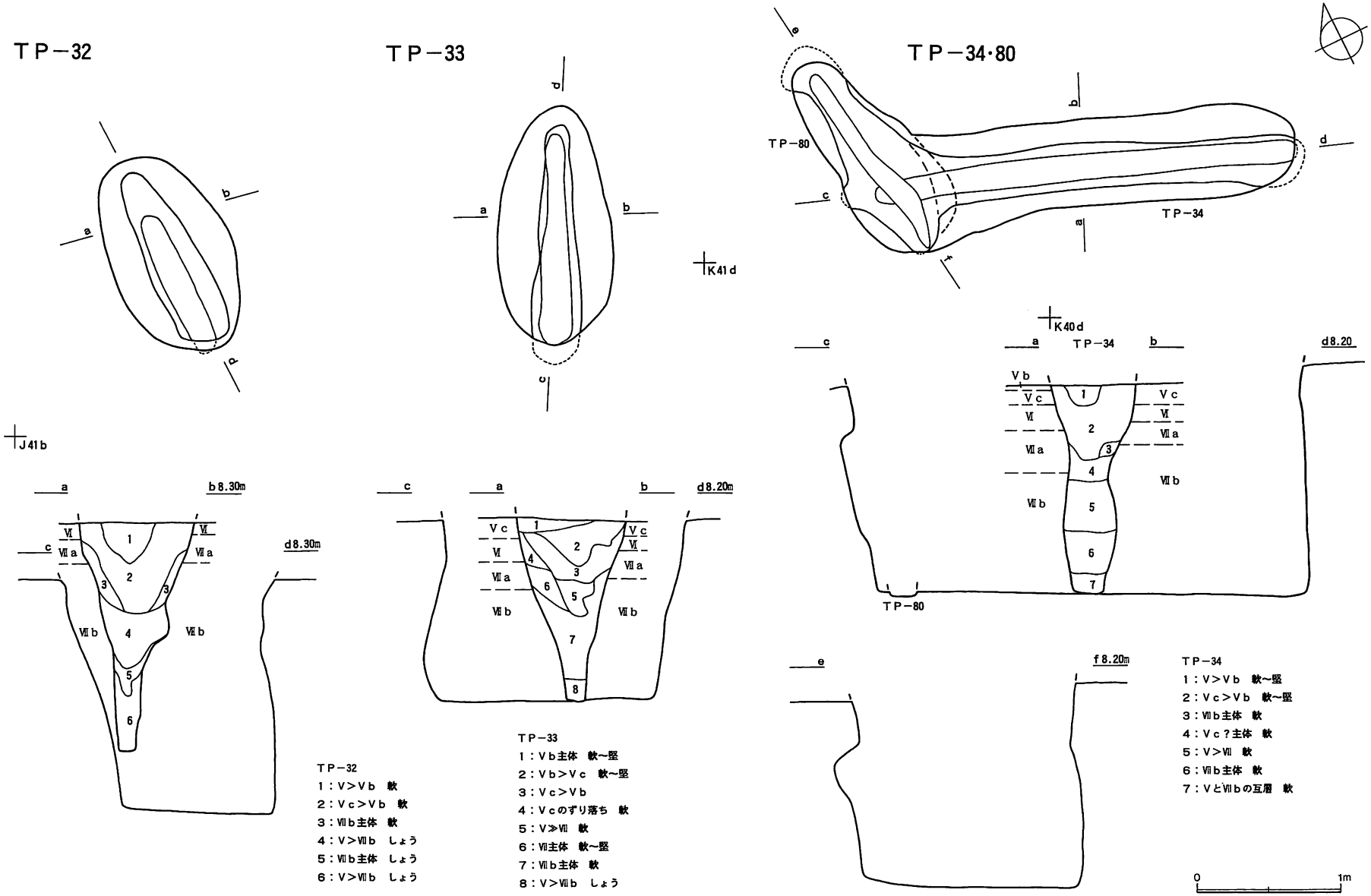
図Ⅳ－２－18　ＴＰ－24～26



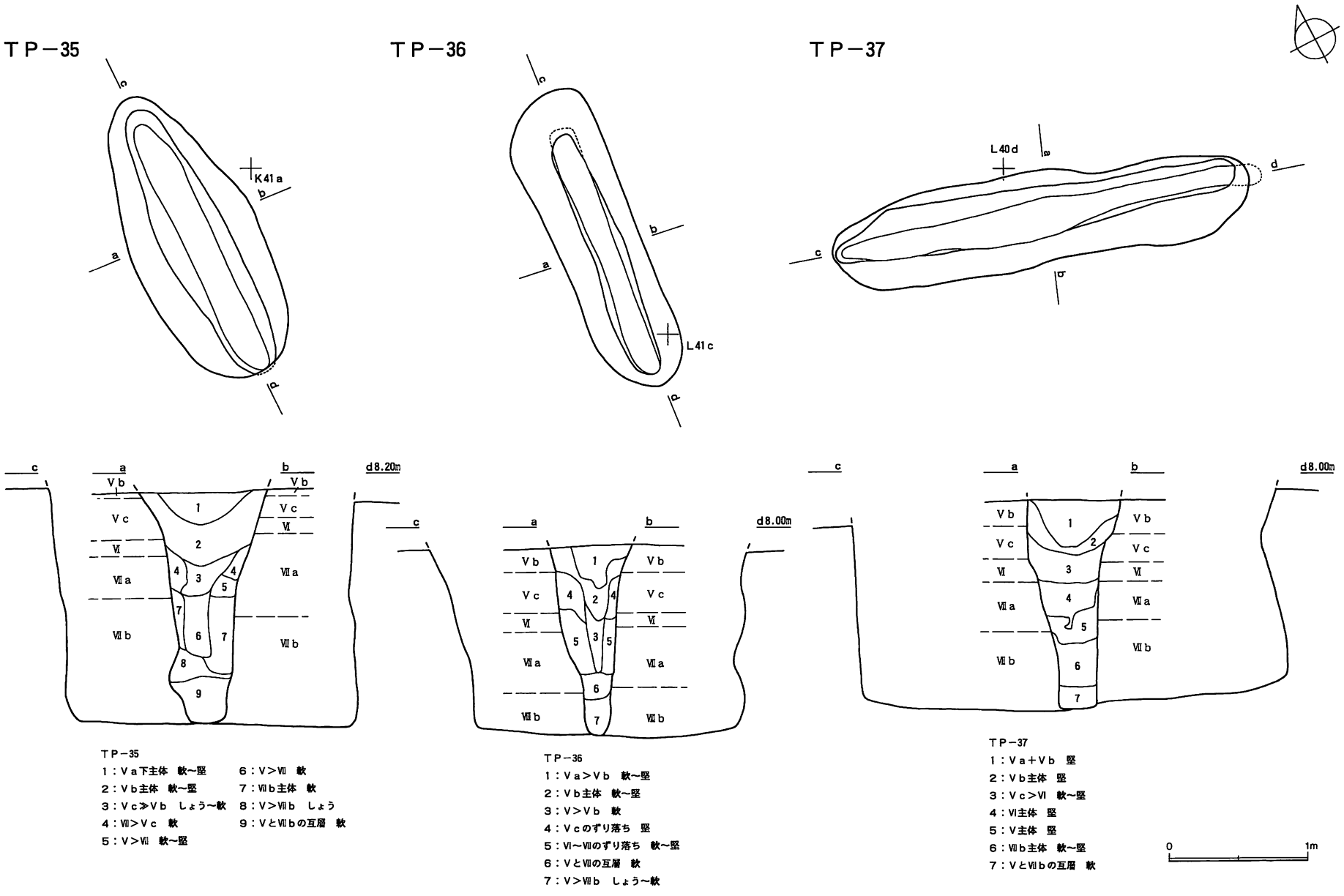
図Ⅳ－２－19　ＴＰ－27・28



図Ⅳ－２－20　ＴＰ－29～31



図Ⅳ−2−21　TP32〜34・80

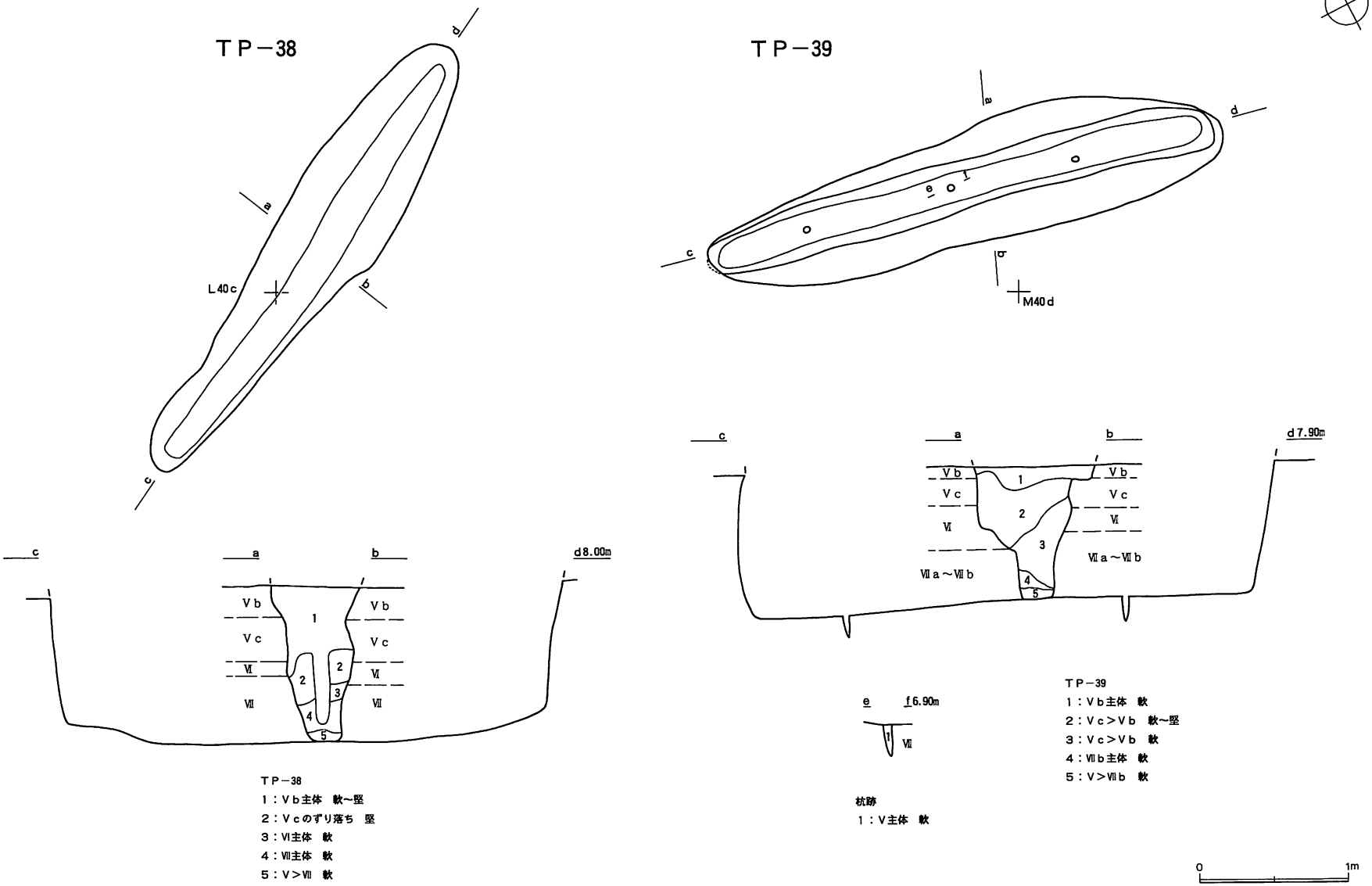


ＴＰ－35
1：Ⅴa下主体　軟～堅
2：Ⅴb主体　軟～堅
3：Ⅴc≫Ⅴb　しょう～軟
4：Ⅶ>Ⅴc　軟
5：Ⅴ>Ⅶ　軟～堅
6：Ⅴ>Ⅶ　軟
7：Ⅶb主体　軟
8：Ⅴ>Ⅶb　しょう
9：ⅤとⅦbの互層　軟

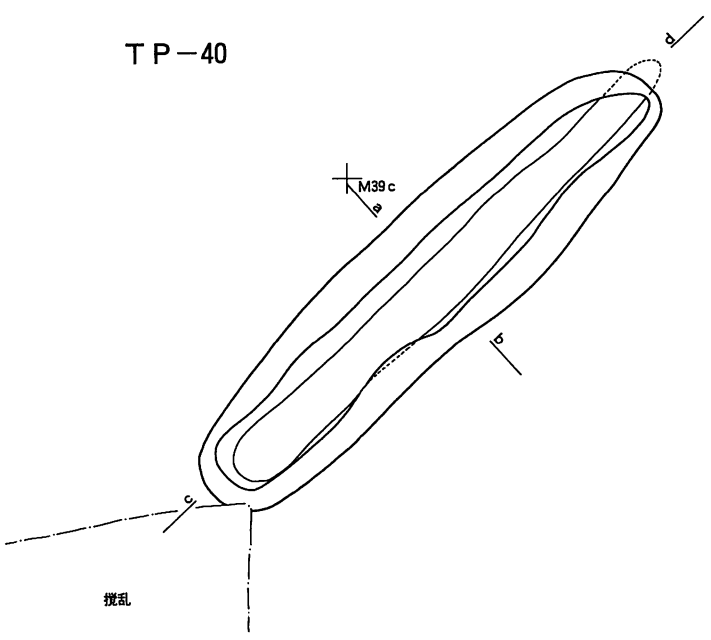
ＴＰ－36
1：Ⅴa>Ⅴb　軟～堅
2：Ⅴb主体　軟～堅
3：Ⅴ>Ⅴb　軟
4：Ⅴcのずり落ち　堅
5：Ⅵ～Ⅶのずり落ち　軟～堅
6：ⅤとⅦの互層　軟
7：Ⅴ>Ⅶb　しょう～軟

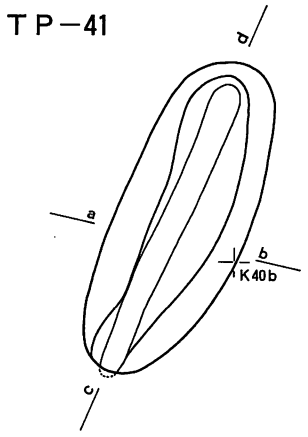
ＴＰ－37
1：Ⅴa＋Ⅴb　堅
2：Ⅴb主体　堅
3：Ⅴc>Ⅵ　軟～堅
4：Ⅵ主体　堅
5：Ⅴ主体　堅
6：Ⅶb主体　軟～堅
7：ⅤとⅦbの互層　軟

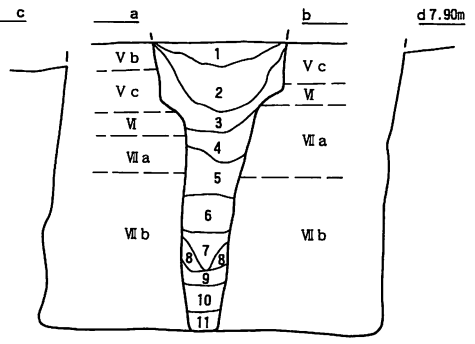
図Ⅳ－２－22　ＴＰ－35～37



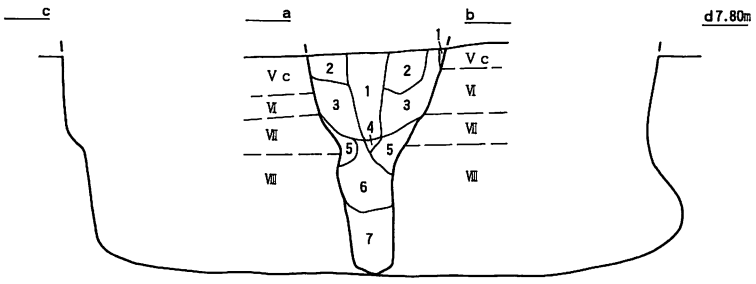
図Ⅳ－2－23　TP－38・39





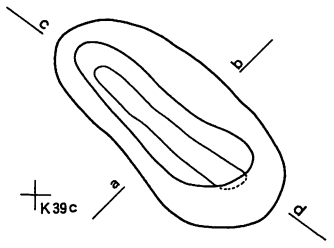


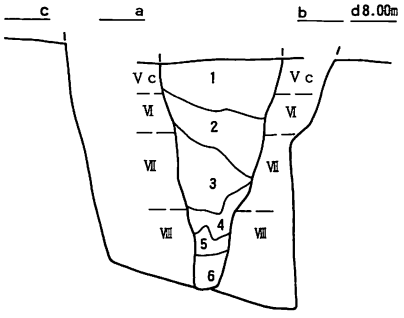
ＴＰ－41
1：Ⅴａ下主体　堅
2：Ⅴｂ主体　すこぶる堅
3：Ⅴｂ≫Ⅴｃ堅
4：Ⅴｃ＋Ⅵ　堅
5：Ⅴ≫Ⅶ　軟
6：Ⅶ主体　軟
7：Ⅴ＞Ⅶ　軟
8：Ⅶｂ主体　軟
9：Ⅴ＞Ⅶｂ　しょう
10：Ⅶｂ主体　しょう
11：Ⅴ≫Ⅶｂ　しょう



ＴＰ－40
1：Ⅴｂ≫Ⅴ　堅
2：Ⅴｂ主体　堅
3：Ⅴｃのずり落ち　堅
4：Ⅴｃ＞Ⅴｂ　堅
5：Ⅵ・Ⅶ主体　軟
6：Ⅴ＋Ⅵ・Ⅶ　軟
7：ⅤとⅧの互層　軟

ＴＰ－42



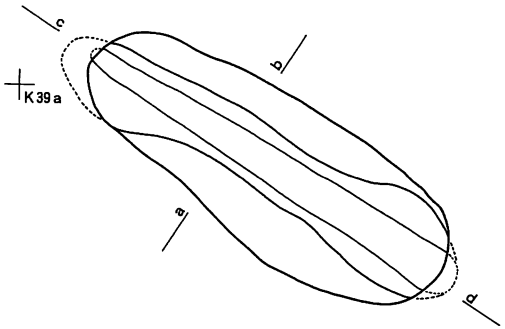


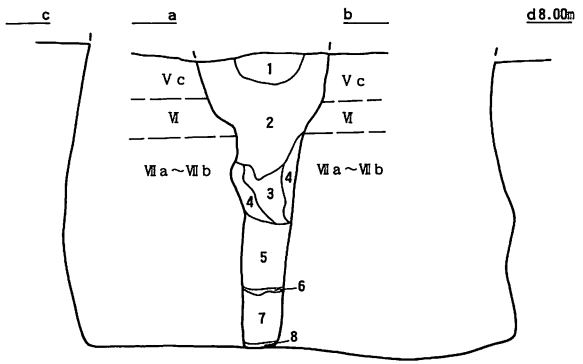
ＴＰ－42
1：Ⅴｂ主体　堅
2：Ⅴｃ≫Ⅴｂ　軟
3：Ⅴ＋Ⅶ　軟
4：Ⅶ主体　しょう
5：Ⅴ主体　しょう
6：Ⅴ≫Ⅶｂ　しょう

0　1m

図Ⅳ－２－24　ＴＰ－40～42

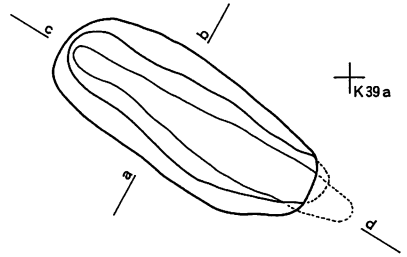
TP－43

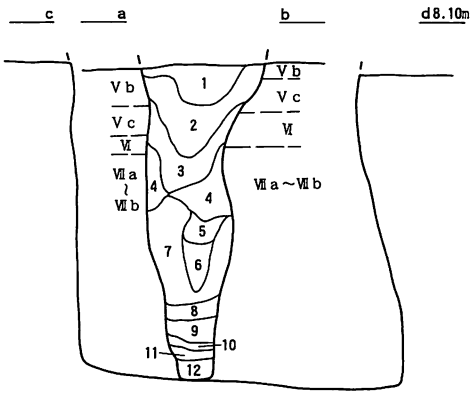




TP－43
1：Vb主体　堅
2：Vc≫Vb　堅
3：V＋Ⅵ　軟
4：Ⅵ・Ⅶ主体　軟
5：V＋Ⅶ　軟
6：V主体　しょう
7：Ⅶ≫V　軟
8：V主体　しょう

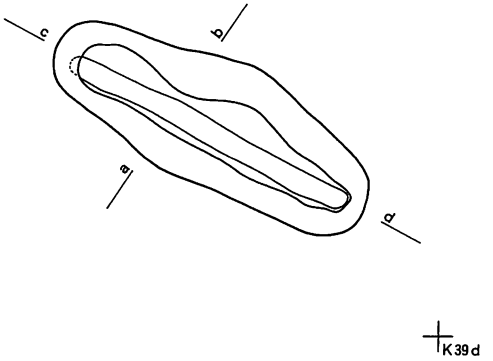
TP－44

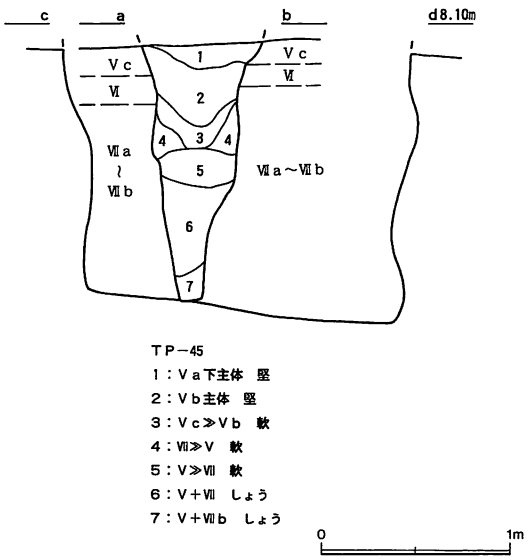




TP－44
1：Va下主体　堅
2：Vb主体　堅
3：Vc≫Ⅵ　堅
4：Ⅵ・Ⅶ≫V　軟
5：Ⅶ≫V　軟
6：V≫Ⅶ　しょう
7：Ⅶ主体　しょう
8：V主体　しょう
9：Ⅶ≫V　軟
10：V主体　しょう
11：Ⅶ≫V　軟
12：V≫Ⅶb　しょう

TP－45

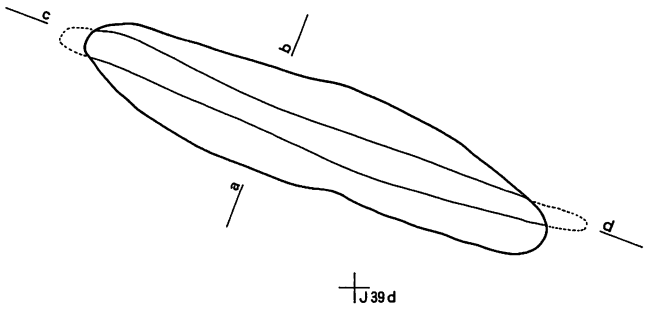




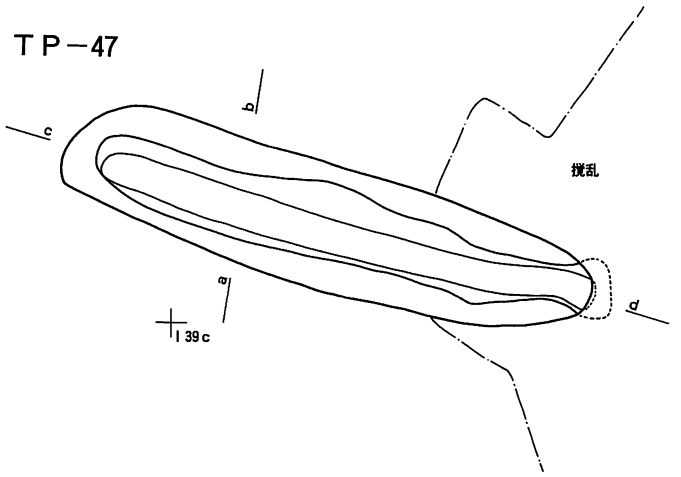
TP－45
1：Va下主体　堅
2：Vb主体　堅
3：Vc≫Vb　軟
4：Ⅶ≫V　軟
5：V≫Ⅶ　軟
6：V＋Ⅶ　しょう
7：V＋Ⅶb　しょう

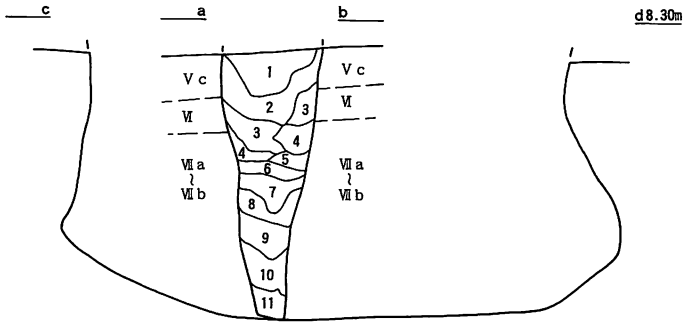
図Ⅳ－2－25　TP－43～45

TP－46

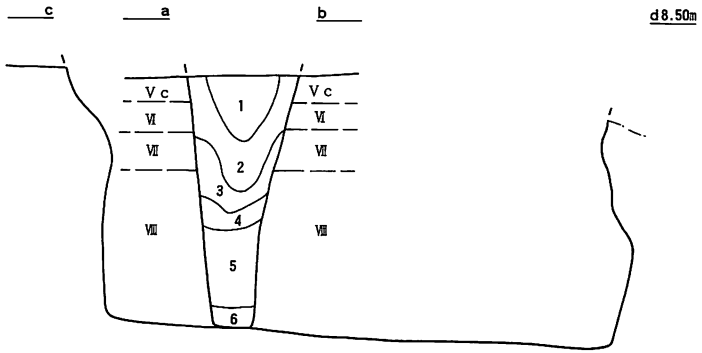


TP－47

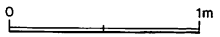




TP－46
1：Va下主体　すこぶる堅
2：Vc＞Vb　堅
3：V≫Ⅶ　堅
4：Ⅶ≫V　軟
5：Ⅶ主体　軟
6：V主体　軟
7：V＞Ⅶb　しょう
8：Ⅶb≫V　しょう
9：V≫Ⅶb　しょう
10：Ⅶb主体　しょう
11：V≫Ⅶb　しょう

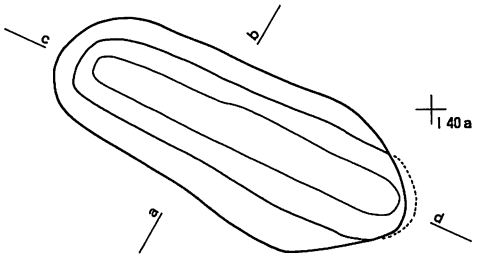


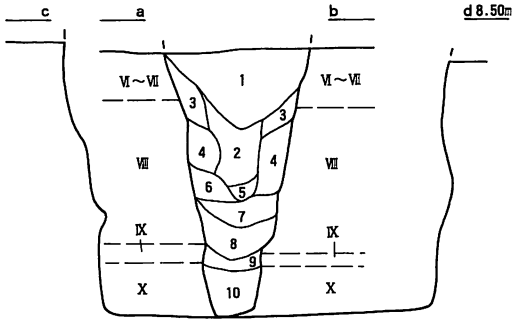
TP－47
1：Va下＞Vb　すこぶる堅
2：Vc＞Vb　堅
3：V＋Ⅶ　堅
4：V≫Ⅶ　軟
5：Ⅶ主体　軟
6：V＞Ⅷ　しょう



図Ⅳ－2－26　TP－46・47

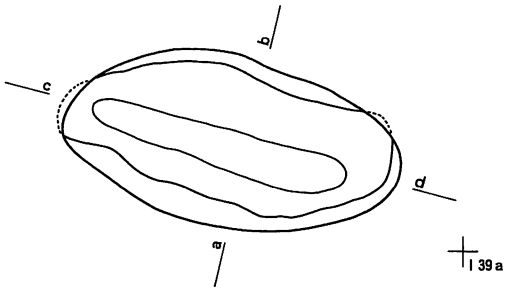
TP－48

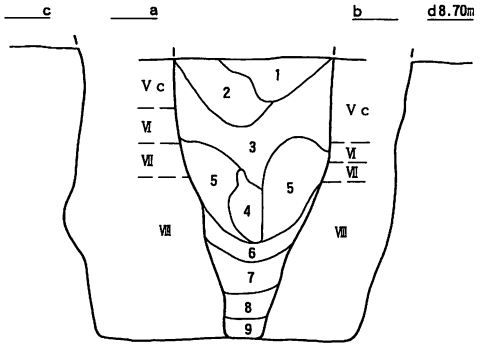




TP－48
1：Vc＞Vb　堅
2：V≫Ⅶ　軟
3：Ⅵ・Ⅶ≫V　堅
4：Ⅶ＞Ⅷ　軟
5：Ⅷ＋V　軟
6：Ⅶ主体　軟
7：V＞Ⅶ　しょう
8：Ⅶ＋Ⅷ　しょう
9：Ⅸ主体　堅
10：V＋Ⅶ　軟

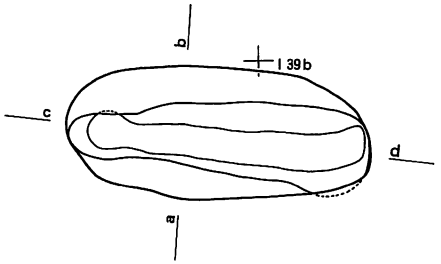
TP－49

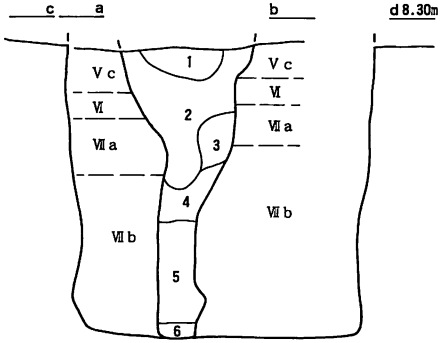




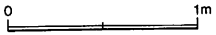
TP－49
1：Va≫Vb　すこぶる堅
2：Vc＞Vb　堅
3：Vc≫Vb　軟
4：V主体　しょう
5：Ⅶ≫V　軟
6：Ⅷ主体　軟
7：V≫Ⅶ　しょう
8：Ⅷ≫V　しょう
9：V主体　しょう

TP－50

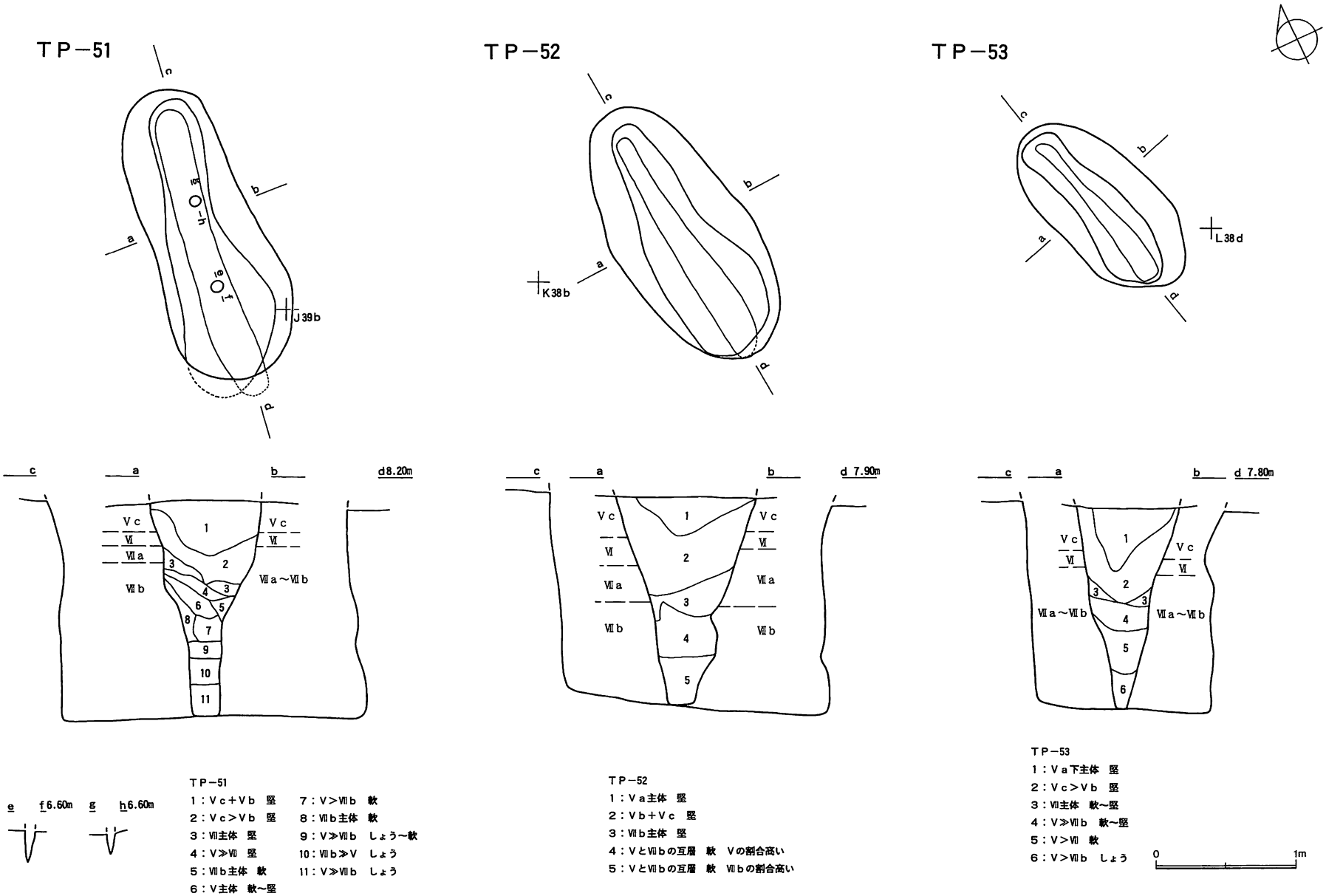




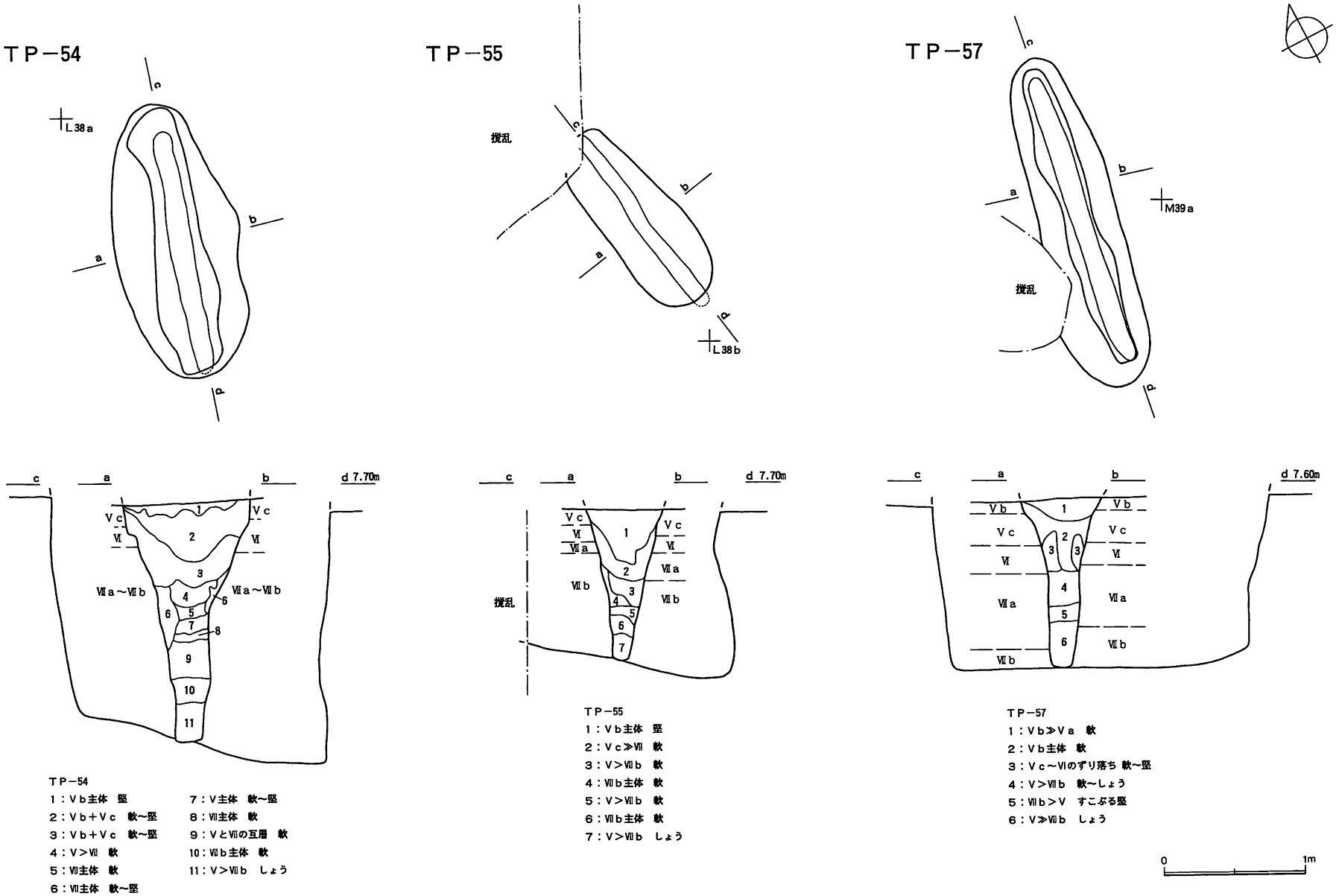
TP－50
1：Va下主体　軟～堅
2：Vc＞Vb　軟
3：Ⅶa≫V　軟
4：Ⅶb≫V　軟
5：V≫Ⅶ　軟
6：Ⅶb主体（下部は黒っぽい）　軟



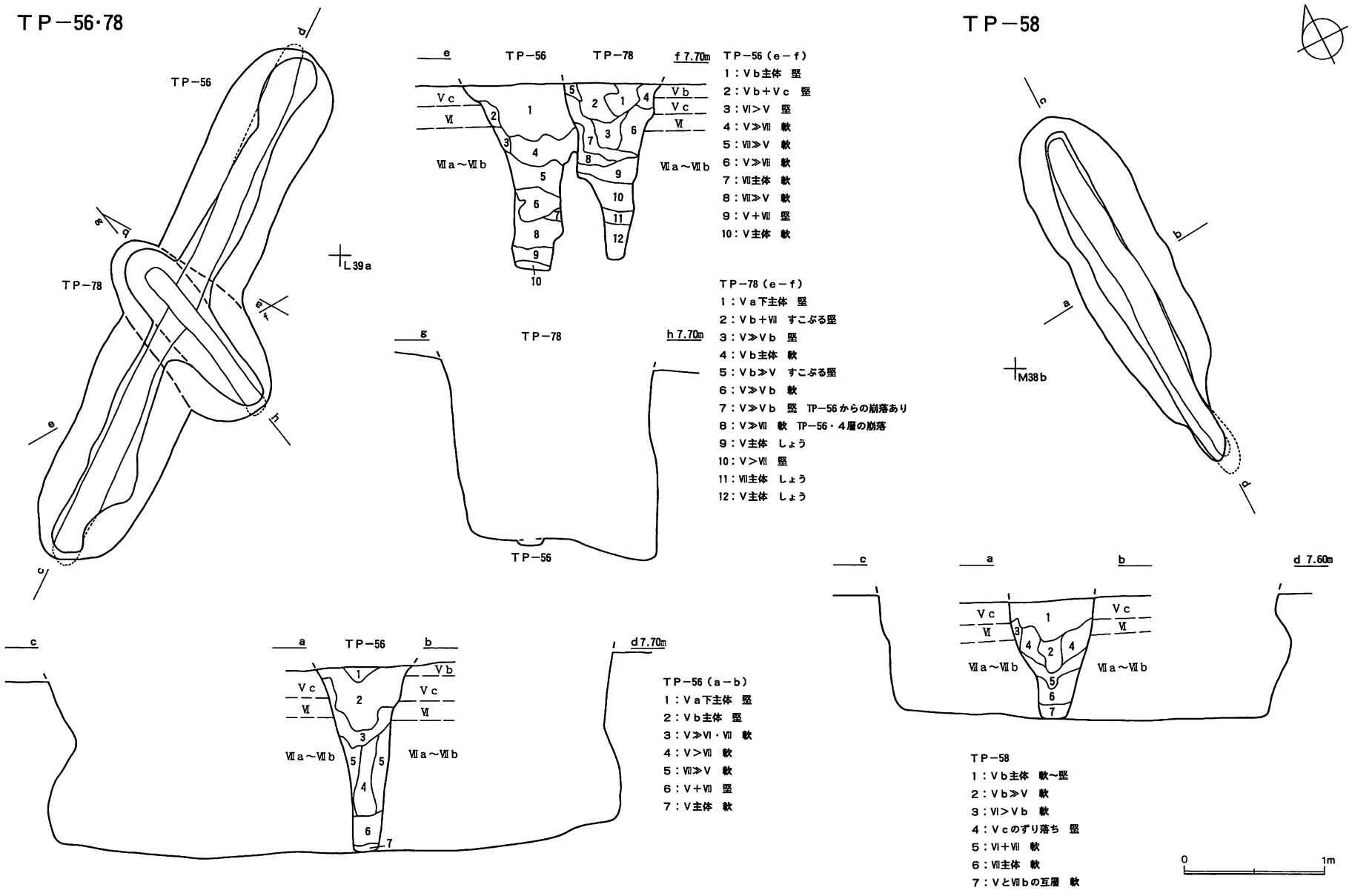
図Ⅳ－２－27　ＴＰ－48～50



図Ⅳ－2－28　TP－51～53

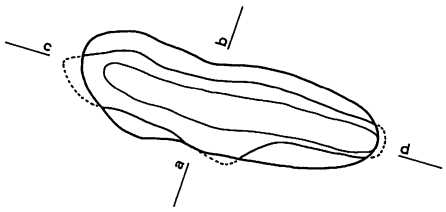


図Ⅳ－２－29　ＴＰ－54・55・57

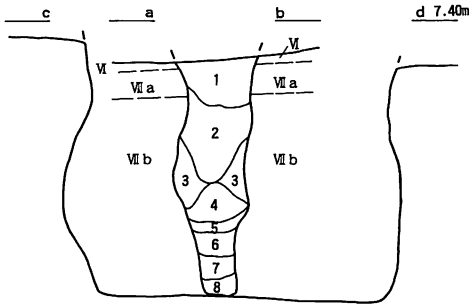


図Ⅳ−2−30　TP−56・58・78

ＴＰ－59



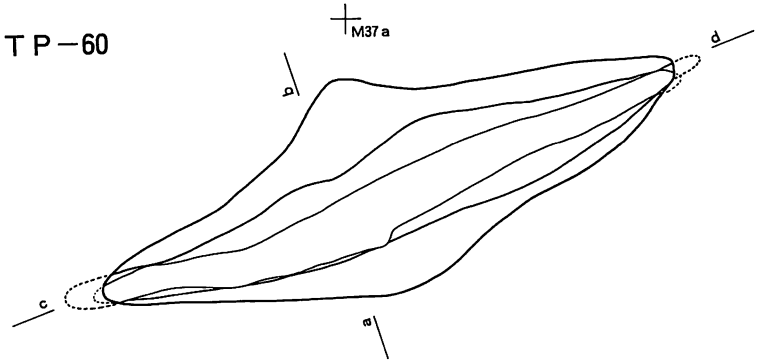
M37d

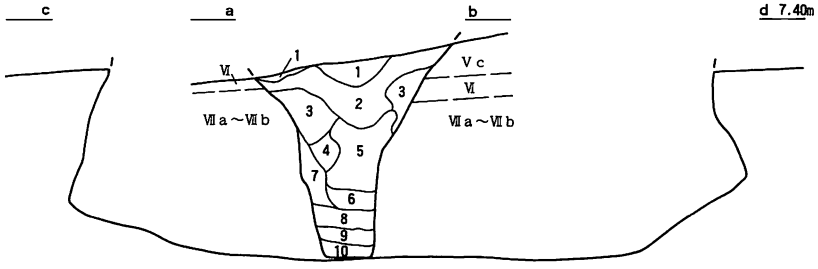


ＴＰ－59
1：Ⅴb主体　軟～堅
2：ⅤとⅦbの互層　軟
3：Ⅶb主体　軟
4：Ⅴ主体　軟
5：Ⅶb主体　しょう～軟
6：Ⅴ主体　軟
7：Ⅶb主体　軟
8：Ⅴ＞Ⅶb　しょう～軟

ＴＰ－60

M37a

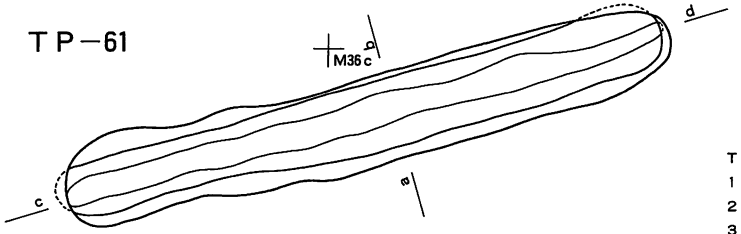


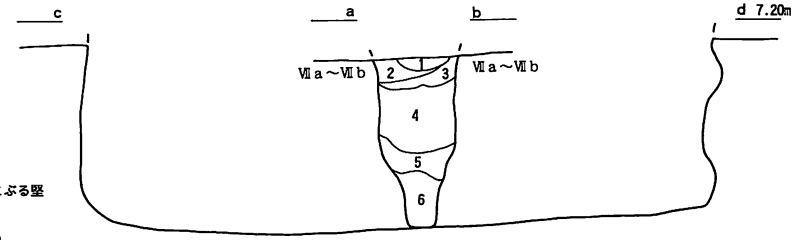


ＴＰ－60
1：Ⅴa主体　すこぶる堅
2：Ⅴb主体　堅
3：Ⅴcのずり落ち　堅
4：Ⅴc≫Ⅴb　堅
5：Ⅴb≫Ⅴ　堅～軟
6：Ⅴ＞Ⅶ　しょう
7：Ⅶb主体　軟
8：Ⅴ＋Ⅶ　しょう
9：Ⅶ≫Ⅴ　しょう
10：Ⅴ主体　しょう

ＴＰ－61

M36c



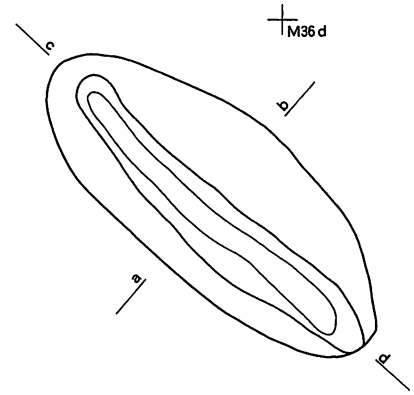


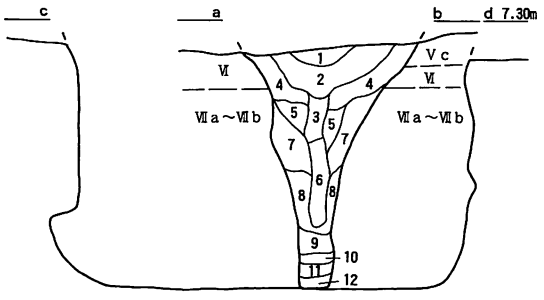
ＴＰ－61
1：Ⅴb主体　堅
2：Ⅶ≫Ⅴ　軟
3：Ⅴb＋Ⅶ　軟
4：Ⅴ＞Ⅶb　すこぶる堅
5：Ⅶ≫Ⅴ　軟
6：Ⅴ主体　しょう

0　1m

図Ⅳ－２－31　ＴＰ－59～61

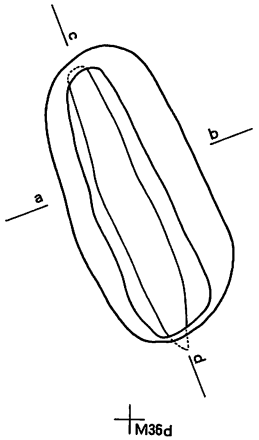
TP－62

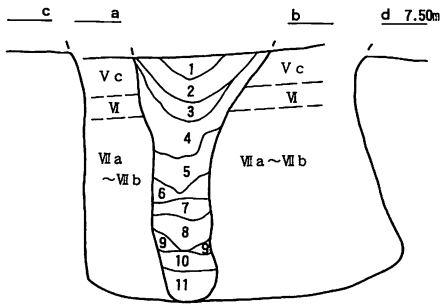




TP－62
1：Va下>Vb　すこぶる堅
2：Vb主体　すこぶる堅
3：Vc＋Vb　堅
4：Vc主体　堅
5：Ⅶ>Ⅴ　堅
6：Ⅴ≫Ⅶ　しょう
7：Ⅶ主体　軟
8：Ⅶb主体　しょう
9：Ⅴ>Ⅶ　しょう
10：Ⅶ主体　堅
11：Ⅴ主体　しょう
12：Ⅶb主体　しょう

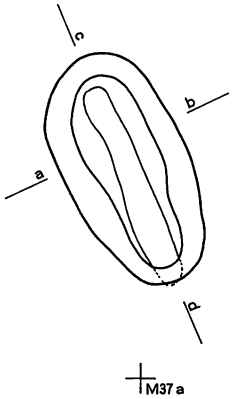
TP－63

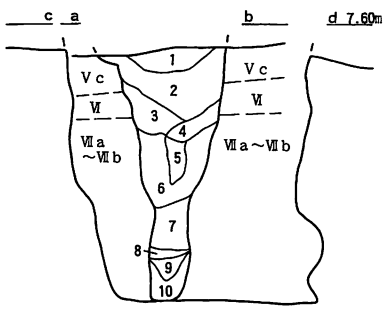




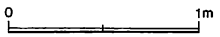
TP－63
1：Va下主体　堅
2：Vb主体　堅
3：Vb？主体　軟　2より明度高い
4：Vc≫Ⅶ　軟
5：Vc≫Ⅶ　しょう
6：Ⅶ>Ⅴ　軟
7：Ⅴ主体　しょう
8：Ⅴ≫Ⅶ　しょう
9：Ⅶ主体　しょう～軟
10：Ⅴ主体　しょう
11：Ⅴ＋Ⅶ　しょう

TP－64

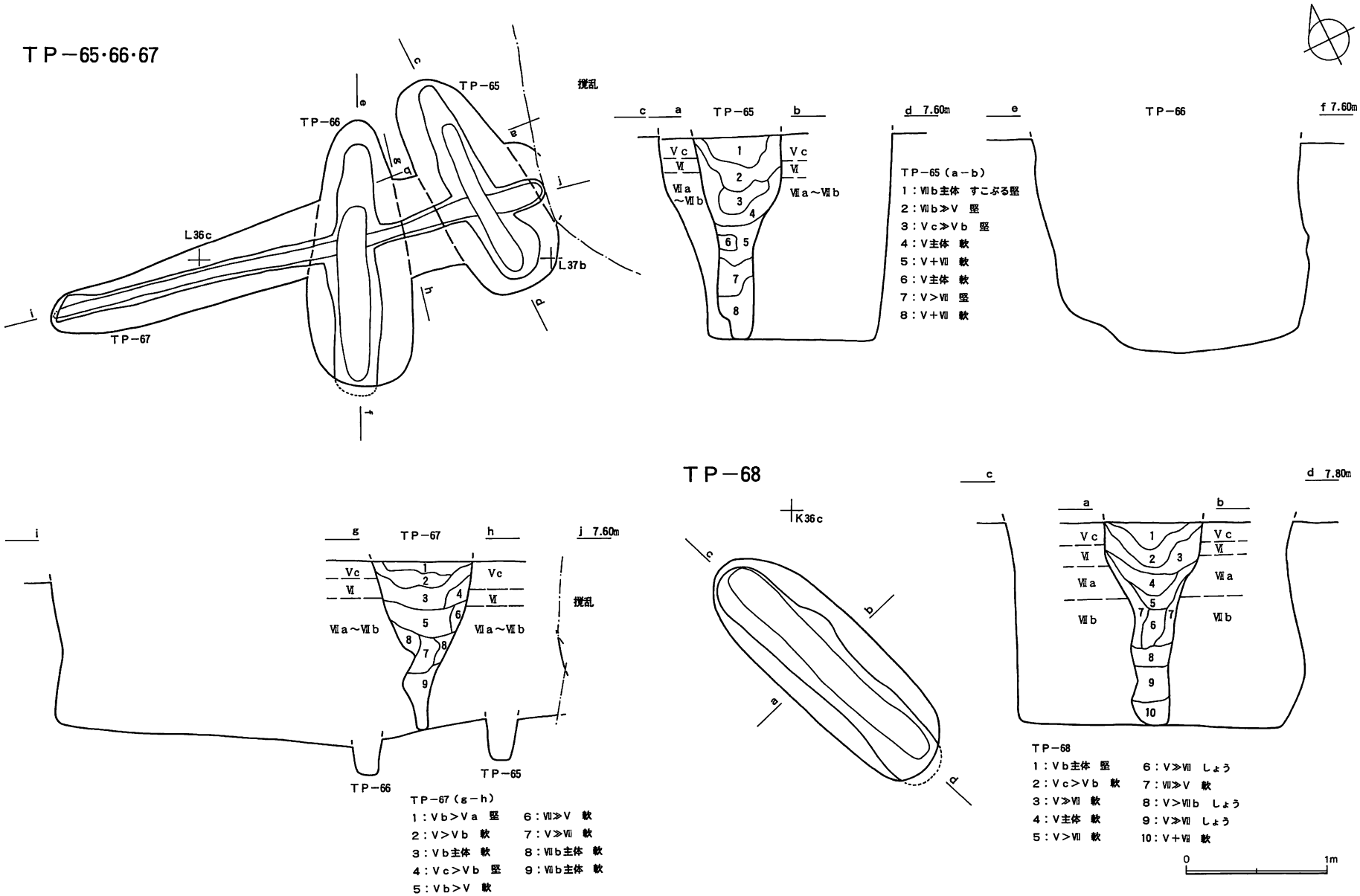




TP－64
1：Va下主体　すこぶる堅
2：Vb主体　堅
3：Vc≫Vb　堅
4：Vc>Ⅵ・Ⅶ　軟
5：Ⅴ≫Ⅶ　軟
6：Ⅶ主体　軟
7：Ⅴ>Ⅶ　しょう
8：Ⅶ主体　しょう
9：Ⅴ主体　しょう
10：Ⅴ＋Ⅶ　しょう

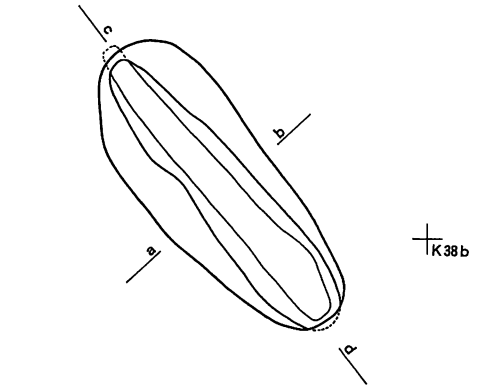


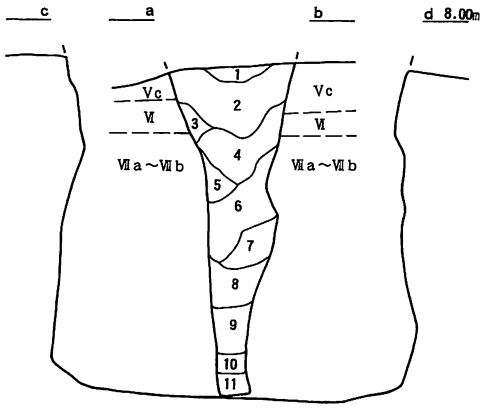
図Ⅳ－２－32　ＴＰ－62～64



図Ⅳ－２－33　ＴＰ－65～68

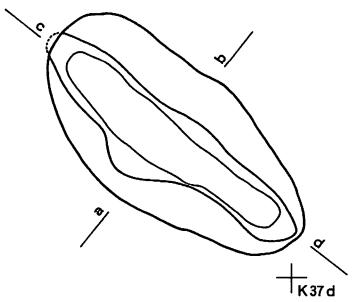
TP－69

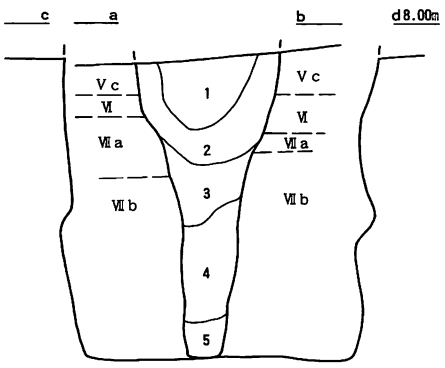




TP－69
1：Vb主体　すこぶる堅
2：Vc＞Vb　堅
3：Ⅶ≫V　すこぶる堅
4：V＞Ⅵ・Ⅶ　軟
5：Ⅶb主体　軟
6：V＋Ⅶ　軟
7：Ⅶ主体　軟
8：V＞Ⅶ　軟
9：V≫Ⅶ　しょう
10：V主体　しょう
11：V＋Ⅶb　しょう

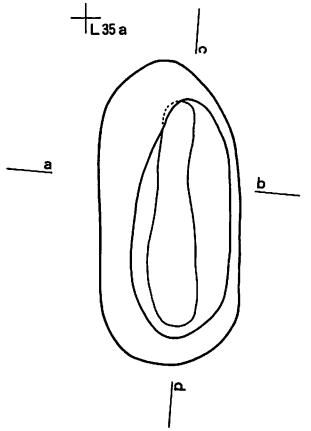
TP－70

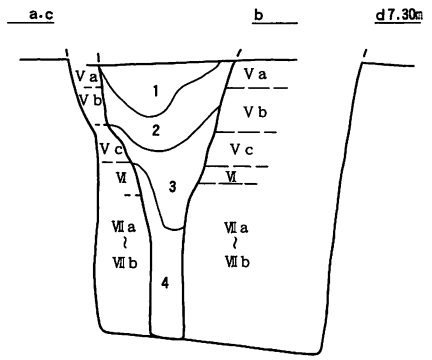




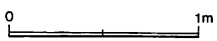
TP－70
1：Va下＞Vb　堅
2：Vc＞Vb　堅
3：Ⅶ主体　堅
4：Ⅶb≫V　軟
5：V＞Ⅶb　軟

TP－71

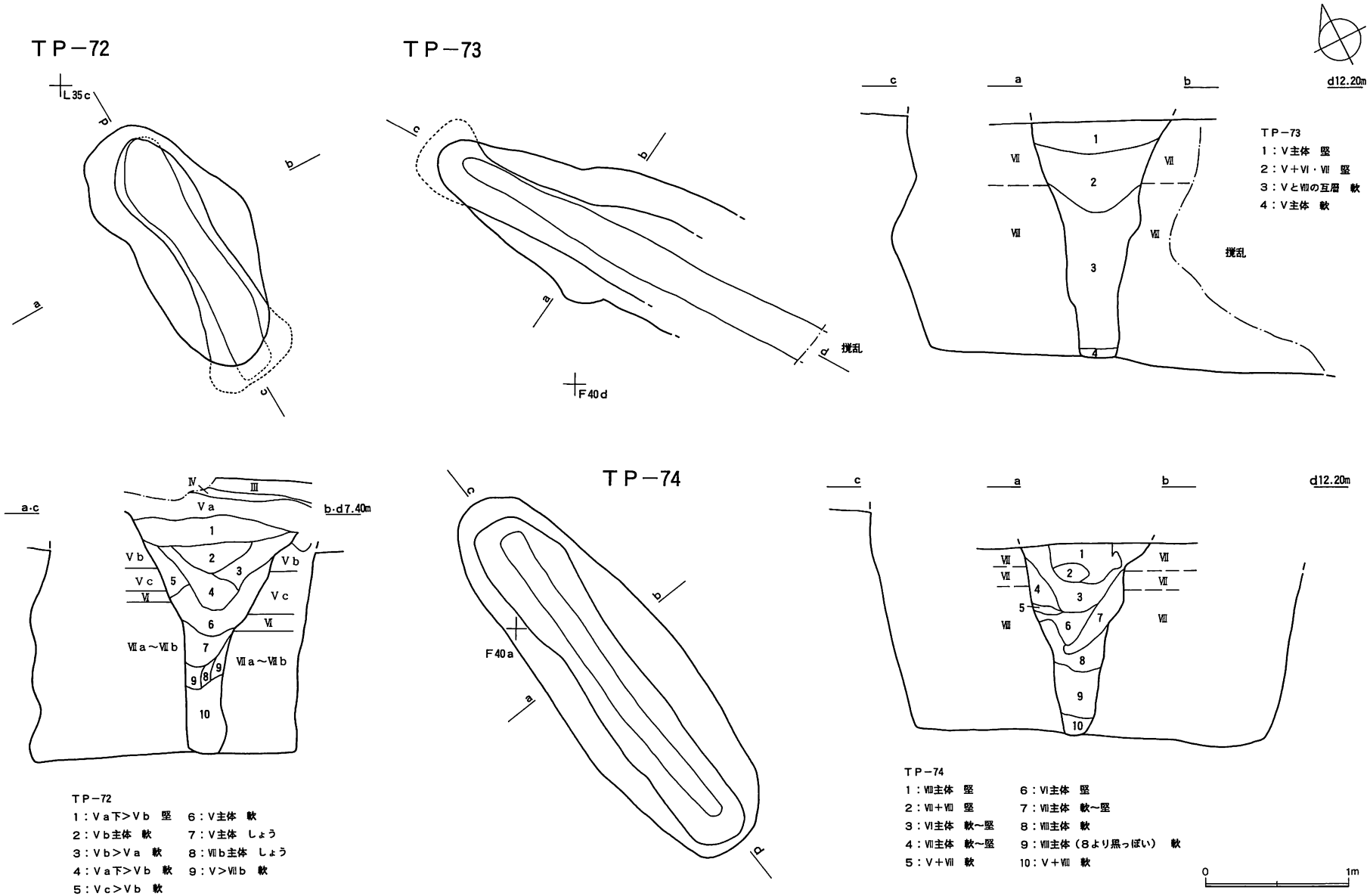




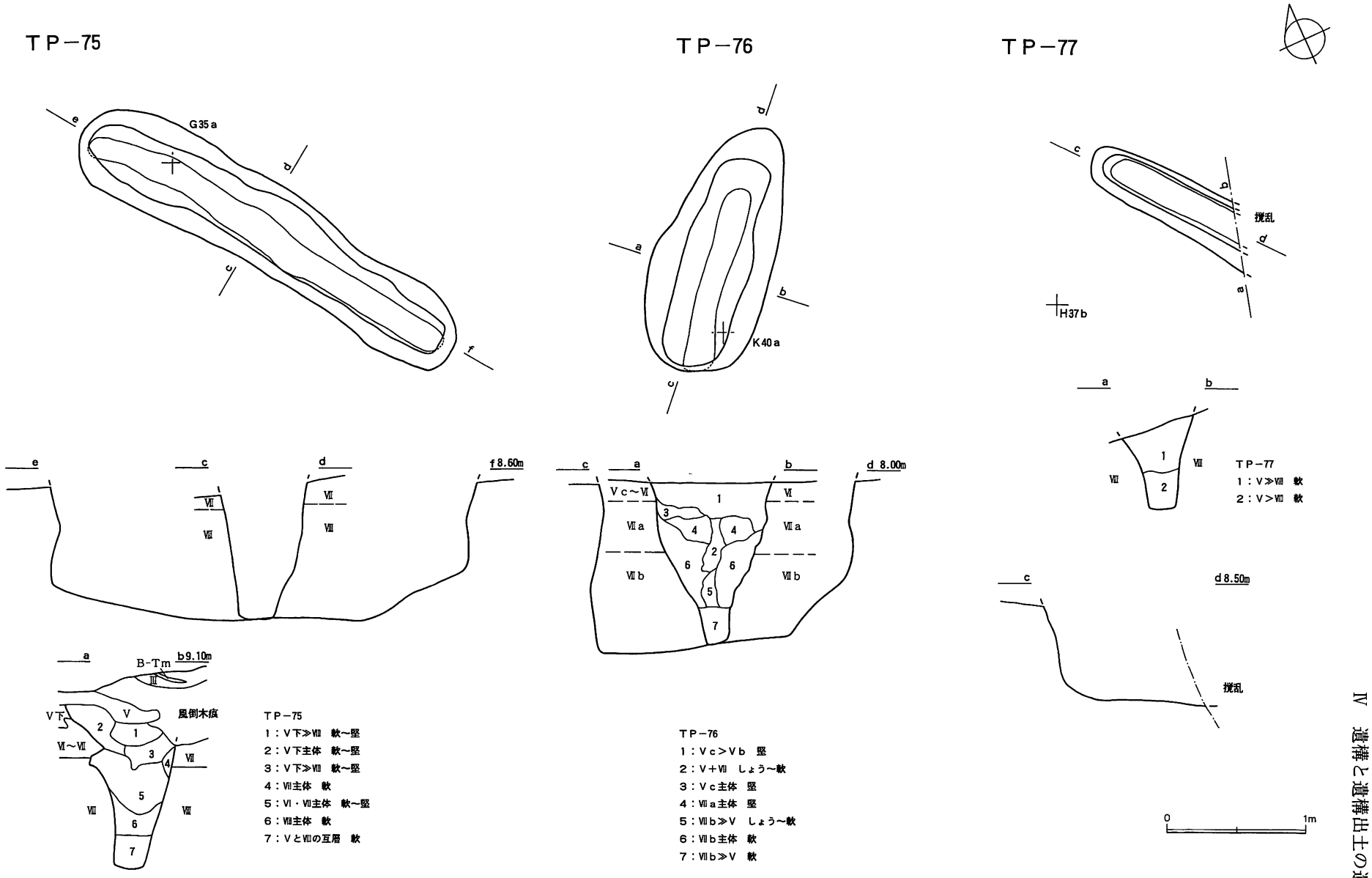
TP－71
1：Va下主体　堅
2：Va下＞Vb　堅
3：Vc≫Vb　軟
4：V主体　しょう～軟



図Ⅳ－2－34　TP－69～71

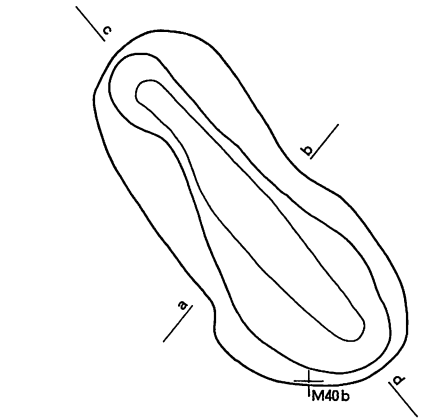


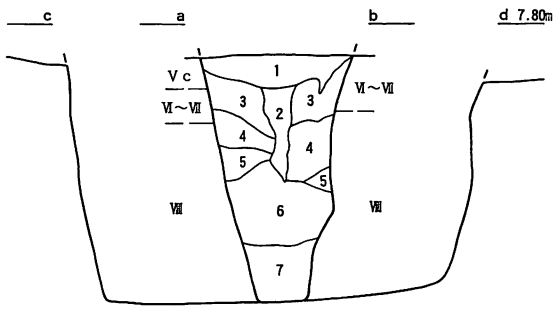
図Ⅳ－２－35　ＴＰ－72～74



図Ⅳ－２－36　ＴＰ－75～77

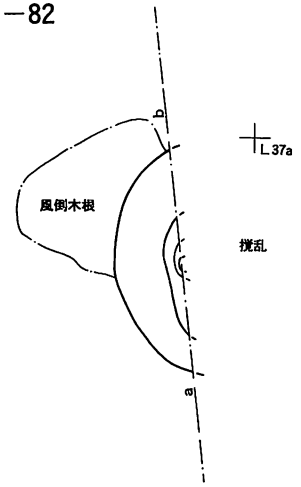
TP－79

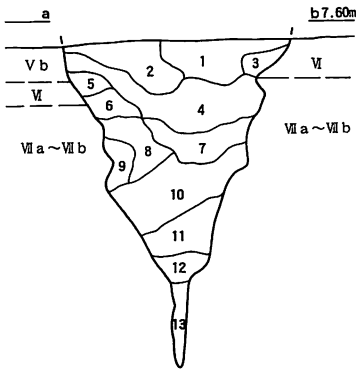




TP－79
1：Vb主体　堅
2：Vb主体　軟
3：Vcのずり落ち 堅
4：Ⅵ～Ⅶのずり落ち 軟
5：Ⅶのずり落ち 軟
6：V＞Ⅷ　軟
7：Ⅷ主体　軟

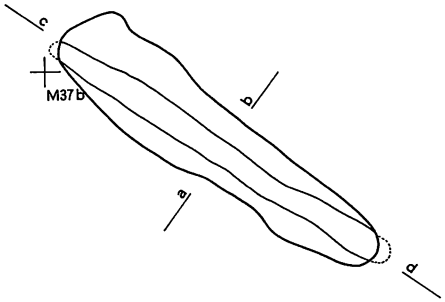
TP－82

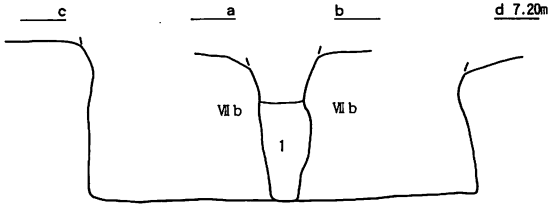




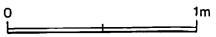
TP－82
1：V＞Vb　堅
2：Vb＞Vc　堅
3：Ⅵ主体　堅
4：Vc＞Vb　堅
5：Ⅵ＞Vc　堅
6：Ⅵ・Ⅶ主体　堅
7：V＋Ⅶb　軟
8：Ⅶb主体　軟
9：Ⅶb主体　堅
10：V＞Ⅶb　軟
11：V≫Ⅶb　軟
12：Ⅶ≫V　しょう
13：V≫Ⅶ　しょう　杭跡の覆土

TP－83



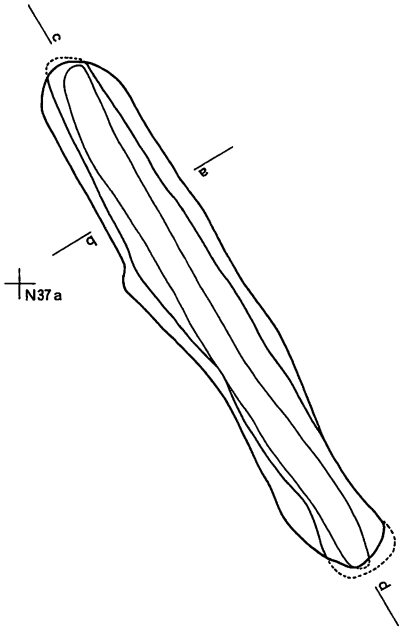


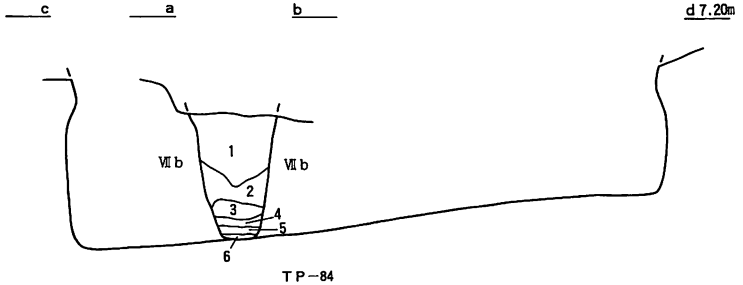
TP－83
1：VとⅦbの互層　軟



図Ⅳ－2－37　TP－79・82・83

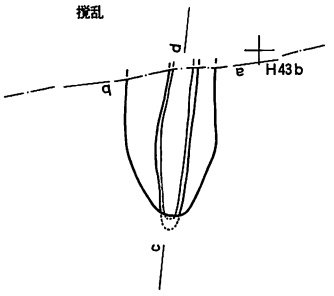
TP－84

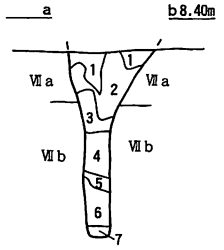




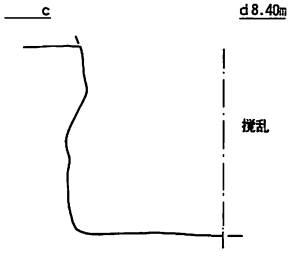
TP－84
1：Ⅴ＋Ⅶb　堅～すこぶる堅
2：Ⅶb主体　軟
3：Ⅴ＞Ⅶb　軟
4：Ⅶb主体　軟
5：Ⅴ＞Ⅶb　軟
6：Ⅴ≫Ⅶb　軟

TP－85

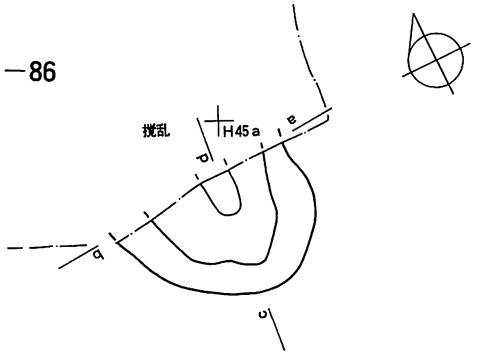


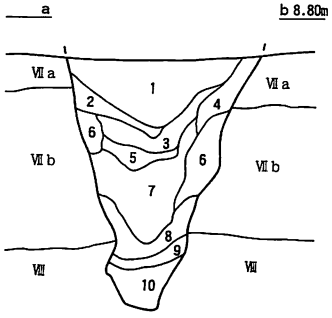


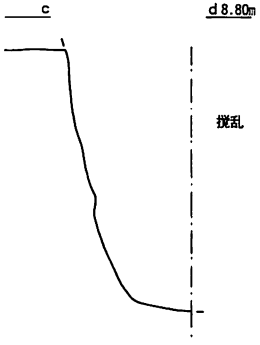
TP－85
1：Ⅴ＞Ⅶ　軟
2：Ⅶ主体　軟～堅
3：Ⅶ主体　軟　2より明度低い
4：Ⅴ≫Ⅶb　軟
5：Ⅶb主体　軟
6：Ⅴ≫Ⅶb　軟
7：Ⅶb主体　軟～堅



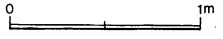
TP－86





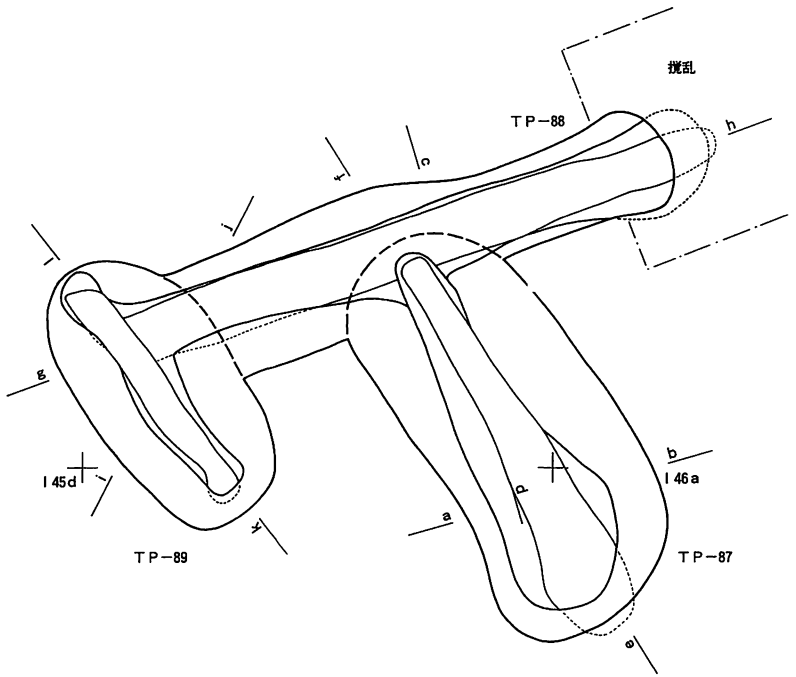


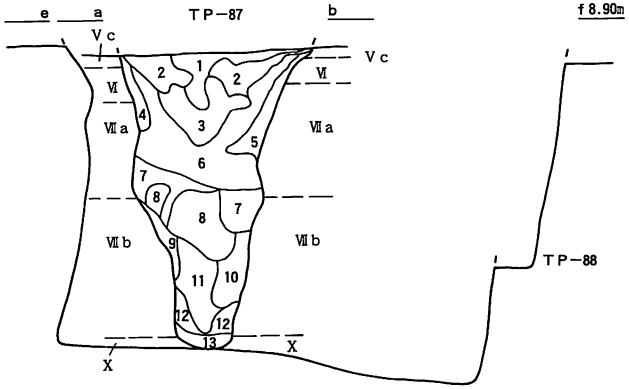
TP－86
1：Ⅴc＞Ⅴb　軟
2：Ⅶa≫Ⅴ
3：Ⅴ主体　堅
4：Ⅶa≫Ⅴ　堅
5：Ⅴ≫Ⅶ　軟
6：Ⅶb主体　軟
7：Ⅶ＞Ⅴ　しょう
8：Ⅶb主体　しょう
9：Ⅶ＋Ⅷ　しょう
10：Ⅴ＋Ⅷ　しょう



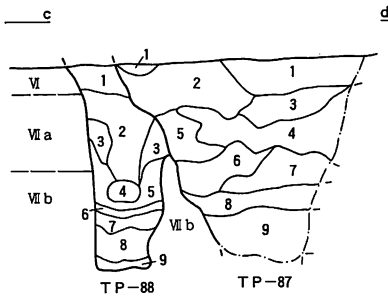
図Ⅳ－２－38　ＴＰ－84～86

ＴＰ－87･88･89



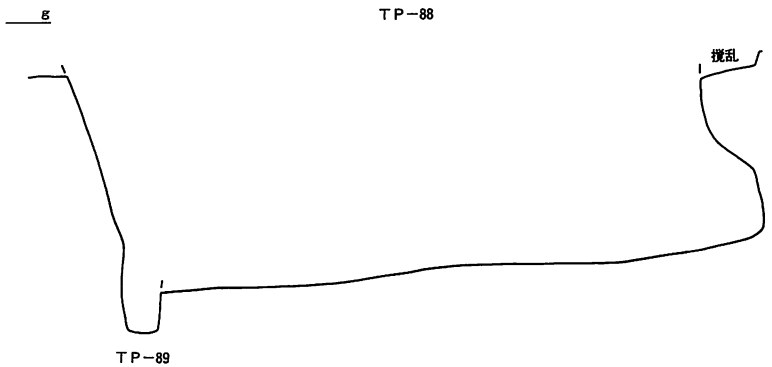


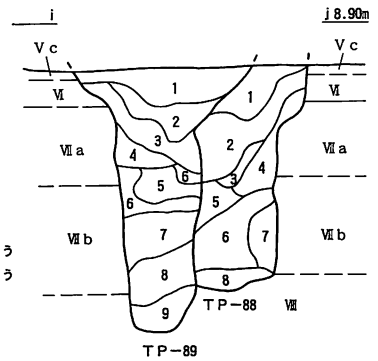
TP－87（a－b）
1：Va下≫Vb 堅
2：Vb＞Vc 堅
3：Vc＞Vb 軟
4：Vc＞Ⅵ・Ⅶ 堅
5：Ⅶ≫V 堅
6：V主体 軟
7：Ⅶ主体 軟
8：V＞Ⅶ 軟
9：Ⅶb主体 堅
10：Ⅶ＞V しょう
11：V＋Ⅶ しょう
12：Ⅶb≫V しょう
13：V主体 しょう

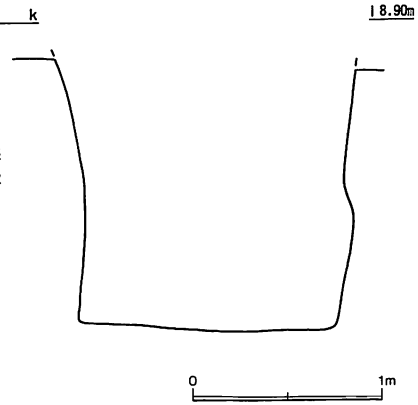


TP－88（c－d）
1：Vb＋Vc 堅
2：Vc≫Ⅶa 軟
3：Ⅶa≫V 堅
4：Ⅶ＞V 軟
5：Ⅶ主体 堅
6：V主体 しょう
7：Ⅶ主体 しょう
8：VとⅦの互層 しょう
9：V主体 しょう

TP－87（c－d）
1：Va下≫Vb 堅
2：Vb＞Vc 堅
3：Vc＞Vb 軟
4：V主体 軟
5：V＞Ⅶ 堅
6：Ⅶ≫V 堅
7：V≫Ⅶ 軟
8：Ⅶb主体 しょう
9：V＞Ⅶ 軟





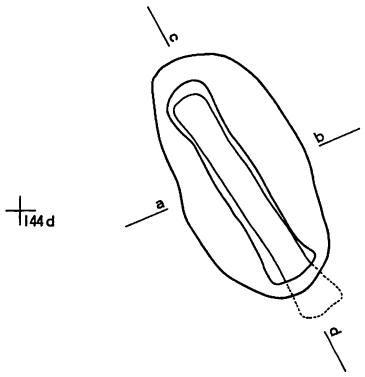


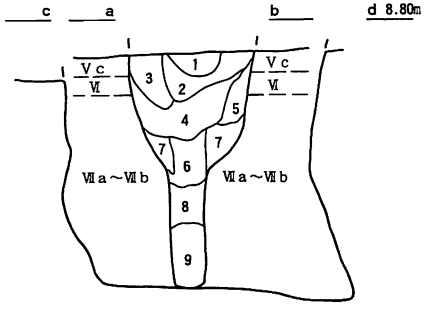
TP－89（i－j）
1：V＞Vb 堅
2：V≫Vb 堅
3：V主体 軟
4：V＋Ⅶa 軟
5：V≫Ⅶa しょう
6：Ⅶb≫V しょう
7：V＞Ⅶ しょう
8：Ⅶ＞V しょう
9：V主体 しょう

TP－88（i－j）
1：Vb＋Vc 堅
2：Vc≫Ⅶa 軟
3：Ⅶa≫V 堅
4：Ⅶ＞V 軟
5：V主体 軟
6：V＋Ⅶ しょう
7：Ⅶb主体 軟
8：V主体 しょう

図Ⅳ－２－39　ＴＰ－87～89

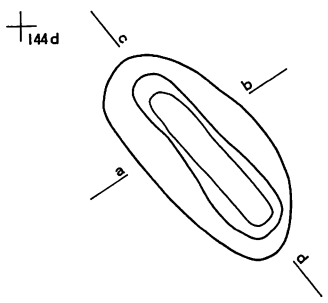
TP－90

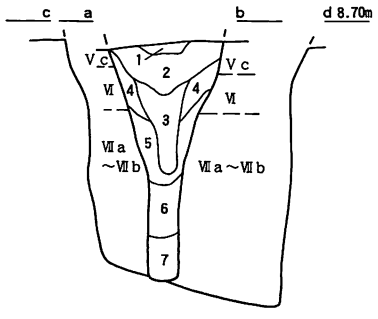




TP－90
1：Vb主体　堅
2：Va≫Vb　軟
3：Vc＞Vb
4：Vc主体　軟
5：Ⅶ＞Ⅴ　軟
6：Ⅶ≫Ⅴ　しょう
7：Ⅶ主体　軟
8：Ⅶb主体　しょう
9：Ⅴ＋Ⅶ　しょう

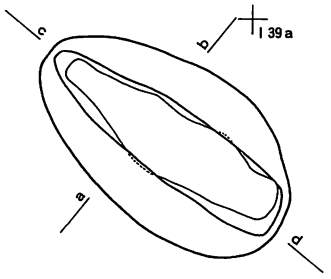
TP－91

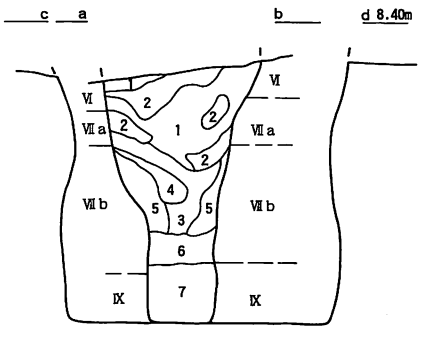




TP－91
1：Va下＞Vb　軟
2：Vb≫Va下　軟
3：Ⅴ≫Ⅶ　しょう
4：Ⅶ＞Vc　堅
5：Ⅶb主体　軟
6：Ⅴ≫Ⅶ　しょう
7：Ⅴ主体　しょう

TP－92

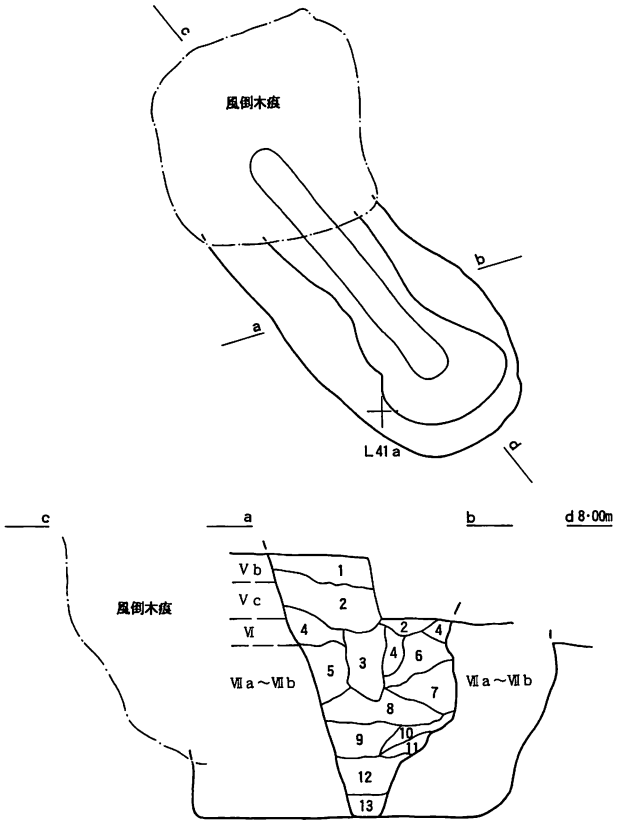




TP－92
1：Ⅴ主体　軟
2：Ⅶ≫Ⅴ　軟
3：Ⅴ≫Ⅶ　軟
4：Ⅶ主体　しょう
5：Ⅶb主体　軟
6：Ⅶ＞Ⅴ　しょう
7：Ⅶb主体　軟

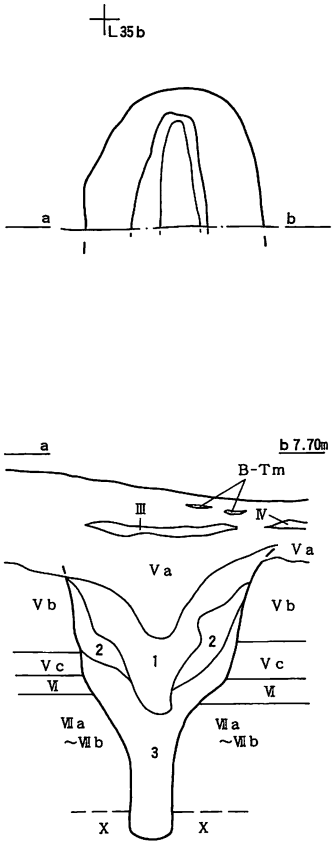
図Ⅳ－２－40　ＴＰ－90～92

TP－93



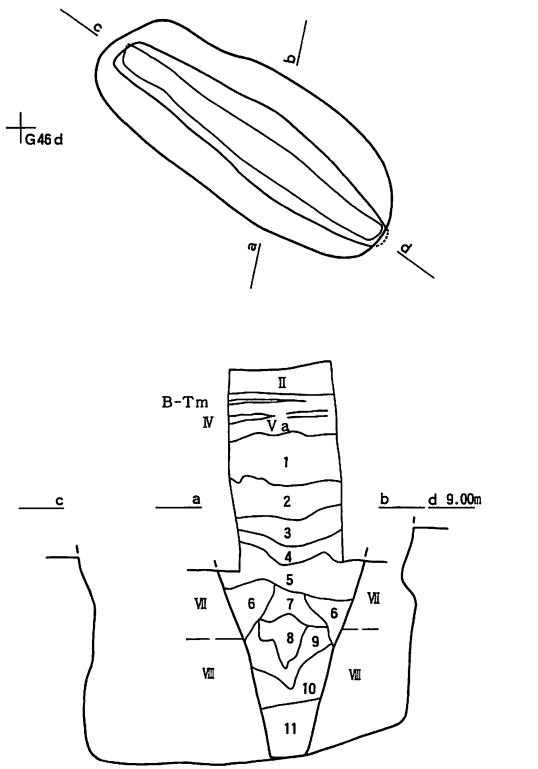
TP－93
1：Va主体 堅
2：Vb主体 堅
3：Vb＞V 軟
4：Vc主体 堅
5：V≫Ⅶ 堅
6：Ⅶ主体 堅
7：Ⅶb主体 堅
8：V主体 しょう
9：V≫Ⅶ しょう
10：V＞Ⅶ しょう
11：V≫Ⅶ 軟
12：V＋Ⅶ 軟
13：V≫Ⅶb しょう

TP－94



TP－94
1：Va＞Vb 軟～堅
2：Vb主体 軟
3：V≫Ⅶ 軟

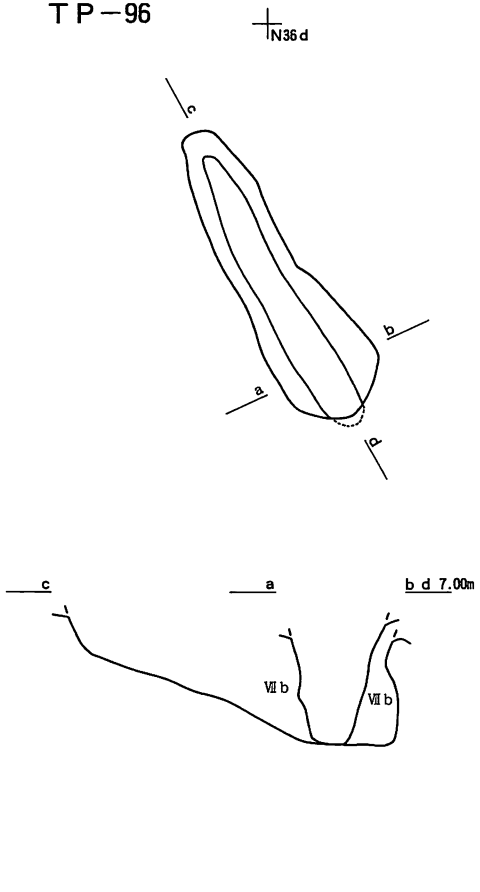
TP－95



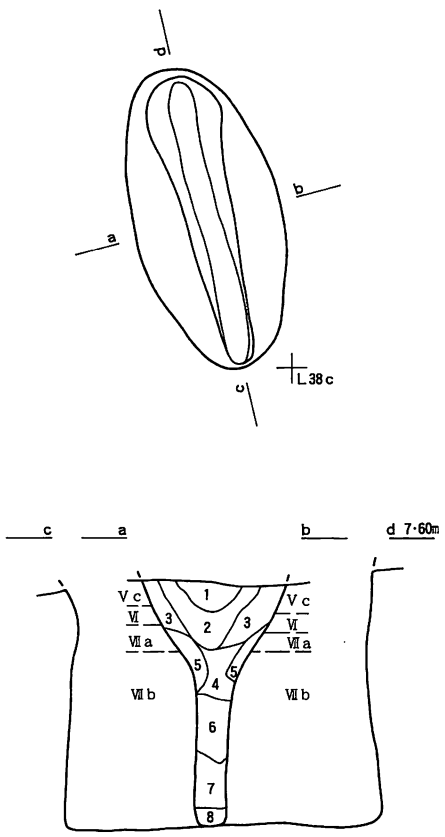
TP－95
1：Va＞Vb 堅
2：Vb＞Va 堅
3：V＞Vb 堅
4：V＋Vb 堅
5：V≫Vb 堅
6：V＞Ⅶ 堅
7：V＋Ⅶ 軟
8：V主体 しょう
9：Ⅶ主体 軟
10：Ⅷ＞V しょう
11：V＋Ⅷ しょう

図Ⅳ－2－41 TP－93～95

TP－96

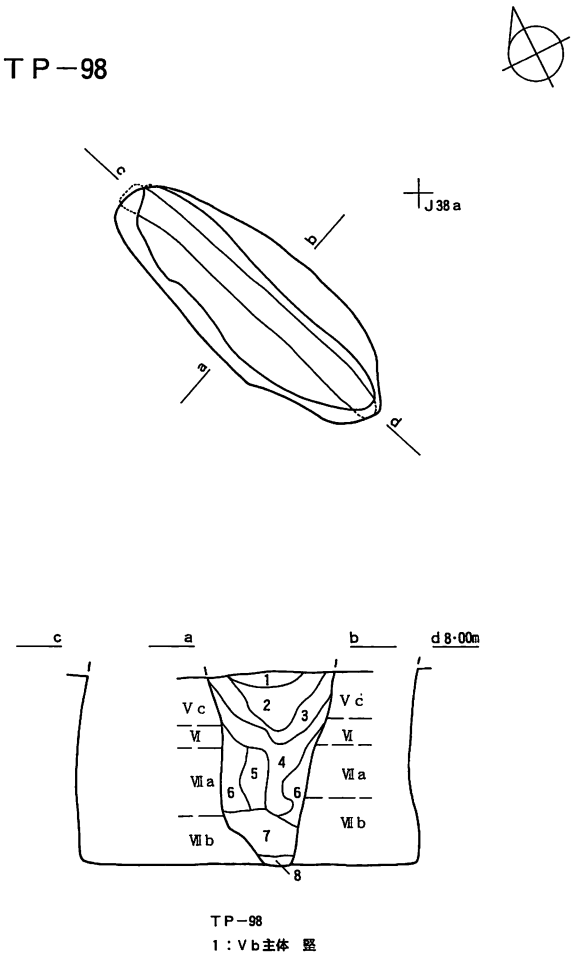


TP－97



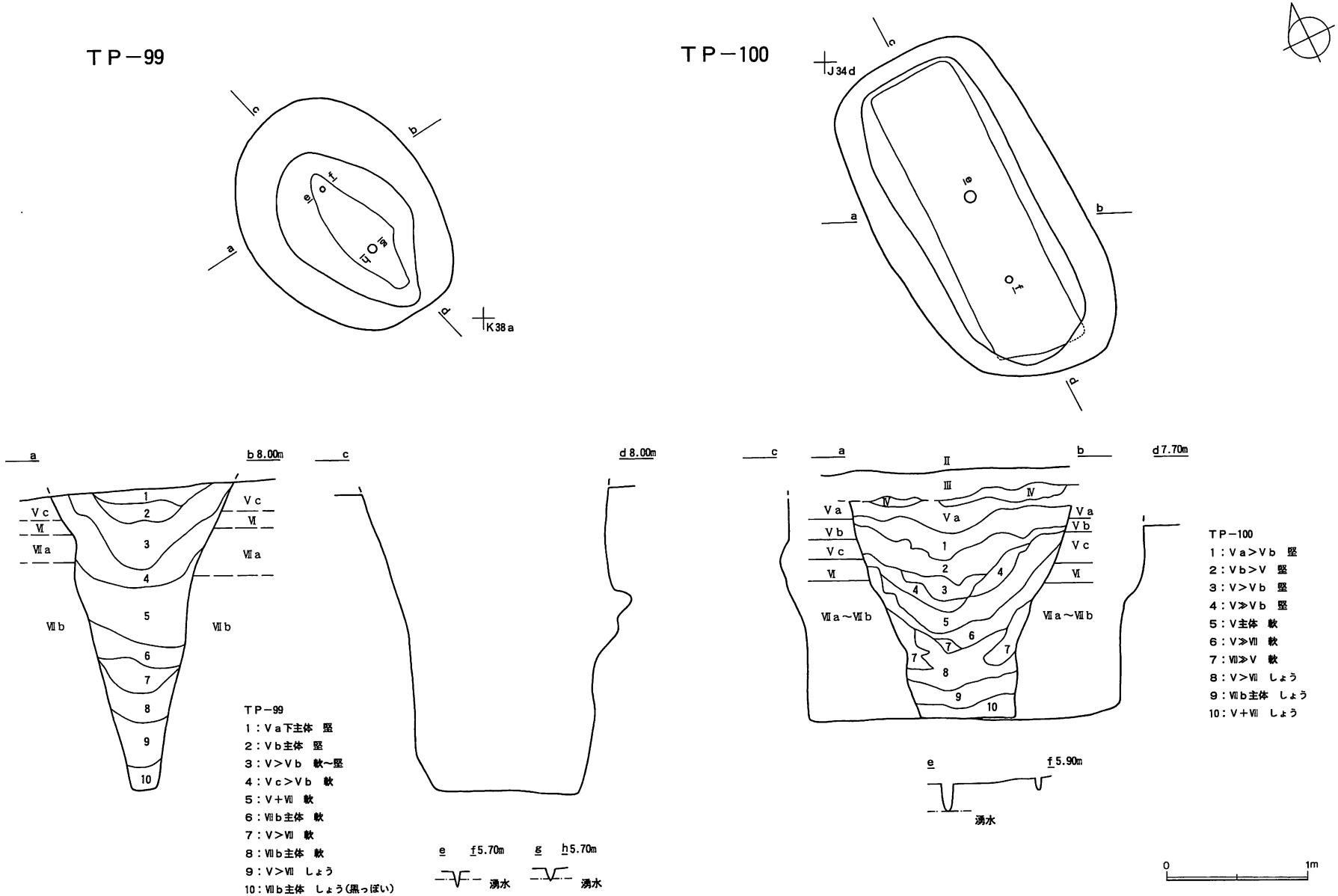
TP－97
1：Va下主体　軟
2：Vb主体　軟～堅
3：Vc≫Vb　軟～堅
4：V＋Vb　軟
5：Ⅶ主体　軟
6：V＋Ⅶb　軟
7：Ⅶb＞V　軟
8：V主体　軟

TP－98

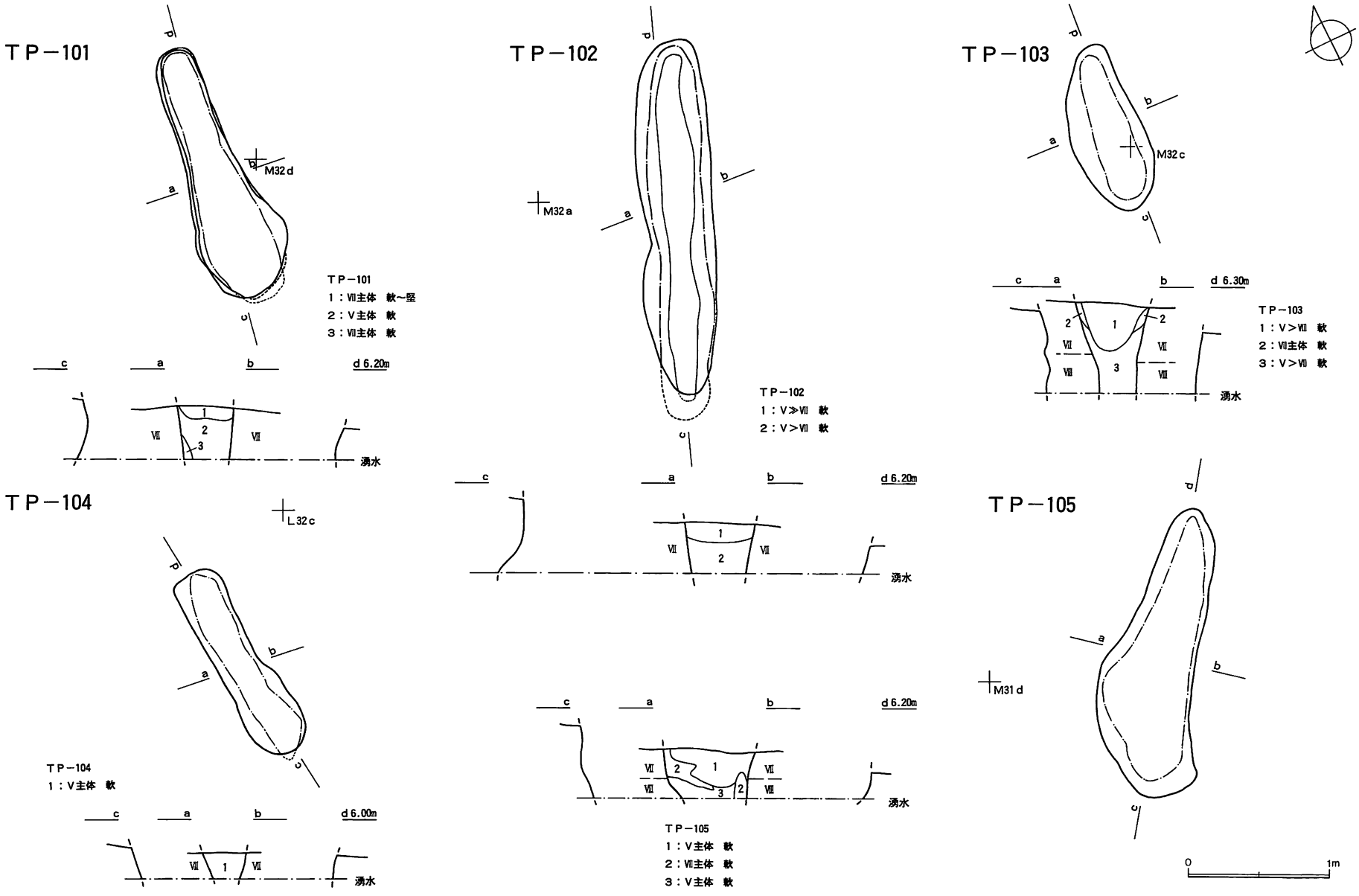


TP－98
1：Vb主体　堅
2：Vc＞Vb　軟～堅
3：Vc＋Vb　軟～堅
4：V主体　軟～堅
5：Ⅶ主体　堅
6：Ⅶ主体　軟
7：Ⅶb主体　軟
8：V主体　軟

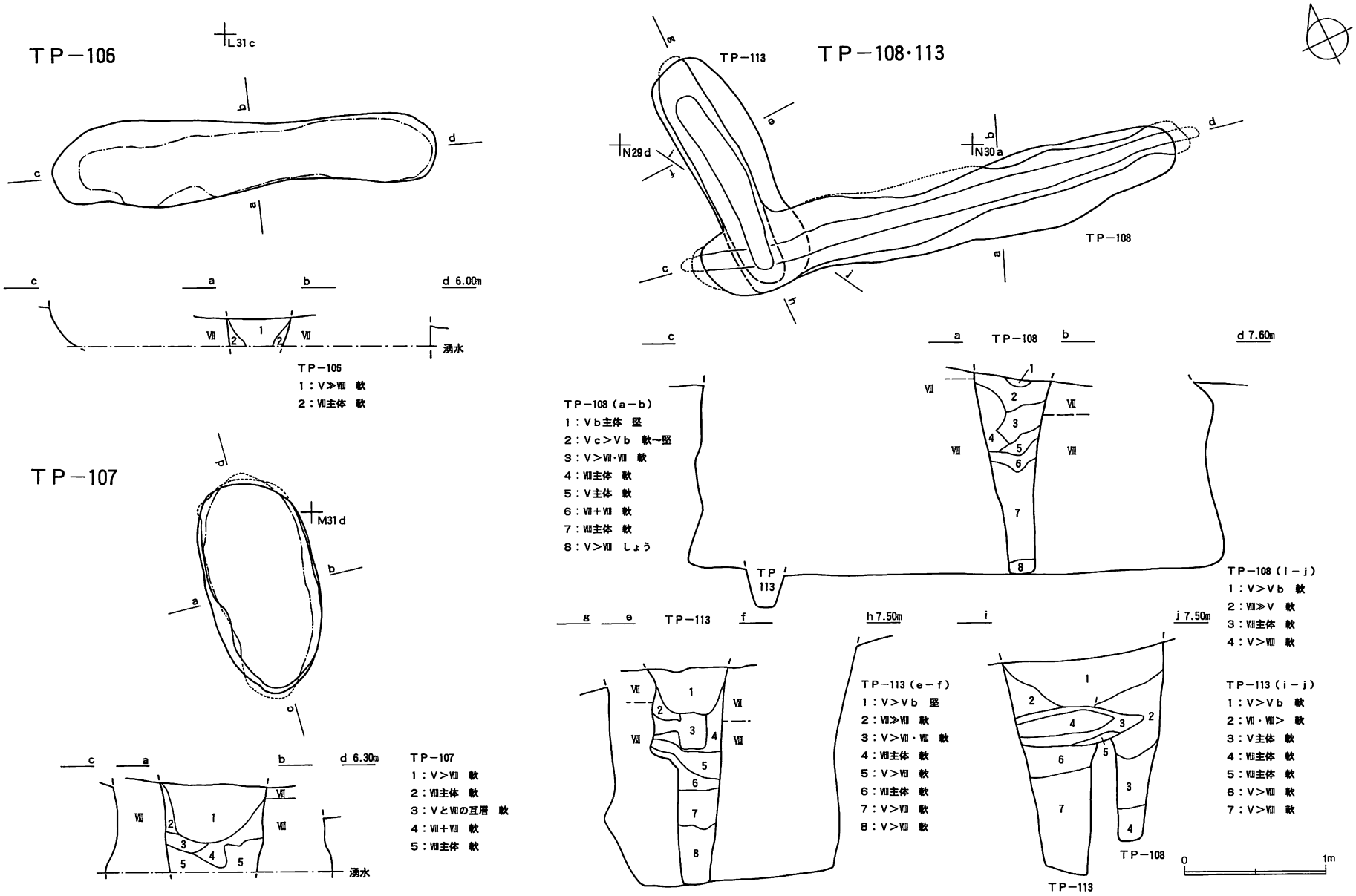
図Ⅳ－2－42　TP－96～98



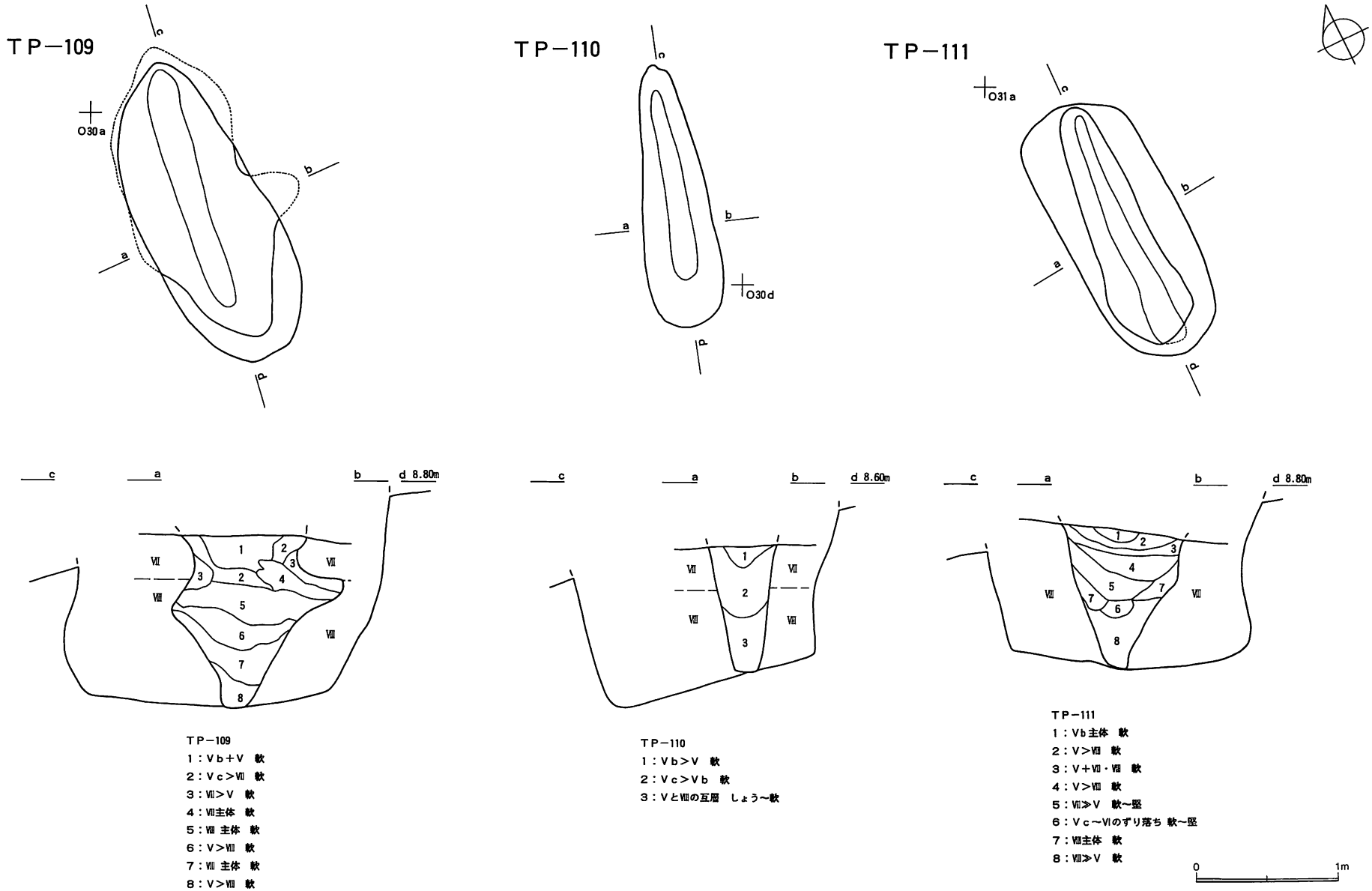
図Ⅳ－2－43　TP－99・100



図Ⅳ－２－44　ＴＰ－101～105



図Ⅳ－２－45　ＴＰ－106～108・113

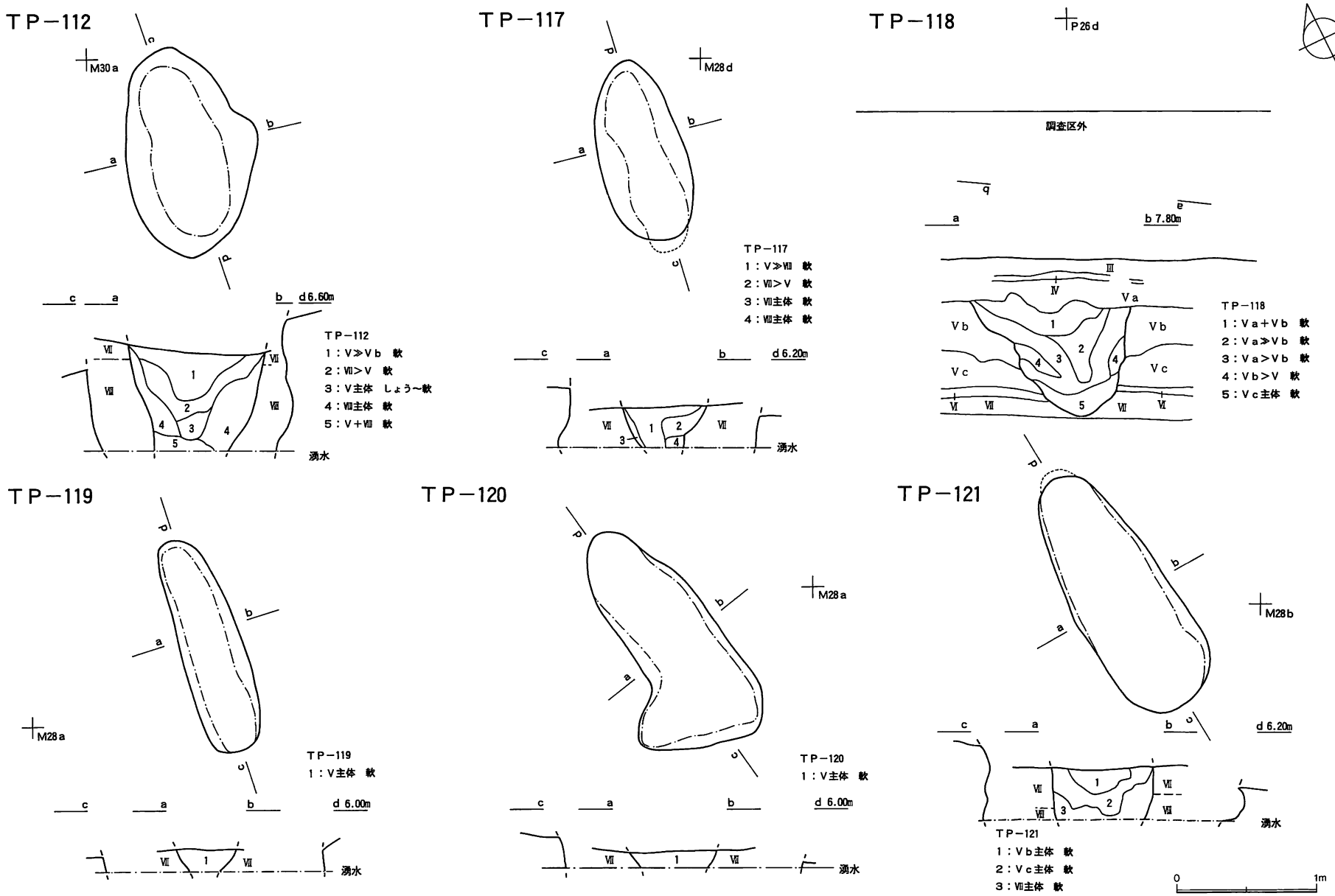


TP−109
1：Vb＋V　軟
2：Vc＞Ⅶ　軟
3：Ⅶ＞V　軟
4：Ⅶ主体　軟
5：Ⅷ 主体　軟
6：V＞Ⅷ　軟
7：Ⅷ 主体　軟
8：V＞Ⅷ　軟

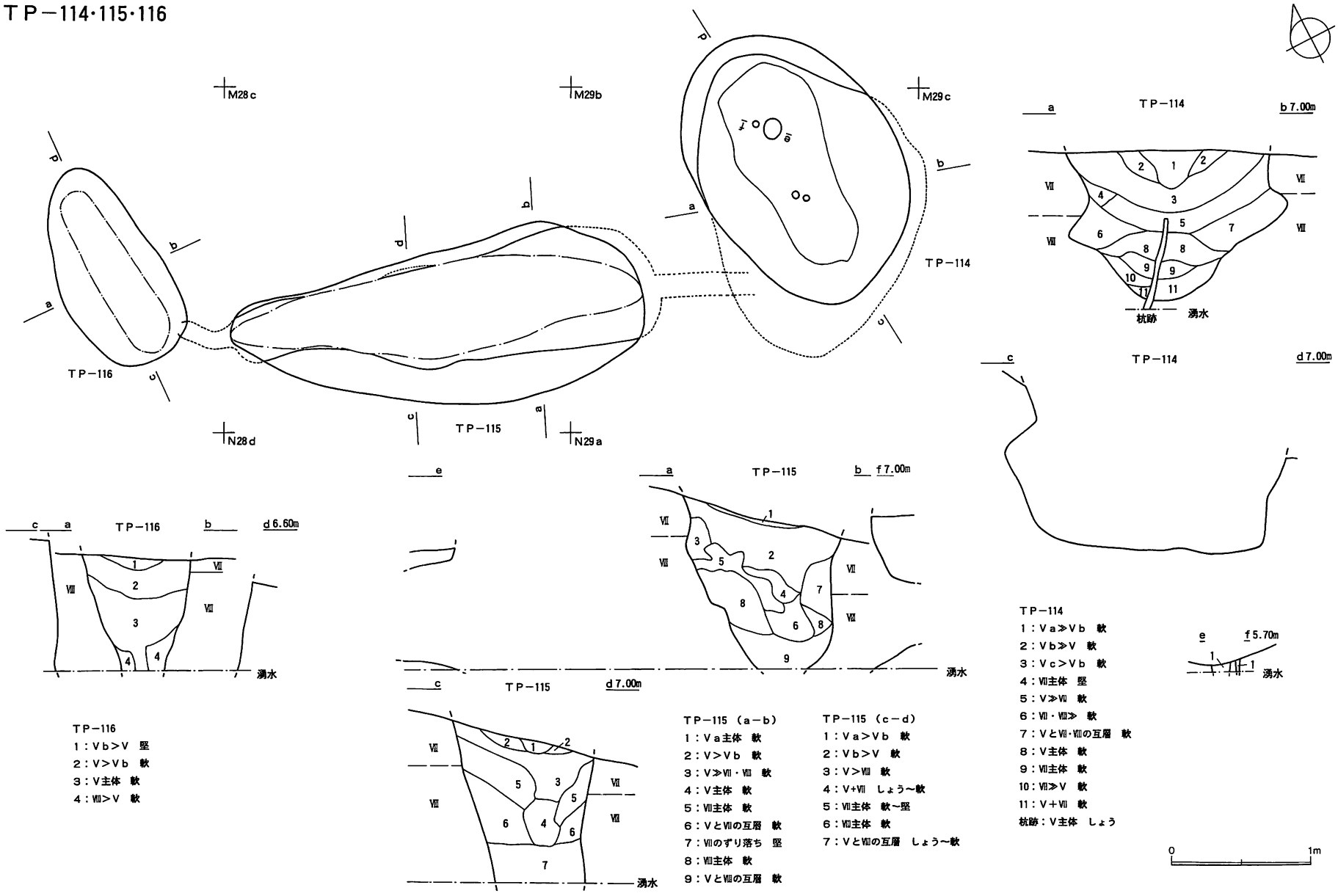
TP−110
1：Vb＞V　軟
2：Vc＞Vb　軟
3：VとⅧの互層　しょう〜軟

TP−111
1：Vb主体　軟
2：V＞Ⅷ　軟
3：V＋Ⅶ・Ⅷ　軟
4：V＞Ⅷ　軟
5：Ⅶ≫V　軟〜堅
6：Vc〜Viのずり落ち 軟〜堅
7：Ⅷ主体　軟
8：Ⅷ≫V　軟

図Ⅳ−2−46　TP−109〜111



図Ⅳ－2－47　TP－112・117～121



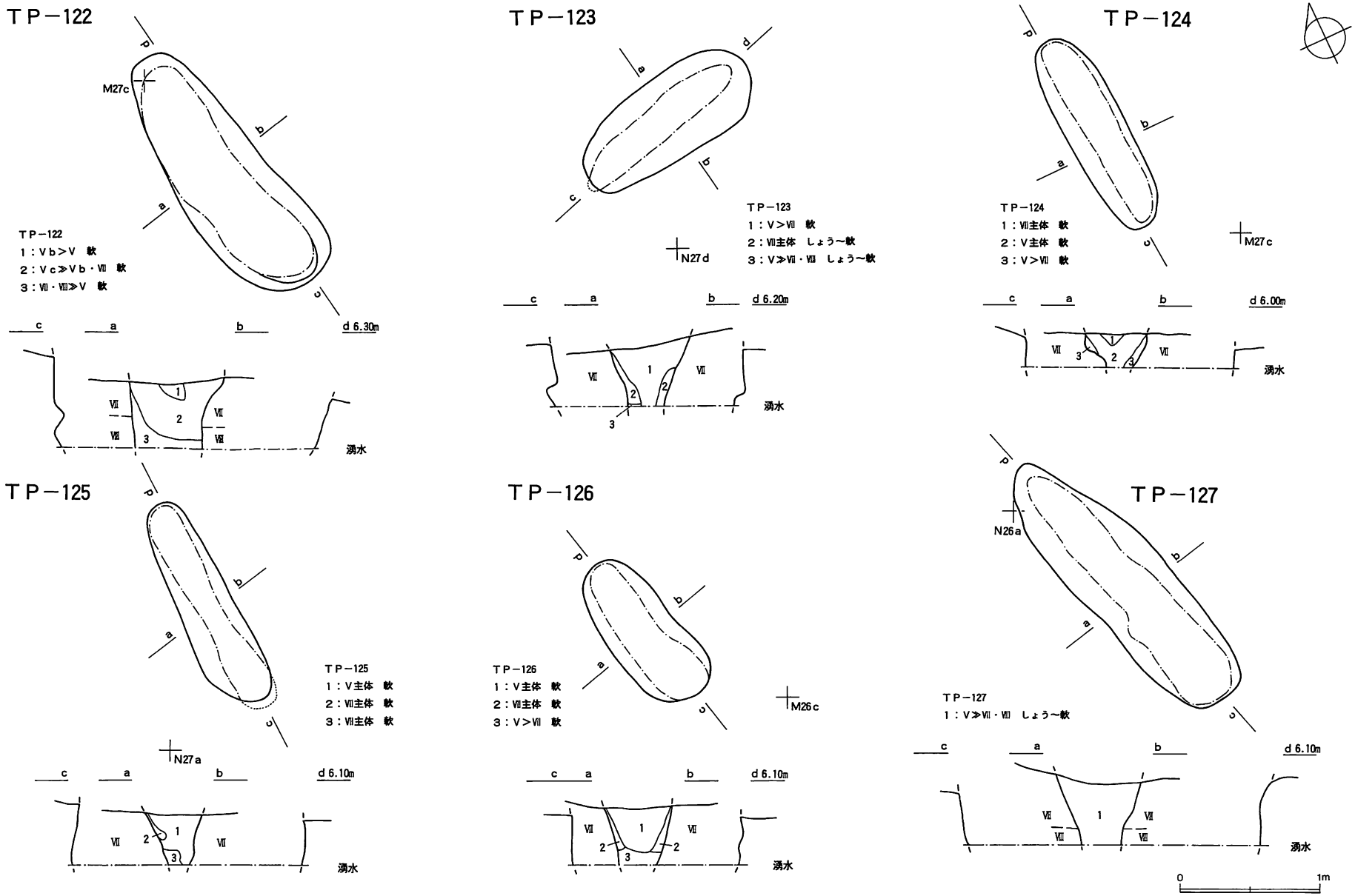
TP－116
1：Vb＞V　堅
2：V＞Vb　軟
3：V主体　軟
4：Ⅷ＞V　軟

TP－115（a－b）
1：Va主体　軟
2：V＞Vb　軟
3：V≫Ⅶ・Ⅷ　軟
4：V主体　軟
5：Ⅶ主体　軟
6：VとⅦの互層　軟
7：Ⅶのずり落ち　堅
8：Ⅷ主体　軟
9：VとⅧの互層　軟

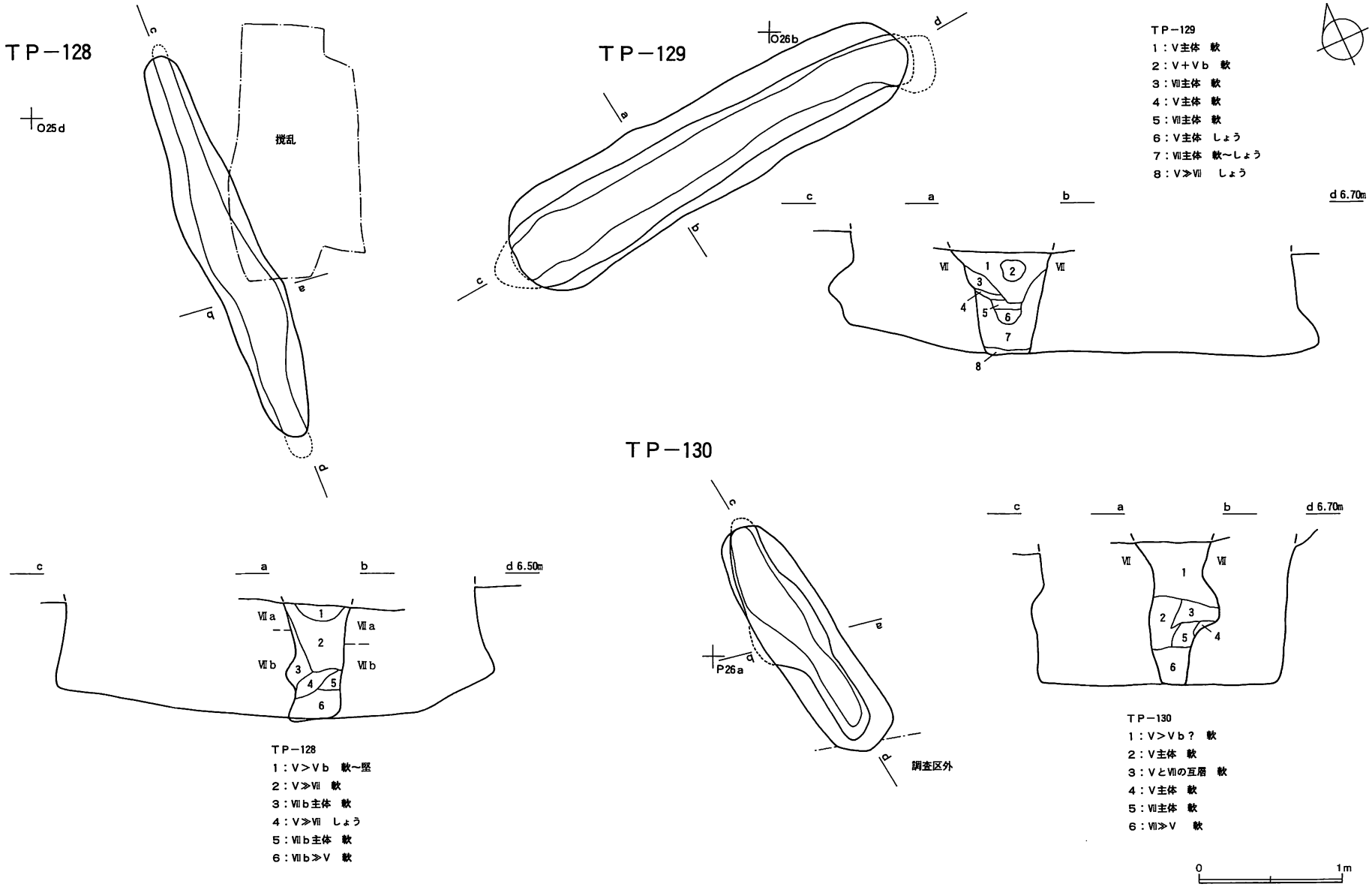
TP－115（c－d）
1：Va＞Vb　軟
2：Vb＞V　軟
3：V＞Ⅷ　軟
4：V+Ⅶ　しょう～軟
5：Ⅶ主体　軟～堅
6：Ⅷ主体　軟
7：VとⅧの互層　しょう～軟

TP－114
1：Va≫Vb　軟
2：Vb≫V　軟
3：Vc＞Vb　軟
4：Ⅶ主体　堅
5：V≫Ⅶ　軟
6：Ⅶ・Ⅷ≫　軟
7：VとⅦ・Ⅷの互層　軟
8：V主体　軟
9：Ⅶ主体　軟
10：Ⅶ≫V　軟
11：V＋Ⅶ　軟
杭跡：V主体　しょう

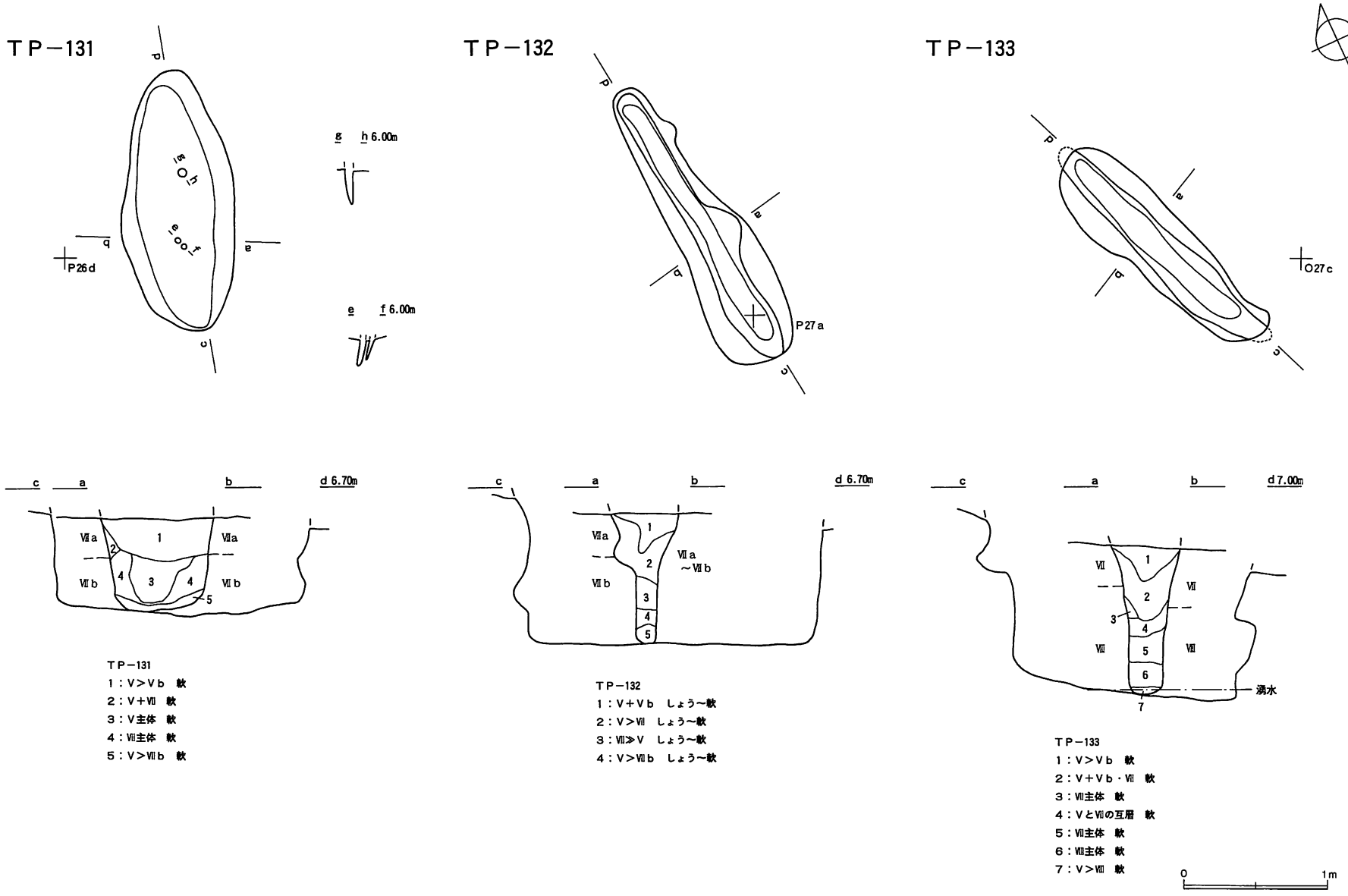
図Ⅳ－２－48　ＴＰ－114～116



図Ⅳ－２－49　ＴＰ－122～127



図Ⅳ－２－50　ＴＰ128～130

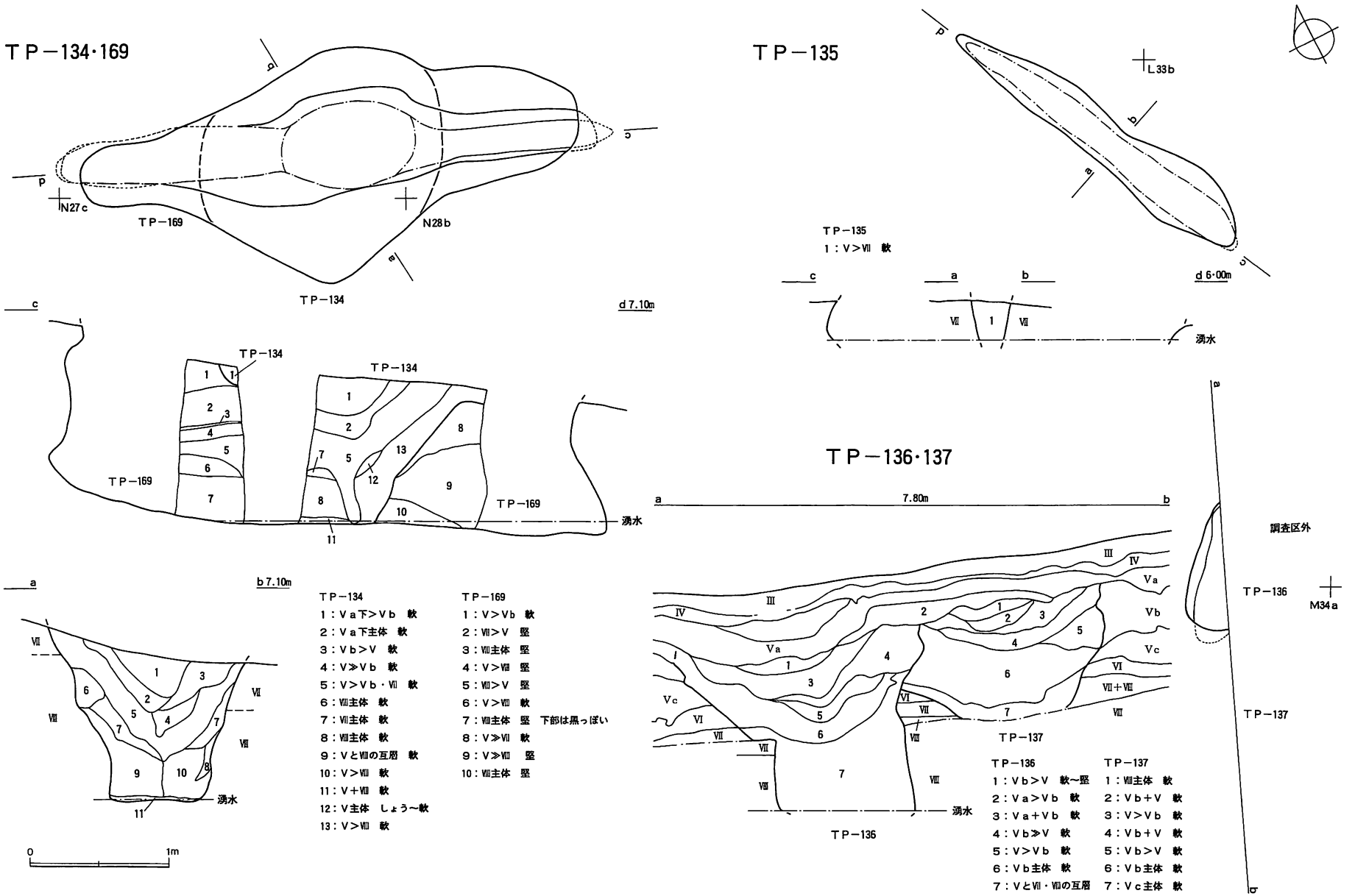


TP－131
1：V＞Vb 軟
2：V＋Ⅶ 軟
3：V主体 軟
4：Ⅶ主体 軟
5：V＞Ⅶb 軟

TP－132
1：V＋Vb しょう～軟
2：V＞Ⅶ しょう～軟
3：Ⅶ≫V しょう～軟
4：V＞Ⅶb しょう～軟

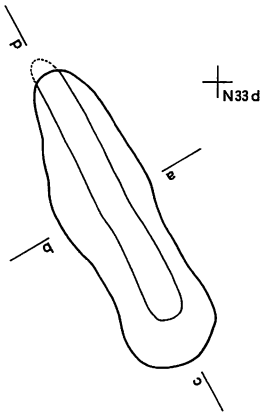
TP－133
1：V＞Vb 軟
2：V＋Vb・Ⅶ 軟
3：Ⅶ主体 軟
4：VとⅦの互層 軟
5：Ⅶ主体 軟
6：Ⅷ主体 軟
7：V＞Ⅷ 軟

図Ⅳ－2－51　TP－131～133

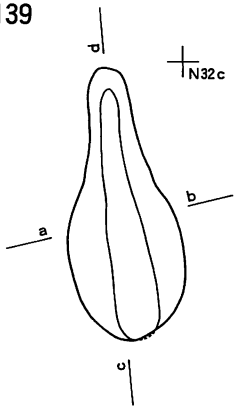


図Ⅳ－２－52　ＴＰ－134～137・169

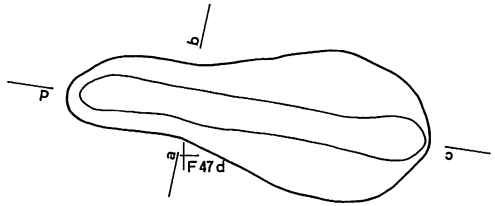
TP－138

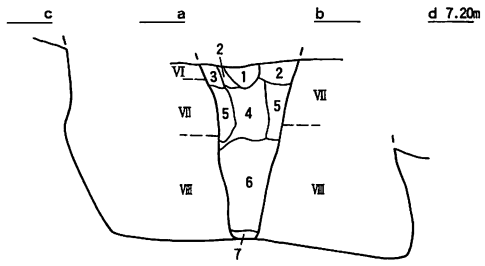


TP－139

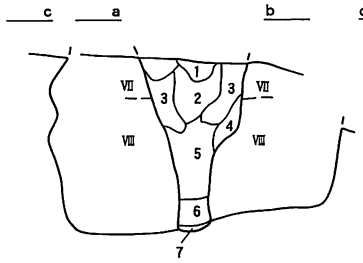


TP－140

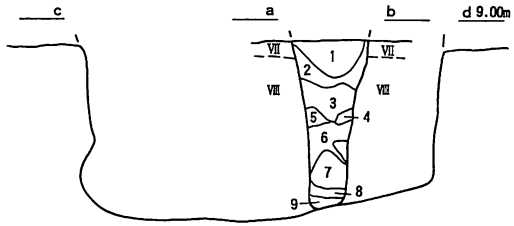




TP－138
1：Vb主体　軟
2：Vc≫Vb　軟
3：VI主体　軟
4：V≫VII　軟
5：VII主体　軟
6：VIII主体　軟
7：V≫VIII　軟



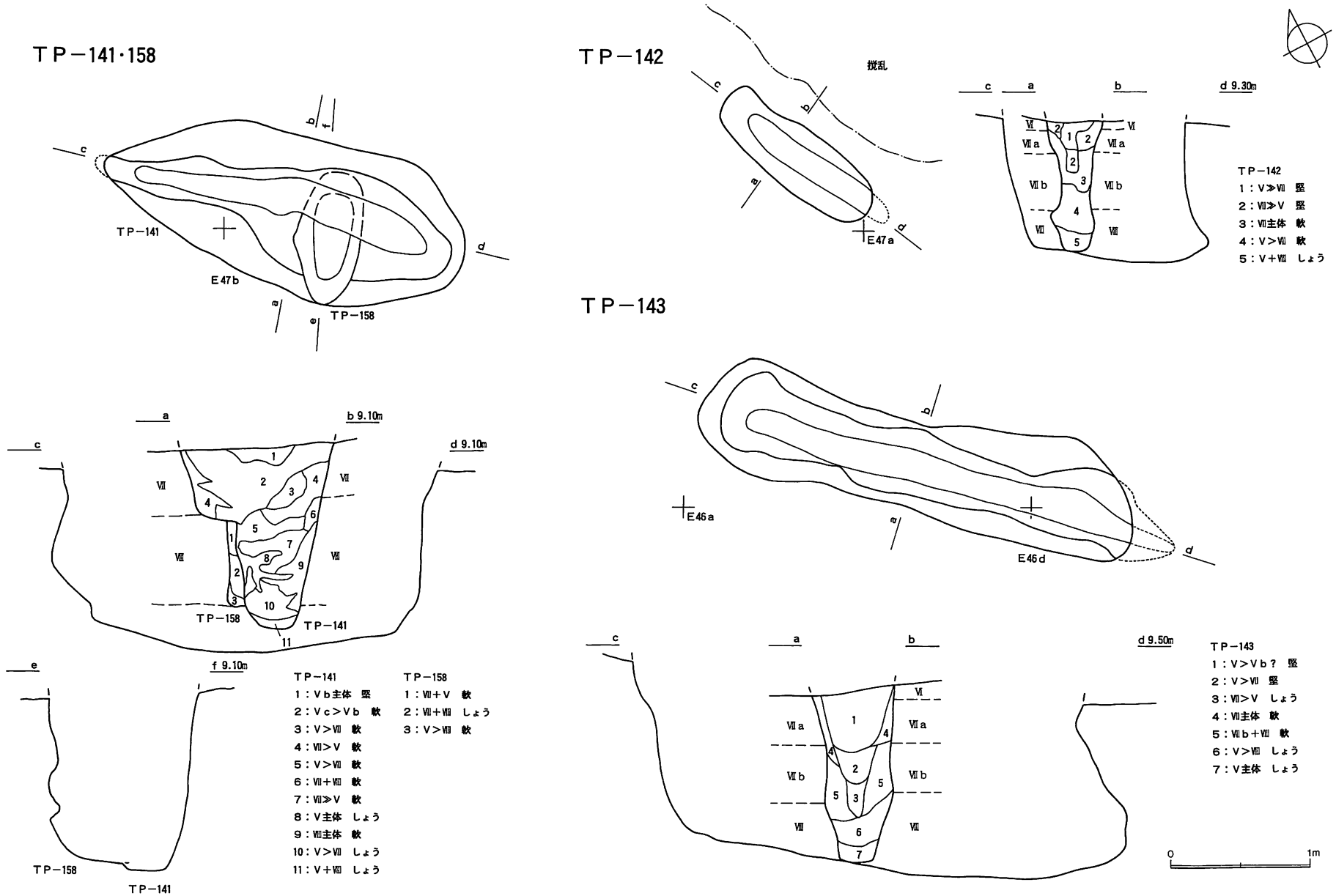
TP－139
1：Vb主層　軟
2：V＞Vb　軟
3：VII＞VIII　軟
4：VIII主体　堅
5：V＞VIII　しょう
6：VIII主体　軟
7：V＞VIII　軟



TP－140
1：V≫VII　軟
2：VII≫V　軟
3：V≫VII　しょう
4：VIII主体　軟
5：VII主体　軟
6：V＋VII　しょう
7：VII＋VIII　しょう
8：VII＞V　しょう
9：V≫VIII　しょう

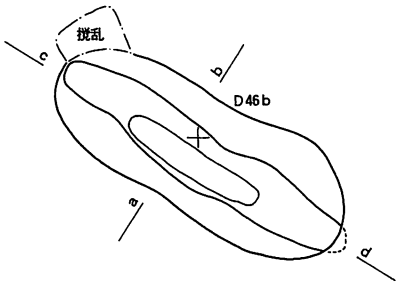
0　1m

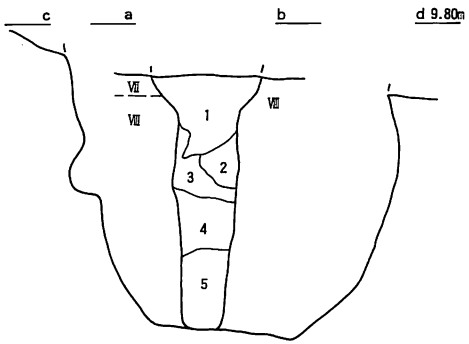
図Ⅳ－２－53　ＴＰ－138～140



図Ⅳ－2－54　TP－141～143・158

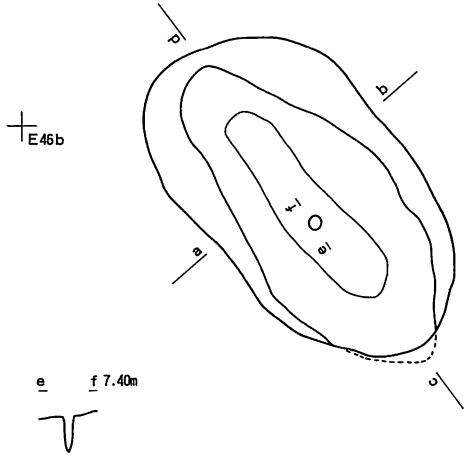
ＴＰ－144

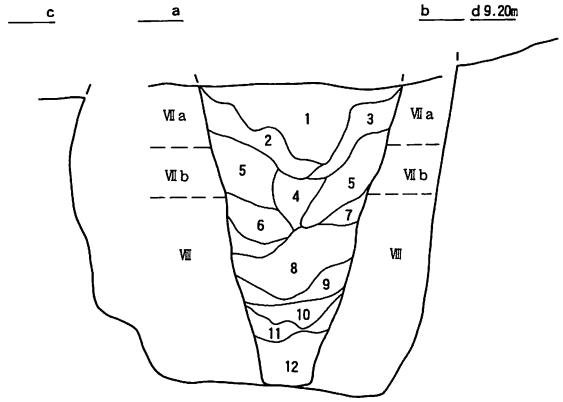




ＴＰ－144
1：Ⅴ≫Ⅶ？　軟
2：Ⅶ主体　軟
3：Ⅴ＞Ⅷ　軟
4：Ⅷ主体　しょう
5：Ⅴ＋Ⅷ　しょう

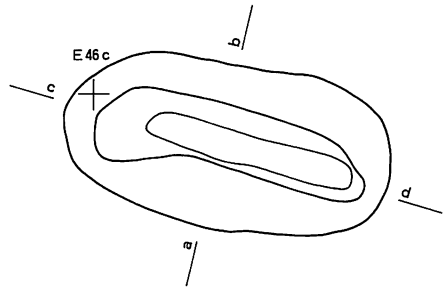
ＴＰ－145

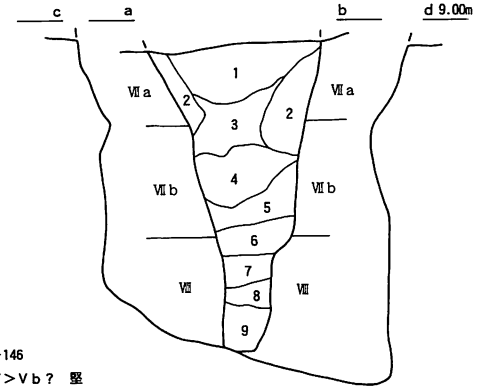




ＴＰ－145
1：Ⅴ＞Ⅴb　軟
2：Ⅴ＞Ⅶ　堅
3：Ⅶ＞Ⅴ　軟
4：Ⅴ主体　軟
5：Ⅶa＞Ⅶb　堅
6：Ⅶb主体　軟
7：Ⅷ主体　しょう
8：Ⅴ＞Ⅷ　軟
9：Ⅶb≫Ⅷ　しょう
10：Ⅴ主体　しょう
11：Ⅷ＞Ⅴ　しょう
12：Ⅴ≫Ⅷ　しょう

ＴＰ－146

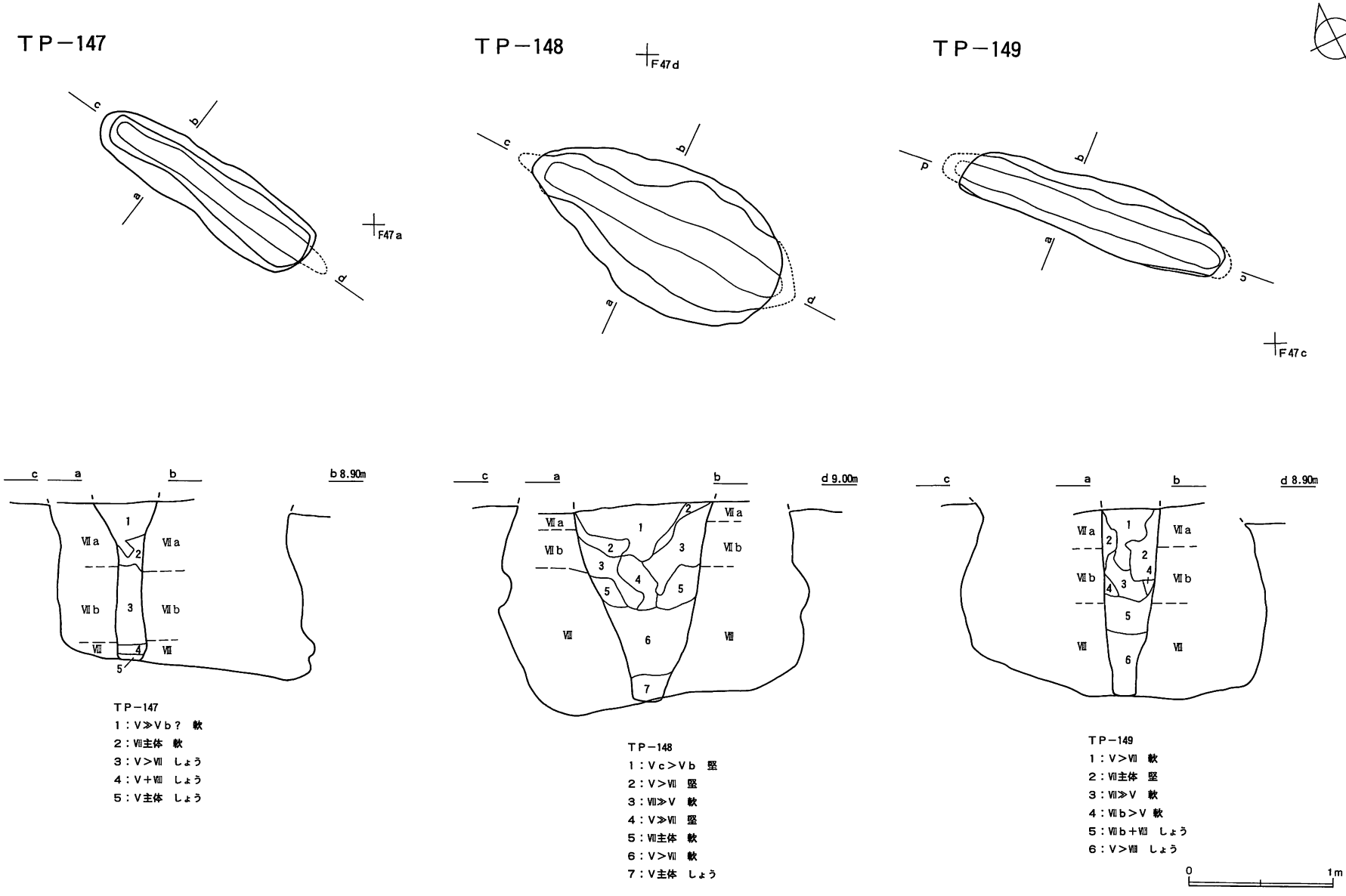




ＴＰ－146
1：Ⅴ＞Ⅴb？　堅
2：Ⅶa主体　堅
3：Ⅴ≫Ⅶ　軟
4：Ⅶ＞Ⅴ　軟
5：Ⅶ主体　軟
6：Ⅴ＋Ⅶ　軟
7：Ⅴ＞Ⅶ・Ⅷ　しょう
8：Ⅷ＞Ⅴ　しょう
9：Ⅴ主体　しょう

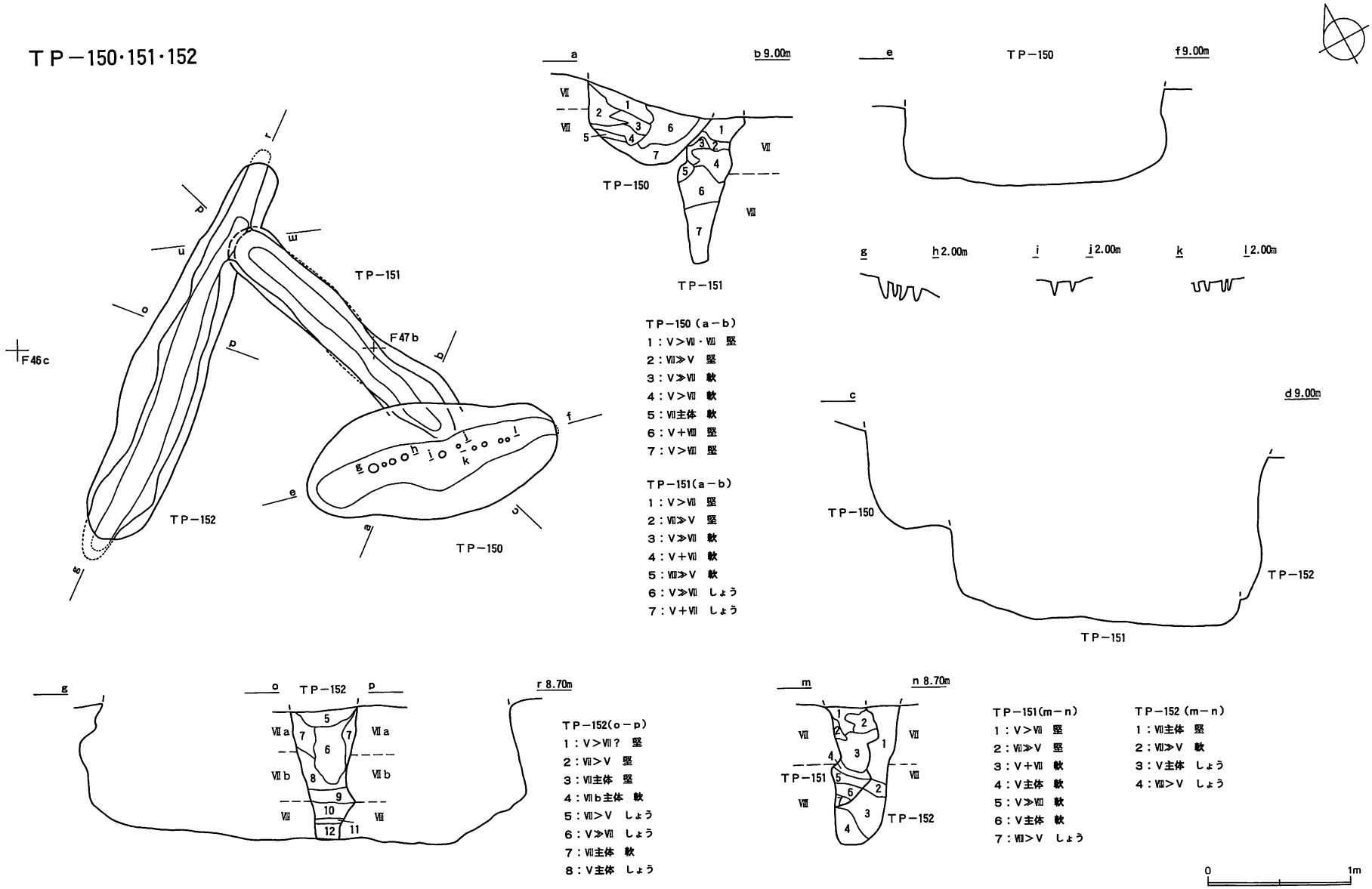
0　1m

図Ⅳ－２－55　ＴＰ－144～146



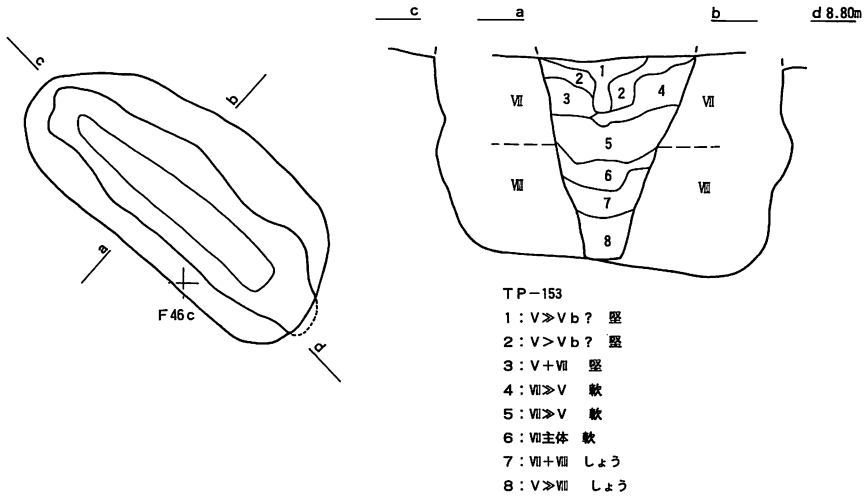
図Ⅳ－２－56　ＴＰ－147～149

ＴＰ－150･151･152



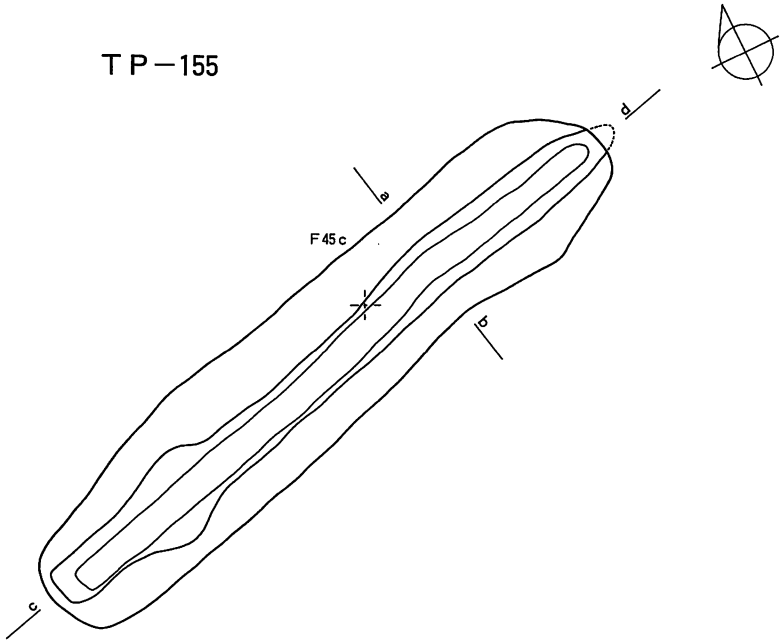
図Ⅳ－２－57　ＴＰ－150～152

TP－153

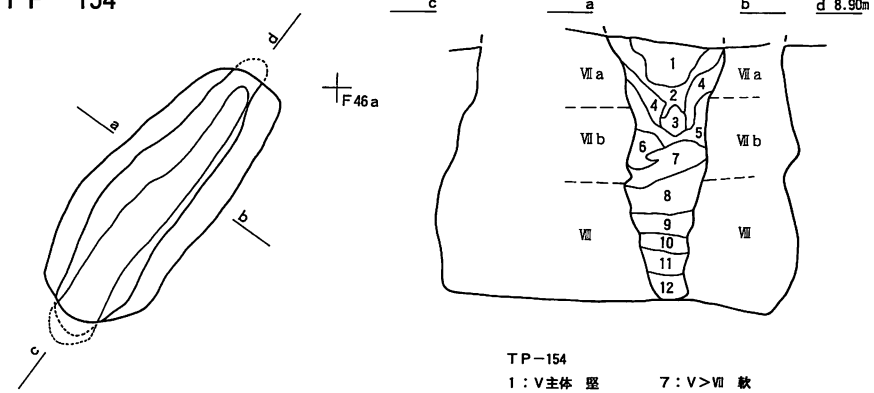


TP－153
1：V≫Vb？　堅
2：V＞Vb？　堅
3：V＋Ⅶ　堅
4：Ⅶ≫V　軟
5：Ⅶ≫V　軟
6：Ⅶ主体　軟
7：Ⅶ＋Ⅷ　しょう
8：V≫Ⅷ　しょう

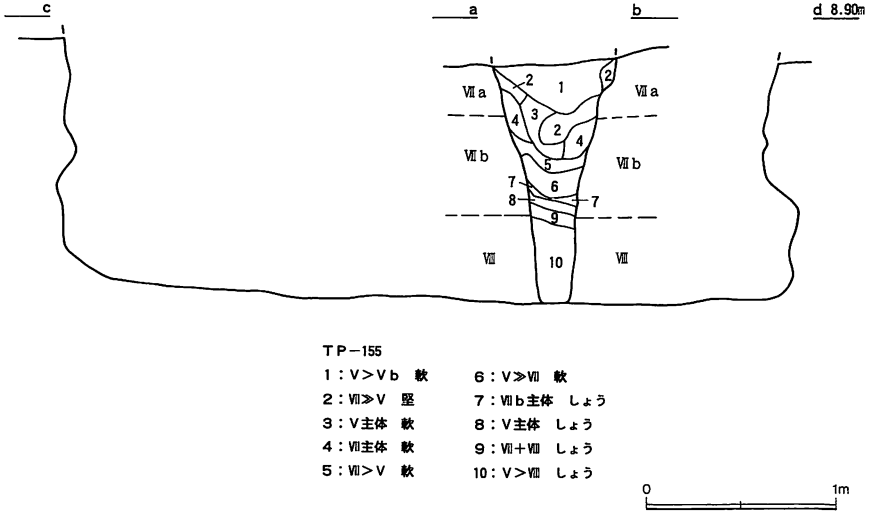
TP－155



TP－154



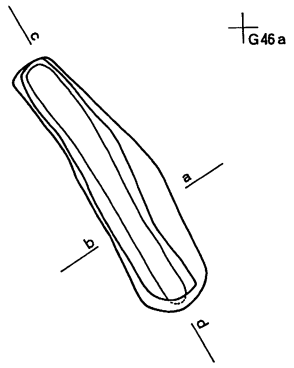
TP－154
1：V主体　堅
2：V≫Ⅶ　軟
3：V主体　軟
4：Ⅶ≫V　軟
5：Ⅶ主体　軟
6：Ⅶ＞V　軟
7：V＞Ⅶ　軟
8：Ⅶ主体　堅
9：V＞Ⅷ　しょう
10：Ⅶ≫V　軟
11：V＞Ⅶ
12：V＋Ⅷ　しょう

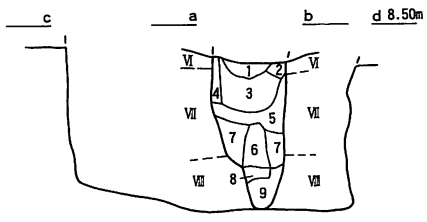


TP－155
1：V＞Vb　軟
2：Ⅶ≫V　堅
3：V主体　軟
4：Ⅶ主体　軟
5：Ⅶ＞V　軟
6：V≫Ⅶ　軟
7：Ⅶb主体　しょう
8：V主体　しょう
9：Ⅶ＋Ⅷ　しょう
10：V＞Ⅷ　しょう

図Ⅳ－２－58　ＴＰ－153～155

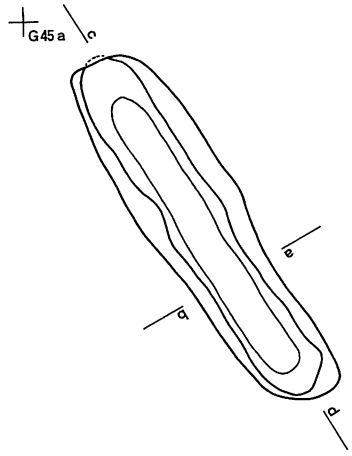
ＴＰ－156

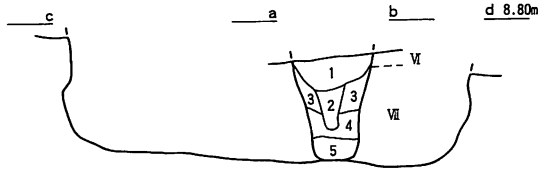




ＴＰ－156
1：Ⅴ＞Ⅶ　堅
2：Ⅴ主体　堅
3：Ⅴ≫Ⅶ　堅
4：Ⅶ＞Ⅴ　軟
5：Ⅴ≫Ⅶ　軟
6：Ⅴ主体　しょう
7：Ⅶ＋Ⅷ　軟
8：Ⅴ＋Ⅶ　しょう
9：Ⅴ＞Ⅷ　しょう

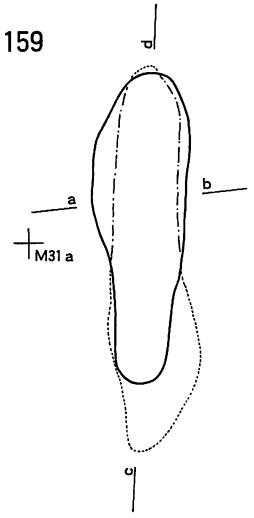
ＴＰ－157

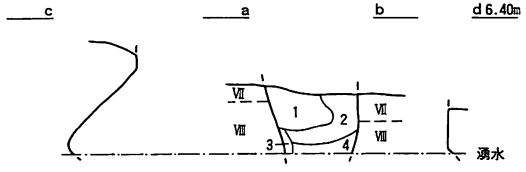




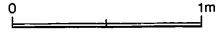
ＴＰ－157
1：Ⅴ＞Ⅶ？　軟
2：Ⅴ＋Ⅶ　しょう
3：Ⅶ≫Ⅴ　軟
4：Ⅶ主体　軟
5：Ⅴ主体　しょう

ＴＰ－159

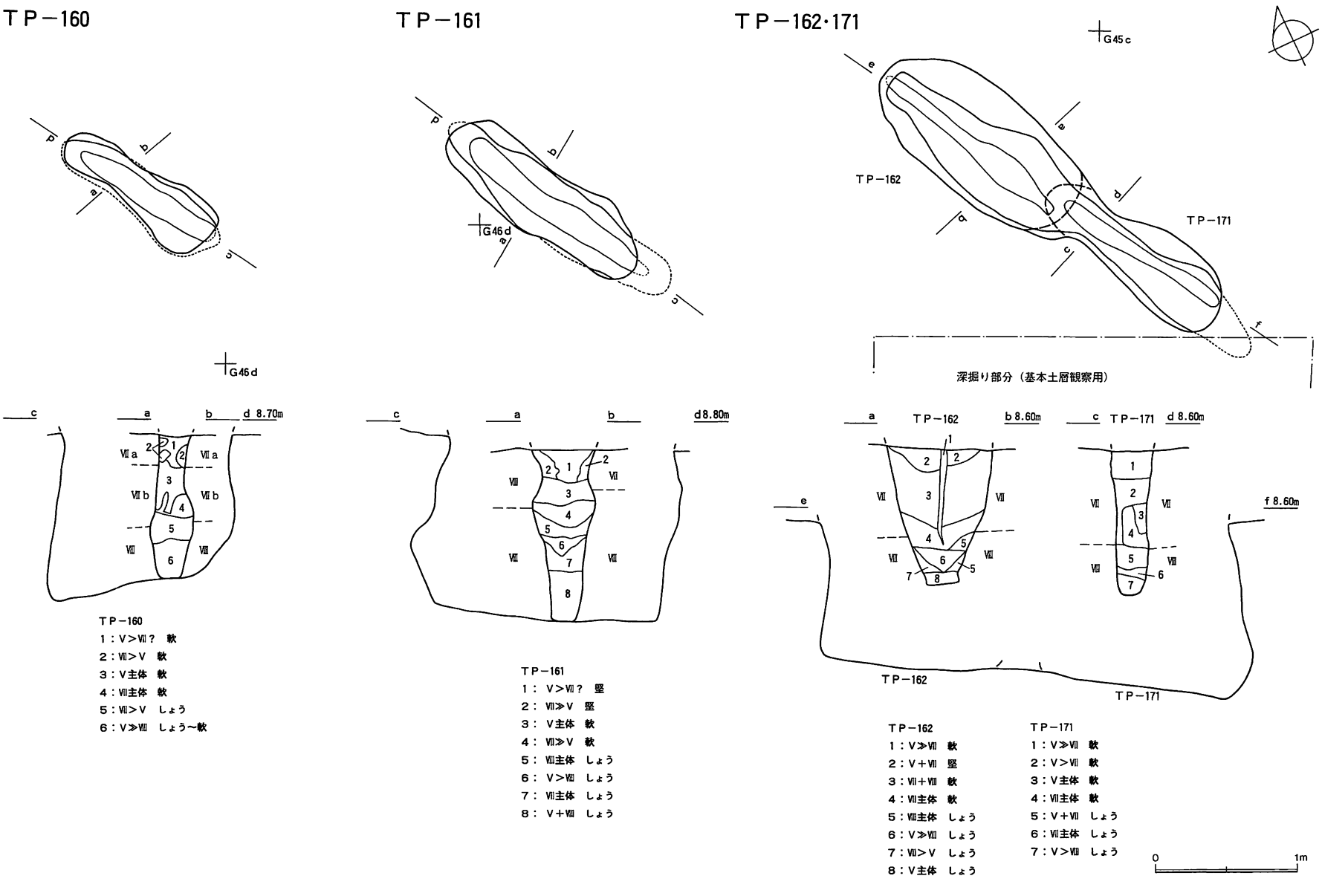




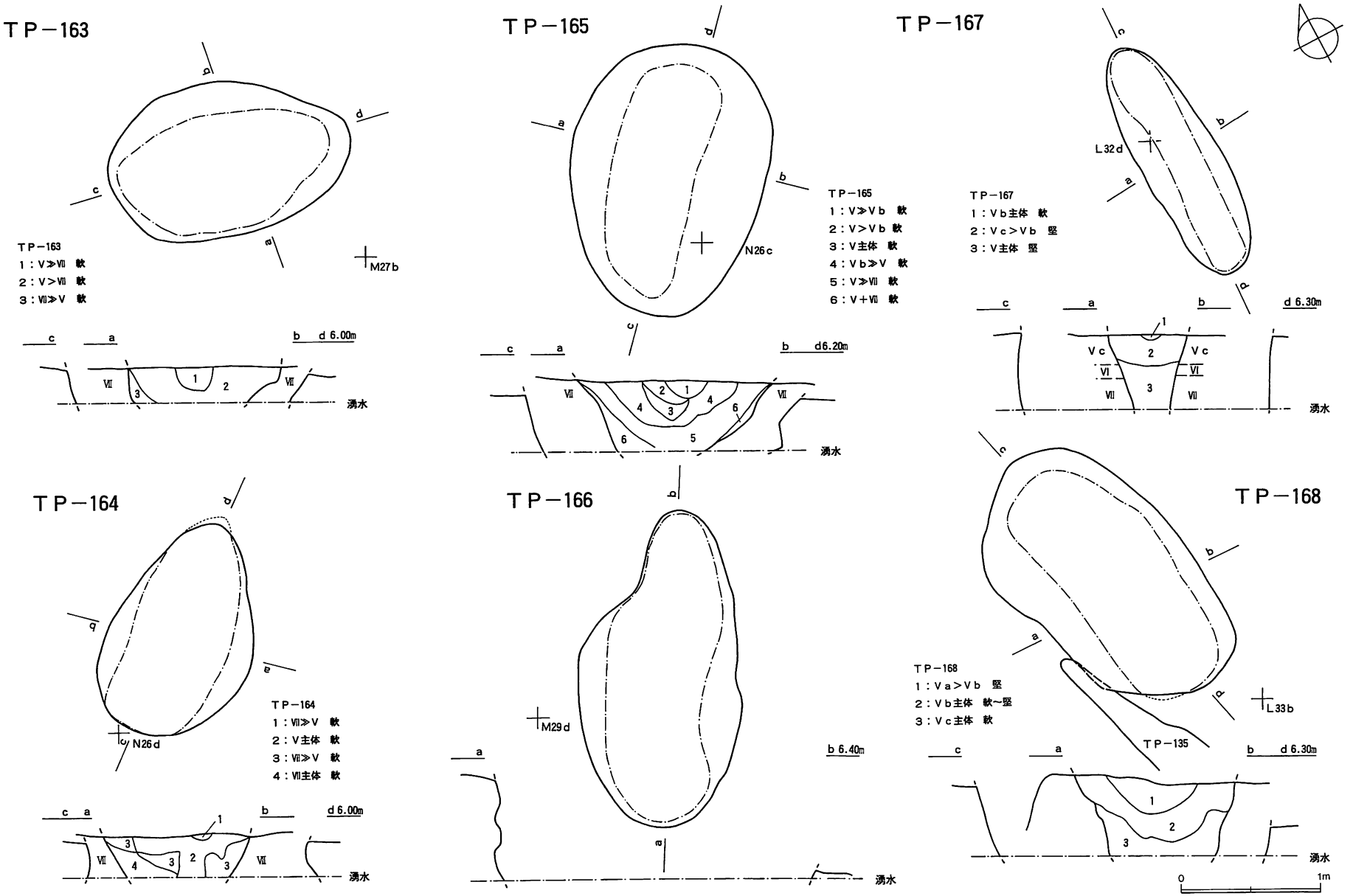
ＴＰ－159
1：Ⅴ＞Ⅶ　軟
2：Ⅶ主体　軟
3：Ⅷ主体　軟
4：Ⅶ・Ⅷ＞Ⅴ　軟



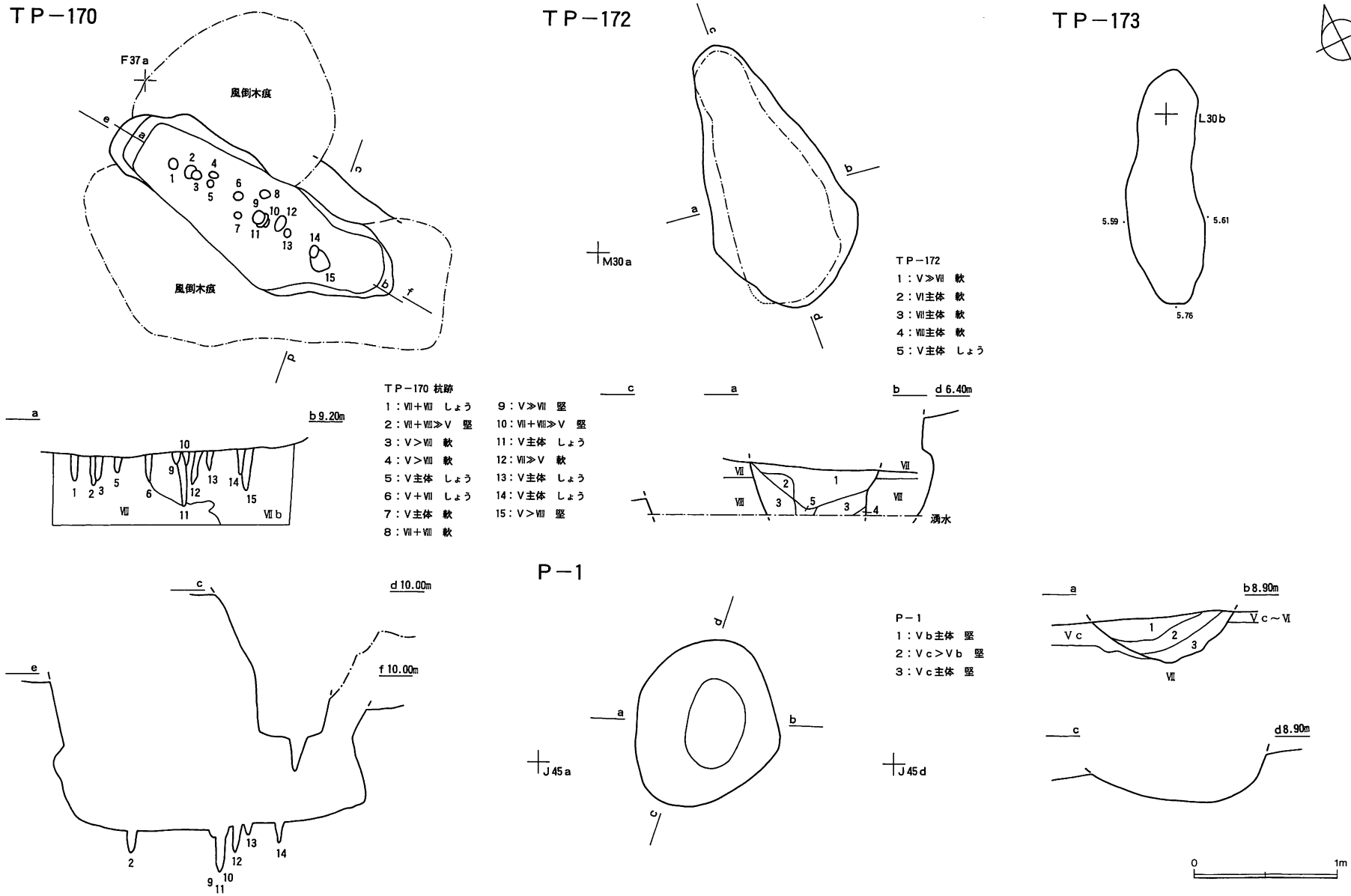
図Ⅳ－２－59　ＴＰ－156・157・159



図Ⅳ－２－60　ＴＰ－160～162・171



図Ⅳ－２－61　ＴＰ－163～168



図Ⅳ－２－62　ＴＰ－170・172・173、Ｐ－１

表Ⅳ－２－４　Ｔピット一覧　ＴＰ番号の( )付きは「湧水あり」 重複の→は「壊す」←は「壊される」( )付きは「断面非確認」を表す　分析は花粉分析、植物珪酸体分析の試料を採取したＴピット

図	図版	ＴＰ番号	調査区	検出層位	平面形態 確認面／底面	確認面規模(m) 長径	確認面規模(m) 短径	底面規模(m) 長径	底面規模(m) 短径	深さ(m)	長軸方向	杭跡	重複	底面長短比	分類	分析
Ⅳ-2-9	7-1・2	1	G46 b・c，H46 a・d	Ⅷ	楕円形／溝状	1.66	0.72	1.34	0.17	1.24	N-36° -E	0		7.9	B1	
〃	7-3・4	2	H45 d，H46 a・b	Ⅴc	長楕円形／溝状	2.18	0.84	1.99	0.19	1.50	N-40° -W	0		10.5	A2	
〃	7-5・6	3	H45 a・b	Ⅴc	楕円形／長楕円形	1.78	0.91	1.20	0.28	1.67	N-35° -W	0		4.3	B1	
Ⅳ-2-10	7-7・8	4	H44 c，H45 b	Ⅴc	楕円形／溝状	1.86	0.90	1.52	0.18	1.44	N-39° -W	0		8.4	B1	
〃	7-9,8-1	5	I45 a	Ⅴc	長楕円形／溝状	2.14	0.70	2.06	0.38	1.32	N-20° -E	0		5.4	B1	
〃	8-2・3	6	I44 d	Ⅴc	楕円形／溝状	1.86	1.04	1.54	0.30	1.55	N-19° -E	0		5.1	B1	
Ⅳ-2-11	8-4・5	7	I44 a・d	Ⅴc	長楕円形／溝状	1.76	0.60	1.47	0.19	1.24	N-19° -W	0		7.7	B1	
〃	8-6・7	8	I45 c，J45 d	Ⅴc	楕円形／溝状	1.45	0.66	1.44	0.18	1.32	N-37° -W	0		8.0	B1	
〃	8-8,9-1	9	G35 b，H35 a・b	Ⅶ	楕円形／不整楕円形	2.48	1.70	2.02	0.70	0.92	N-45° -W	6		2.9	C2	
Ⅳ-2-12	9-2	10	I44 c，I45 b	Ⅴb	溝状／溝状	1.97	0.68	1.56	0.16	1.20	N-12° -W	0		9.8	A2	
〃	9-3・4	11	I44 c，J44 d	Ⅴb	溝状／溝状	1.67	0.59	1.67	0.17	1.62	N-11° -W	0		9.8	A2	
〃	9-5・6	12	I44 b，J44 a	Ⅴc	楕円形／溝状	2.09	0.97	1.98	0.13	1.74	N-5° -W	0		15.2	A2	
Ⅳ-2-13	9-7・8	13	J44 a・b	Ⅴb	長楕円形／溝状	2.03	0.82	1.95	0.19	1.38	N-8° -W	0	→F12	10.3	A2	
〃	9-9,10-1	14	J44 c，J45 b，K44 d，K45 a	Ⅴc	溝状／溝状	(2.00)	0.60	(1.78)	0.22	1.08	N-24° -W	1		8.1	B2	
〃	10-2・3	15	K44 d，K45 a	Ⅴc	溝状／溝状	(2.80)	0.62	2.76	0.22	1.10	N-44° -W	0		12.5	A1-L	
Ⅳ-2-14	10-4・5	16	K44 a・b・c・d	Ⅴc	長楕円形／溝状	2.84	0.74	2.62	0.13	1.11	N-71° -W	0		20.2	A1-L	
〃		17	L44 a・d，L45 a	Ⅴc	溝状／溝状	3.40	0.34	3.15	0.16	0.59	N-88° -W	0		19.7	A1-L	
Ⅳ-2-15		18	I43 c，I44 b	Ⅴb	楕円形／溝状	1.43	0.65	1.33	0.16	1.08	N-8° -W	0		8.3	B1	
〃		19	I43 b，J43 a・d	Ⅴc	長楕円形／溝状	2.16	0.76	2.01	0.29	1.58	N-12° -E	0		6.9	B1	
〃		20	I43 b，J43 a	Ⅴc	楕円形／溝状	1.80	1.14	1.20	0.22	1.88	N-23° -E	0	(81)	5.5	B1	
Ⅳ-2-16		21	I42 c，J42 d	Ⅴc	楕円形／溝状	1.79	0.96	1.55	0.18	1.21	N-21° -E	0		8.6	B1	
〃		22	J43 a・b	Ⅴc	楕円形／溝状	1.28	0.69	1.05	0.16	1.14	N-21° -E	0		6.6	B1	
〃	10-6・7	23	J43 b，K43 a	Ⅴc	溝状／溝状	1.73	0.61	1.50	0.13	1.35	N-1° -E	0		11.5	A2	
Ⅳ-2-17	10-8・9	24	K43 b	Ⅴc	溝状／溝状	1.98	0.53	1.67	0.16	1.12	N-8° -E	0		10.4	A2	
〃	11-1・2	25	K42 c・d	Ⅴc	溝状／溝状	2.32	0.52	2.09	0.16	1.29	N-12° -W	0		13.1	A1	
〃		26	K42 b・c	Ⅴc	楕円形／溝状	2.04	0.77	1.73	0.10	1.26	N-33° -W	0		17.3	A2	
Ⅳ-2-18	11-3・4	27	L42 b・c，L43 b	Ⅵ	溝状／溝状	3.30	0.49	3.28	0.16	0.94	N-45° -W	0		20.5	A1-L	
〃	11-5・6	28	K42 a・d	Ⅴc	溝状／溝状	3.02	0.53	2.87	0.11	1.18	N-87° -W	0		26.1	A1-L	

図	図版	TP番号	調査区	検出層位	平面形態 確認面／底面	確認面規模(m) 長径	確認面規模(m) 短径	底面規模(m) 長径	底面規模(m) 短径	深さ(m)	長軸方向	杭跡	重複	底面長短比	分類	分析
Ⅳ-2-19	11-7・8	29	J42a	Ⅵ	溝状／溝状	1.16	0.41	1.05	0.14	0.95	N-55° -E	0		7.5	B1	
〃		30	I42a・b	Ⅵ	溝状／溝状	2.09	0.50	1.94	0.25	0.89	N-24° -E	0		7.8	B1	
〃	11-9, 12-1	31	I41c・d	Ⅵ	楕円形／溝状	2.26	1.16	1.98	0.23	1.44	N-10° -E	0		8.6	B1	
Ⅳ-2-20	12-2・3	32	J41a	Ⅵ	楕円形／溝状	1.46	0.87	1.02	0.19	1.64	N-3° -W	0		5.4	B1	
〃	12-4・5	33	J41b, K41a	Ⅴc	楕円形／溝状	1.68	0.79	1.48	0.23	1.31	N-26° -E	0		6.4	B1	
〃	12-6・7	34	J40b・c	Ⅴb	溝状／溝状	(3.13)	0.71	2.94	0.20	1.46	N-70° -W	0	(80)	14.7	A1-L	
Ⅳ-2-21	12-8・9	35	J40c, K40d, K41a	Ⅴb	楕円形／溝状	2.19	0.96	1.98	0.26	1.68	N-1° -W	0		7.6	B1	
〃		36	L41a・b・c・d	Ⅴb	長楕円形／溝状	2.26	0.68	1.84	0.22	1.36	N-3° -E	0		8.4	B1	
〃	13-1・2	37	K40c, L40a・d	Ⅴb	溝状／溝状	3.04	0.72	3.06	0.30	1.51	N-75° -W	0		10.2	A1-L	
Ⅳ-2-22		38	L40a・b・c・d	Ⅴb	溝状／溝状	3.46	0.74	3.21	0.28	1.05	N-60° -E	0		11.5	A1-L	
〃		39	L40b・c	Ⅴb	溝状／溝状	3.57	0.83	3.38	0.27	0.90	N-78° -W	3		12.5	A1-L・2	
Ⅳ-2-23		40	M39b・c・d	Ⅴc	溝状／溝状	3.15	0.71	3.11	0.27	1.18	N-70° -E	0		11.5	A1-L	
〃		41	K39c・d, K40a	Ⅴb	楕円形／溝状	1.78	0.64	1.69	0.14	1.53	N-48° -E	0		12.1	A2	
〃		42	K39c・d	Ⅴc	楕円形／溝状	1.43	0.64	0.96	0.19	1.24	N-24° -W	0		5.0	B1	
Ⅳ-2-24		43	J39b, K39a	Ⅴc	長楕円形／溝状	2.16	0.82	2.28	0.24	1.57	N-32° -W	0		9.5	A1	
〃		44	J38c, K38d	Ⅴb	楕円形／溝状	1.51	0.65	1.69	0.26	1.67	N-33° -W	0		6.5	B1	
〃		45	J39b	Ⅴc	楕円形／溝状	1.83	0.69	1.63	0.13	1.40	N-36° -W	0		12.5	A2	
Ⅳ-2-25		46	I39b・c	Ⅴc	溝状／溝状	2.64	0.58	2.96	0.24	1.44	N-45° -W	0		12.3	A1-L	
〃	13-3・4	47	I39a・d	Ⅴc	溝状／溝状	2.86	0.65	2.68	0.28	1.39	N-49° -W	0		9.6	A1-L	
Ⅳ-2-26	13-5・6	48	H39c, I39d	Ⅵ	長楕円形／溝状	2.03	0.85	1.77	0.20	1.41	N-38° -W	0		8.9	B1	
〃		49	H38c	Ⅴc	楕円形／溝状	1.74	0.90	1.38	0.24	1.50	N-49° -W	0		5.8	B1	
〃	13-7・8	50	I38c, I39b	Ⅴc	楕円形／溝状	1.61	0.70	1.46	0.26	1.54	N-61° -W	0		5.6	B1	
Ⅳ-2-27		51	J38c・d, J39a・b	Ⅴc	楕円形／溝状	2.16	0.94	2.13	0.32	1.50	N-8° -E	2		6.7	B2	
〃		52	K38a・b	Ⅴc	楕円形／溝状	2.01	0.96	1.81	0.25	1.50	N-5° -W	0		7.3	B1	
〃		53	K38b, L38a	Ⅴc	楕円形／溝状	1.46	0.77	1.25	0.19	1.44	N-15° -W	0		6.6	B1	
Ⅳ-2-28	13-9, 14-1	54	K38b, L38a	Ⅴc	楕円形／溝状	1.98	0.92	1.75	0.16	1.70	N-14° -E	0		10.9	A2	
〃		55	L37d, L38a	Ⅴc	長楕円形／溝状	(1.44)	0.57	(1.55)	0.13	1.07	N-11° -W	0		11.9	A2	
Ⅳ-2-29	14-2・3	56	L38d, K38d	Ⅴb	溝状／溝状	4.00	0.79	4.07	0.36	1.33	N-49° -E	0	←78	11.3	A1-L	
Ⅳ-2-28	14-4・5	57	L38c, M38d	Ⅴb	溝状／溝状	2.41	(0.63)	2.12	0.21	1.24	N-10° -E	0	→F14	10.1	A1	

図	図版	TP番号	調査区	検出層位	平面形態 確認面／底面	確認面規模(m) 長径	確認面規模(m) 短径	底面規模(m) 長径	底面規模(m) 短径	深さ(m)	長軸方向	杭跡	重複	底面長短比	分類	分析
Ⅳ-2-29	14-6･7	58	M38 a・b	Ⅴc	長楕円形／溝状	2.74	0.72	2.58	0.19	0.87	N-3° -W	0		13.6	A1-L	
Ⅳ-2-30	14-8･9	59	L37 b・c	Ⅵ	長楕円形／溝状	1.62	0.48	1.50	0.17	1.41	N-48° -W	0		8.8	B1	
〃		60	M36 d, M37 a	Ⅴc	長楕円形／溝状	3.24	1.16	3.31	0.31	1.04	N-85° -W	0		10.7	A1-L	
〃		61	M36 b・c・d	Ⅶa	溝状／溝状	3.30	0.47	3.27	0.16	1.00	N-83° -W	0		20.4	A1-L	
Ⅳ-2-31	15-1･2	62	M36 a・d	Ⅴc	楕円形／溝状	2.19	0.90	1.78	0.12	1.28	N-22° -W	0		14.8	A2	
〃	15-3･4	63	L36 b・c	Ⅴc	楕円形／溝状	1.58	0.76	1.61	0.23	1.33	N-4° -W	0		7.0	B1	
〃		64	L36 c, L37 b	Ⅴc	楕円形／溝状	1.28	0.67	1.13	0.17	1.33	N-4° -E	0		6.6	B1	
Ⅳ-2-32		65	L36 c・d, L37 a・b	Ⅴc	楕円形／溝状	1.67	0.73	1.16	0.17	1.44	N-2° -W	0	→67	6.8	B1	
〃	15-5･6	66	L36 c・d	Ⅴc	楕円形／溝状	1.94	0.76	1.24	0.24	1.51	N-25° -E	0	→67	5.2	B1	
〃	15-7･8	67	L36 a・b・c・d, L37 a	Ⅴc	溝状／溝状	(3.66)	0.78	3.58	0.18	1.20	N-78° -W	0	←65・66	19.9	A1-L	
〃		68	K36 b・c	Ⅴc	楕円形／溝状	2.03	0.72	1.88	0.21	1.46	N-20° -W	0		9.0	A2	
Ⅳ-2-33		69	K37 b・c	Ⅴc	楕円形／溝状	1.80	0.72	1.82	0.18	1.76	N-14° -E	0		10.1	A2	
〃	15-9, 16-1	70	J37 b・c	Ⅴc	楕円形／溝状	1.64	0.80	1.38	0.27	1.58	N-23° -W	0		5.1	B1	
〃		71	L35 a	Ⅴa	楕円形／溝状	1.60	0.80	1.16	0.27	1.48	N-26° -E	0		4.3	B1	
Ⅳ-2-34	16-2･3	72	L35 c	Ⅴa	楕円形／溝状	1.85	0.98	1.84	0.26	1.67	N-1° -E	0		7.1	B1	
〃	口絵4-3	73	E40 b・c	Ⅶ	長楕円形／溝状	(2.93)	1.02	(2.73)	0.25	1.69	N-35° -W	0		10.9	A1-L	
〃	〃	74	E39 c, E40 b, F39 d, F40 a	Ⅶ	長楕円形／溝状	3.01	0.96	2.45	0.14	1.54	N-12° -E	0		17.5	A1-L	
Ⅳ-2-35	16-4･5	75	F34 c, F35 b, G34 d, G35 a	Ⅴ下	溝状／溝状	3.09	0.70	2.92	0.30	1.16	N-33° -W	0		9.7	A1-L	○
〃	16-6･7	76	J39 c, J40 b, K39 d, K40 a	Ⅴc	楕円形／溝状	1.85	0.89	1.37	0.17	1.27	N-43° -E	0		8.1	B1	○
〃		77	H37 a	Ⅶ	溝状／溝状	(1.36)	0.38	(1.09)	0.19	0.71	N-36° -W	0		−	−	
Ⅳ-2-29	16-8･9	78	L38 d, K38 d	Ⅴb	楕円形／溝状	1.53	(0.74)	1.29	0.16	1.26	N-13° -W	0	→56	8.1	B1	
Ⅳ-2-36		79	M39 d, M40 a	Ⅴc	楕円形／溝状	2.17	0.80	1.77	0.28	1.31	N-30° -W	0		6.3	B1	
Ⅳ-2-20		80	J40 b	Ⅴb	長楕円形／溝状	1.55	0.57	1.45	0.22	1.38	N-13° -W	0	(34)	6.5	B1	
Ⅳ-2-15		81	I44 b, J43 a	Ⅴc	楕円形／長楕円形	−	−	(0.52)	(0.30)	1.12	N-54° -E	0	(20)	1.7	B1	
Ⅳ-2-36	17-1･2	82	L36 d	Ⅴb	−／−	(0.75)	(0.98)	−	−	1.24	N-37° -W	1		−	−	
〃		83	M37 a・b	Ⅶb	溝状／溝状	1.99	0.41	2.12	0.13	0.83	N-29° -W	0		16.3	A1	
Ⅳ-2-37		84	M37 b, N37 a	Ⅶb	溝状／溝状	3.09	0.47	3.06	0.15	0.73	N-5° -W	0		20.4	A1-L	
〃	17-3･4	85	H42 c	Ⅶa	−／溝状	(0.78)	0.47	(0.79)	0.11	0.99	N-31° -E	0		−	−	
〃		86	H44 d, H45 a	Ⅶa	−／−	(0.67)	1.01	(0.23)	0.16	1.45	N-1° -W	−		−	−	

図	図版	TP番号	調査区	検出層位	平面形態 確認面／底面	確認面規模(m) 長径	確認面規模(m) 短径	底面規模(m) 長径	底面規模(m) 短径	深さ(m)	長軸方向	杭跡	重複	底面長短比	分類	分析
Ⅳ-2-38		87	H45c，H46b，I45d，I46a	Vc	楕円形／溝状	(2.29)	1.12	2.24	0.42	1.58	N-7°-W	0	→88	5.3	B1	
〃	17-5・6	88	H45c，H46b	Vc	溝状／溝状	(3.03)	0.73	(3.29)	0.34	1.19	N-83°-W	0	←87・89	9.7	A1-L	
〃	17-5・7	89	H45b・c，I45d	Vc	楕円形／溝状	1.58	0.86	1.39	0.23	1.40	N-10°-W	0	→88	6.0	B1	
Ⅳ-2-39		90	H44c，I44d	Vc	楕円形／溝状	1.40	0.70	1.34	0.15	1.33	N-2°-W	0		8.9	B1	
〃	17-8・9	91	I44d	Vc	楕円形／溝状	1.28	0.66	0.90	0.14	1.40	N-12°-W	0		6.4	B1	○
〃		92	I38d，I39a	Ⅵ	楕円形／長楕円形	1.53	0.89	1.30	0.40	1.40	N-24°-W	0		3.3	C1	
Ⅳ-2-40		93	K40c，K41b，L40d，L41a	Vb	楕円形／溝状	(1.70)	0.97	1.53	0.20	1.40	N-13°-W	0		7.7	B1	
〃		94	L34c，L35b	Va	－／－	(0.71)	(0.91)	(0.53)	(0.21)	1.53	N-26°-E	－		－	－	
〃		95	G46a・b	Ⅶ	長楕円形／溝状	1.75	0.75	1.65	0.17	1.25	N-27°-W	0		9.7	A2	
Ⅳ-2-41		96	N36a・d	Ⅶ	長楕円形／溝状	1.70	0.53	1.61	0.25	0.70	N-3°-W	0		6.4	B1	
〃	18-1・2	97	L38a	Vc	楕円形／溝状	1.62	0.78	1.52	0.15	1.30	N-14°-E	0		10.1	A2	
〃		98	J37d，I37c	Vc	長楕円形／溝状	1.76	0.66	1.76	0.14	1.04	N-24°-W	0		12.6	A2	
Ⅳ-2-42	18-3・4	99	J37c，K37d	Vc	楕円形／不整楕円形	1.73	1.30	1.00	0.33	2.20	N-18°-W	2		3.0	C2	
〃	18-5・6	100	I34c，J34d	Vc	楕円形／隅丸方形	2.53	1.53	2.22	0.64	1.34	N-2°-W	2		3.5	C2	○
Ⅳ-2-43		(101)	L32b・c，M32a・b	Ⅶ	長楕円形／－	1.86	0.66	－	－	(0.38)	N-6°-E	－		－	－	
〃	18-7・8	(102)	L32b，M32a	Ⅶ	溝状／－	2.51	0.50	－	－	(0.36)	N-24°-E	－		－	－	
〃	18-9，19-1	(103)	M32a・b・c・d	Ⅶ	楕円形／－	1.16	0.50	－	－	(0.64)	N-5°-E	－		－	－	
〃	19-2・3	(104)	L32b・c	Ⅶ	溝状／－	1.46	0.40	－	－	(0.18)	N-7°-W	－		－	－	
〃		(105)	L31c，M31d	Ⅶ	長楕円形／－	2.10	0.70	－	－	(0.52)	N-36°-E	－		－	－	
Ⅳ-2-44		(106)	L31b・c	Ⅶ	溝状／－	2.74	0.62	－	－	(0.28)	N-69°-W	－		－	－	
〃		(107)	L31a・d，M31b	Ⅶ	楕円形／－	1.52	0.78	－	－	(0.62)	N-11°-E	－		－	－	
〃	19-4・5	108	M30b，N29d，N30a	Ⅶ	溝状／溝状	3.42	0.54	3.78	0.19	1.40	N-79°-W	0	←113	19.9	A1-L	
Ⅳ-2-45		109	N30a，N30b	Ⅶ	楕円形／溝状	2.20	1.05	1.75	0.23	1.20	N-11°-E	0		7.6	B1	
〃		110	N30b，O30a	Ⅶ	長楕円形／溝状	1.86	0.54	1.35	0.19	1.10	N-17°-E	0		7.1	B1	
〃	19-6・7	111	O31a	Ⅷ	楕円形／溝状	1.93	0.92	1.73	0.24	1.15	N-4°-E	0		7.2	B1	
Ⅳ-2-46		(112)	M30a	Ⅶ	楕円形／－	1.50	0.96	－	－	(0.96)	N-11°-E	－		－	－	
Ⅳ-2-44	19-8・9	113	M29c，N29d	Ⅶ	長楕円形／溝状	1.75	0.55	1.37	0.25	1.54	N-1°-E	0	→108	5.5	B1	
Ⅳ-2-47	20-1・2	114	M29a・b・c	Ⅶ	楕円形／不整楕円形	2.28	1.44	1.56	0.75	1.09	N-32°-E	4		2.1	C2	○
〃		(115)	M28c，M29b	Ⅶ	長楕円形／－	3.00	1.30	－	－	(1.26)	N-66°-W	－		－	A1-L	

図	図版	TP番号	調査区	検出層位	平面形態 確認面／底面	確認面規模(m) 長径	確認面規模(m) 短径	底面規模(m) 長径	底面規模(m) 短径	深さ(m)	長軸方向	杭跡	重複	底面長短比	分類	分析
Ⅳ-2-47		(116)	M28 b	Ⅶ	楕円形／－	1.50	0.80	－	－	(0.95)	N-3° -W	－		－	－	
Ⅳ-2-46		(117)	M28 a	Ⅶ	楕円形／－	1.30	0.63	－	－	(0.42)	N-12° -E	－		－	－	
〃		118	P26 a・d	Ⅴa	－	－	－	－	－	(0.83)	－	－		－	－	
〃		(119)	L28 b, M28 a	Ⅶ	長楕円形／－	1.60	0.48	－	－	(0.17)	N-8° -E	－		－	－	
〃		(120)	L27 c, M27 d	Ⅶ	長楕円形／－	1.80	0.65	－	－	(0.24)	N-13° -W	－		－	－	
〃	20-3・4	(121)	M27 c・d	Ⅶ	楕円形／－	1.86	0.75	－	－	(0.54)	N-5° -W	－		－	－	
Ⅳ-2-48		(122)	M27 a・b・c・d	Ⅶ	長楕円形／－	1.97	0.73	－	－	(0.65)	N-12° -W	－		－	－	
〃		(123)	M27 b・c	Ⅶ	楕円形／－	1.38	0.64	－	－	(0.50)	N-76° -E	－		－	－	
〃		(124)	M27 a	Ⅶ	長楕円形／－	1.49	0.43	－	－	(0.24)	N-0° -W	－		－	－	
〃	20-5・6	(125)	M26 c, M27 b	Ⅶ	長楕円形／－	1.58	0.45	－	－	(0.43)	N-2° -W	－		－	－	
〃		(126)	M26 a	Ⅶ	楕円形／－	1.18	0.54	－	－	(0.43)	N-10° -W	－		－	－	
〃	20-7	(127)	M26 b, N26 a	Ⅶ	長楕円形／－	2.20	0.65	－	－	(0.50)	N-16° -W	－		－	－	
Ⅳ-2-49	20-8・9	128	N25 c, O25 d	Ⅶa	溝状／溝状	2.84	0.55	3.10	0.32	0.92	N-6° -E	0		9.7	A1-L	
〃		129	O25 c, O26 a・b	Ⅶ	溝状／溝状	3.10	0.81	3.31	0.36	0.89	N-88° -E	0		9.2	A1-L	
〃	21-1・2	130	O26 b, P26 a	Ⅶ	溝状／溝状	1.81	0.51	1.70	0.31	1.00	N-7° -W	0		5.5	B1	
Ⅳ-2-50	21-3・4	131	O26 c, P26 d	Ⅶa	楕円形／長楕円形	1.81	0.84	1.70	0.56	0.71	N-17° -E	3		3.0	C2	
〃	21-5・6	132	O26 c, O27 b, P26 d, P27 a	Ⅶa	溝状／溝状	2.13	0.60	1.90	0.18	1.04	N-4° -W	0		10.6	A2	
〃		133	O27 a・b	Ⅶ	長楕円形／溝状	1.82	0.55	1.57	0.19	1.05	N-22° -W	0		8.3	B1	
Ⅳ-2-51	21-7・8	134	N27 c・d, N28 a・b	Ⅶ	楕円形／楕円形	(1.76)	1.68	(0.96)	0.64	1.27	N-68° -W	－	→169	1.5	C	
〃	21-9	(135)	L32 c・d, L33 b	Ⅶ	溝状／－	2.47	0.49	－	－	(0.28)	N-28° -W	－	(168)	－	－	
〃	22-1	136	L33 c, M33 d	Ⅴa	－	(0.92)	(0.36)	(0.98)	(0.28)	(1.34)	N-37° -E	－	→137	－	－	
〃	22-2	137	M33 d	Ⅴa	－	－	－	－	－	(0.98)	－	－	←136	－	－	
Ⅳ-2-52	22-3・4	138	N33 a	Ⅵ	長楕円形／溝状	1.80	0.61	1.54	0.20	1.09	N-1° -W	2		7.7	B2	
〃	22-5・6	139	N32 b	Ⅶ	長楕円形／溝状	1.46	0.61	1.33	0.26	0.92	N-20° -E	0		5.1	B1	
〃	22-7・8	140	E47 b・c, F47 d	Ⅶ	楕円形／溝状	1.92	0.80	1.82	0.25	0.93	N-56° -W	0		7.3	B1	
Ⅳ-2-53	22-9, 23-1	141	E46 c・d, E47 a・b	Ⅶ	楕円形／溝状	2.78	1.17	2.18	0.38	1.32	N-51° -W	0	←158	5.7	B1	
〃	23-2・3	142	D46 c, D47 b	Ⅵ	溝状／溝状	1.30	0.46	1.24	0.20	1.07	N-30° -W	0		6.2	B1	
〃	23-4・5	143	D46 b・c, E46 a・b	Ⅵ	長楕円形／溝状	3.21	0.92	3.21	0.32	1.54	N-49° -W	0		10.0	A1-L	
Ⅳ-2-54	23-6・7	144	D45 c・d, D46 a・b	Ⅶ	楕円形／溝状	1.72	0.68	0.76	0.15	1.39	N-32° -W	0		5.1	B1	

図	図版	TP番号	調査区	検出層位	平面形態 確認面／底面	確認面規模(m) 長径	確認面規模(m) 短径	底面規模(m) 長径	底面規模(m) 短径	深さ(m)	長軸方向	杭跡	重複	底面長短比	分類	分析
Ⅳ-2-54	23-8・9	145	E46a・b	Ⅶa	楕円形／長楕円形	1.98	1.21	1.16	0.34	1.60	N-11° -W	1		3.4	C2	
〃	24-1・2	146	E46a・b・c・d	Ⅶa	楕円形／溝状	1.76	0.93	1.12	0.19	1.84	N-49° -W	0		5.9	B1	
Ⅳ-2-55	24-3・4	147	E46c，F46d	Ⅶa	溝状／溝状	1.72	0.50	1.79	0.24	1.22	N-29° -W	0		7.5	B1	
〃	24-5・6	148	F47a・d	Ⅶa	楕円形／溝状	1.89	1.01	1.84	0.26	1.47	N-37° -W	0		7.1	B1	
〃	24-7・8	149	F47a	Ⅶa	溝状／溝状	1.92	0.48	1.96	0.16	1.38	N-43° -W	0		12.3	A2	
Ⅳ-2-56	24-9，25-1	150	F46c，F47b	Ⅶ	長楕円形／長楕円形	1.79	0.86	1.73	0.39	0.68	N-101° -E	10	→151	4.4	C2	
〃	25-2	151	F46c・d，F47a・b	Ⅶ	溝状／溝状	(2.06)	(0.45)	1.84	0.19	1.39	N-20° -W	0	←150、→152	9.7	A2	
〃		152	F46c・d	Ⅶa	溝状／溝状	2.87	0.62	3.06	0.26	1.02	N-51° -E	0	←151	11.8	A1-L	
Ⅳ-2-57	25-3・4	153	F46a・b・c・d	Ⅶ	長楕円形／溝状	1.84	0.86	1.33	0.22	1.16	N-24° -W	0		6.0	B1	
〃		154	E45c，F45d	Ⅶa	長楕円形／溝状	1.60	0.70	1.68	0.27	1.43	N-62° -E	0		6.2	B1	
〃		155	F45a・b・c・d	Ⅶa	溝状／溝状	3.76	0.82	3.53	0.22	1.40	N-76° -E	0		16.0	A1-L	
Ⅳ-2-58		156	G45d	Ⅵ	溝状／溝状	1.54	0.46	1.48	0.19	0.88	N-6° -W	0		7.8	B1	
〃		157	G45a	Ⅵ	溝状／溝状	2.14	0.57	1.70	0.18	0.70	N-6° -W	0		9.4	A2	
Ⅳ-2-53	22-9，23-1	158	E47a・b	Ⅶ	楕円形／楕円形	－	－	(0.62)	(0.27)	1.16	N-33° -E	0	→141	2.3	B1	
Ⅳ-2-58	25-5・6	(159)	L31b，M31a	Ⅶ	長楕円形／－	1.64	0.50	－	－	(0.52)	N-30° -E	－		－	－	
Ⅳ-2-59	25-7・8	160	F46b	Ⅶa	長楕円形／溝状	1.21	0.44	1.12	0.20	1.20	N-37° -W	0		6.0	B1	
〃	26-1・2	161	F46b・c，G46d	Ⅶ	長楕円形／溝状	1.61	0.57	1.58	0.24	1.32	N-64° -E	0		6.6	B1	
〃		162	G45b	Ⅶ	楕円形／溝状	(1.63)	0.80	1.52	0.22	0.97	N-26° -W	0	(171)	6.9	B1	
Ⅳ-2-60		(163)	M26d	Ⅶ	楕円形／－	1.76	1.12	－	－	(0.26)	N-105° -E	－		－	－	
〃		(164)	M26b・c，N26d	Ⅶ	楕円形／－	1.60	1.04	－	－	(0.32)	N-50° -E	－		－	－	
〃	26-3・4	(165)	N26a・b．c・d	Ⅶ	楕円形／－	1.96	1.40	－	－	(0.50)	N-38° -E	－		－	－	
〃		(166)	L29c，M29d	Ⅶ	楕円形／－	2.29	1.18	－	－	(0.72)	N-29° -E	－		－	－	
〃	26-5	(167)	K32b・c，L32a・d	Ⅴc	長楕円形／－	1.79	0.59	－	－	(0.54)	N-1° -W	－		－	－	
〃	26-6	(168)	L32d	Ⅶ	楕円形／－	2.12	1.32	－	－	(0.58)	N-15° -W	－	(135)	－	－	
Ⅳ-2-51	21-8	169	N27c・d，N28a・b	Ⅶ	長楕円形／溝状	3.60	1.08	4.01	0.40	1.50	N-112° -E	－	←134	10.0	A1-L	
Ⅳ-2-61	26-7・8	170	F36d，F37a	Ⅶ	不整楕円形／不整楕円形	(2.26)	(1.02)	1.94	0.76	1.04	N-36° -W	15		2.6	C2	
Ⅳ-2-59		171	G45b・c	Ⅶ	楕円形／溝状	(1.48)	0.52	1.30	0.16	1.03	N-27° -W	0	(162)	8.1	B1	
Ⅳ-2-61		(172)	L30b，M30a	Ⅶ	楕円形／－	1.94	1.04	－	－	(0.65)	N-6° -E	－		－	－	
〃		(173)	L29c・d，L30a・b	Ⅶ	長楕円形／－	1.64	0.58	－	－	－	N-28° -E	－		－	－	

Ｔピット出土の遺物

概　要

39基のＴピットから108点の遺物が出土した。ＴＰ－77の風倒攪乱から出土したものを除き、すべて覆土からの出土である。Ⅴ層下位からⅥ層にかけて、縄文時代早期後半の遺物包含層があり、Ｔピットはこの層を掘り抜いて構築されている。遺物はこの際に掘り上げられたものが、覆土に流れ込んだものである。

土　器

18基のＴピットの覆土から67点の土器が出土している。47点がＩ群ｂ－１類であり、東釧路Ⅱ式に相当するものである。Ｉ群ｂ－３類は１点、Ｉ群ｂ－４類は18点、Ⅲ群ａ類は１点出土した。

１～８・10・11・13はＩ群ｂ－１類、９はＩ群ｂ－４類、12はⅢ群ａ類、14はＩ群ｂ－３類である。

１はＴＰ－15から出土した。器厚５㎜で、器面に条の幅２～３㎜のＬＲ羽状縄文が浅く施されている。内面は横になで調整されている。胎土は緻密で、黒色鉱物・黄褐色火山灰を含む。焼成は良好で、堅く焼き締まる。２はＴＰ－21から出土した。器厚５～６㎜で口縁がわずかに外反する。口唇・内面と口縁の幅14～15㎜の部分は横になで調整されている。器面には条の幅２～３㎜の整ったＬＲ縄文が浅く施されている。胎土は緻密で微量の黒色鉱物を含む。焼成はよく、堅く焼き締まる。３はＴＰ－34から出土した。器面にはＬＲとＲＬの原体による縄文が施されている。縄を転がす方向を変え、斜行縄文を組み合わせることによって羽状縄文風な構成になっている。器厚は５～10㎜である。なで調整された内面には成形の際の凹凸や指頭痕がある。胎土は緻密で、黒色鉱物・砂・黄白色火山灰を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。４はＴＰ－42から出土した。底面は欠落しており、底部は無文で「く」の字状に張り出す。胎土に黒色鉱物・黄褐色火山灰・細礫を含む。５はＴＰ－42から出土した。器面には条の幅２㎜のＬＲ縄文が施される。内面は横になで調整されている。胎土に白色火山灰・細礫を含む。器壁６～７㎜を計る。６・７はＴＰ－54から出土した。６は器面に直前段反撚ＬＬの縄文が施されている。条の幅は３㎜である。内面は横になで調整されており、成形の際の凹凸や指頭痕が残る。胎土に砂・細礫を含む。器壁６～７㎜を計る。この個体はＴＰ－55からも出土している。７ａ～７ｃは同一個体である。器厚３～６㎜と薄手で、口縁が内傾気味である。口唇断面は丸みを帯びる。器面には横走気味のＬＲ縄文が施されている。条の幅は２㎜である。底部は上底で直線的に立ち上がる。横になで調整された内面には、成形の際の凹凸や指頭痕が残る。胎土には白色火山灰・砂・細礫を含む。８はＴＰ－55から出土した。６と同一個体である。９はＴＰ－69から出土した。器面にＲＬの自縄自巻の原体による羽状縄文が施されている。条の幅は１㎜以下である。内面は丁寧な横なでにより調整されている。胎土に黒色鉱物・石英・砂を含む。器壁６～７㎜を計る。10・11はＴＰ－80から出土した。10は器面に条の幅２㎜のＬＲ縄文が方向を変えて施文されている。横になで調整された内面には指頭痕が残る。胎土に黄白色火山灰・砂・細礫を含む。器壁６～９㎜を計る。11ａ・ｂは同一個体である。口唇断面は丸みを帯びる。器面には条の幅３～４㎜のＬＲ縄文と縄線文が施されている。２条の縄線文の下には、縄端刺突文が認められる。内面は横になで調整されており、胎土に黄白色火山灰・砂・細礫を含む。器壁４～７㎜を計る。12はＴＰ－136から出土した。器面にＬＲ＋ＲＬの結束羽状縄文が施されている。内面は横になで調整されており、胎土に砂・白色粒を含む。13はＴＰ－161から出土した。器面に条の幅１～２㎜のＲＬ縄文が施されている。内面調整は横なでで、胎土に黒色鉱物・砂・黄白色火山灰を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。器壁５～９㎜を計る。14はＴＰ－165から出土した。口縁はわずかに外反し、口唇断面は尖り気味である。器面に幅２～３㎜の断面が半円形を呈した貼付帯と、条の幅１㎜の短縄文が施されている。内面は横になで調整されてい

る。胎土に黒色鉱物・石英・砂・細礫を含む。（鎌田）

石　器

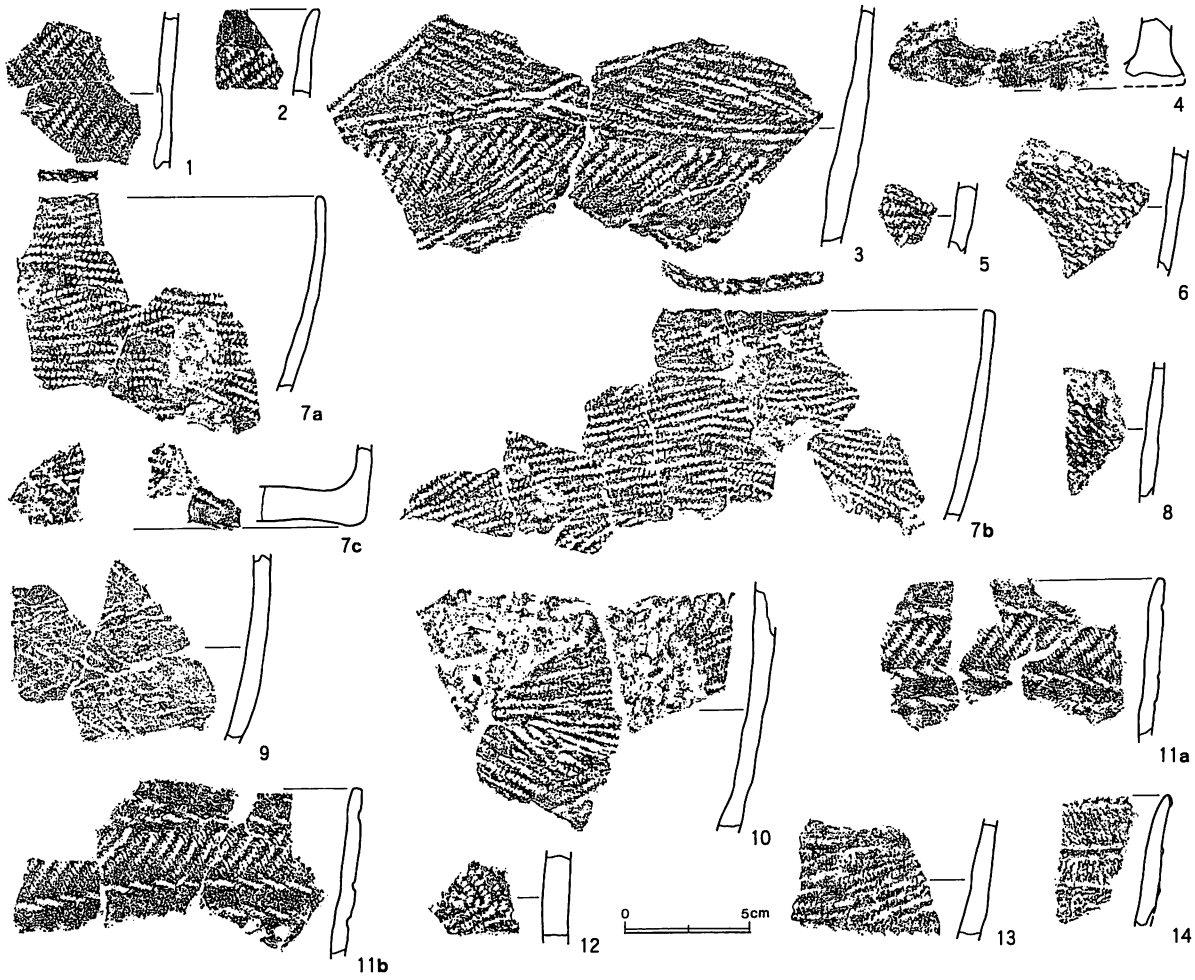
いずれも覆土中より出土し、流れ込みの遺物でＴピットには伴わないと考えられる。1はＴＰ－6出土の石鏃片。中半で切損しており、下半分のみが残る。残存部の形状から柳葉形と推測される。黒曜石製。2はＴＰ－19出土のＵフレイク。縦長剥片の内湾する側縁に使用痕が見られる。表面に自然面を残す。頁岩製。3はＴＰ－45、4はＴＰ－65出土の石核。いずれも打面を転移しながら、剥片を剥ぎ取っている。各作業面から、少なくとも3は2回、4は3回の転移が認められる。ともに黒曜石製で、自然面を残す。5はＴＰ－77と切り合う風倒木痕より出土した石槍・ナイフ。両面の調整は粗雑である。茎部を欠損する。黒曜石製。6はＴＰ－86出土のピエス・エスキーユ。剥片の上下端に打撃による階段状の細かな剥離が認められる。側面の剥離作業により、下端が鋭角に整形されている。頁岩製。7はＴＰ－143出土の石斧未製品。両面を打ち欠いて整形されている。裏面に自然面が残る。石材は結晶片岩である。磨製石斧としては、研磨されておらず、刃部が作り出されていないことから未製品に分類した。しかしながら、下端の弧状になった部分に、剥落や磨滅といった使用痕が見られることを考慮すると、これを打製石斧として捉えることもできる。本遺跡ではＴピットの掘り具としての機能が想定される。ただし、他のＴピットや遺物包含層より同形のものが出土しておらず、使用に伴って生じると考えられる石斧剥片もほとんど見られないことから、今回は可能性を指摘するにとどめる。今後Ｔピットの構築方法を推定する上で、掘り具の可能性のある石斧類の観察に注意する必要があると思われる。（芝田）

表Ⅳ－２－５　Ｔピット出土遺物一覧

遺構名	層位	分　類	点数	備考	遺構名	層位	分　類	点数	備考
ＴＰ－4	覆土	フレイク	1		ＴＰ－65	覆土	石核	1	
ＴＰ－6	覆土	石鏃	1		ＴＰ－68	覆土	Ｒフレイク	1	
ＴＰ－10	覆土	Ｉｂ－1	2		ＴＰ－69	覆土	Ｉｂ－4	5	
		Ｉｂ－4	13		ＴＰ－77	風倒	石槍・ナイフ	1	
		フレイク	1		ＴＰ－80	覆土	Ｉｂ－1	1	
ＴＰ－13	覆土	フレイク	1		ＴＰ－86	覆土	Ｉｂ－1	1	
ＴＰ－15	覆土	Ｉｂ－1	3				石鏃	1	
		礫片	1				Ｕフレイク	4	
ＴＰ－16	覆土	フレイク	1				フレイク	3	頁岩1
ＴＰ－17	覆土	Ｕフレイク	1				ピエス・エスキーユ	1	
ＴＰ－19	覆土	Ｕフレイク	1		ＴＰ－89	覆土	Ｉｂ－1	2	
ＴＰ－20	覆土	Ｉｂ－1	3		ＴＰ－99	覆土	フレイク	1	
ＴＰ－21	覆土	Ｉｂ－1	8		ＴＰ－129	覆土	礫	1	
ＴＰ－22	覆土	フレイク	1		ＴＰ－136	覆土	Ⅲａ	1	
ＴＰ－24	覆土	フレイク	1	頁岩	ＴＰ－143	覆土	石斧	1	
ＴＰ－28	覆土	フレイク	4		ＴＰ－146	覆土	Ｕフレイク	1	
ＴＰ－34	覆土	Ｉｂ－1	6		ＴＰ－151	覆土	フレイク	1	
ＴＰ－36	覆土	すり石	1		ＴＰ－152	覆土	Ｒフレイク	1	
ＴＰ－42	覆土	Ｉｂ－1	1		ＴＰ－155	覆土	Ｉｂ－1	5	
		礫	1				礫片	1	
ＴＰ－45	覆土	Ｉｂ－1	2		ＴＰ－156	覆土	Ｒフレイク	1	
		石核	1		ＴＰ－161	覆土	Ｉｂ－1	1	
ＴＰ－54	覆土	Ｉｂ－1	9				フレイク	1	
ＴＰ－55	覆土	Ｉｂ－1	2		ＴＰ－164	覆土	礫片	1	
		フレイク	1		ＴＰ－165	覆土	Ｉｂ－3	1	
ＴＰ－56	覆土	Ｉｂ－1	1		合　計			108点	
		フレイク	1						

表Ⅳ－２－６　Ｔピット掲載土器一覧

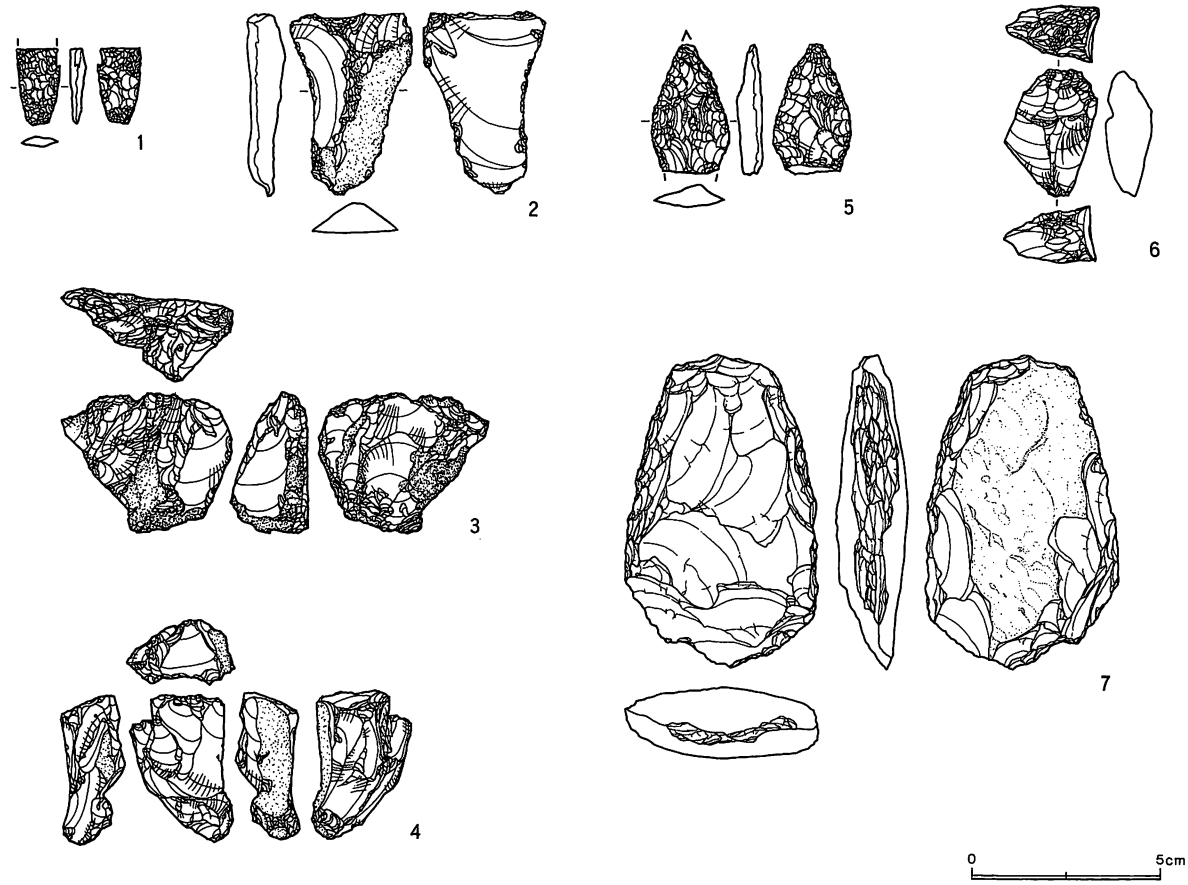
掲載番号	遺構名	遺物番号	層位	破片 点数	破片 掲載	破片 総数	分類	同一個体破片の情報　発掘区、層位、点数(1点の場合は省略)前に同じ部分は同とした
1	TP-15	1	覆土	1	3	3	Ⅰb-1	(掲載) ＴＰ-15-3覆土(2),
2	TP-21	1	覆土	1	1	8	Ⅰb-1	(非掲載) ＴＰ-21-1覆土(7)
3	TP-34	2	覆土	1	3	9	Ⅰb-1	(掲載) Ｌ40ｄ1Ⅴｃ2.(非掲載)Ｋ41ａ5Ⅴｃ,同ｃ1同2,Ｌ40ｃ3同,同41ｄ1Ⅴｃ2.
4	TP-34	1	覆土	2	2	5	Ⅰb-1	(非掲載) ＴＰ-34-1覆土(3).
5	TP-42	1	覆土	1	1	1	Ⅰb-1	
6	TP-54	3	覆土	1	1	1	Ⅰb-1	
7	TP-54	1	覆土	2	29	45	Ⅰb-1	(掲載) ａ：ＴＰ-54-2覆土(2), ｂ：ＴＰ-56-1覆土(1), Ｌ37ｄ3Ⅴｂ,同38ａ1同3,同6同2,同7Ⅴｃ9.
								ｃ：Ｌ38ａ6Ⅴｂ3,同7Ⅴｃ6.(非掲載) ＴＰ-45-1覆土(1).
8	TP-55	1	覆土	1	1	2	Ⅰb-1	(非掲載) ＴＰ-55-1覆土(1).
9	TP-69	1	覆土	1	5	5	Ⅰb-1	(掲載) ＴＰ-69-2覆土(4).
10	TP-80	1	覆土	1	5	6	Ⅰb-1	(掲載) Ｋ40ｂ1Ⅴｃ4.(非掲載) Ｌ41ａ1Ⅴｃ.
11	TP-89	1	覆土	1	11	15	Ⅰb-1	(掲載) ａ：Ｈ45ｃ2Ⅴｂ6,同4同. ｂ：Ｈ44ｂ1Ⅳ,同45ｃ2Ⅴｂ,同8Ⅴｃ.
								(非掲載) ＴＰ-89-1覆土, Ｇ45ｂ17Ⅴｃ, Ｈ45ｃ2Ⅴｂ.
12	TP-136	1	覆土	1	1	1	Ⅰb-1	
13	TP-161	1	覆土	1	1	1	Ⅰb-1	
14	TP-165	1	覆土	1	1	1	Ⅰb-1	



図Ⅳ－２－63　Ｔピット出土の土器

表Ⅳ－２－７　Ｔピット掲載石器一覧

掲載番号	遺構名	遺物番号	分　　類	層　位	長さ×幅×厚さ（cm）	重量（g）	石　質	備　考
1	ＴＰ－６	1	石　鏃	覆土	2.0×1.03×0.42	0.8	黒曜石	破片
2	ＴＰ－19	1	Ｕフレイク	覆土	4.75×3.21×0.94	11.3	頁岩	
3	ＴＰ－45	2	石　核	覆土	3.65×4.50×1.77	22.1	黒曜石	
4	ＴＰ－65	1	石　核	覆土	3.88×2.49×1.49	12.5	黒曜石	
5	ＴＰ－77	1	石槍ナイフ	風倒撹乱	3.35×2.06×0.69	3.7	黒曜石	欠損品
6	ＴＰ－86	1	ピエス・エスキーユ	頁岩	3.21×2.49×1.23	8.6	頁岩	
7	ＴＰ－143	1	石斧	覆土１層	8.24×5.10×1.91	87.5	結晶片岩	未製品



図Ⅳ－２－64　Ｔピット出土の石器

3　土　坑（図Ⅳ－２－62）

１基のみである（Ｐ－１）。Ｉ45ｂ、Ｊ45ａ区のＶｃ層上面で、Ｖｂ層の落ち込みとして確認された。形態は皿状を呈する。規模は確認面で1.24×1.06m、底面で0.62×0.40m、深さ0.36mである。Ⅶｂ層と覆土３層（Ｖｃ主体）との層界が明瞭で、整った平面形であることから土坑として扱ったが、Ⅶｂ層とＶｃ層の層界は、遺跡内の場所によって本遺構のように明瞭な部分もあり、人為でない可能性がある。遺物の出土はない。

4　焼　土（図Ⅳ－４－１・２／表Ⅳ－４－１～４）

焼土は14ヵ所検出された。各焼土の属性は表Ⅳ－４－１にまとめ、以下では各層の焼土について概括して述べる。（山中）

Ⅲ層の焼土

１ヵ所のみ検出された（Ｆ－1）。調査区北側の台地から続く斜面上に形成されている。非常に強く焼けており、炭化物の集中を伴う。断面観察により、その場で形成されたものと判断したが、平面が不整形を呈し、遺物を伴わないことから、自然営力（落雷による野火など）の可能性もある。

周辺に白頭山－苫小牧降下火山灰（Ｂ－Ｔｍ）の堆積が部分的に見られ、焼土の形成面がこれよりも上位であることから、時期は擦文時代～アイヌ文化期と考えられる。（芝田）

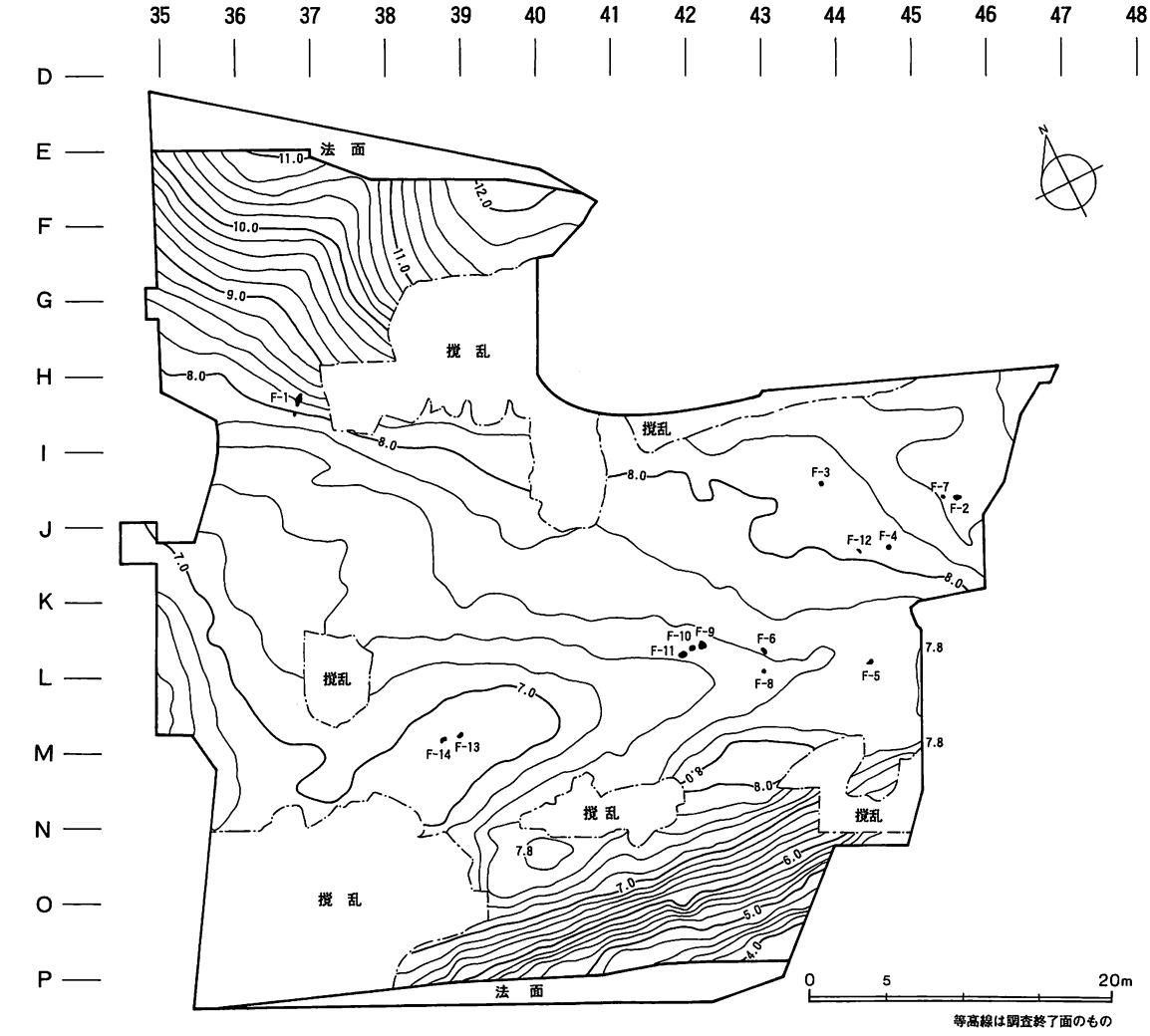
Ｖｃ層の焼土

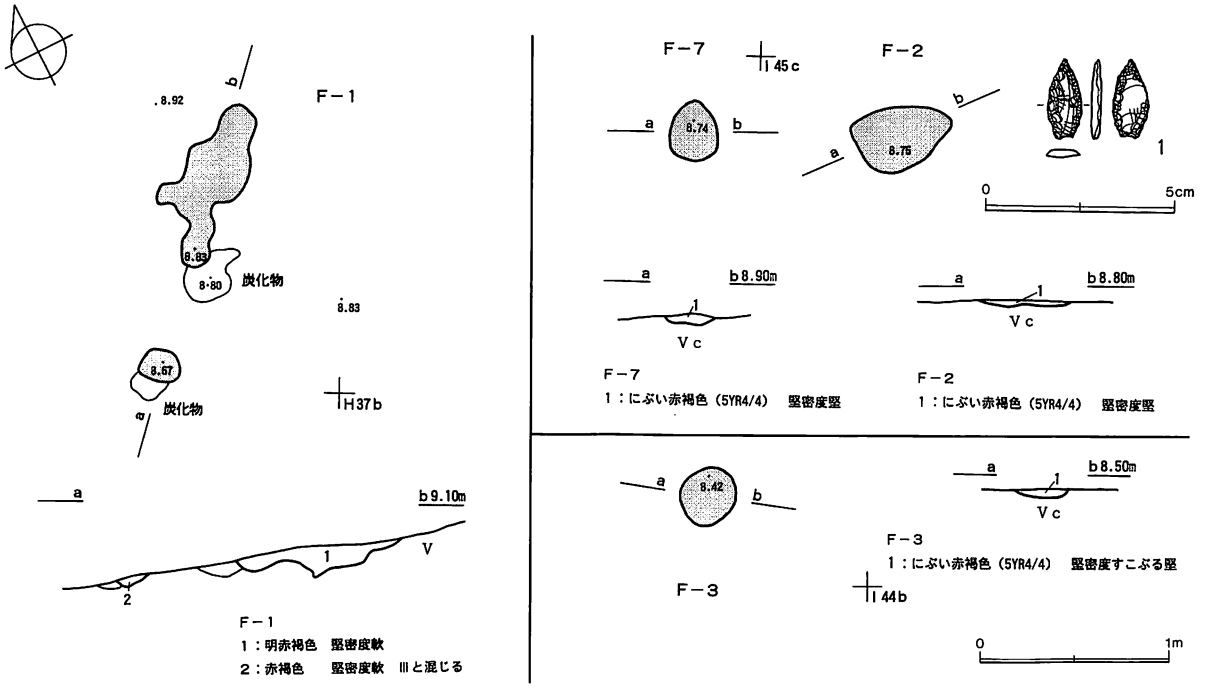
13ヵ所で検出された（Ｆ－２～14）。Ｆ－３・５を除き、２、３ヵ所のまとまりが点在している。Ｆ－13・14は幅広な沢状地形内に位置する。いずれもＶｃ層の上面・上位が赤みを帯びた部分を半截し、断面観察の結果焼土と判断したものである。平面形は円形・楕円形に近く、厚さは５cm前後である。周囲ではＩ群ｂ－１類土器（東釧路Ⅱ式相当）、黒曜石製のフレイク、炭化したクルミ殻等がまばらに出土している。Ｆ－９～11では、黒曜石製のフレイクが多くみられたため、周囲の土壌を水洗選別したところ、微細なフレイクが約800点得られた。

検出された層位と周囲の遺物出土状況から、時期は縄文時代早期後半、東釧路Ⅱ式期とみてよいで

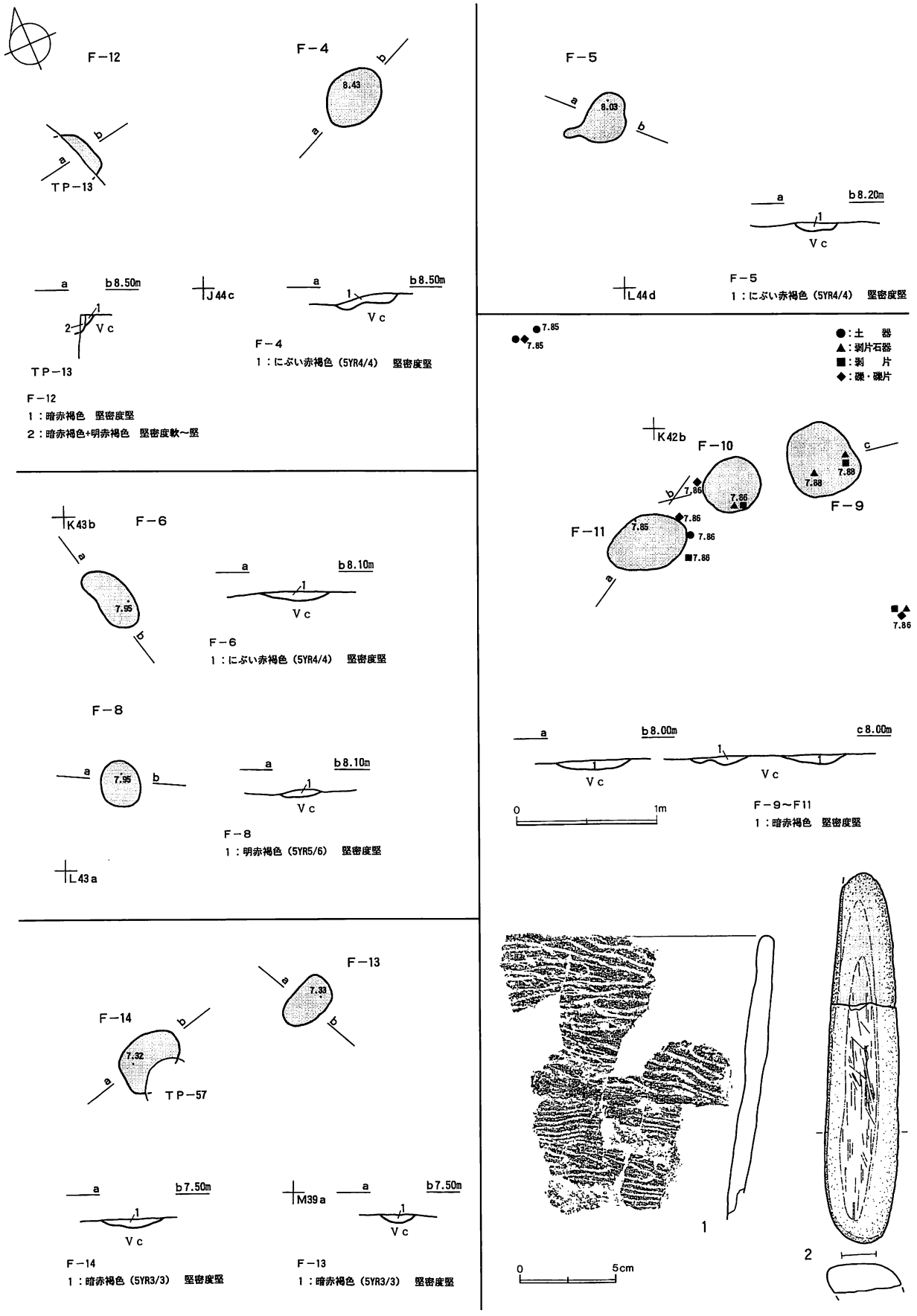
表Ⅳ－４－１　焼土一覧

図	図版	遺構名	発掘区	検出層位	色調	規模（m）長径×短径／厚さ	遺物	時期	備考
Ⅳ-4-1	27－1･2	Ｆ－１	H36ｄ	Ⅲ層上位	明赤褐色～赤褐色	0.89×0.44／0.16	なし	擦文時代～アイヌ文化期	
〃		Ｆ－２	Ｉ45ｃ	Ｖｃ層上面	にぶい赤褐色	0.52×0.34／0.03	有り	縄文時代早期後半	
〃		Ｆ－３	Ｉ43ｄ	Ｖｃ層上面	にぶい赤褐色	0.32×0.30／0.04	有り	縄文時代早期後半	
Ⅳ-4-2		Ｆ－４	Ｊ44ｄ	Ｖｃ層上面	にぶい赤褐色	0.45×0.36／0.06	有り	縄文時代早期後半	
〃	27-3	Ｆ－５	Ｋ44ｂ	Ｖｃ層上位	にぶい赤褐色	0.48×0.32／0.06	有り	縄文時代早期後半	
〃		Ｆ－６	Ｋ43ｂ	Ｖｃ層上面	にぶい赤褐色	0.48×0.28／0.06	有り	縄文時代早期後半	
Ⅳ-4-1		Ｆ－７	Ｉ45ｃ	Ｖｃ層上面	にぶい赤褐色	0.32×0.26／0.06	有り	縄文時代早期後半	
Ⅳ-4-2		Ｆ－８	Ｋ43ｂ	Ｖｃ層上面	明赤褐色	0.34×0.28／0.06	有り	縄文時代早期後半	6,890±40（ｙＢＰ）
〃	27-4	Ｆ－９	Ｋ41ｃ，Ｋ42ｂ	Ｖｃ層上位	明赤褐色	0.52×0.48／0.06	有り	縄文時代早期後半	
〃	〃	Ｆ－10	Ｋ41ｃ，Ｋ42ｂ	Ｖｃ層上位	明赤褐色	0.40×0.40／0.06	有り	縄文時代早期後半	
〃	〃	Ｆ－11	Ｋ41ｃ，Ｋ42ｂ	Ｖｃ層上位	明赤褐色	0.58×0.40／0.07	有り	縄文時代早期後半	6,890±40（ｙＢＰ）
〃		Ｆ－12	Ｊ44ａ	Ｖｃ層上面	暗赤褐色～明赤褐色	(0.48)×(0.12)／(0.10)	有り	縄文時代早期後半	ＴＰ-13に壊される
〃		Ｆ－13	Ｌ38ｃ，Ｌ39ｂ	Ｖｃ層上位	暗赤褐色	0.40×0.24／0.06	有り	縄文時代早期後半	
〃		Ｆ－14	Ｌ38ｃ	Ｖｃ層上位	暗赤褐色	0.48×（0.34）／0.06	有り	縄文時代早期後半	ＴＰ-57に壊される





図Ⅳ－4－1　焼土分布図とF－1～3・7


F－12
TP－13
F－4
8.43
F－5
8.03
b8.20m
Vc
F－5
1：にぶい赤褐色（5YR4/4） 堅密度堅
L44d
b8.50m
J44c
TP－13
F－4
1：にぶい赤褐色（5YR4/4） 堅密度堅
F－12
1：暗赤褐色 堅密度堅
2：暗赤褐色+明赤褐色 堅密度軟～堅
●：土 器
▲：剥片石器
■：剥 片
◆：礫・礫片
K42b
F－10
F－9
F－11
K43b
F－6
7.95
b8.10m
F－6
1：にぶい赤褐色（5YR4/4） 堅密度堅
F－8
b8.00m
c8.00m
F－9～F11
1：暗赤褐色 堅密度堅
0
1m
F－8
1：明赤褐色（5YR5/6） 堅密度堅
L43a
F－13
7.33
F－14
7.32
TP－57
b7.50m
M39a
F－14
1：暗赤褐色（5YR3/3） 堅密度堅
F－13
1：暗赤褐色（5YR3/3） 堅密度堅
0
5cm
1
2

図Ⅳ－4－2 F－4～6・8～14

表Ⅳ－４－２　焼土出土遺物一覧

遺構名	分　類	点数	備考	遺構名	分　類	点数	備考	遺構名	分　類	点数	備考
F-2	Ⅰb－1	3		F-8	Ⅰb－1	27		F-10	すり石	1	
	石鏃	1			フレイク	1	頁岩		礫片	1	
	Uフレイク	2		F-9	Rフレイク	5		F-11	Ⅰb－1	4	
	フレイク	68	頁岩5		Uフレイク	4			フレイク	7	頁岩1
F-3	フレイク	4	頁岩		フレイク	270	頁岩30		礫片	3	
	礫片	1			石核	1		F-12	フレイク	2	
F-4	フレイク	5	頁岩1		石斧フレイク	1		F-13	Uフレイク	3	
F-5	フレイク	1	頁岩		礫	1			フレイク	11	
F-6	フレイク	1		F-10	フレイク	23	頁岩2	F-14	フレイク	9	

表Ⅳ－４－３　焼土掲載土器一覧

掲載番号	遺構名	遺物番号	層位	破片			分　類	同一個体破片の情報　発掘区、層位、点数（1点の場合は省略）前に同じ部分は同とした
				点数	掲載	総数		
1	F-11	1		2	9	29	Ⅰb-1	（掲載）TP-10-2覆土（2），TP-20-1覆土，J43b1b（4）.（非掲載）F-11-1（2），I43b2Vb2，同d4同，同5同，同8Ⅵ（2），同9Vc，同13同，J37c2同2，L42d2Vc5.

表Ⅳ－４－４　焼土掲載石器一覧

掲載番号	遺構名	遺物番号	分　類	層　位	長さ×幅×厚さ（cm）	重量（g）	石　質	備　考
図Ⅳ－４－１－１	F－２	1	石　鏃	焼土１層	2.10×0.90×0.20	0.4	黒曜石	
図Ⅳ－４－２－２	F－10	1	すり石	焼土１層	19.7×3.90×1.60	207.0	緑色凝灰岩	TP－36－１と接合被熱

あろう。F－８の炭化クルミ殻、F－11の炭化材について、放射性炭素年代測定（AMS法）を依頼したところ、いずれも6,890±40（yBP）と測定された（Ⅵ章－１参照）。

なお、焼土の検出されたVc層の上面・上位については、当時の植生に関する情報を得るため、基本土層の一部から土壌試料を採取し、花粉分析・植物珪酸体分析を依頼した（Ⅵ章－２参照）。

（山中）

焼土出土の遺物

14ヶ所の焼土のうち、縄文時代早期後半の焼土13ヶ所すべてから遺物が出土した。このうち、12ヶ所から土器・石器等460点の遺物が出土している。

土　器

１はF－11から出土したⅠ群ｂ－１類土器である。東釧路Ⅱ式に相当する。口縁は直立気味で、口唇断面は丸みを帯びる。器面には無節の原体を何本か一単位にして並列を押捺している。横になで調整された内面には指頭痕が残る。胎土には黄褐色火山灰、細礫を含む。この個体の破片はF－11、TP－10・20の覆土、I43b、J37c、L42dのVb～Ⅵ層から29点出土している。（鎌田）

石　器

図Ⅳ－４－１－１は、F－２の焼土１層より出土した石鏃。小型の柳葉形。周縁部のみ粗く加工されており、両面に剥離面が残る。石材は黒曜石である。図Ⅳ－４－２－２は、すり石。F－10の焼土１層、TP－36の覆土中より出土した２点が接合したもの。F－10出土の破片は被熱している。棒状礫を縦方向に半割し、腹面を弱く擦っている。石材は緑色凝灰岩である。F－10の形成以前に破砕したものが、一方は焼土中にあって被熱し、もう一方はTP－36に流れ込んだものと推測される。F－10の時期から、縄文時代早期後半（東釧路Ⅱ式期）以前の所産と考えられる。（芝田）

Ⅴ　包含層出土の遺物

1　土　器

概　要

平成14年度、浜厚真３遺跡では遺物包含層より679点の土器が出土した。このうち、縄文時代のものが678点で99.9%を占める。続縄文時代のものは１点で0.1%である。時期別の点数と包含層出土土器全体に占める割合を多い順に記すと、縄文時代早期後半のものが389点と57.3%を占める。次いで、後期後葉が183点で27%、後期初頭が87点で12.8%、中期後半が14点で2.1%となっている（表Ⅴ－１－１）。

各時期の出土層位別点数と時期別出土土器点数に占める割合は、縄文時代早期後半のものはⅤｃ層で199点(51.2%)、Ⅴｂ層で151点(38.8%)、Ⅵ層で14点(6.2%)、中期後半はⅤｃ層で７点(50%)、Ⅴｂ層で６点（42.9%)、後期初頭はⅤａ層で87点（100%)、後期後葉はⅤａ層で146点（79.8%)、Ⅲ層で25点（13.7%）である。続縄文時代のものはⅢ層から１点だけ出土した。

図Ⅴ－１－１・２では各時期の土器の分布図を示した。また、表Ⅴ－１－２の包含層掲載土器一覧で「破片」の欄で「点数」とあるのは見出しとなった破片の点数、掲載とあるのは拓本で掲載した破片の数、「総数」は当該個体の破片総数である。「同一個体破片の情報」の部分では見出しに記した破片以外の掲載破片と非掲載破片の情報を、発掘区（グリッド・小グリッド）・遺物番号・層位（Ⅴａ層はⅤａ、Ⅴｂ層はⅤｂ、Ⅴｃ層はⅤｃと略した）・点数の順に記載した。発掘区と層位の部分については前に記載したものと同じ場合には「同」として省略した。層位の次の数字は点数であり、１点の場合は１を省略した。

縄文時代早期の土器

Ⅰ群ｂ－１類（１～25）

321点出土している。東釧路Ⅱ式に相当するもので、施文の特徴等によりａ～ｇに分けた。

ａ　縄文をもつもの（１～３・５～８・13）

１～３・５～８・13は撚りの緩い縄文による地文をもつ。斜位・横位と方向を変えて施文するものがある。施文の重複のあるものもある。１・２・５・７・８はＬＲ、３・６・13はＲＬの縄文をもつ。５・13は方向を変えて施文される。３・５・７・13は施文が重複する。１・２は焼成が良好で堅く焼き締まる。

表Ⅴ－１－１　層位別出土土器点数一覧

分　類	Ⅲ層	Ⅴ層			Ⅵ層	風倒攪乱	排土	計
		Ⅴａ	Ⅴｂ	Ⅴｃ				
縄文時代早期								
Ⅰ群ｂ－１類		7	115	175	17		7	321
Ⅰ群ｂ－４類				2				2
Ⅰ群ｂ類細分不能		1	36	22	7			66
縄文時代中期								
Ⅲ群ｂ－２類		1	3	7				11
Ⅲ群ｂ類細分不能			3					3
縄文時代後期								
Ⅳ群ａ類タプコプ式		87						87
Ⅳ群ｃ類	25	146	10			2		183
続縄文時代								
Ⅵ群ｃ類	1							1
分類不明	2	1	2					5
合　計	28	243	169	206	24	2	7	679

ｂ　撚糸文をもつもの（９～11）

９～11は撚糸による施文をもつ。９・11は右撚、10は左撚である。11は内面が剥落している。

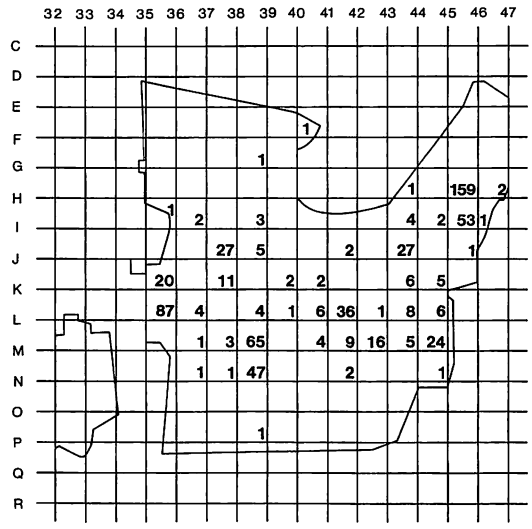
ｃ　直前段反撚・合撚の原体による施文をもつもの（４・12・14）

４は反撚の混合したＬＬＲ、12は反撚のＲＲである。14はＬＲとＲＬを撚った３段の原体による施文をもつ。

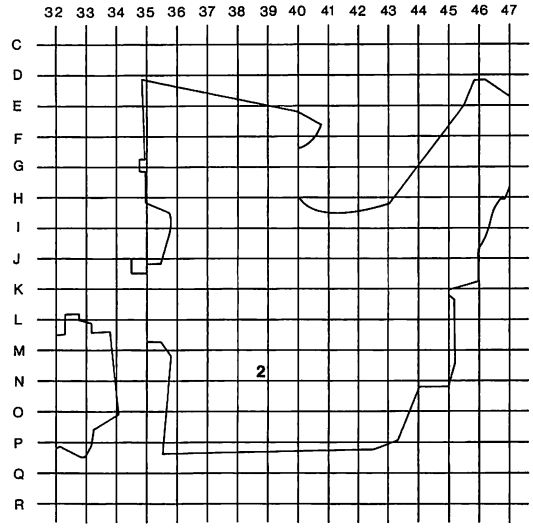
ｄ　縄文と縄端圧痕文・縄線文が組み合わされたもの（15～17）

15はＬＲの比較的整った縄文が方向を変えて施文

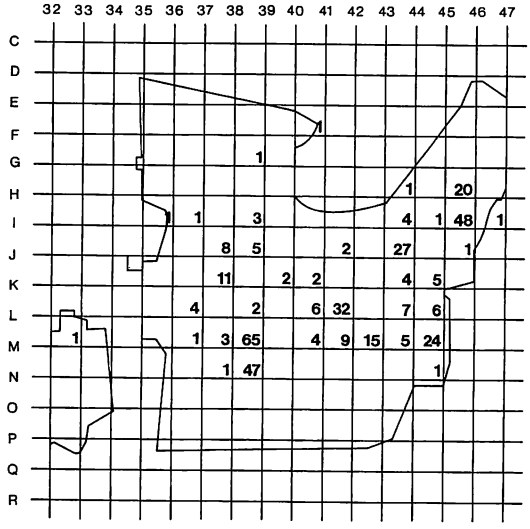
全体の土器分布



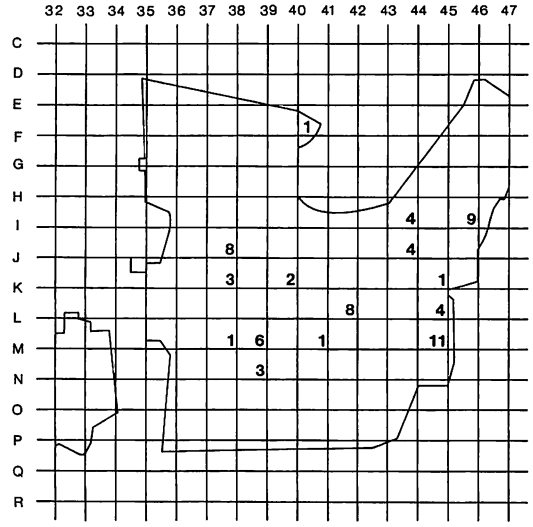
Ⅰ群ｂ－４類土器の分布



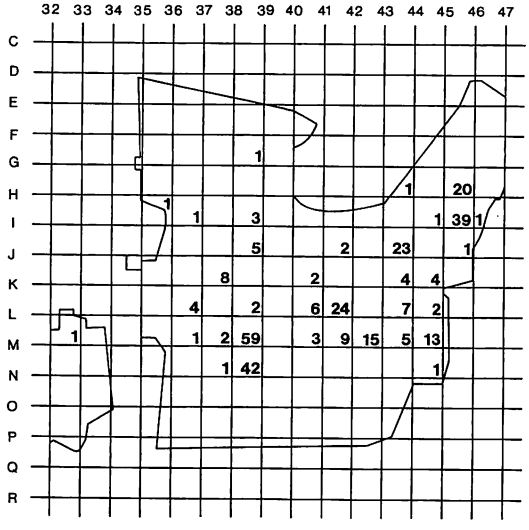
縄文時代早期の土器分布



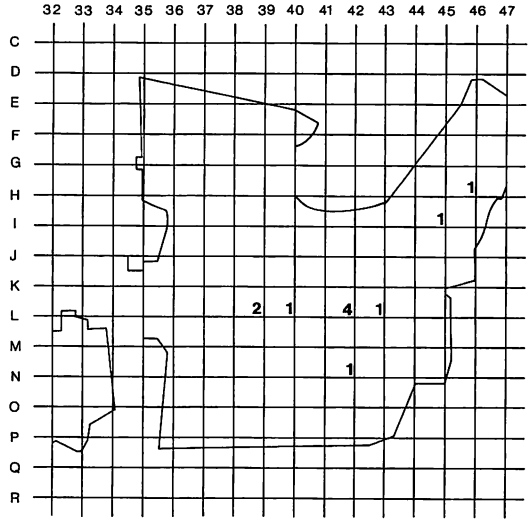
Ⅰ群ｂ類土器（細分不能）の分布



Ⅰ群ｂ－１類土器の分布

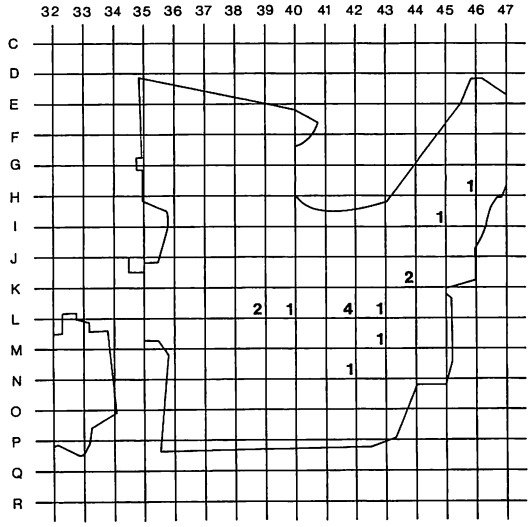


縄文時代中期の土器分布

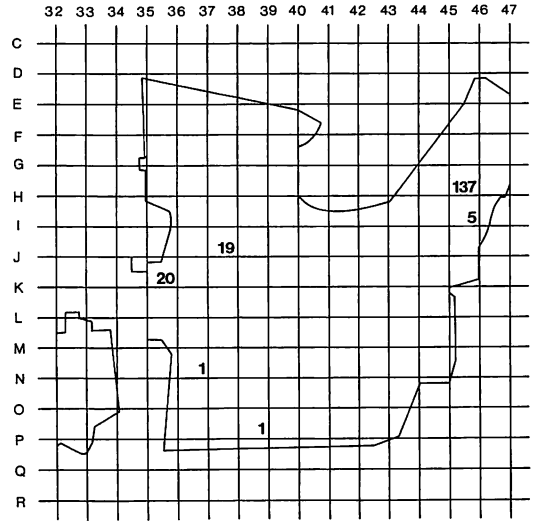


図Ⅴ－１－１　包含層出土土器分布図（１）

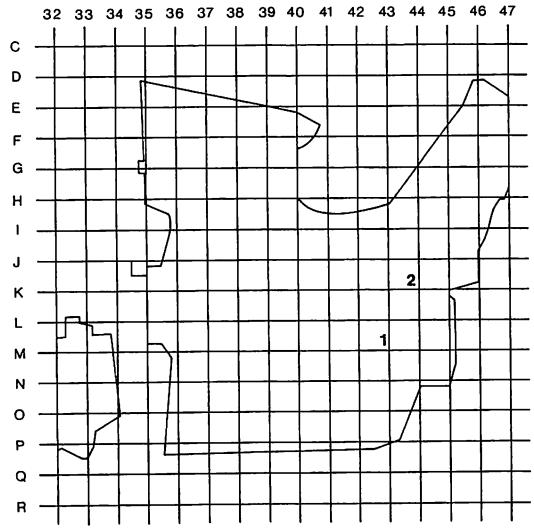
Ⅲ群ｂ－２類土器の分布



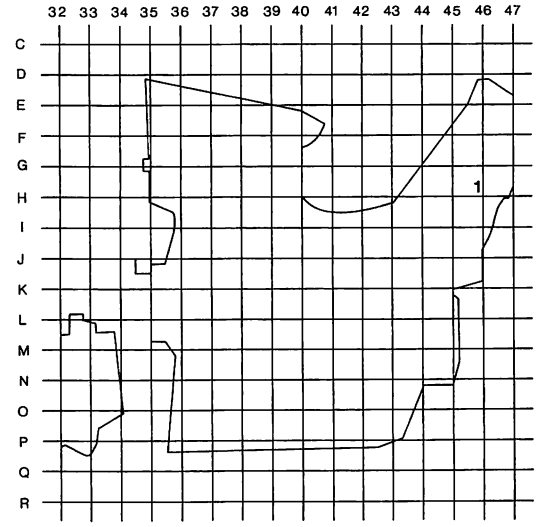
縄文時代後期（Ⅳ類ｃ群）の土器分布



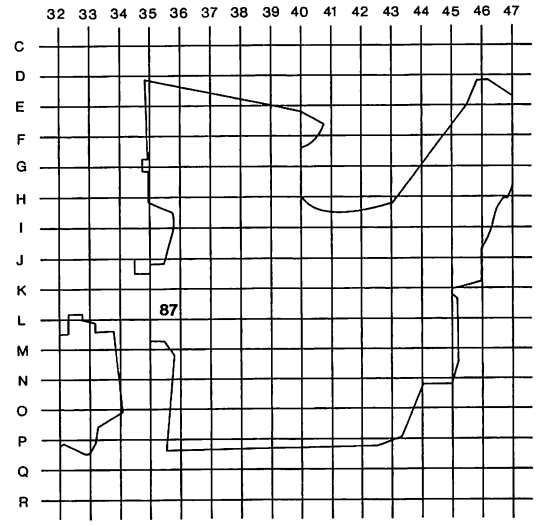
Ⅲ群ｂ類土器（細分不能）の分布



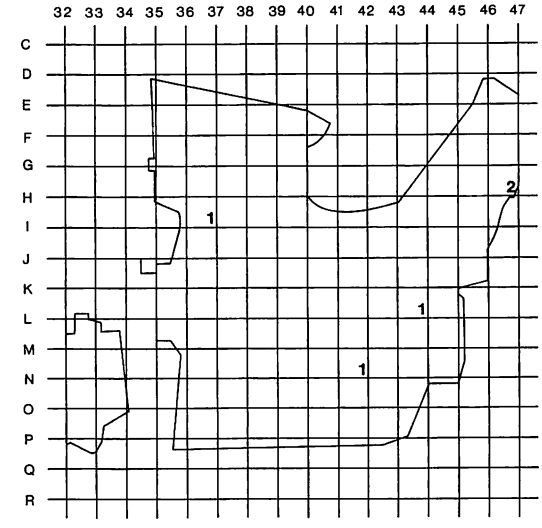
続縄文時代（Ⅵ群ｃ類）の土器分布



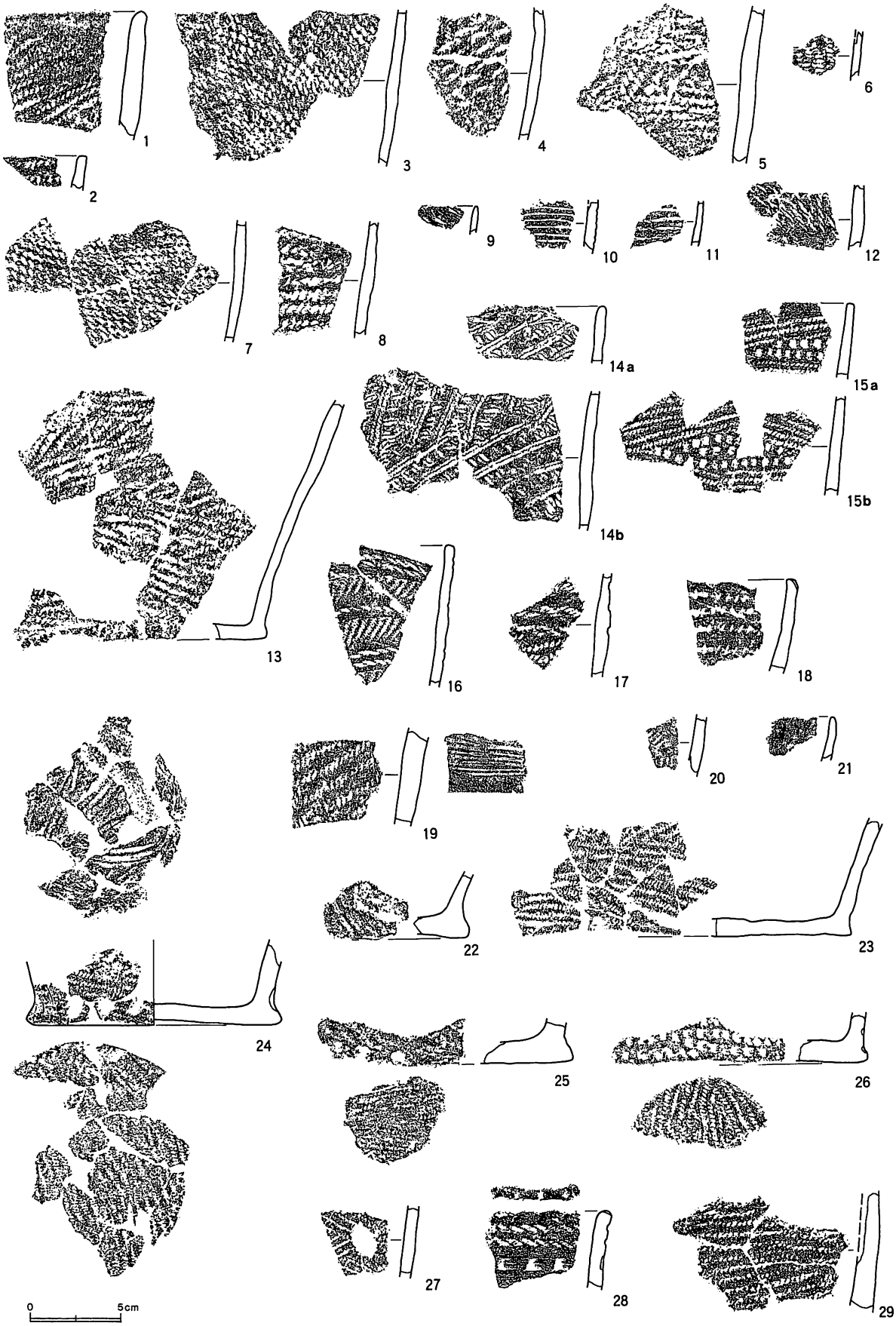
縄文時代後期（Ⅳ群ａ類）の土器分布



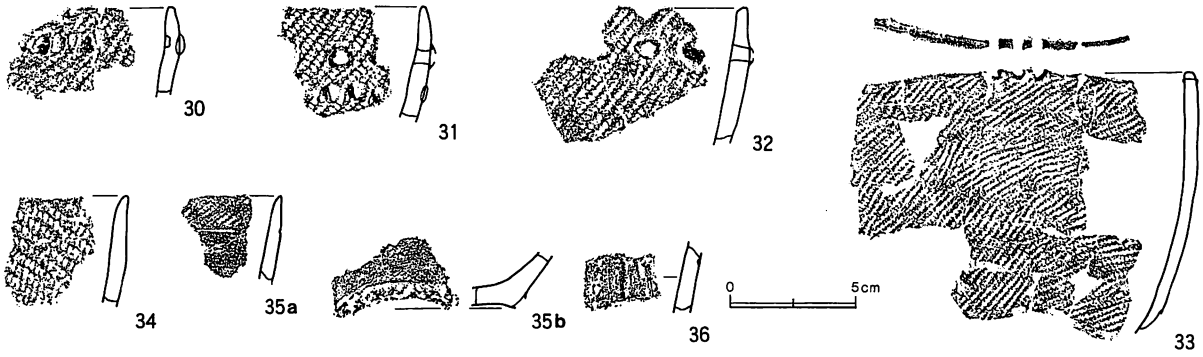
分類不明の土器分布



図Ⅴ－１－２　包含層出土土器分布図（２）



図Ⅴ－１－３　包含層出土の土器（１）



図Ⅴ－1－4　包含層出土の土器（2）

され、その間に縄端圧痕文が施される。16は縄端部を強く押して回転させた、整った半羽状風のＬＲの縄文と縄線文をもつ。17は撚りの緩いＬＲの縄文と縄線文が施されている。

e　絡条体圧痕文をもつもの（18～20）

18～20は単軸絡条体による圧痕文をもつ。絡条体の軸は丸軸である。18の口唇は指頭により抓まれている。19は内面に条痕をもつ。20は横位・斜位の絡条体圧痕文をもつ。

f　無　文（21）

21は無文である。器厚3～4㎜で、器面には指頭痕がある。口唇断面は丸みを帯びる。

g　底　部（22～23）

22～26は底部が張り出す。縄文の施されたもの（22～24）、底部の張り出しが抓まれたもの（25）、縄端刺突文が施されたもの（26）がある。24～26は底面に縄文をもつ。24は内面および底部内面に条痕がある。

Ⅰ群ｂ－4類（27）

Ⅰ群ｂ－4類は2点のみの出土である。27・28は自縄自巻の原体による羽状縄文をもつ。条の幅は1㎜である。

縄文時代中期の土器

Ⅲ群ｂ－2類（28）

Ⅲ群ｂ－2類は11点出土している。29は口縁に2条の縄線文が施される。断面形が丸みを帯びた口唇と口縁には篦状工具による右方向からの連続刺突文をもつ。口縁には胎土には砂・黒色鉱物・細礫を含む。

縄文時代後期の土器

Ⅳ群ａ類（29）

Ⅳ群ａ類は87点出土している。29はＬＲの縄文を施して、器面をなでている。内面は剥落している。胎土には黄白色火山灰・砂・細礫を含む。

Ⅳ群ｃ類（30～35）

Ⅳ群ｃ類は183点出土している。30～32は口縁に突瘤文をもつ。30は突瘤が抓まれている。31は突瘤文の下に爪形文をもつ。32の口縁は小波状を呈す。33は口唇に3つ一組で丸棒状工具による刻みがある。34は口唇が切り出しナイフ状を呈す。35は沈線文をもち、口縁に縄文が施される。沈線文より下は無文である。いずれも、地文はＬＲの斜行縄文である。

続縄文時代の土器

Ⅳ群ｃ類（36）

Ⅳ群ｃ類はⅢ層から1点のみの出土である。36は器面に隆起線と三角列点文をもつ。胎土に黒色鉱物・白色粒・細礫を含む。（鎌田）

表Ⅴ－１－２　包含層出土掲載土器一覧

掲載番号	遺構番号	遺物番号	層位	破片 点数	破片 掲載	破片 総数	分類	同一個体破片の情報　発掘区、層位、点数(1点の場合は省略)前に同じ部分は同とした
1	L41c	3	Ⅴc	1	1	6	Ⅰb-1	(非掲載) Ⅰ38c1Ⅴb, L41d1Ⅴc, 同42b1Ⅴb3
2	J44d	1	Ⅴb	1	1	1	Ⅰb-1	
3	M38b	4	Ⅴc	1	2	13	Ⅰb-1	(掲載) M38c2Ⅴc. (非掲載) L38b10Ⅴc2, M38a2Ⅴb, 同c2Ⅴc8.
4	L38a	6	Ⅴb	5	5	5	Ⅰb-1	
5	L44d	1	Ⅴb	1	1	1	Ⅰb-1	
6	I41a	1	Ⅵ	2	3	3	Ⅰb-1	(掲載) L38a1Ⅴb.
7	M38c	2	Ⅴc	5	5	24	Ⅰb-1	(非掲載) K36b1Ⅴb2, L38b4Ⅴ2, 同9Ⅴc, 同42a3Ⅴb, M37d1Ⅴb, 同38a1Ⅴb, 同b4Ⅴc5, 同c2Ⅴc6.
8	L43b	2	Ⅴb	1	1	1	Ⅰb-1	
9	J37c	3	Ⅴc	1	1	1	Ⅰb-1	
10	H46b	1	Ⅴc	1	1	1	Ⅰb-1	
11	L43a	1	Ⅴb	1	1	1	Ⅰb-1	
12	J37d	3	Ⅴb	2	2	5	Ⅰb-1	
13	G45b	13	Ⅴa	1	7	15	Ⅰb-1	(掲載) G45b17Ⅴc6. (非掲載) G45b2Ⅴc, 同12同, 同17同6.
14	M38b	4	Ⅴc	1	8	12	Ⅰb-1	(掲載) b:Ⅰ43c2Ⅴc, 同d7Ⅵ6. (非掲載) Ⅰ43b1Ⅴb, 同d12Ⅴc, L44d1Ⅴb2.
15	L38c	1	Ⅴc	2	7	20	Ⅰb-1	(掲載) a:L38b9Ⅴc. b:L38b9Ⅴc2, 同d1Ⅴb, M38c2Ⅴc. (非掲載) Ⅰ45a4Ⅴc, L38b9Ⅴc, 同b10同2, 同c1同2, M38c2Ⅴc7.
16	K43d	1	Ⅴb	2	2	7	Ⅰb-1	(非掲載) K43c1Ⅴc, 同d1Ⅴb2, 同4Ⅴc, L43a1Ⅴb.
17	M44b	1	Ⅴb	1	1	1	Ⅰb-1	
18	I38b	1	Ⅴa	2	2	6	Ⅰb-1	(非掲載) F38c1Ⅵ, H36c1Ⅴ下, Ⅰ38a1Ⅴb, J44d11Ⅴb.
19	L36a	1	Ⅴc	1	1	1	Ⅰb-1	
20	G45b	17	Ⅴc	1	1	1	Ⅰb-1	
21	L44a	1	Ⅴb	1	1	1	Ⅰb-1	
22	L37c	2	Ⅴc	1	1	1	Ⅰb-1	
23	H45c	2	Ⅴb	1	1	1	Ⅰb-1	(掲載) H45c8Ⅴc16. (非掲載) H45c2Ⅴb4, 同4同3, 同8Ⅴc4.
24	K41b	1	Ⅴc	6	12	19	Ⅰb-1	(掲載) K41b2Ⅴc6. (非掲載) K40d1Ⅴc, 同41aⅤb4, 同b2Ⅴc2.
25	K40d	2	Ⅴc	1	1	1	Ⅰb-1	
26	L38b	10	Ⅴb	1	1	1	Ⅰb-1	
27	M38d	1	Ⅴc	2	2	2	Ⅰb-4	
28	K42b	4	Ⅴc	1	1	1	Ⅲb-2	
29	K35a	1	Ⅴa	4	4	87	Ⅳa	
30	J35c	1	Ⅴb	2	2	2	Ⅳc	
31	J35d	1	Ⅴa	1	1	17	Ⅳc	(掲載) J35a1Ⅴ上. (非掲載) J35a1Ⅴ上, 同c1Ⅴb2, 同2同, 同4Ⅴ上, 同d1Ⅴ中10, 同4Ⅴa.
32	G45b	2	Ⅴa	2	2	35	Ⅳc	(非掲載) G45b10Ⅴa8, 同13同24, 同c6Ⅲ.
33	I37a	1	Ⅴa	5	15	17	Ⅳc	(掲載) Ⅰ37a2Ⅴa, 同4同6, 同b2同, 同8同, 同d2同. (非掲載) Ⅰ37a4Ⅴa, 同b2同.
34	G45b	13	Ⅴa	1	1	70	Ⅳc	(非掲載) G45b10Ⅴa25, 同13同33, 同c6Ⅲ11.
35	G45b	10	Ⅴa	1	2	6	Ⅳc	(掲載) b:G45b1Ⅲ. (非掲載) G45b10Ⅴa4.
36	G45b	18	Ⅴa	1	1	1	Ⅵc	

2　石　器

概　要：遺物包含層より1,398点の石器等が出土した。大部分がフレイク（1,224点）である。他に、剥片石器136点、磨製石器１点、礫石器11点、礫・礫片26点が出土している。出土層位は、Ｖｃ層が1,194点と突出しているが、ほとんどがフレイク・Ｒフレイク・Ｕフレイクである。分布は、調査区北東側から続く浅い沢の内部より多く出土した。Ｋ－42グリッドで802点と最も多く出土しているが、これは焼土Ｆ－９～11の周辺の土壌を水洗選別した結果得られた、黒曜石製の微細なフレイクである。剥片石器は石鏃が40点と最も多い。磨製石器は石斧剥片が１点のみ出土した。礫石器および礫・礫片の出土は非常に少ない。付近に石材を獲得できるような河川がないことが原因と考えられる。

注目されるのはＶｃ層より石錘が２点出土している点である。遺跡が縄文時代中期後半にエゾシカの猟場として機能する以前に、南側の低地部分で漁労活動が行われていた可能性がある。周辺の厚真台地に立地する静川22遺跡では、3,577点という大量の石錘が出土している（工藤・兵藤　2002）。

Ｖｃ層出土の土器の約９割がⅠ群ｂ－１類（東釧路Ⅱ式）に相当することから、石器等の大部分も当該時期（縄文時代早期後半）の所産であろう。Ｖｃ層はＴピット群の構築により著しく撹乱されており、多くの石器等が掘り上げ土に混入して流失してしまった可能性が高い。

(1)　剥片石器

石　鏃（図Ｖ－２－３－１～12／表Ｖ－２－２／図版31）

40点出土している。形態別では、五角形２点、柳葉形９点、三角形13点、有茎７点、形態不明な破片９点となっている。石材は２点のみ頁岩で、他は黒曜石である。12点図示した。１～６は薄身のもの。１・２は五角形。１は裏面に主剥離面を残す。２は幅広で、先端部が全体の約１／３ほどである。３～６は柳葉形。４は基部に浅い抉りが入る。５・６は縦長で、両側縁が直線的でよく整っている。７～10は三角形のもの。７は平基。形状は短身で、正三角形に近い。側縁は直線的である。８～10は凹基。いずれも側縁が外湾する。10の基部には装着痕と推測される潰れが見られる。11・12は有茎。どちらも縦長の基部を有する。11は平基、12は凸基である。11は基部、12は先端部を欠損する。12は非常に細かな調整が施されている。ここで図示したものは、すべて黒曜石製である。

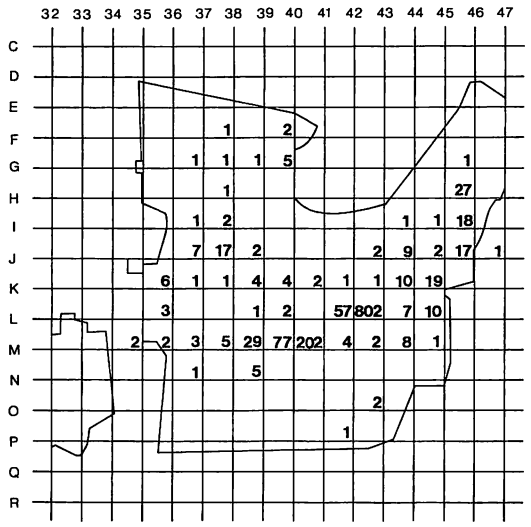
石槍・ナイフ（図Ｖ－２－３－13・14／表Ｖ－２－２／図版31）

３点出土している。石材はすべて黒曜石である。２点図示した。13は茎を持つもの。凸基である。厚みがあり、両面の調整は粗い。14は茎が不明瞭なもの。左右の側縁が非対称になっている。

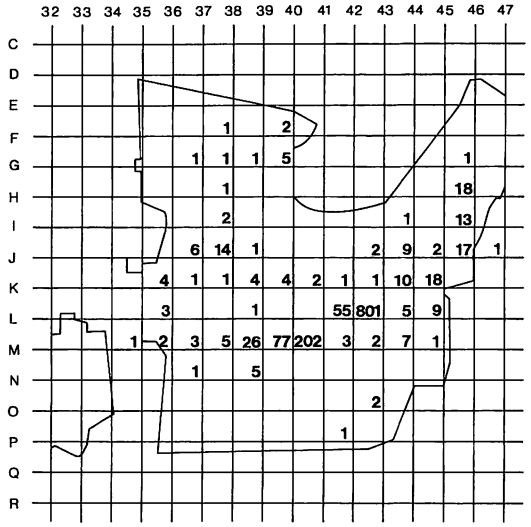
表Ｖ－２－１　層位別出土石器一覧

	分　類	Ⅲ層	Ⅴ層 a	Ⅴ層 b	Ⅴ層 c	Ⅴ層 上位	Ⅴ層 中位	Ⅴ層 下位	Ⅴ層 不明	Ⅵ層	撹乱 風倒木	表採 排土	不明	計
剥片石器	石　鏃	4	2	9	9	5	4	5		1	1			40
	石槍・ナイフ			2				1						3
	石　錐			3	1									4
	スクレイパー			4	1			1			1			7
	Ｒフレイク	1	1	11	15					2				30
	Ｕフレイク		1	21	16		5			3			1	47
	石核・原石			1	3	1								5
剥　片	フレイク	4	3	58	1,140	1	8		1	5	1	3		1,224
磨製石器	石　斧				1									1
礫石器	たたき石			1			2	1						4
	くぼみ石					1								1
	すり石			1										1
	石　錘				2									2
	砥　石			3										3
礫・礫片	加工痕のある礫	1		3										4
	礫・礫片	1		12	6			2			1			22
合　計		11	7	129	1,194	8	19	10	1	11	4	3	1	1,398

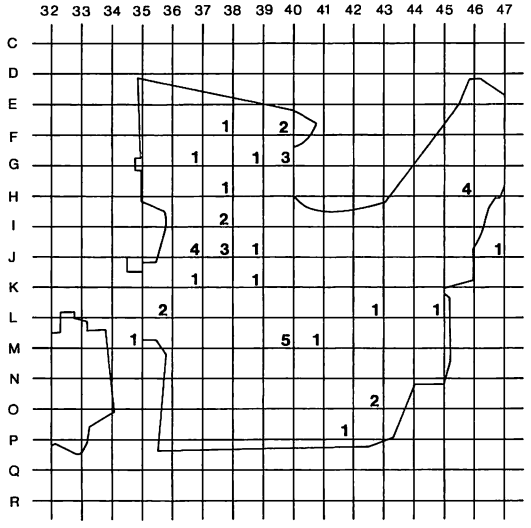
石器等全体



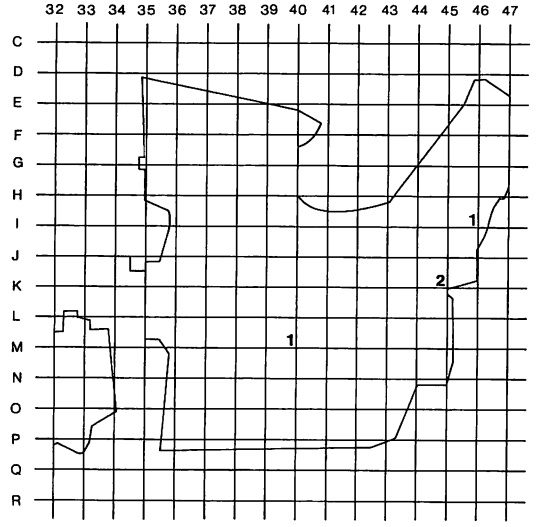
剥片石器類



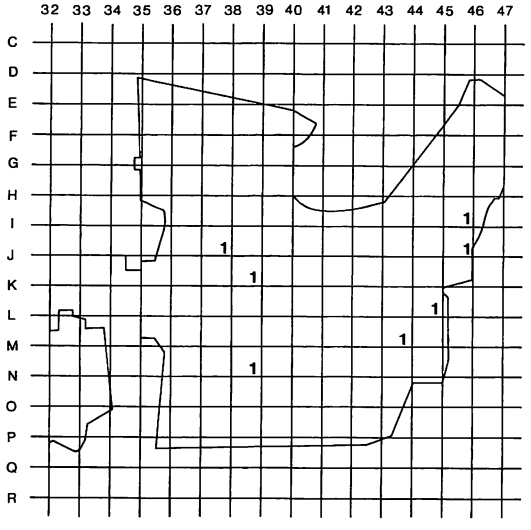
石鏃



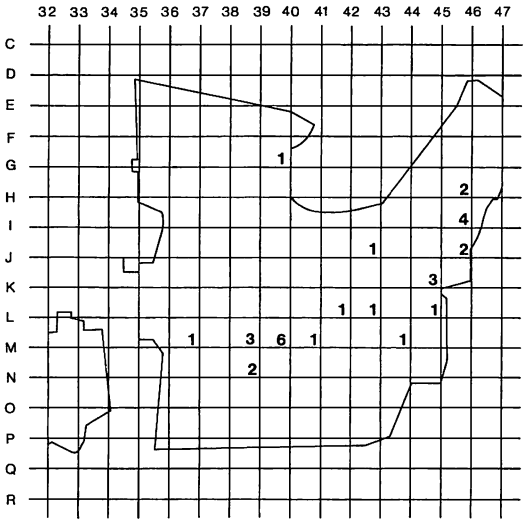
石錐



スクレイパー

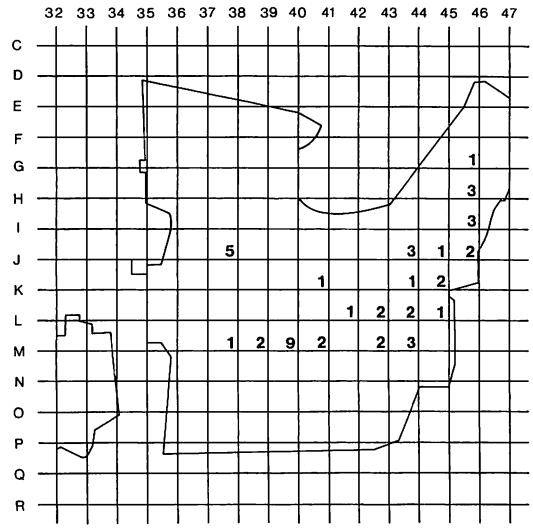


Rフレイク

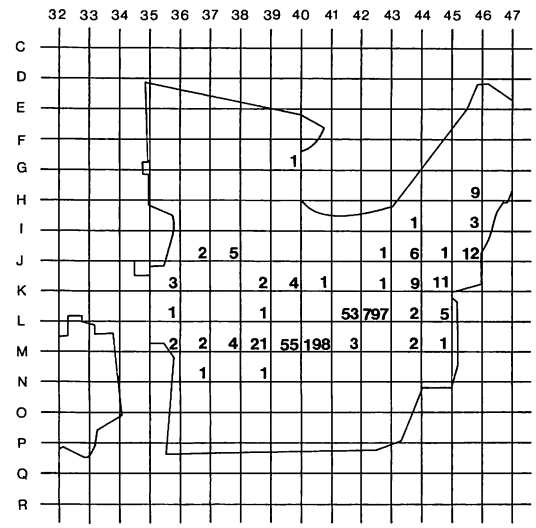


図Ⅴ－２－１　包含層出土石器等分布図（１）

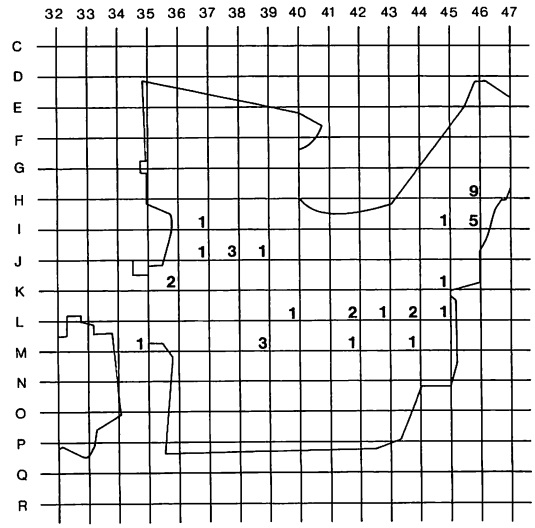
Uフレイク



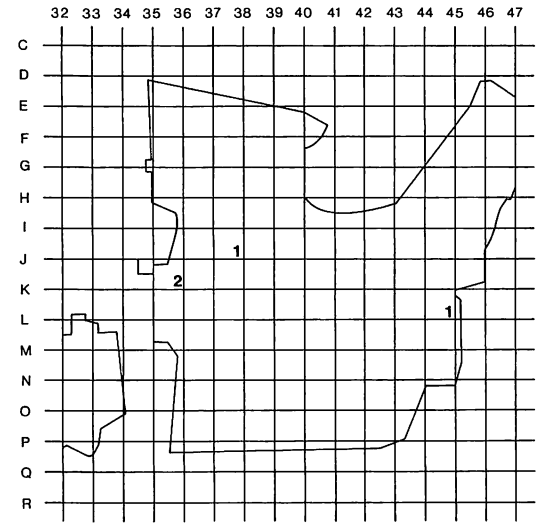
フレイク



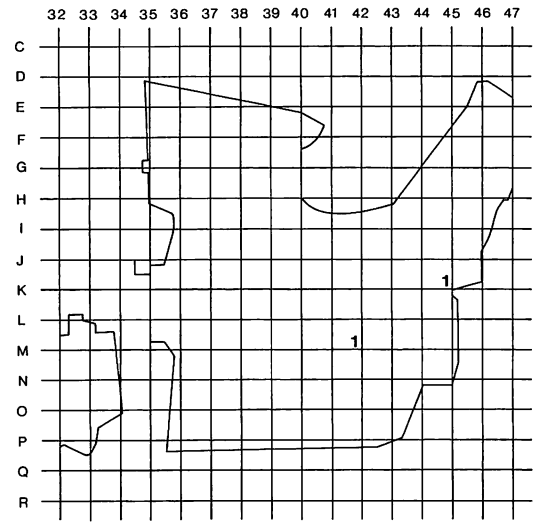
礫石器類



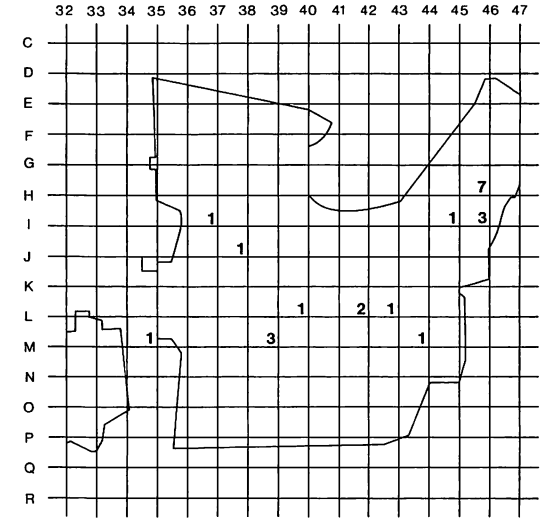
たたき石



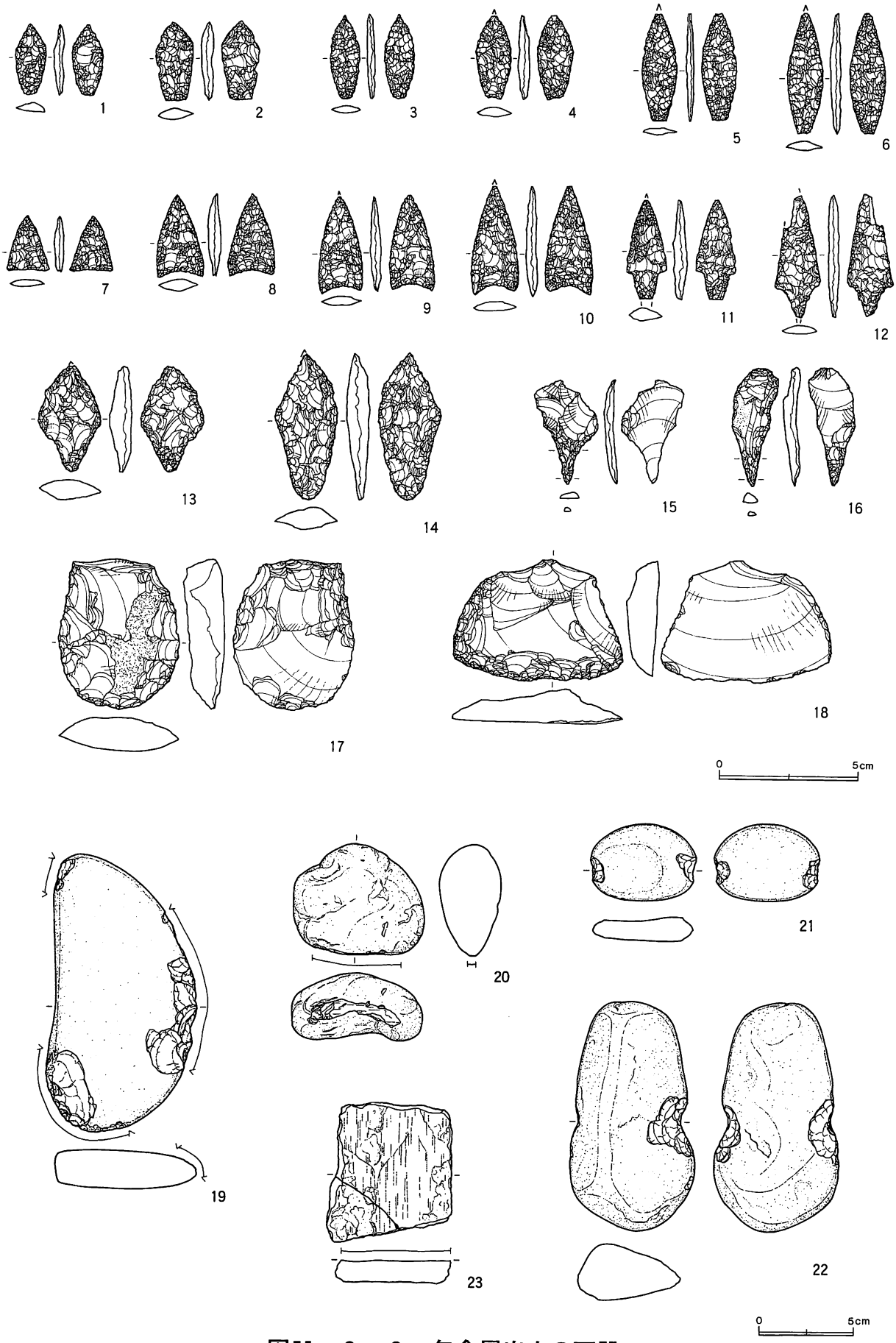
石錘



礫・礫片



図Ⅴ－２－２　包含層出土石器等分布図（２）



図Ⅴ－２－３　包含層出土の石器

表Ⅴ－2－2　包含層出土掲載石器一覧

番号	分　類	出土地点・番号	層位	長さ×幅×厚さ（cm）	重量（g）	石　質	備　考
1	石　鏃	K42b・2	Ⅴc層	2.51×1.10×0.28	0.7	黒曜石	F－9～11周辺
2	石　鏃	F38d・1	Ⅴ層下	2.80×1.31×0.41	1.4	黒曜石	
3	石　鏃	H37b・1	Ⅴ層下	2.99×1.09×0.25	0.8	黒曜石	
4	石　鏃	G45b・6	Ⅴc層	2.91×1.25×0.36	1.2	黒曜石	
5	石　鏃	I37a・5	Ⅴ層下	3.80×1.25×0.23	1.0	黒曜石	
6	石　鏃	K35c・2	Ⅴb層	4.22×1.30×0.36	1.7	黒曜石	
7	石　鏃	I36d・2	Ⅴb層	1.95×1.51×0.29	0.6	黒曜石	
8	石　鏃	F39a・1	Ⅲ層	2.92×1.71×0.40	1.6	黒曜石	
9	石　鏃	F39b・1	Ⅴa層	3.30×1.59×0.35	1.6	黒曜石	
10	石　鏃	L34b・1	Ⅴ層上	3.82×1.70×0.32	2.1	黒曜石	
11	石　鏃	O41b・1	Ⅴ層上	3.50×1.41×0.47	1.7	黒曜石	
12	石　鏃	N42b・1	Ⅴb層	4.30×1.61×0.36	2.0	黒曜石	欠損品
13	石槍ナイフ	J41a・1	Ⅴb層	3.78×2.21×0.73	4.5	黒曜石	
14	石槍ナイフ	F37c・1	Ⅴ層下	5.20×2.20×0.83	7.3	黒曜石	
15	石　錐	H45b・1	Ⅴb層	3.70×2.28×0.32	1.7	黒曜石	
16	石　錐	J44d・9	Ⅴb層	4.20×1.50×0.42	2.2	黒曜石	
17	スクレイパー	J38b・2	風倒木痕	5.39×4.35×1.25	34.5	頁岩	
18	スクレイパー	I37b・6	Ⅴ層下	4.31×6.09×1.23	30.6	頁岩	
19	たたき石	I37c・2	Ⅴ層下	14.9×8.0×2.05	4.3	緑色泥岩	
20	すり石	I38a・2	Ⅴb層	5.90×7.0×3.60	164.0	凝灰岩	
21	石　錘	J44a・1	Ⅴc層	4.17×5.67×1.33	47.0	砂岩	
22	石　錘	L41b・1	Ⅴc層	12.2×6.70×3.30	370.0	珪岩	
23	砥　石	K43d・2	Ⅴb層	(7.50)×(6.70)×(1.25)	(85.0)	凝灰質砂岩	2点接合　破片

石　錐（図Ⅴ－2－3－15・16／表Ⅴ－2－2／図版31）

4点出土している。石材はすべて黒曜石である。2点図示した。15・16は刺突部を顕著に作り出したもの。15は表面のみの調整で、刺突部以外は剥片の形状を変えていない。16は両面を調整しているが、表面に自然面を、裏面に打瘤を残す。側辺に使用による潰れが見られる。

スクレイパー（図Ⅴ－2－3－17・18／表Ⅴ－2－2／図版32）

7点出土している。石材は図示した2点が頁岩で、他は黒曜石である。17は石べらと称されるもの。上面に打面が残る剥片の周縁を弧状に加工し、粗く調整して刃部を設けている。表面に自然面を残す。18は素材の形状を大きく変えていないもの。横長の剥片の下縁と左側縁に急角度の刃部を設けている。右側縁にも使用痕が見られる。

(2)　礫石器

たたき石（図Ⅴ－2－3－19／表Ⅴ－2－2／図版32）

4点出土している。1点図示した。19は扁平礫の周縁部にたたき痕が見られるもの。たたかれている部分に打ち欠きの痕跡が残ることから、石斧未製品の可能性もある。石材は緑色泥岩である。

すり石（図Ⅴ－2－3－20／表Ⅴ－2－2／図版32）

1点のみ出土した。20は亜円礫の下面を擦っているもの。すり面は素材礫の形状のため、直線的ではなく、湾曲している。石材は凝灰岩である。

石　錘（図Ⅴ－2－3－21・22／表Ⅴ－2－2／図版32）

2点出土した。21は小型の扁平礫を素材とし、長軸の両端に打ち欠きをもつもの。表裏両面から打ち欠いている。22はやや厚みのある亜円礫を素材とし、短軸の両端に打ち欠きをもつもの。石材は21が砂岩、22が珪岩である。

砥　石（図Ⅴ－2－3－23／表Ⅴ－2－2／図版32）

3点出土している。23は破片で、2点が接合したもの。板状礫の表面を砥面として使用している。石材は凝灰質砂岩である。（芝田）

Ⅵ　自然科学的手法による分析

1　放射性炭素年代測定

(株)地球科学研究所

報告内容の説明

14C age (y BP) ： 14C 年代　"measured radiocarbon age"
試料の 14C／ 12C 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
半減期はリビーの5568年を用いた。

補正14C age (y BP) ： 補正 14C 年代　"conventional radiocarbon age"
試料の炭素安定同位体比(13C／ 12C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
14C／ 12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料の　13 C値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代値である。
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

δ 13C (permil) ： 試料の測定 14C／ 12C 比を補正するための 13C／ 12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)
で表現する。

$$\delta\ ^{13}C\ (‰) = \frac{(\ ^{13}C/\ ^{12}C)[試料] - (\ ^{13}C/\ ^{12}C)[標準]}{(\ ^{13}C/\ ^{12}C)[標準]} \times 1000$$

ここで、 13C／ 12C [標準] ＝ 0.0112372である。

暦 年 代 ： 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を
算出する。　具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴのU-Th年代と
14 C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。 最新のデータベース(
"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))
により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

"The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results."

測定方法などに関するデータ

測定方法　AMS　：　加速器質量分析

Radiometric　：　液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法

処理・調製・その他　：　試料の前処理、調製などの情報

前処理　acid-alkali-acid ： 酸 - アルカリ - 酸洗浄
acid washes ： 酸洗浄
acid etch ： 酸によるエッチング
none ： 未処理

調製、その他

Bulk-Low Carbon Material ： 低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction ： 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction ： 木材のセルローズ抽出

Extended Counting ： Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関　BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami, Fl, U.S.A 33155

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	δ13C(permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 174517	6900 ± 40	-25.7	6890 ± 40
試料名（ 21723） HAMA3-1			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など nutshell		acid/alkali/acid	
Beta- 174518	6890 ± 40	-25.3	6890 ± 40
試料名（ 21724） HAMA3-2			
測定方法、期間 AMS-Standard			
試料種、前処理など charred material		acid/alkali/acid	

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic Acidの C14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

表1　厚真町　浜厚真3遺跡　放射性炭素年代測定分析試料一覧

試料番号	測定方法	種類	重量（g）	遺構名	発掘区	層位	試料採取日	備考
HAMA3－1	AMS	炭化クルミ殻	0.09	F－8※	K－43	Vc層上面	2002. 9.26	フローテーション後に回収
HAMA3－2	AMS	炭化材	0.05	F－11※	K－41・42	Vc層上面	2002. 9.30	フローテーション後に回収

※F－8・11とも焼土跡

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.7:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-174517**

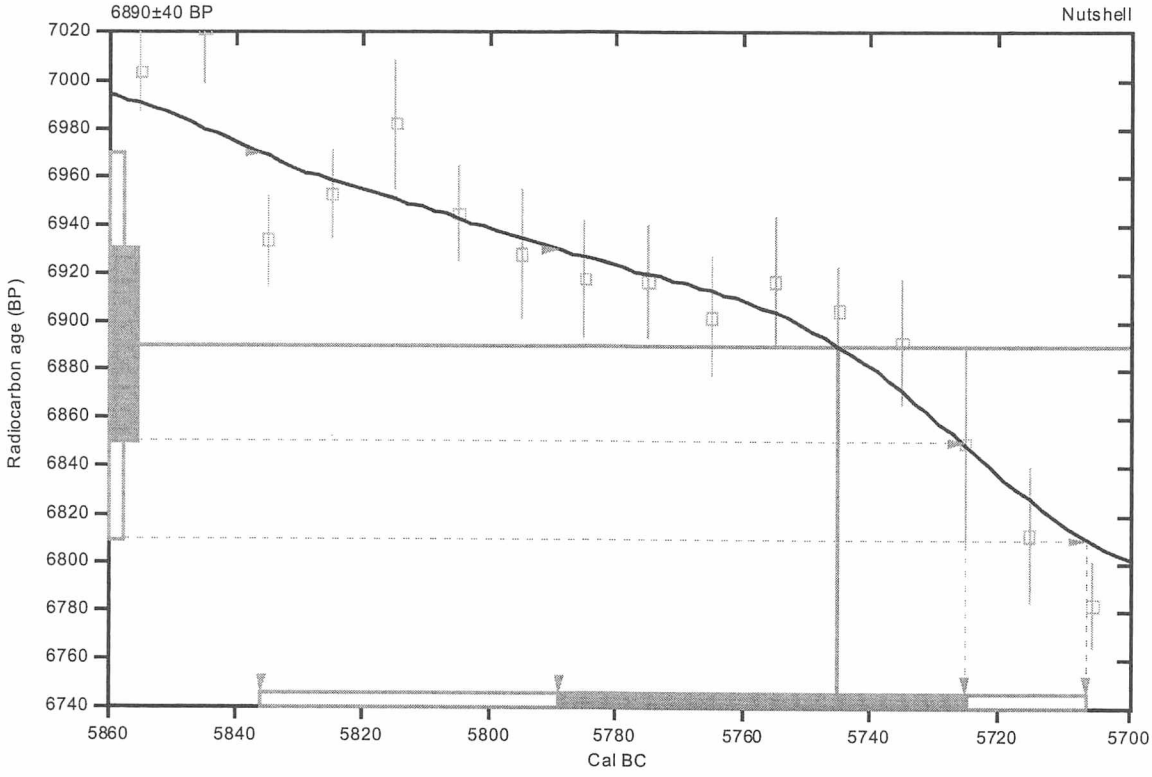
Conventional radiocarbon age: **6890±40 BP**

2 Sigma calibrated result: (95% probability) **Cal BC 5840 to 5710 (Cal BP 7790 to 7660)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 5740 (Cal BP 7700)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal BC 5790 to 5720 (Cal BP 7740 to 7680)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.3:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-174518**

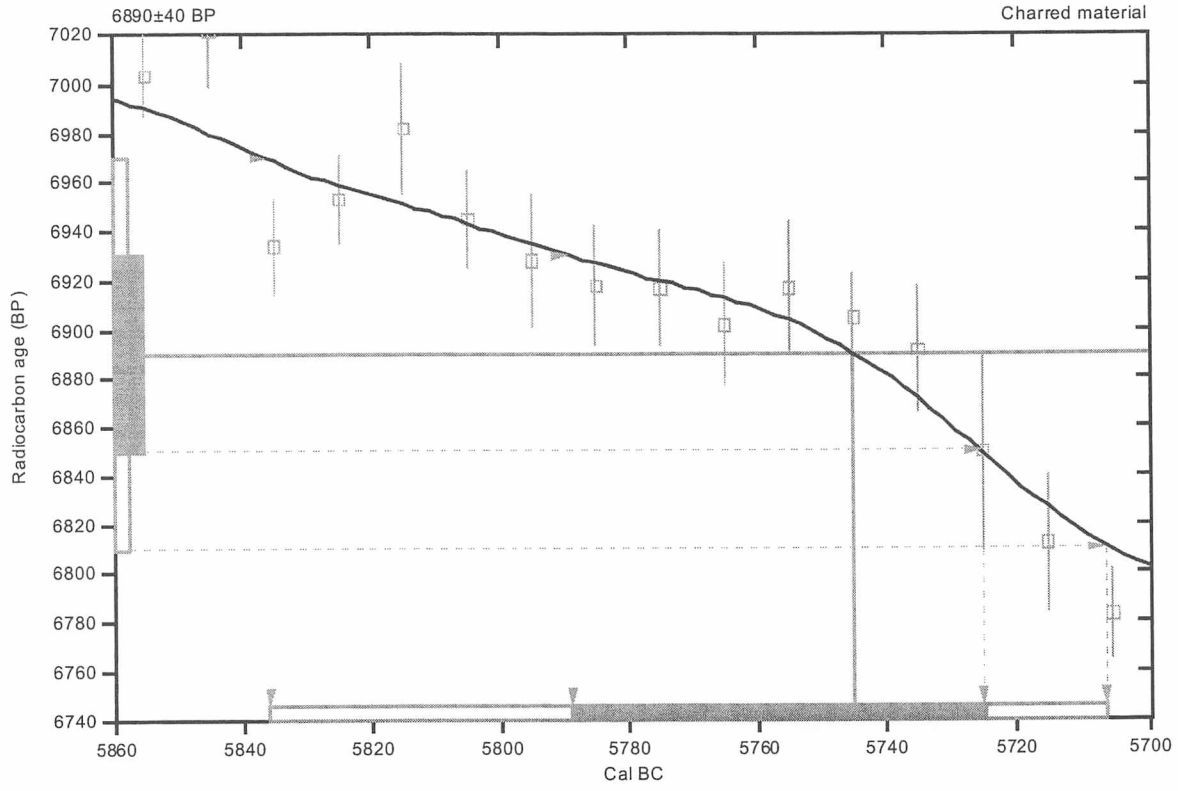
Conventional radiocarbon age: **6890±40 BP**

2 Sigma calibrated result: (95% probability) **Cal BC 5840 to 5710 (Cal BP 7790 to 7660)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 5740 (Cal BP 7700)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal BC 5790 to 5720 (Cal BP 7740 to 7680)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

2　浜厚真３遺跡の古植生について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

浜厚真３遺跡は、北海道勇払郡厚真町の浜厚真地区に所在し、現海岸線から２ｋｍほど内陸の台地縁辺部（現標高７～12m）に位置する。調査区の地形は、北側と南西側に台地、南東側に低湿地がみられ、それらの間は平坦部となっている。今回の発掘調査により、縄文時代早期の焼土や縄文時代中期後半～後期初頭の可能性があるＴピットなど、縄文時代を中心とした遺構・遺物が検出されている。このうち、Ｔピットの多くは平坦部で検出されている。

今回の分析調査では、縄文時代早期～晩期の植生変遷とともに、Ｔピット周辺の古植生に関する情報を得るため、花粉分析と植物珪酸体分析を行った。

１．試　料

調査区内の基本土層は大きくⅠ層～Ⅹ層に区分され、主に火山灰やそれを母材とする土壌により構成される。Ｔピットは、縄文時代中期後半～後期初頭に堆積したとみられるⅤ層から掘り込まれている。Ⅴ層は場所により、Ｖａ層・Ｖｂ層・Ｖｃ層に細分される。このうち、Ｖａ層はＴピットが掘り込まれた層位、Ｖｂ層は支笏第１テフラ（Spfa-1）の二次堆積と推測されている。またＶｃ層は、東釧路Ⅱ式の出土する縄文時代早期の遺物包含層で、上面～上位で焼土が確認された。今回の調査では、基本土層の観察されたＬ-33地点が基本土層試料採取地点とされた。なお、本地点ではＶａ層とＶｂ層の間にＶａ層下位がもうけられている。試料は、Ｖａ層・Ｖａ層下位・Ｖｂ層・Ｖｃ層から３点ずつ、合計12点が採取された。

一方、Ｔピットについては、構築から埋積開始までの情報を包含すると思われる底部の土壌を分析対象とし、５基（ＴＰ-75・76・91・100・114）のＴピットから１点ずつ、計５点の土壌試料が採取された。このうち、ＴＰ-75は調査区北側に位置する南向きの斜面下方、ＴＰ-114は調査区南側に位置する北向きの斜面下方、他の３基は平坦部に構築されている。なお試料の採取は、発掘担当者により現代の土壌などが混入しないように注意深く行われた。

分析試料は、基本土層試料およびＴピット底部試料の合計17点である（表１）。

表１　分析試料

試料番号	採取地点	層　位	推　定　時　期	備　考	分析項目	
					花粉	ＰＯ
1	Ｌ-33	Ｖａ層①	縄文時代後期～晩期	基本土層	●	●
2	Ｌ-33	Ｖａ層②	縄文時代中期～後期		●	●
3	Ｌ-33	Ｖａ層③			●	●
4	Ｌ-33	Ｖａ層下位①	縄文時代前期～後期		●	●
5	Ｌ-33	Ｖａ層下位②			●	●
6	Ｌ-33	Ｖａ層下位③			●	●
7	Ｌ-33	Ｖｂ層①	縄文時代前期～中期		●	●
8	Ｌ-33	Ｖｂ層②			●	●
9	Ｌ-33	Ｖｂ層③			●	●
10	Ｌ-33	Ｖｃ層①	縄文時代早期		●	●
11	Ｌ-33	Ｖｃ層②			●	●
12	Ｌ-33	Ｖｃ層③			●	●
13	ＴＰ-75	底面	縄文時代中期後半～後期初頭	Ｔピット	●	●
14	ＴＰ-76	底面			●	●
15	ＴＰ-91	底面			●	●
16	ＴＰ-100	底面			●	●
17	ＴＰ-114	底面			●	●

ＰＯ：植物珪酸体分析

2．分析方法

(1) 花粉分析

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(2) 植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，１分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作成する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

3．結　果

(1) 花粉分析

結果を表２、図１に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。

基本土層の試料番号６～12（Ｖｃ層～Ｖａ層下位）についてみると、花粉化石・シダ類胞子の産出が少なく、保存状態も悪い。木本花粉ではコナラ亜属・ハンノキ属など、草本花粉ではイネ科・キク亜科などがわずかに認められる程度である。

試料番号１～５（Ｖａ層～Ｖａ層下位）では、保存状態はやや悪いものの、草本花粉・シダ類胞子が多産する。木本花粉ではコナラ属コナラ亜属が最も多く産出し、モミ属・マツ属・ハンノキ属などが認められる。

草本花粉ではキク亜科が最も多く産出し、イネ科・カラマツソウ属・ワレモコウ属・ヨモギ属などが認められる。また、いずれの試料からもシダ類胞子が多産し、ゼンマイ属が多く認められる。

一方、Ｔピットの試料番号13～17では基本土層の試料番号６～12と同様に、花粉化石・シダ類胞子の産出が少なく、保存状態も悪い。木本花粉ではコナラ亜属など、草本花粉ではイネ科・キク亜科などがわずかに認められるに過ぎない。

表2　花粉分析結果

種　類	Va層						Vb層			Vc層			TP-75	TP-76	TP-91	TP-100	TP-114
	①	②	③	下位①	下位②	下位③	①	②	③	①	②	③	底面	底面	底面	底面	底面
試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
木本花粉																	
モミ属	27	4	9	14	9	2	2	1	−	1	−	−	2	−	1	−	−
トウヒ属	8	2	3	3	1	2	1	3	1	−	1	−	1	−	−	−	−
マツ属単維管束亜属	5	1	1	1	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
マツ属複維管束亜属	−	−	2	−	3	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
マツ属(不明)	19	22	17	26	8	2	1	−	1	1	−	1	2	−	−	−	−
コウヤマキ属	−	1	−	−	2	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
クルミ属	1	−	−	1	2	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
クマシデ属−アサダ属	1	2	1	1	1	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ハシバミ属	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
カバノキ属	−	−	2	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ハンノキ属	5	12	17	14	11	4	1	3	3	2	1	−	1	−	−	1	−
ブナ属	1	−	1	2	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−
コナラ属コナラ亜属	35	68	62	42	61	12	9	1	10	3	4	3	1	2	1	−	2
ニレ属−ケヤキ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
カエデ属	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
シナノキ属	−	1	1	1	−	2	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−
ウコギ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−
ツツジ科	−	3	−	1	6	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
トネリコ属	−	−	−	1	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
草本花粉																	
ガマ属	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
イネ科	27	27	45	35	22	5	3	3	4	1	1	5	3	4	2	4	4
カヤツリグサ科	1	3	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
アヤメ科	2	2	1	−	1	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
クワ科	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−
サナエタデ節−ウナギツカミ節	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
タデ属	3	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ナデシコ科	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
カラマツソウ属	20	34	28	13	18	3	−	−	1	−	−	−	−	−	−	2	−
キンポウゲ科	−	2	−	−	1	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−
ワレモコウ属	74	25	15	10	2	3	3	−	−	2	1	−	1	−	−	−	1
ソラマメ属	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−
セリ科	24	3	4	3	3	3	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
リンドウ属	1	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ネナシカズラ属	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
シソ科	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
オミナエシ属	6	1	−	1	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ツリガネニンジン属−ホタルブクロ属	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
ヨモギ属	11	18	14	13	9	9	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
キク亜科	256	229	168	166	80	29	8	8	3	3	3	2	5	−	2	1	3
タンポポ亜科	2	1	8	12	18	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1
不明花粉	5	3	5	3	6	7	−	−	−	−	−	1	−	−	1	−	1
シダ類胞子																	
ヒカゲノカズラ属	1	2	−	−	−	1	−	−	−	1	1	1	−	−	2	−	1
ゼンマイ属	170	133	147	173	156	32	12	4	9	8	4	2	39	1	−	2	2
他のシダ類胞子	502	444	710	398	238	85	41	19	18	18	16	6	36	39	47	20	8
合　計																	
木本花粉	103	116	116	108	109	29	15	9	19	8	6	6	7	2	2	1	2
草本花粉	428	354	286	256	156	56	15	11	9	6	6	8	11	4	4	8	9
不明花粉	5	3	5	3	6	7	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1
シダ類胞子	673	579	857	571	394	118	53	23	27	27	21	9	75	40	49	22	11
総計(不明を除く)	1204	1049	1259	935	659	203	83	43	55	41	33	23	93	46	55	31	22
その他の微化石																	
ミズゴケ属	3	10	17	4	4	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−

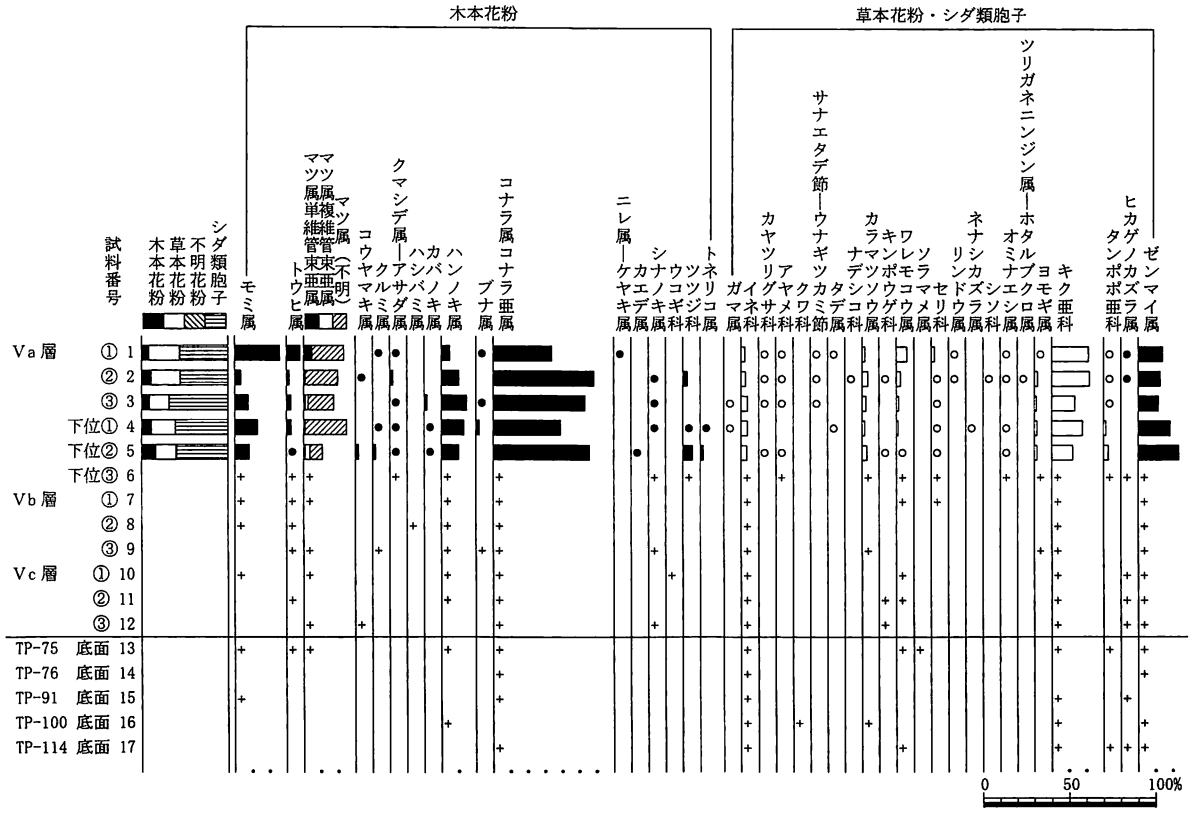


図１　花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

(2)　植物珪酸体分析

結果を表３、図２に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

Ｖ層中では、植物珪酸体の産状に層位的な変化が見られる。

試料番号12～８（Ｖｃ層～Ｖｂ層）では、下位でイチゴツナギ亜科の産出が目立つが、上位に向かって減少し、代わってクマザサ属を含むタケ亜科が増加する傾向が認められる。またヨシ属、ススキ属なども認められる。

試料番号７～１（Ｖｂ層～Ｖａ層）では下位と同様な種類が認められるものの、クマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、イチゴツナギ亜科がこれに続く。ヨシ属、ススキ属などはわずか、あるいは稀に認められるに過ぎない。

一方、Ｔピット５基（ＴＰ-75・76・91・100・114）では、いずれもクマザサ属を含むタケ亜科およびイチゴツナギ亜科の産出が目立つ。このうち、試料番号13（ＴＰ-75）・14（ＴＰ-76）ではクマザサ属の機動細胞珪酸体、試料番号15（ＴＰ-91）ではイチゴツナギ亜科が目立つ。

このように、それぞれのＴピットによる産状の違いは見られるものの、斜面下方と平坦部による産状の違いは明瞭ではない。

表３　植物珪酸体分析結果

種類	Ｖａ層						Ｖｂ層		
試料番号	①	②	③	下位①	下位②	下位③	①	②	③
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
イネ科葉部短細胞珪酸体									
タケ亜科クマザサ属	44	29	10	17	18	11	16	2	4
タケ亜科	210	231	189	212	209	147	152	40	69
ヨシ属	3	2	2	4	－	2	4	1	7
ウシクサ族ススキ属	－	－	－	－	－	－	2	－	－
イチゴツナギ亜科	77	48	42	31	36	24	26	27	83
不明キビ型	38	14	18	24	26	34	25	34	71
不明ヒゲシバ型	9	1	5	7	5	8	1	1	3
不明ダンチク型	4	1	5	5	4	10	2	4	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
タケ亜科クマザサ属	52	46	39	36	42	37	34	5	6
タケ亜科	47	50	66	66	67	68	60	15	23
ヨシ属	1	－	－	－	－	2	3	－	－
ウシクサ族	2	－	－	－	－	－	－	－	－
不明	7	7	4	2	6	7	5	2	1
合計									
イネ科葉部短細胞珪酸体	385	326	271	300	298	236	228	109	238
イネ科葉身機動細胞珪酸体	109	103	109	104	115	114	102	22	30
総計	494	429	380	404	413	350	330	131	268

表３のつづき

種類	Ｖｃ層			ＴＰ-75	ＴＰ-76	ＴＰ-91	ＴＰ-100	ＴＰ-114
試料番号	①	②	③	底面	底面	底面	底面	底面
	10	11	12	13	14	15	16	17
イネ科葉部短細胞珪酸体								
タケ亜科クマザサ属	2	12	2	15	4	4	3	4
タケ亜科	70	85	73	146	158	135	122	53
ヨシ属	6	1	1	－	－	7	2	－
ウシクサ族ススキ属	11	－	－	－	3	5	2	－
イチゴツナギ亜科	144	180	185	64	63	181	39	27
不明キビ型	81	45	53	35	34	55	46	17
不明ヒゲシバ型	3	6	4	11	7	7	1	4
不明ダンチク型	9	3	4	10	9	15	4	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
タケ亜科クマザサ属	3	10	7	48	41	16	10	5
タケ亜科	15	20	17	61	50	67	83	15
ヨシ属	－	－	－	－	－	－	2	－
ウシクサ族	－	－	－	－	－	－	－	－
不明	4	5	12	7	13	23	27	10
合計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	326	332	322	281	278	409	219	109
イネ科葉身機動細胞珪酸体	22	35	36	116	104	106	122	30
総計	348	367	358	397	382	515	341	139

4．考　察

(1)Ⅴ層中の植生変遷

Ｌ-33地点のＶｃ層上部～Ｖａ層下位下部にかけては、花粉化石の検出は少なく、その保存状態も悪かった。しかし、植物珪酸体は豊富に検出されたことから、花粉が土壌中に取り込まれにくかったとは考えにくい。一般的に花粉・シダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村，1967；徳永・山内，1971）。この点を考慮すれば、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が酸化状態による経年変化により分解・消失したと考えられる。したがって、Ｖｃ層上部～Ｖａ層下位下部は好気的環境下で堆積したと推測される。植物珪酸体の産状からは、クマザサ属を含むタケ亜科、イチゴツナギ亜科、ヨシ属、ススキ属などのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。湿潤な場所に生育するヨシ属がわずかに認められたことから、周囲には湿潤な場所も存在していたと思われる。

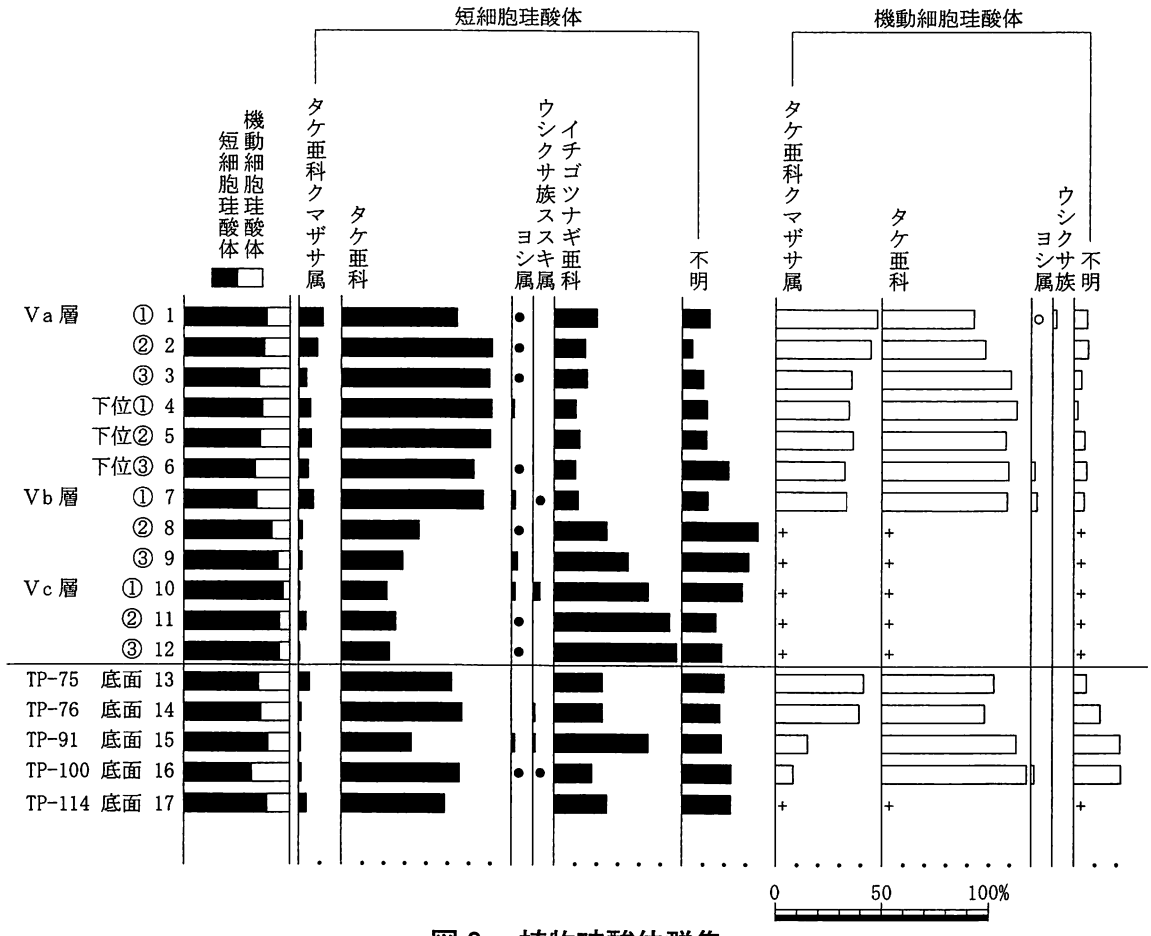


図２　植物珪酸体群集

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。
なお、●○は１％未満、＋は100個体未満の試料で検出された種類を示す。

なお、植物珪酸体の産状はＶｂ層を挟んで変化している。すなわち、Ｖｃ層～Ｖｂ層では、下位でイチゴツナギ亜科の産出が目立つが、上位に向かって減少し、代わってクマザサ属を含むタケ亜科が増加する傾向が認められる。北海道では、胆振地方などの４地域で、5,000～6,000年前にウシノケグサ亜科（イチゴツナギ亜科）からササ類にイネ科中の優占種が変化したことが報告されている（佐瀬・近藤，1974）。Ｖ層内で見られた産状の変化は、このような植生の変化を反映している可能性がある。

上位のＶａ層下位～Ｖａ層にかけては、草本花粉とシダ類胞子が多産する。草本類ではキク亜科が多産し、イネ科・カラマツソウ属・ワレモコウ属・ヨモギ属などが検出される。また、植物珪酸体ではクマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、イチゴツナギ亜科、ヨシ属、ススキ属なども認められる。これらのうち多産するキク亜科やイネ科・ヨモギ属などは、開けた明るい場所を好む種を含む分類群である。森林植生を反映する木本類の産出が少ないことから、当時の本遺跡周辺はキク亜科やイネ科などが生育する、開けた草地であったと推測される。

また、道南の花粉化石群集をみると縄文時代にはコナラ亜属やカバノキ属などの広葉樹花粉が優勢で、マツ属やトウヒ属などの針葉樹花粉を伴う組成であり（星野，1998など）、今回の場合も広葉樹花粉が優勢な結果が得られている。これより、コナラ亜属は主に本遺跡が立地する台地や周辺の山野に森林を形成していたと考えられる。コナラ亜属にはハンノキ属やクマシデ属－アサダ属、シナノキ属と同様、河畔や湿地など湿ったところを好む種類も含まれていることから、これらとともに低地縁

辺部や河畔などに生育していた可能性もある。なお、冷温帯上部にあたる北海道南部地域では、コナラ亜属などの広葉樹と針葉樹がモザイク状に混交する、針広混交林とよばれる森林が多くみられる(小野・五十嵐，1991)。検出された針葉樹花粉には標高の高い場所から飛来した可能性も残されるが、その立地を考慮すれば、当時針広混交林が存在しており、その構成種に由来する可能性が高いと思われる。

(2)　Ｔピット周辺の古植生

調査した５基のＴピット底部の腐植土層からは、花粉化石・シダ類胞子がほとんど検出されなかった。わずかに産出する試料をみると、コナラ亜属・イネ科・キク亜科などが認められ、Ｖａ層下位～Ｖａ層から得られた群集と同様の傾向を示す。しかし、産出量が少ないことから、当時の植生を推定するには充分ではないと考えられる。基本土層Ｖａ層下位より下の層準と同様に、土壌中に取り込まれた花粉が分解・消失したと考えられる。

これらのＴピットでは、いずれもクマザサ属を含むタケ亜科とイチゴツナギ亜科に由来する植物珪酸体の産出が目立った。これより、Ｔピットの周囲でもＬ-33地点と同様にイネ科植物などが生育していたことがうかがえる。なお、ＴＰ-75やＴＰ-76ではクマザサ属の機動細胞珪酸体、ＴＰ-91ではイチゴツナギ亜科が目立ち、これらのＴピットが構築された場所では局所的にイネ科の中でも優先する種類が異なっていた可能性がある。ただし、斜面下方と平坦部による産状の違いは明瞭ではないため、斜面下方と平坦部でほぼ同様な植生であったと思われる。

ところで、静岡県三島市の下原遺跡や加茂ノ洞Ｂ遺跡では、旧石器時代の陥穴状土坑がススキ属などの草本類が地面を覆う、土坑の存在の判りにくい場所に構築された可能性が指摘された（植木ほか，1996)。本遺跡で産出の目立ったササ類やイチゴツナギ亜科などの草本類は、他の種類の草本類とともに群落を作って、地表面を覆うように生育する。そのため、上記の調査例同様に、本遺跡のＴピットも斜面下方や平坦面の中で、草本類により土坑の存在がわかりにくい場所を選んで構築された可能性がある。

【引用文献】

星野フサ（1998）北海道の植生史(2)－南北海道．図説日本列島植生史，安田喜憲・三好教夫編，ｐ.51-61，朝倉書店.

近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，ｐ.31-64.

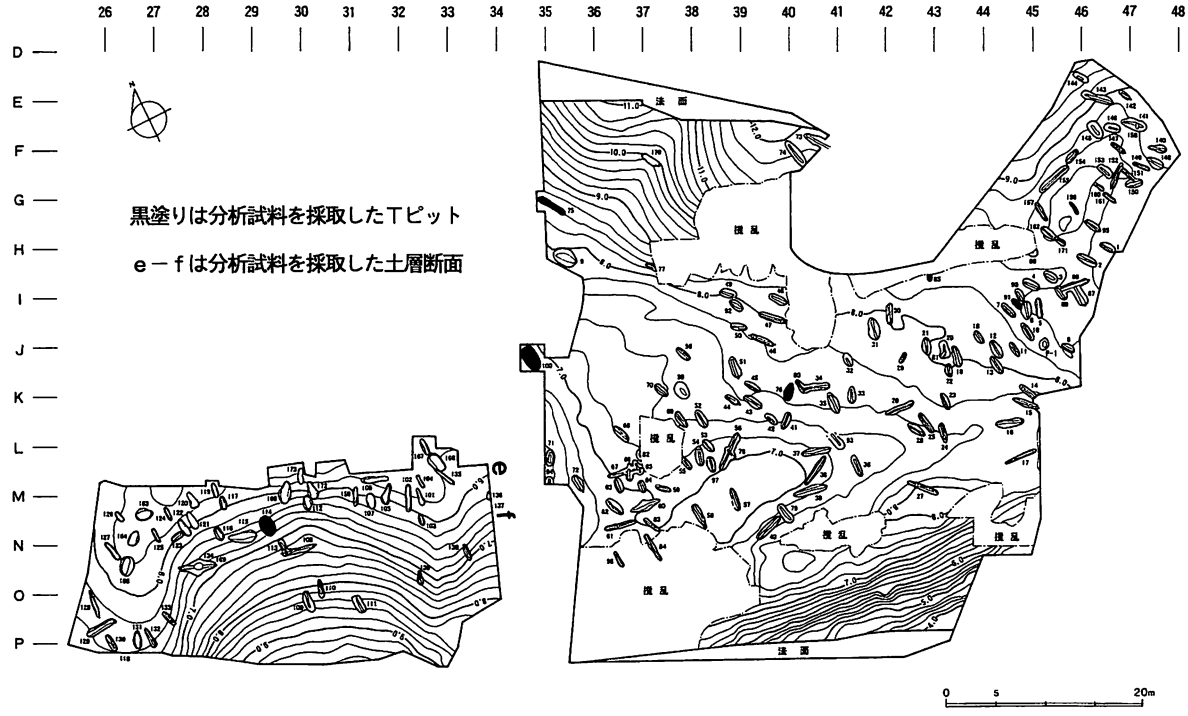
中村　純（1967）花粉分析．232ｐ.，古今書院.

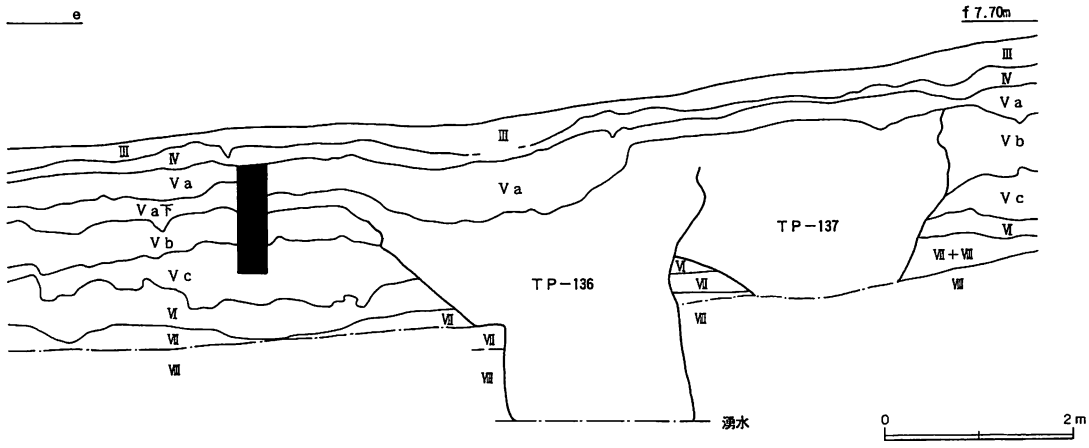
小野有五・五十嵐八枝子（1991）北海道の自然史　氷期の森林を旅する．219ｐ.，北海道大学図書刊行会.

佐瀬　隆・近藤錬三（1974）北海道の埋没火山灰土腐植層中の植物珪酸体について．帯広畜産大学研究　報告，８，ｐ.147-183.

徳永重元・山内輝子（1971）花粉・胞子.「化石の研究法」，ｐ.50-73，共立出版株式会社.

植木真吾・馬場健司・中根秀二（1996）陥穴状土坑をとりまいた古環境．静岡県埋蔵文化財調査研究所　調査報告第72集「下原遺跡Ⅱ」，ｐ.62-86，静岡県埋蔵文化財調査研究所.


26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48
D E F G H I J K L M N O P
黒塗りは分析試料を採取したTピット
e－fは分析試料を採取した土層断面
e
f
法面
撹乱
0 5 20m


e
f 7.70m
Ⅲ
Ⅳ
Va
Va下
Vb
Vc
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
TP−136
TP−137
湧水
0 2m

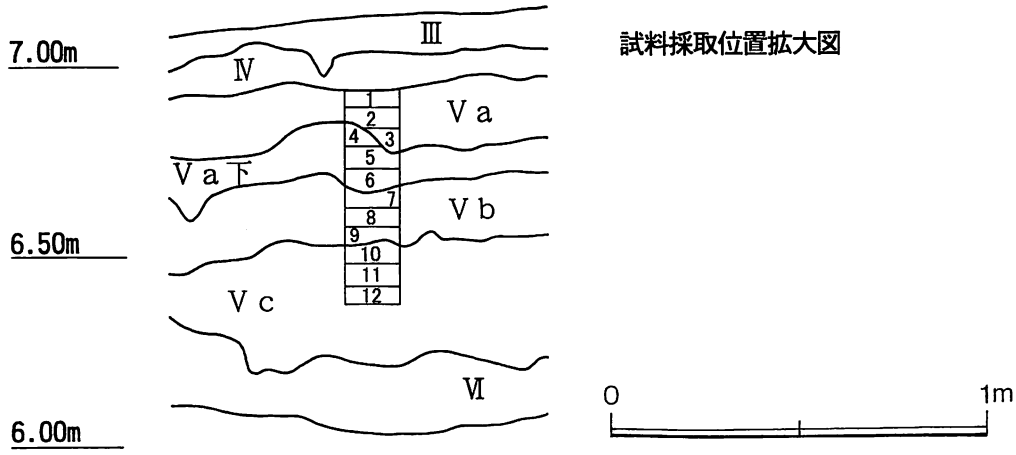
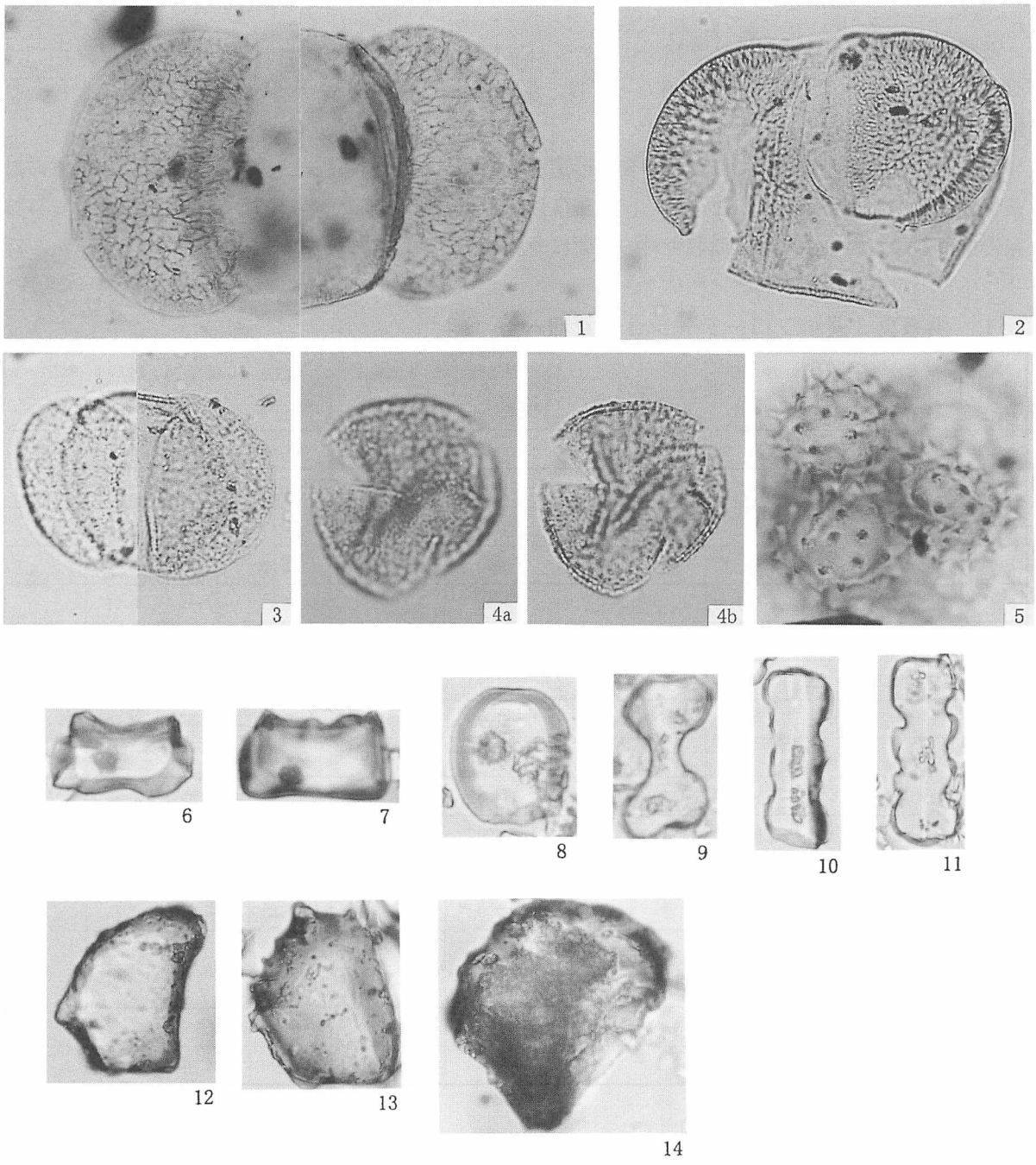

7.00m
6.50m
6.00m
Ⅲ
Ⅳ
Va
Va下
Vb
Vc
Ⅵ
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
試料採取位置拡大図
0 1m

図３　分析試料採取位置

図版１　花粉化石・植物珪酸体



1．モミ属(Va層①;1)
2．トウヒ属(Va層①;1)
3．マツ属(Va層①;1)
4．コナラ属コナラ亜属(Va層③;3)
5．キク亜科(Va層①;1)
6．クマザサ属短細胞珪酸体(Va層①;1)
7．クマザサ属短細胞珪酸体(TP-75;13)
8．ヨシ属短細胞珪酸体(Va層③;3)
9．ススキ属短細胞珪酸体(TP-91;15)
10．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(Va層③;3)
11．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(TP-91;15)
12．クマザサ属機動細胞珪酸体(Va層①;1)
13．クマザサ属機動細胞珪酸体(TP-75;13)
14．ヨシ属機動細胞珪酸体(Va層③;3)

3　浜厚真３遺跡のフローテーション資料

浜厚真３遺跡の焼土（Ｆ－２～14）について、炭化種子等の微細遺物を回収する目的でフローテーション作業を行った。回収作業にあたっては、浮遊物に2.00㎜と0.425㎜の篩を、沈殿物に1.40㎜の篩をそれぞれ用いた。

当センターの整理作業所でこれらの資料の選別を行ったが、時間的な制約から今年度の報告書に掲載することができなかった。このため、次年度以降発行の報告書（日高自動車道関連）に分析資料の報告を予定している。表１は回収資料の概要についてまとめたものである。　（山中）

表１　浜厚真３遺跡フローテーション資料一覧

遺構名	調　査　区	検　出 層　位	時期	水洗前乾 燥重量（ｇ）	水洗前乾 燥体積（ｌ）	浮遊物 （ｇ）	沈殿物 （ｇ）	炭化クルミ殻 （ｇ）	黒曜石フレイク （点）
Ｆ－２	Ｉ45ｃ	Ｖｃ層上面	縄文時代早期後半	2900	4	18.95	106.36	0.07	
Ｆ－３	Ｉ43ｄ	〃	〃	1800	2	10.34	73.86		
Ｆ－４	Ｊ44ｄ	〃	〃	3300	4	39.45	216.96	0.05	
Ｆ－５	Ｋ44ｂ	Ｖｃ層上位	〃	3500	5	4.08	113.75		
Ｆ－６	Ｋ43ｂ	Ｖｃ層上面	〃	1800	2	2.15	96.59	0.74	
Ｆ－７	Ｉ45ｃ	〃	〃	1900	3	1.72	88.91	0.15	
Ｆ－８	Ｋ43ｂ	〃	〃	10700	17	11.69	537.71	3.28	
Ｆ－９	Ｋ41ｃ、Ｋ42ｂ	Ｖｃ層上位	〃	9500	13	8.03	431.87	0.18	
Ｆ－10	Ｋ41ｃ、Ｋ42ｂ	〃	〃	4100	11	14.55	182.74	1	
Ｆ－11	Ｋ41ｃ、Ｋ42ｂ	〃	〃	11100	15	5.48	374.44	1.55	
Ｆ－12	Ｊ44ａ	Ｖｃ層上面	〃	2400	4	1.48	105.02	0.23	
Ｆ－13	Ｌ38ｃ、Ｌ39ｂ	Ｖｃ層上位	〃	2400	4	2.21	78.15	0.24	
Ｆ－14	Ｎ38ｃ	〃	〃	2700	4	1.33	53.51	0.15	
Ｆ－12 の崩落	Ｊ44ａ・ｂ	ＴＰ－13 の覆度	〃	1900	2.5	2.94	69.14	0.05	1
Ｆ－９－11の周囲		Ｖｃ層上位	〃	－	－	－	－	6.53	
合　計				60000	90.5	124.40	2529.01	14.22	1

Ⅶ　成果と問題点

1　浜厚真３遺跡のＴピットについて

これまで述べてきたように、今回の調査では3,390㎡の調査面積から173基のＴピットが検出された。本遺跡の所在する勇払平野東部では、これまでに「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」（以下、「苫東遺跡群」）等の調査によって、500基を越すＴピットが報告されている。ここでは、本遺跡と「苫東遺跡群」のＴピットとの相違点について若干の比較を行い、本遺跡の特徴と問題点のいくつかを明確にしておきたい。なお「苫東遺跡群」の位置は、図Ⅱ－４－５に示されている（表Ⅶ－１－１の番号は図Ⅱ－４－５に対応）。

（ａ）立地

本遺跡は台地から低湿地へ地形が変化する部分に立地している。台地と低湿地の間には標高７～８ｍ（中央部の調査終了面）の平坦部が形成されており、Ｔピットの大半はこの部分で検出された。

一方の「苫東遺跡群」中の各遺跡は、いずれも厚真台地（40等のある台地）、静川台地（100等のある台地）、柏原台地（16等のある台地）、遠浅台地（81等のある台地）の頂部、標高約10ｍ以上にあり、本遺跡とは対照的な立地である。

（ｂ）分布密度

Ｔピットの分布密度は、「調査面積（㎡）／Ｔピット基数」から割り出され（厚真町教委2001）、本遺跡の場合、19.6㎡につき１基となる。

「苫東遺跡群」のうち、最もＴピットが検出されている静川14遺跡（40番）では130.1㎡につき１基、次いで多い厚真７遺跡（100番）では90.9㎡につき１基である（表Ⅶ－１－１）。台地ごとにみると、各台地とも約300～400㎡に１基検出される程度で、本遺跡に比べるといずれもＴピットの密度は低い。遺跡の範囲のとらえ方で計算上の値は変わるが、本遺跡が高密度にＴピットの分布する一帯であることは理解されよう。

本遺跡のＴピットを「苫東分類」によって分類したところ、Ｂ１型にあてはまるものが最も多く67基、次いでＡ１型、Ａ２型、Ｃ２型、Ｂ２型、Ｃ１・Ｃ型となる（表Ⅳ－２－１）。

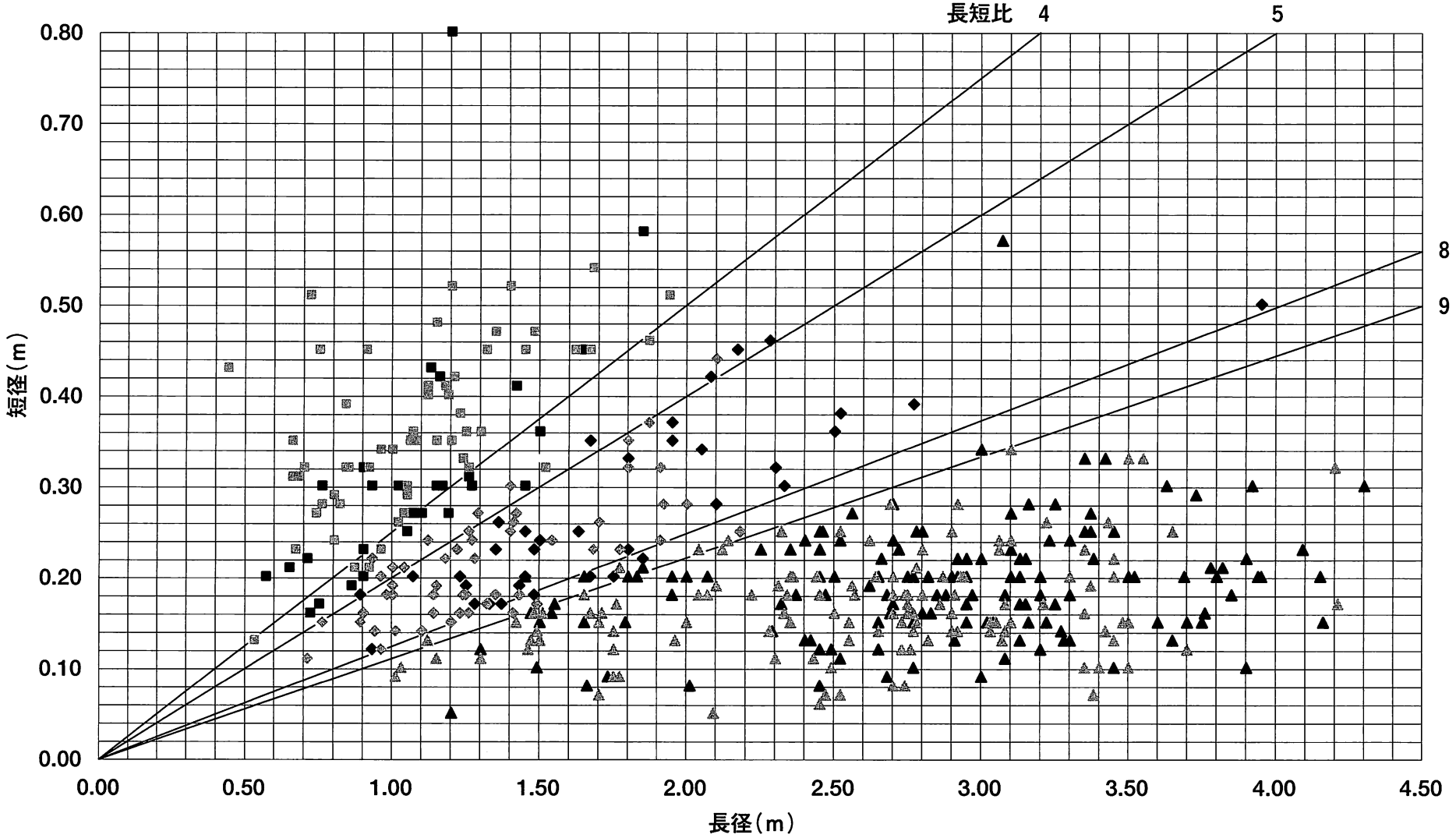
これに対して「苫東遺跡群」全体（534基）では、Ａ１型が248基で半数に近く、以下Ｂ１型、Ｃ２型、Ａ２型、Ｃ１型、Ｂ２型の順になる（表Ⅶ－１－１）。ただし、Ｂ１型とＣ２型の差はわずか３基で、台地によっては両者が逆転する場合もあり、これらはほぼ同数とみてよいであろう。

このように「苫東遺跡群」では、Ａ１型のＴピットが最も多いが、本遺跡ではＢ１型が多い。また、「苫東遺跡群」におけるＢ１型の検出数をみると、調査面積177,830㎡に対して71基にとどまる（約2,500㎡につき１基検出される程度）。これらを合わせて考えると、台地と低湿地の間に平坦部のある本遺跡のような場所に、台地頂部よりもＢ１型の多い可能性がある。

（ｃ）形態

図Ⅶ－１－１は厚真台地と静川台地のＴピット約500基について、底面の長径と短径の相関をあらわしたものである。本遺跡での相関図（図Ⅳ－２－４）と比べると、両者ともおおむね同様の分布を示しており、とくに異なるまとまりはみあたらない。

各分類についてみると、Ａ１型は、両者とも2.5～3.5m付近にまとまりがみられる。本遺跡のＡ１型は2.4～4.0mのまとまりがあったため、あえてＡ１－Ｌ型として区別したが、厚真・静川台地のものをあわせてみると、2.4mとした境界は曖昧になり、２ｍを境としてＡ１型とＡ２型に分けることで充分であったかと思われる。２ｍ以下のＡ型（Ａ２型）については、本遺跡の場合、Ｂ型との境界



△A型 ◇B型 □C型（黒塗りは厚真、薄網は静川台地）

図Ⅶ－１－１　Ｔピット底面における長径・短径の相関図（厚真・静川台地）

が不明瞭であり（図Ⅳ－２－４）、配列を想定する際には、Ａ２型、Ｂ１型をあわせて検討した方がよいと考えられる。

Ｂ型は、本遺跡では約１～２ｍに集中しているが、厚真・静川台地では約１～1.5m程度のものが多い。Ｃ型でとくに目立つ点はない。

以上、（ａ）～（ｃ）の３点について、本遺跡のいくつかの特徴を明確にしたつもりである。続いて、本遺跡のＴピットの問題点について若干ふれておきたい。

Ⅳ章でも述べたが、ＴＰ－74の覆土１・２層はＴＰ－73の掘り上げ土と推測される。一方、覆土３～10層は晩秋から春先にかけて、土壌中の水分が凍結・融解を繰り返したことにより、壁面等が崩落して堆積したものとみられる（本頁25～33行参照）。このことから、使用されなくなった74がくぼみとして確認できる時点で73は構築され、その掘り上げ土で74のくぼみを埋めたと推測される。さらに、73・74ともＡ１－Ｌ型で、規模・長軸方向についても概ね同じであることを考慮すると、74が使用されなくなってから１年ほどの間に、その代わりとして73は構築されたのではないかと考えられる。

さて本遺跡のＴピットの中には、重複するものや、隣接するＴピットの掘り上げ土によって埋められたもの（以下、埋め戻しと略）があることから、全てが同時に構築されたわけではない。ここで本遺跡における重複と埋め戻しの差を整理すると、①同分類・同規模のものは重複しないが、長軸方向をほぼ同じくして隣接する場合、埋め戻される例がある（ＴＰ－73と74等）、②異なる分類どうしでは重複する例があるが（ＴＰ－56と78等）、隣接するものに埋め戻しは確認されていない。

①と②、さらにＴピット覆土の堆積を合わせて考えると、同分類で規模・長軸方向も概ね同じＴピットどうしの隣接は、Ｔピットが埋まりきっていないため重複しないとみられ、構築の時間差が短い可能性がある。異なる分類のＴピットどうしの重複は、Ｔピットがほぼ埋まりきっているため重複するとみられ、構築の時間差が長い可能性がある。以上のことから推し量ると、本遺跡でのＴＰ－73と74（ともにＡ１－Ｌ型）の隣接等は同分類のものがほぼ同時期（時間差が短い）に構築されたことを、ＴＰ－56（Ａ１－Ｌ型）と78（Ｂ１型）の重複等は異なる分類のものが時期も異にして（時間差が長い）構築されたことをうかがわせる。

ここで本遺跡のＴピットを冬季に観察する機会があったので、簡単に紹介しておきたい。

2002年10月25日：現場調査の最終日。初霜が降りる。

2002年11月初旬（曇り、正午頃）：ＴＰ－９に枯葉がかなりたまっている。

2002年12月１日（晴れ、午前10時半頃）：調査終了面は霜柱が立ちブカブカである。観察された全てのＴピットは、壁面から崩落したⅦにより半分近くまで埋没している。埋まりきっていない壁面にはⅦの付着した霜柱がびっしりと立ち、小さな崩落を起こし続けている。まだ積雪はない。

2003年１月26日（晴れ、正午頃）：積雪20cm程度。ＴＰ－99は調査終了面から約45cm下まで埋まっている。地表はピンポールが刺さらないほど凍てついて固い。ＴＰ－145の開口部は長径が40cm程広がっていた。積雪により多くのＴピットの位置は不明である。

花粉分析・植物珪酸体分析の結果によれば（Ⅵ章２参照）、Ｔピットが構築された頃の本遺跡は、キク亜科やイネ科などの生育する開けた草地であったと推測されている。また、ヨシ属等も検出されていることから、近くに湿潤な場所があったとみられており、本遺跡の低湿地部分が該当するのであろう。すでに述べたが、浜厚真３遺跡は台地から低湿地へと変化する地形の境界部分に立地している。Ｔピットの構築にあたってこのような立地条件がいかに好適であったかは、173基にのぼるＴピットの数によって示唆されている。　（山中）

表Ⅶ－１－１　「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」Ｔピット一覧

台地	番号	遺跡名	面積（㎡）	基数	１基／㎡	Ａ１	Ａ２	Ｂ１	Ｂ２	Ｃ１	Ｃ２	Ｃ	Ｄ	不明	合計	報告書
厚真	42	静　川	18,234	41	1／444.7	17	5	6	1		12				41	Ⅷ
	40	静川14	15,608	120	1／130.1	41	13	23	8	12	23				120	Ⅵ
	41	静川15	2,187	1	1／2187.0	1									1	Ⅵ
	44	静川18	2,974	2	1／1487.0	2									2	Ⅶ
	45	静川19	2,974	11	1／270.4	5		1	4		1				11	Ⅴ
	46	静川20	2,687	17	1／158.1	9	1	1	2		4				17	Ⅳ
	47	静川21	2,544	4	1／636.0	1		3							4	Ⅳ
	48	静川22	13,064	21	1／622.1	11	4	2		1	2		1		21	Ⅸ
	49	静川23	2,770	1	1／2770.0						1				1	Ⅶ
	50	静川24	2,562	2	1／1281.0	2									2	Ⅶ
	51	静川25	8,174	13	1／628.8	12			1						13	Ⅶ
厚真台地合計			73,778	233	1／316.6	101	23	36	16	13	43		1		233	
静川	95	厚真１	5,208	12	1／434.0	5		2	1	4					12	Ⅰ
	96	厚真２	3,241	8	1／405.1	3	1	3			1				8	Ⅰ
	97	厚真３	6,366	31	1／205.4	21		2	3	4	1				31	Ⅲ
	100	厚真７	7,185	79	1／90.9	27	10	10		10	1		21		79	Ⅱ
	101	厚真８	6,829	9	1／758.8	5								4	9	Ⅰ
	103	厚真10	2,707	3	1／902.3			1	1	1					3	Ⅰ
	105	厚真12	1,812	2	1／906.0	1		1							2	Ⅲ
	106	厚真13	3,200	9	1／355.6	7	1				1				9	Ⅳ
	107	共和１	5,711	7	1／815.9	3	1			1	2				7	Ⅱ
	30	静川４	2,300	17	1／135.3	12		2	1	2					17	Ⅹ
	34	静川８	15,660	50	1／313.2	25	1	6	3		2		13		50	Ⅲ
	74	静川29	1,938	3	1／646.0	1						1	1		3	Ⅶ
	75	静川30	9,375	17	1／551.5	12		4			1				17	Ⅶ
	76	静川31	1,094	2	1／547.0	1					1				2	Ⅶ
	78	静川33	3,375	2	1／1687.5	1		1							2	Ⅶ
	79	静川34	4,713	6	1／785.5	6									6	Ⅶ
	80	静川35	3,281	1	1／3281.0	1									1	Ⅶ
静川台地合計			83,995	258	1／325.6	131	14	32	9	22	10	1	35	4	258	
柏原	15	柏原16	3,778	16	1／236.1	9		2	2		3				16	Ⅳ
	16	柏原17	5,007	4	1／1251.7	1					3				4	Ⅷ
	17	柏原18	4,904	15	1／326.9	1		1	2		9		2		15	Ⅴ
	18	柏原19	2,125	6	1／354.2	4	2								6	Ⅳ
柏原台地合計			15,814	41	1／385.7	15	2	3	4		15		2		41	
遠浅	81	遠浅１	4,243	2	1／2121.5	1								1		Ⅱ
合計			177,830	534	1／333.0	248	39	71	29	35	68	1	38	5	534	

Ｔピットの報告されていない遺跡は含めていない
番号は図Ⅱ－４－５に対応　　報告書は「苫小牧東部工業地帯の遺跡群」の報告書シリーズ名

写　真　図　版

図版２

１　Ｔピット検出状況（西から）

２　西側拡張部Ｔピット検出状況（北西から）

写　真　図　版

1　調査風景（南西から）

2　Tピット検出状況（北から）

図版 2

1　Ｔピット検出状況（西から）

2　西側拡張部Ｔピット検出状況（北西から）

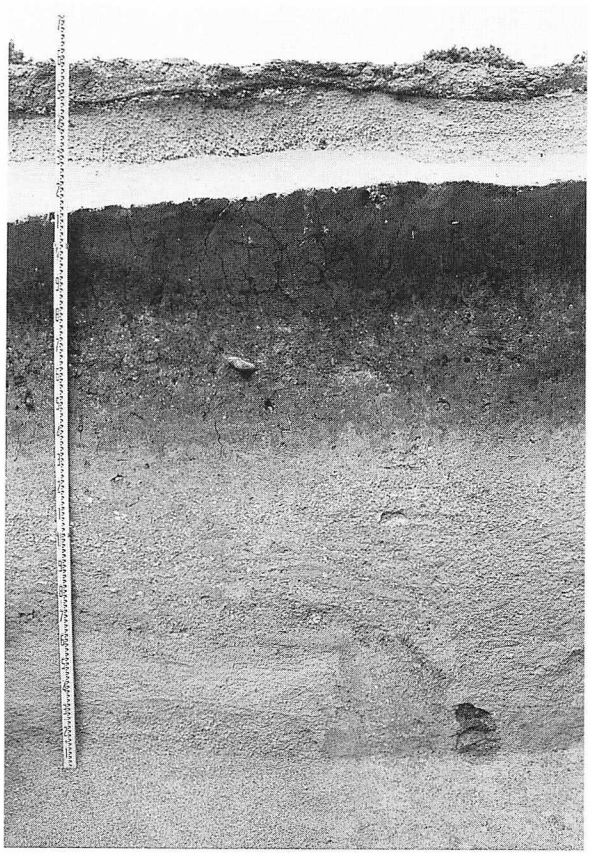
1　調査区完掘（西から）

2　東側拡張部完掘（北から）

図版 4

1　西側拡張部完掘（北から）

2　調査区全景（南西から）

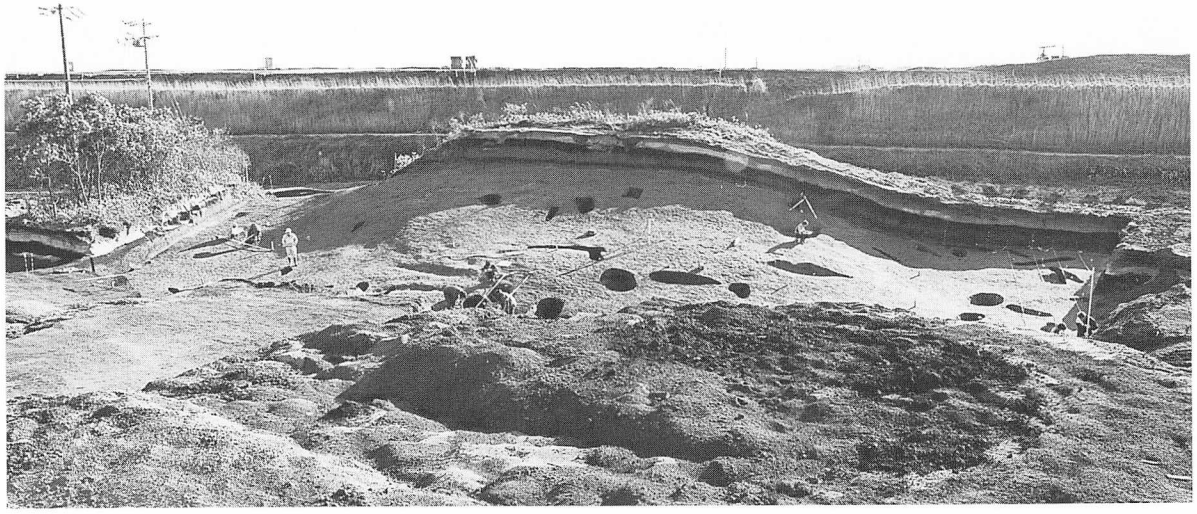


1　基本土層（南西から）

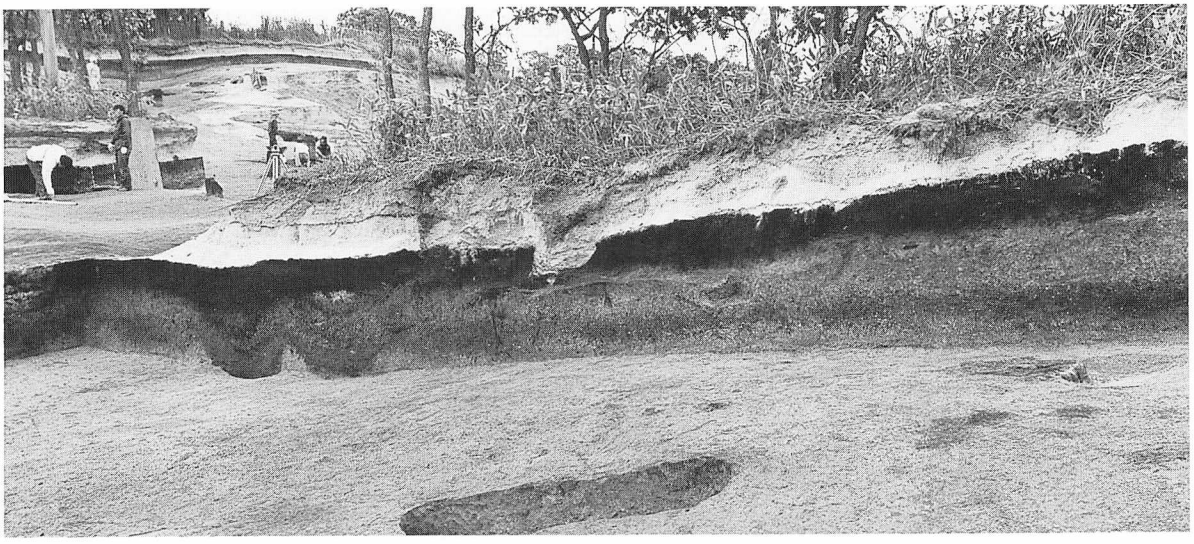
2　基本土層拡大

3　南北土層断面（南から）

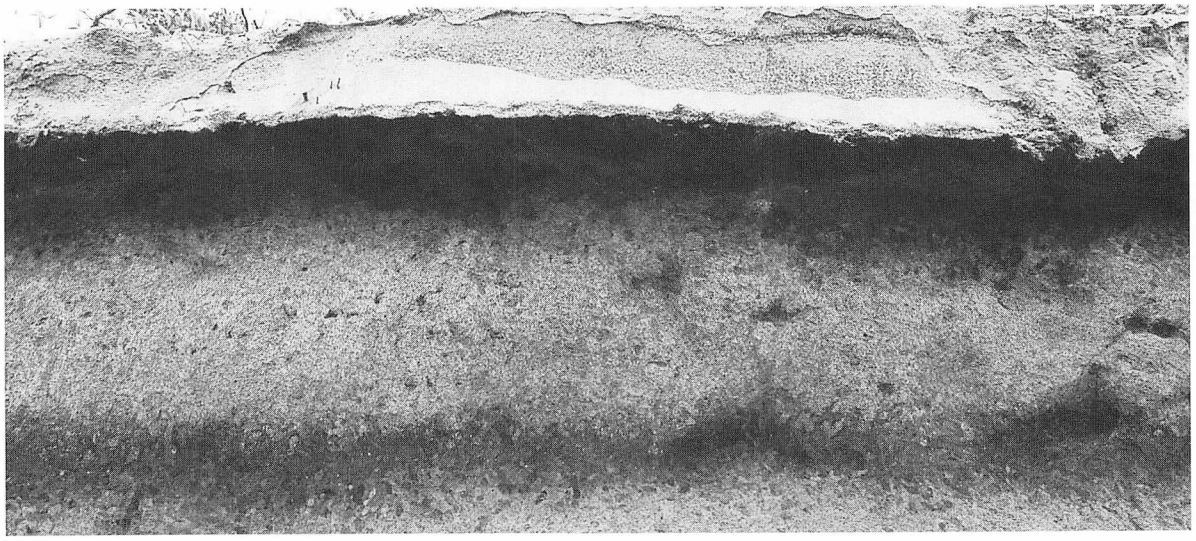
図版 6



1　西側拡張部調査区全景（北から）

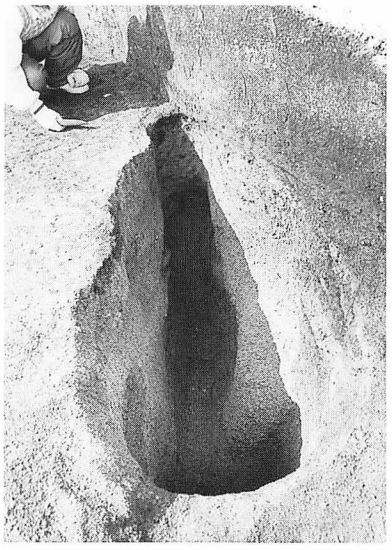


2　西側拡張部南北土層断面（西から）

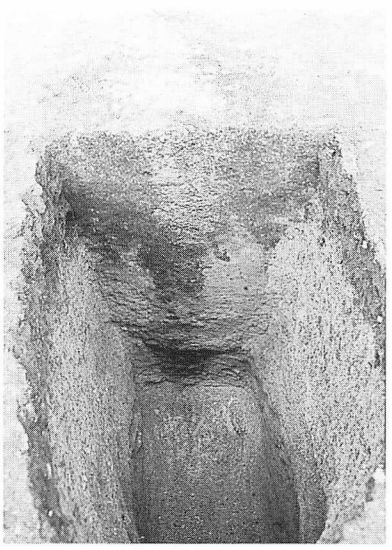


3　西側拡張部東西土層断面（北から）

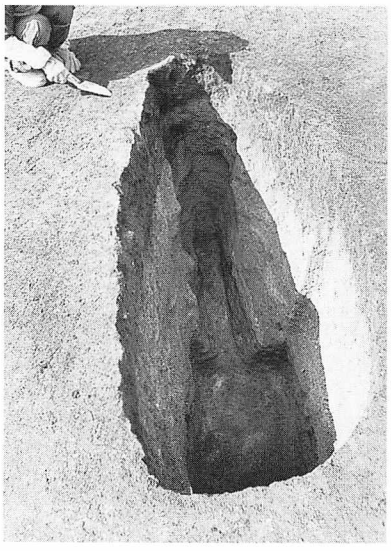
1　ＴＰ－１土層断面（南東から）



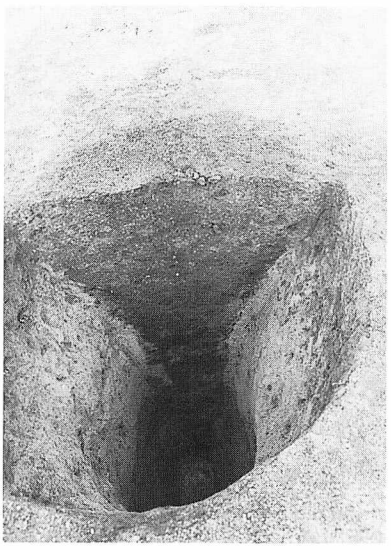
2　ＴＰ－１完掘（南東から）



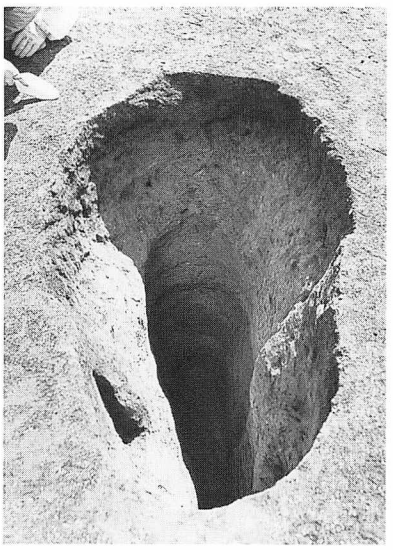
3　ＴＰ－２土層断面（南東から）



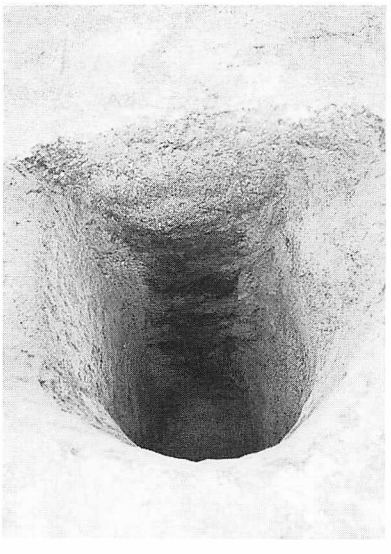
4　ＴＰ－２完掘（南東から）



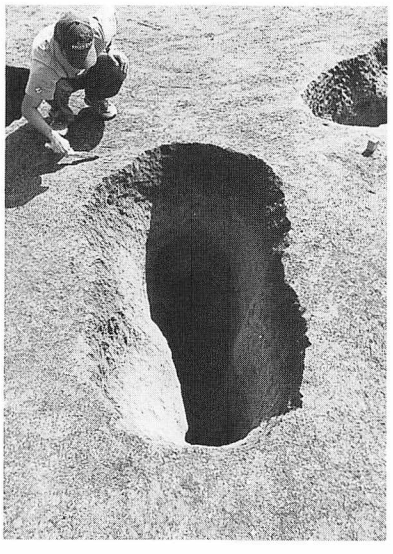
5　ＴＰ－３土層断面（南東から）



6　ＴＰ－３完掘（北から）



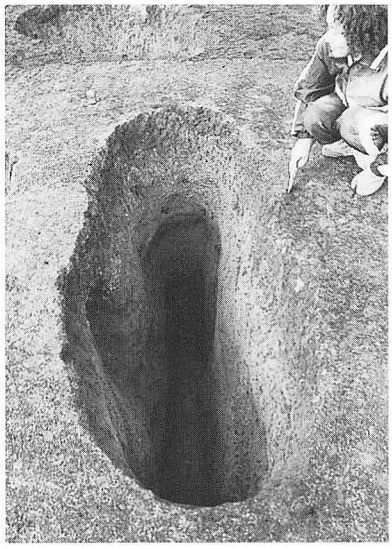
7　ＴＰ－４土層断面（南東から）



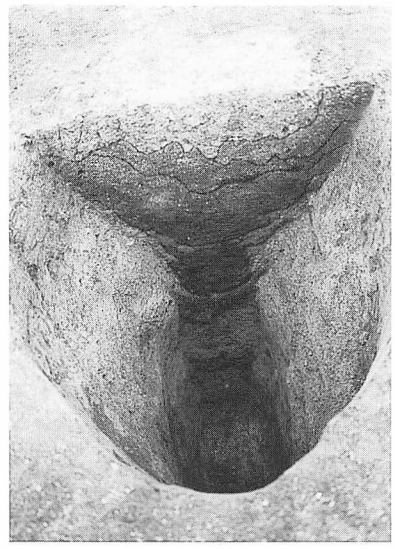
8　ＴＰ－４完掘（北西から）

9　ＴＰ－５土層断面（南から）

図版 8

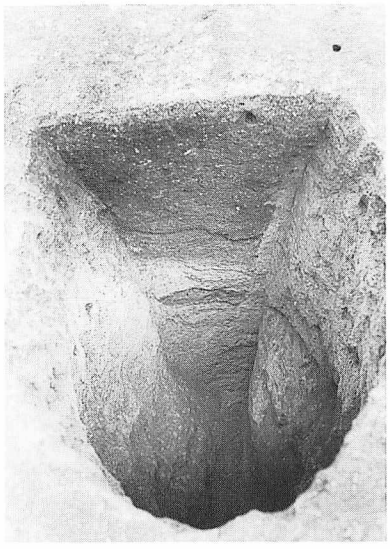


1　ＴＰ－５完掘（南西から）

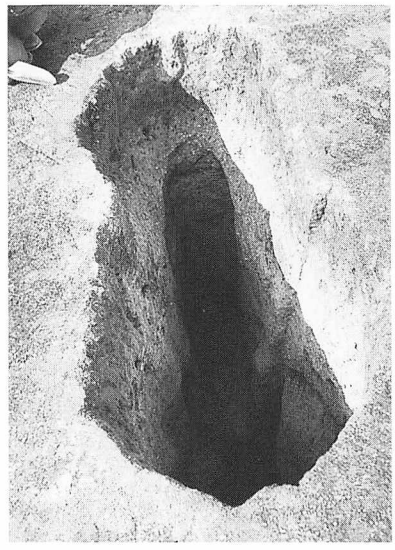


2　ＴＰ－６土層断面（南西から）

3　ＴＰ－６完掘（南西から）

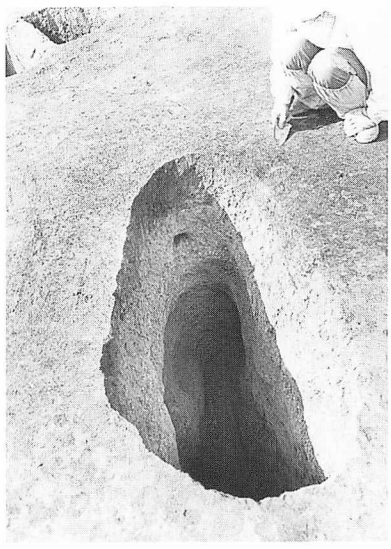


4　ＴＰ－７土層断面（南から）



5　ＴＰ－７完掘（南から）

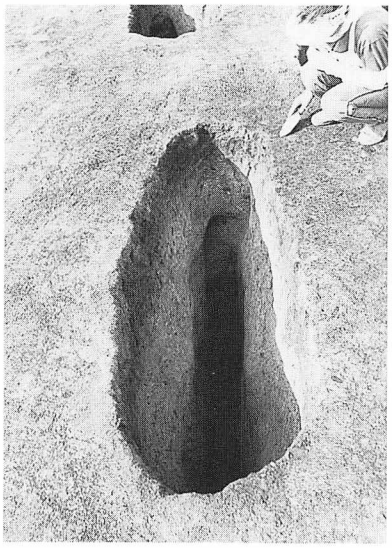
6　ＴＰ－８土層断面（南東から）



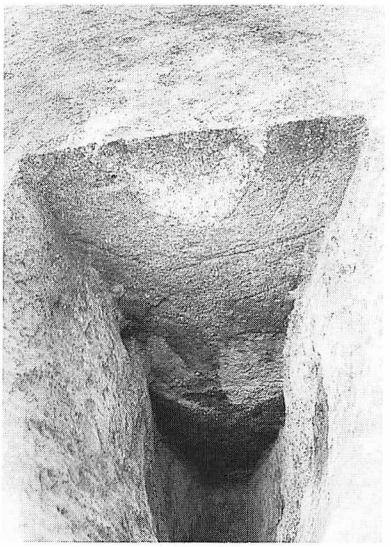
7　ＴＰ－８完掘（南東から）

8　ＴＰ－９土層断面（北東から）

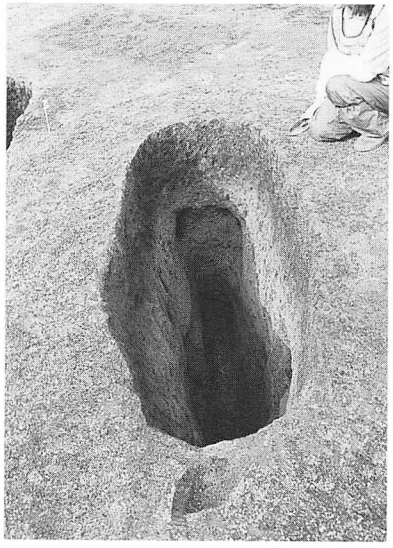
1　ＴＰ－９完掘（南から）



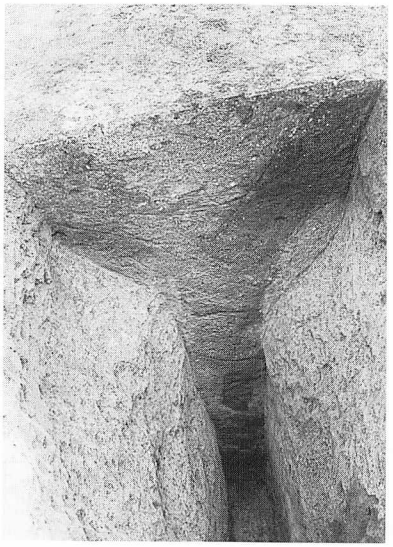
2　ＴＰ－10完掘（南から）



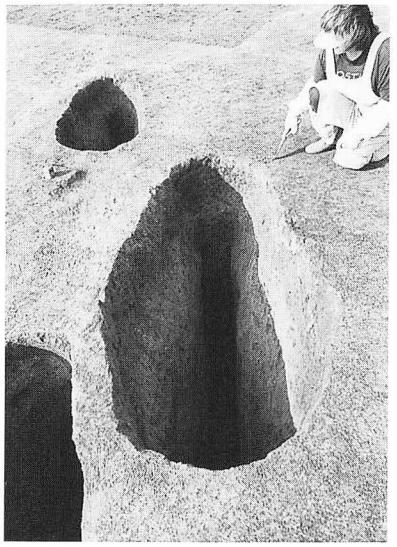
3　ＴＰ－11土層断面（南から）



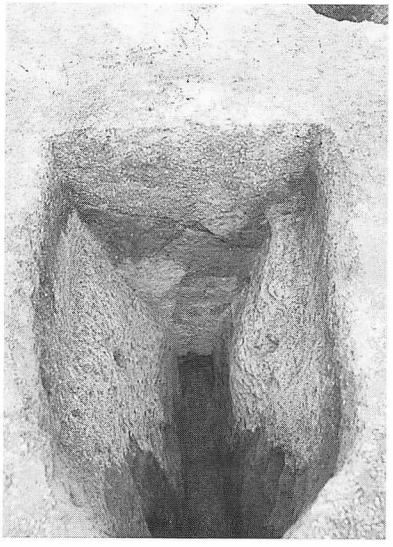
4　ＴＰ－11完掘（南から）



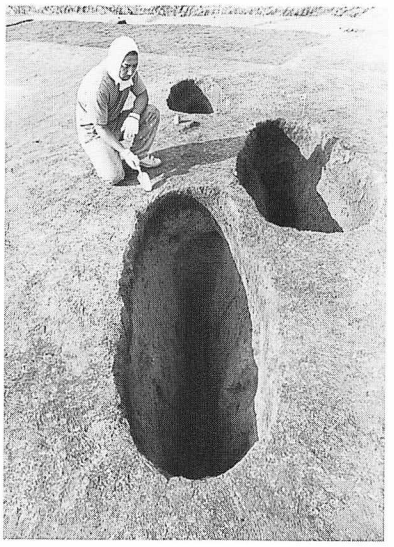
5　ＴＰ－12土層断面（南から）



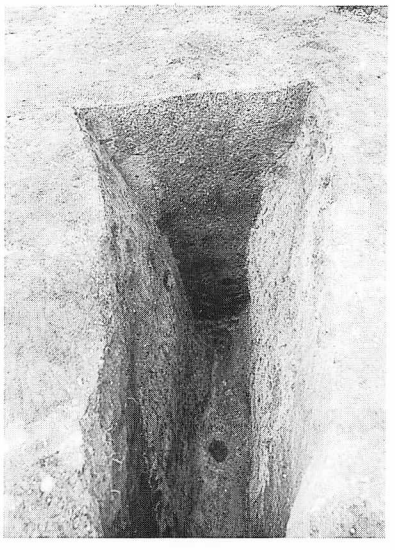
6　ＴＰ－12完掘（南から）



7　ＴＰ－13土層断面（南から）

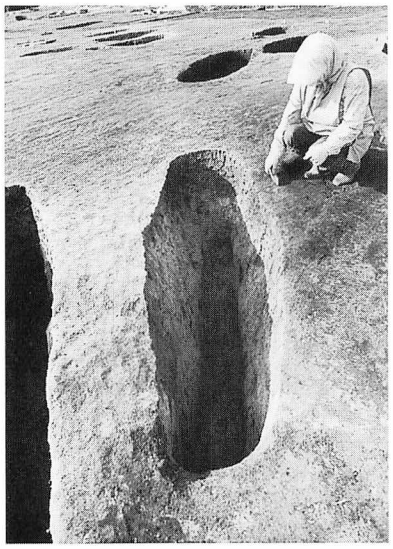


8　ＴＰ－13完掘（南から）

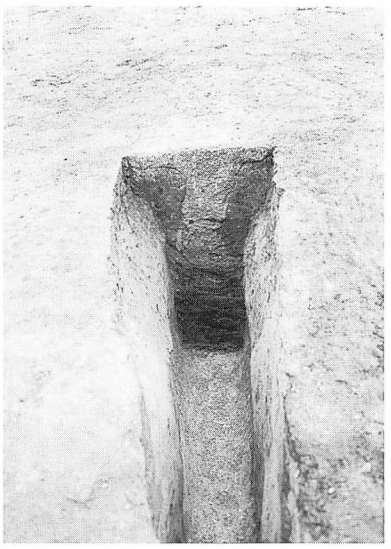


9　ＴＰ－14土層断面（南から）

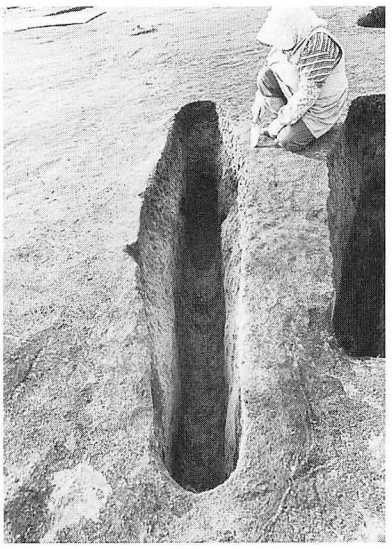
図版10



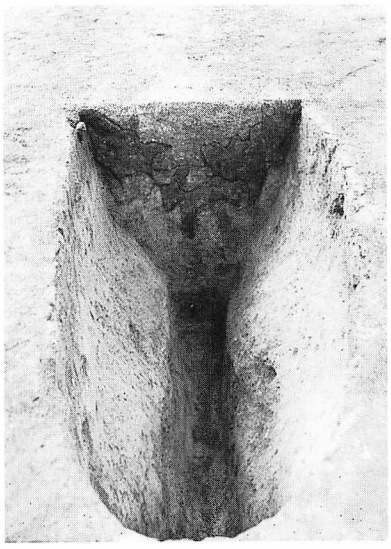
1　ＴＰ-14完掘（南から）



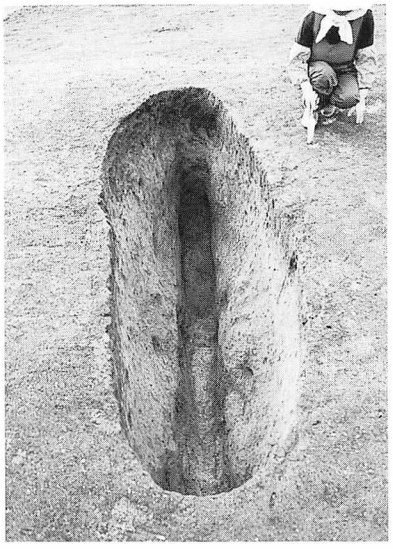
2　ＴＰ-15土層断面（南から）



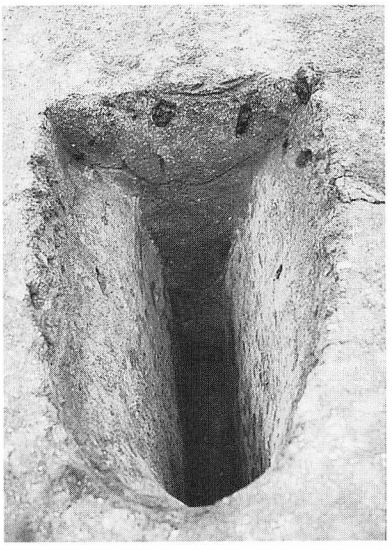
3　ＴＰ-15完掘（南東から）



4　ＴＰ-16土層断面（東から）

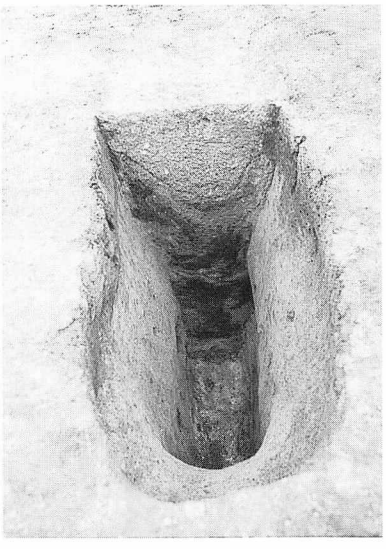


5　ＴＰ-16完掘（南東から）

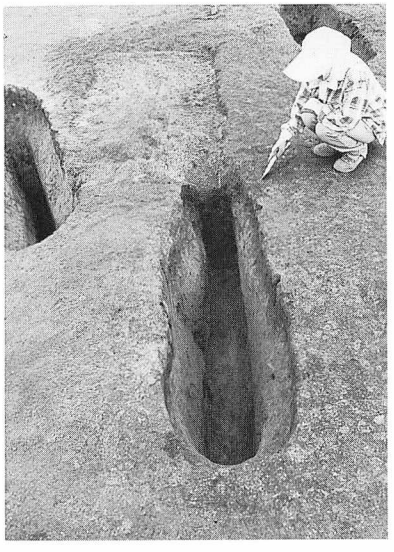


6　ＴＰ-23土層断面（南から）

7　ＴＰ-23完掘（南から）

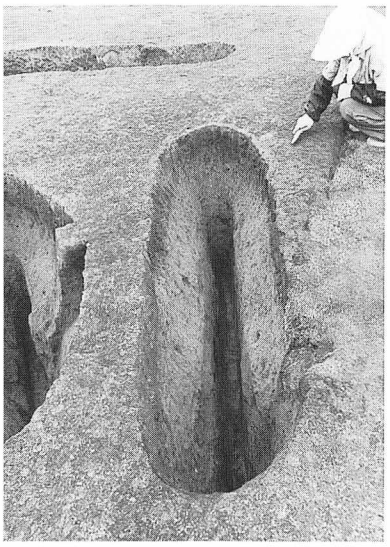


8　ＴＰ-24土層断面（南から）



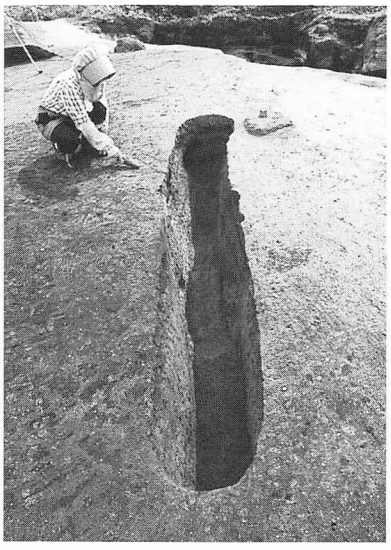
9　ＴＰ-24完掘（南から）

1　ＴＰ-25土層断面（南から）

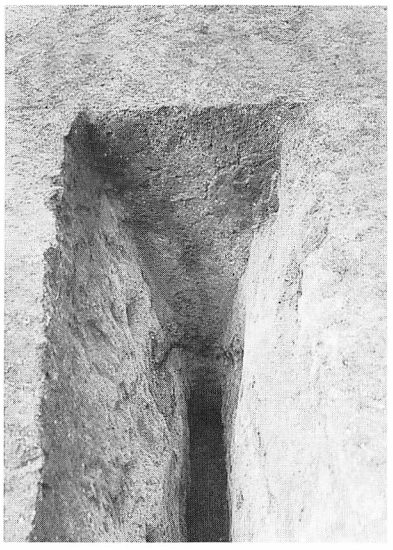


2　ＴＰ-25完掘（南から）

3　ＴＰ-27土層断面（南から）

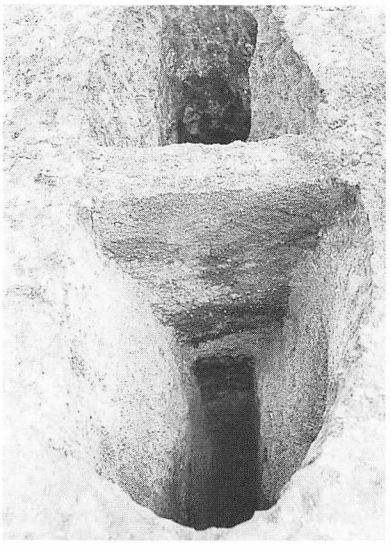


4　ＴＰ-27完掘（北西から）

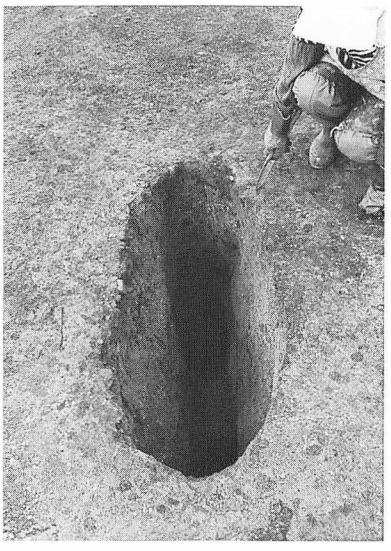


5　ＴＰ-28土層断面（東から）

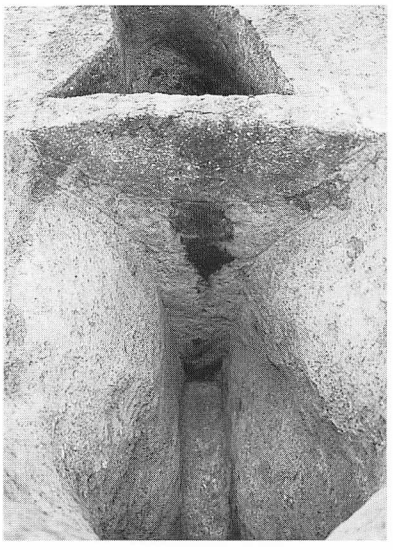
6　ＴＰ-28完掘（西から）



7　ＴＰ-29土層断面（南西から）

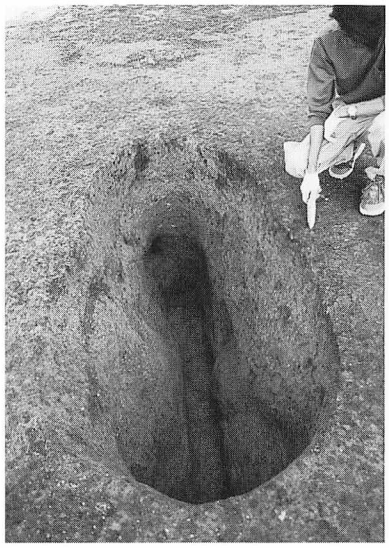


8　ＴＰ-29完掘（南西から）

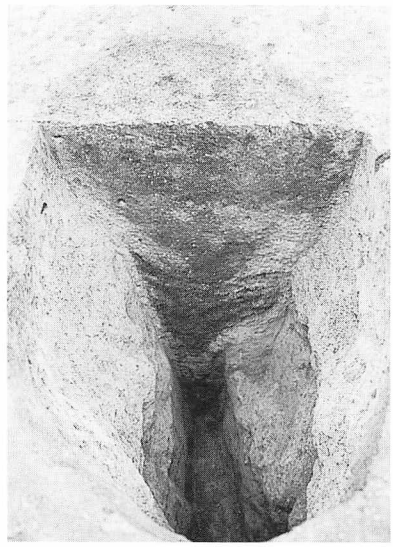


9　ＴＰ-31土層断面（南から）

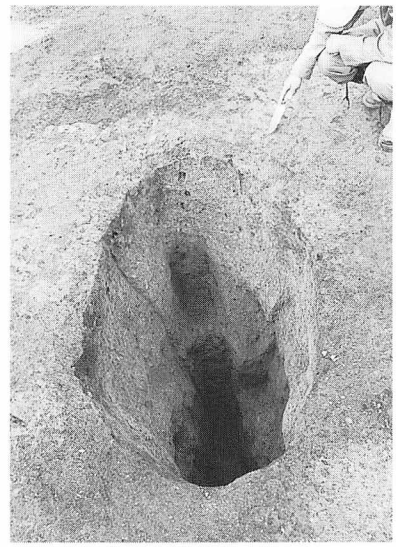
図版12



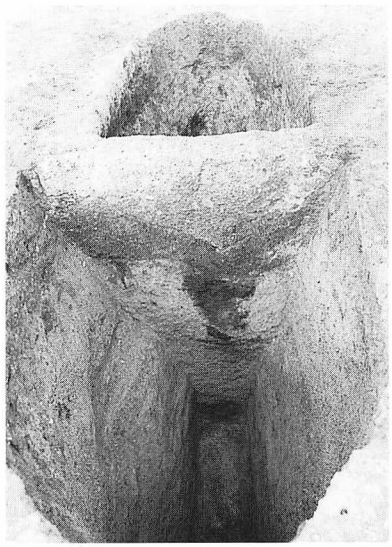
1　ＴＰ-31完掘（南から）



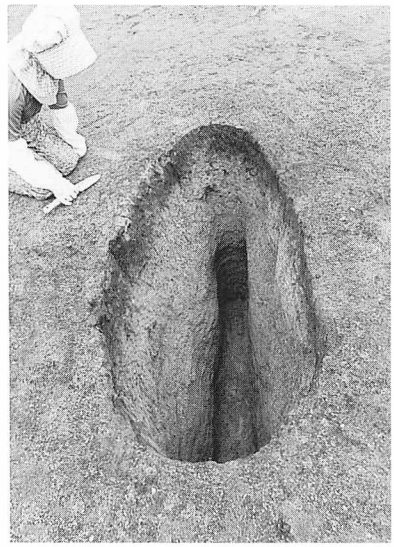
2　ＴＰ-32土層断面（南から）



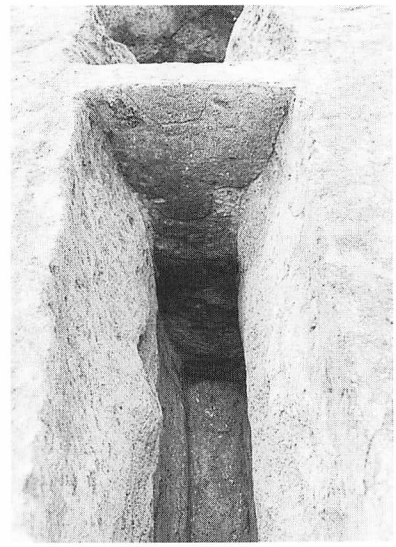
3　ＴＰ-32完掘（南から）



4　ＴＰ-33土層断面（南西から）



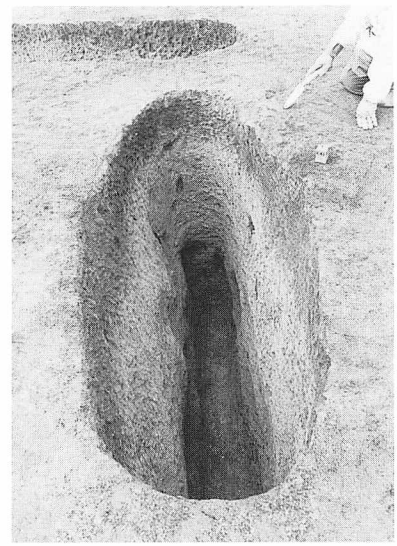
5　ＴＰ-33完掘（南西から）



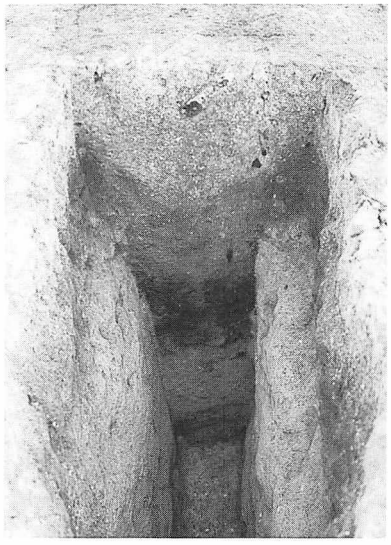
6　ＴＰ-34土層断面（東から）

7　ＴＰ-34完掘（東から）

8　ＴＰ-35土層断面（南から）

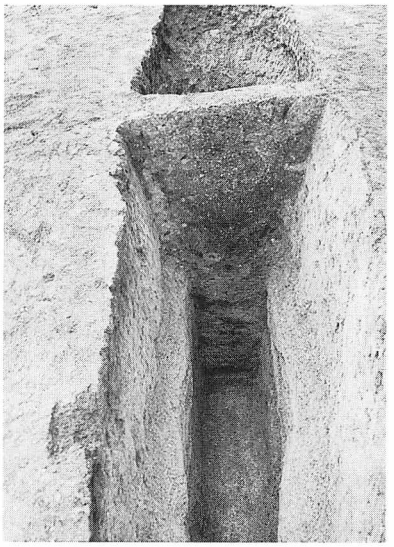


9　ＴＰ-35完掘（南から）

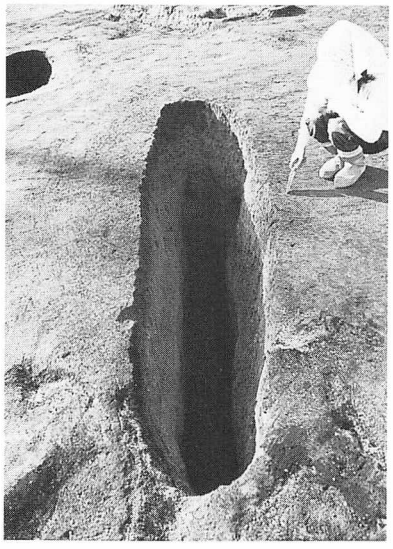


1　ＴＰ-37土層断面（西から）

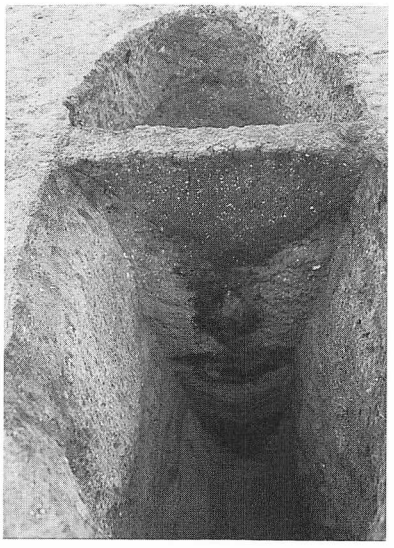
2　ＴＰ-37完掘（西から）



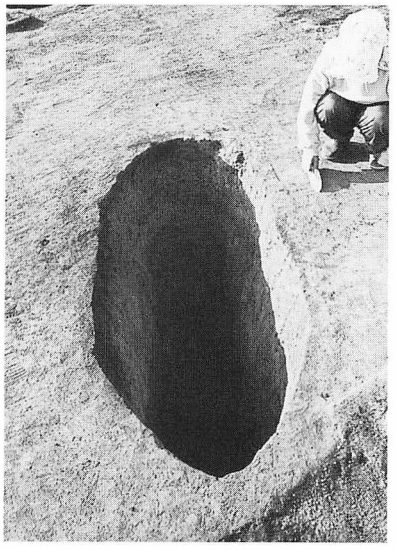
3　ＴＰ-47土層断面（南東から）



4　ＴＰ-47完掘（南東から）

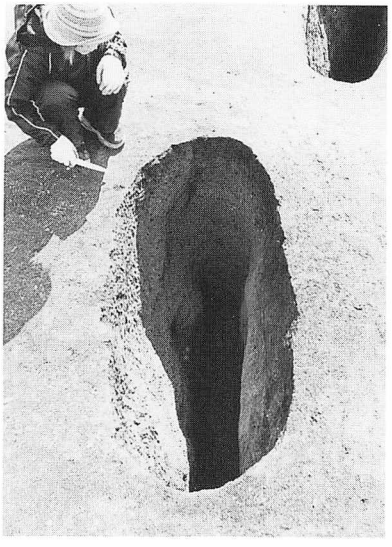


5　ＴＰ-48土層断面（南東から）

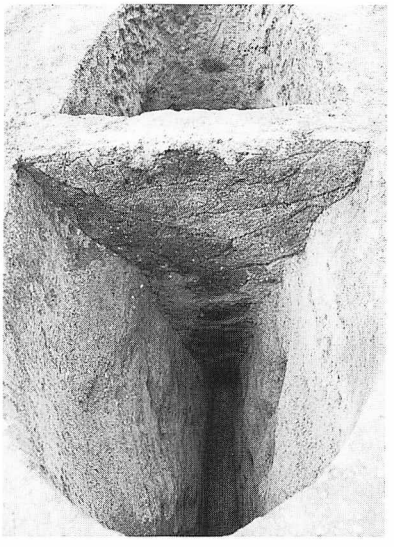


6　ＴＰ-48完掘（南東から）

7　ＴＰ-50土層断面（東から）

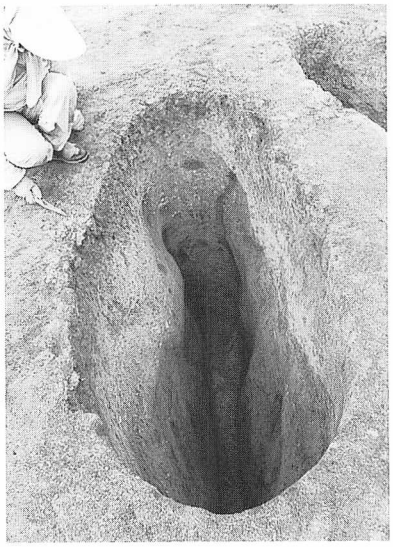


8　ＴＰ-50完掘（北西から）

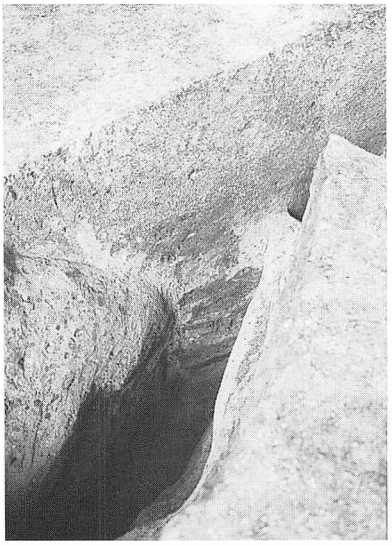


9　ＴＰ-54土層断面（南から）

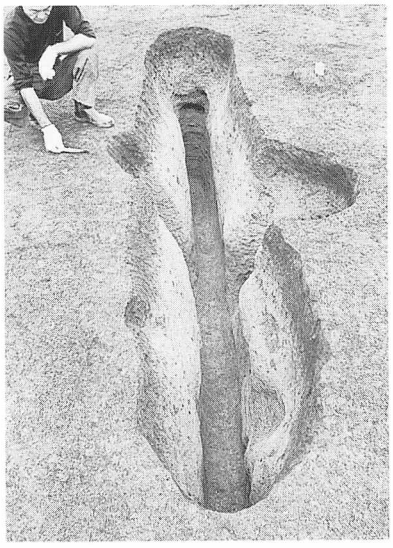
図版14



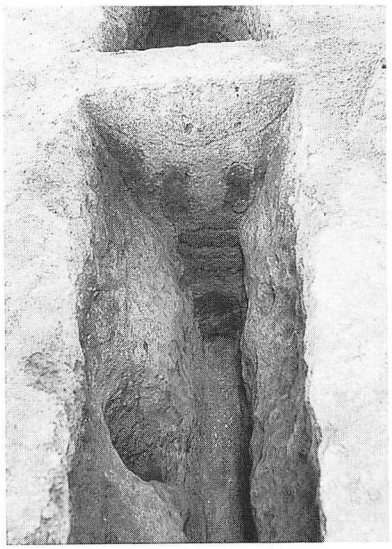
1　ＴＰ-54完掘（南から）



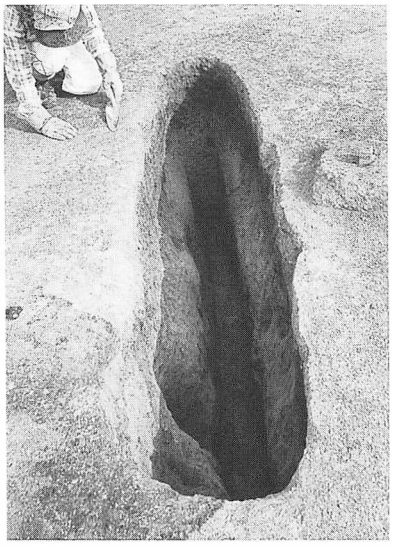
2　ＴＰ-56土層断面（南から）



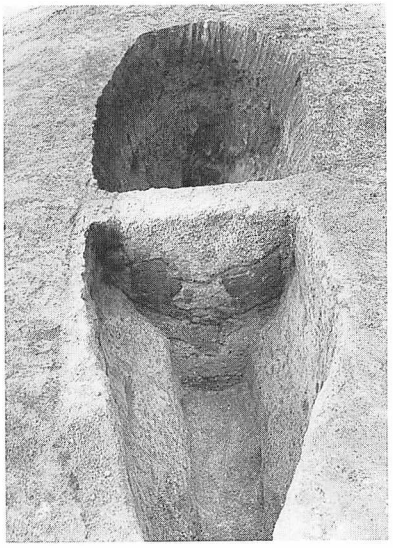
3　ＴＰ-56完掘（南西から）



4　ＴＰ-57土層断面（南から）

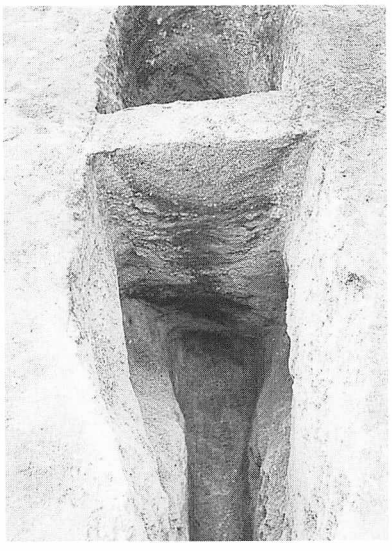


5　ＴＰ-57完掘（南から）

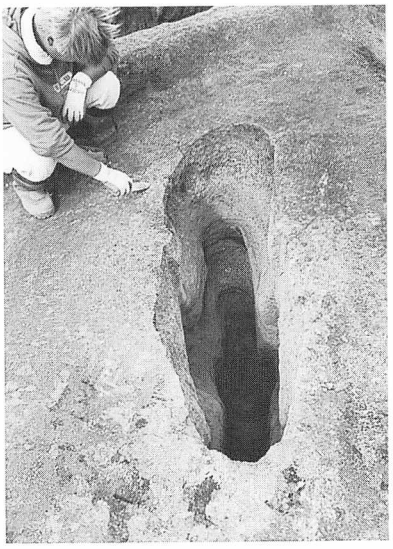


6　ＴＰ-58土層断面（南から）

7　ＴＰ-58完掘（南から）

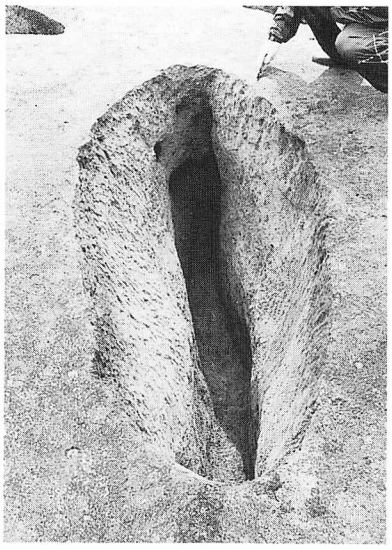


8　ＴＰ-59土層断面（南東から）



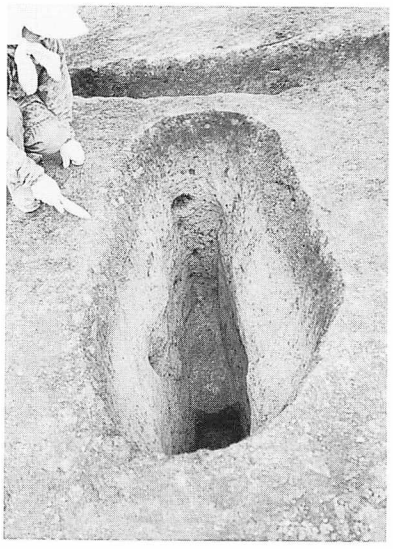
9　ＴＰ-59完掘（南東から）

1　ＴＰ-62土層断面（南から）

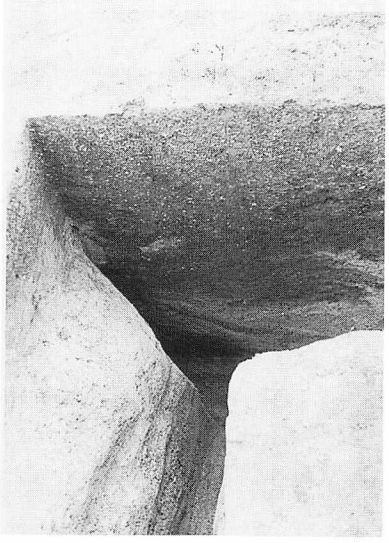


2　ＴＰ-62完掘（北西から）

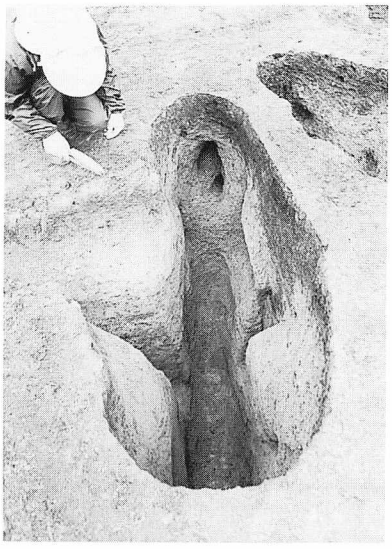
3　ＴＰ-63土層断面（南から）



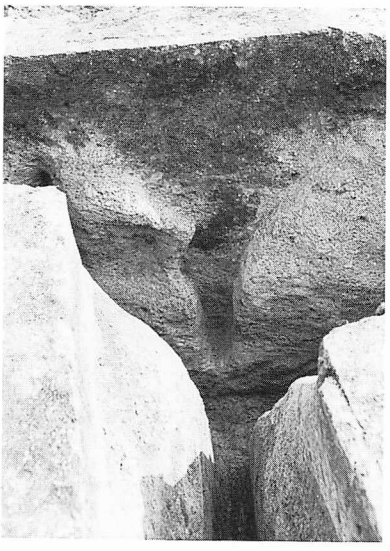
4　ＴＰ-63完掘（南から）



5　ＴＰ-66土層断面（西から）

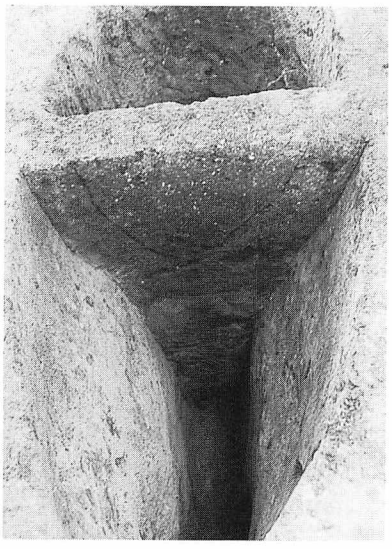


6　ＴＰ-66完掘（南から）



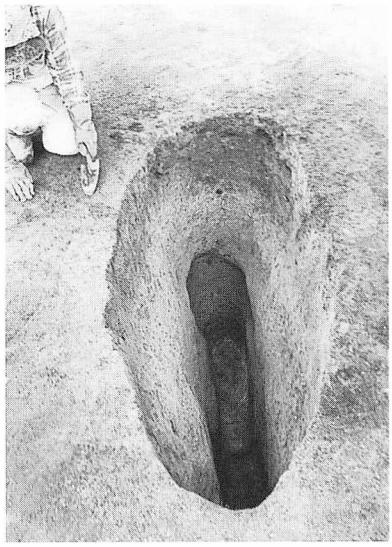
7　ＴＰ-67土層断面（西から）

8　ＴＰ-67完掘（西から）



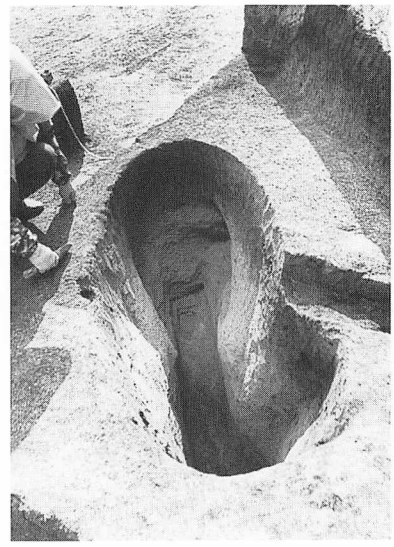
9　ＴＰ-70土層断面（南から）

図版16



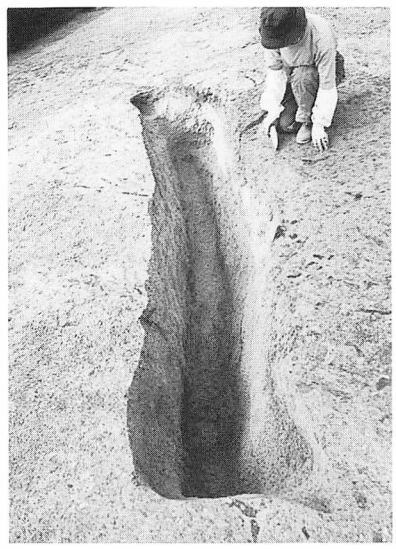
1　ＴＰ-70完掘（南から）

2　ＴＰ-72土層断面（北から）

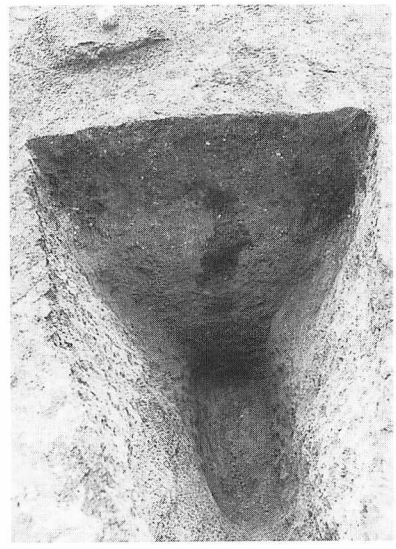


3　ＴＰ-72完掘（北から）

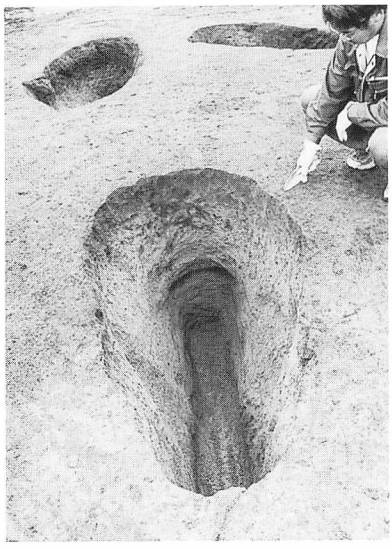
4　ＴＰ-75土層断面（南から）



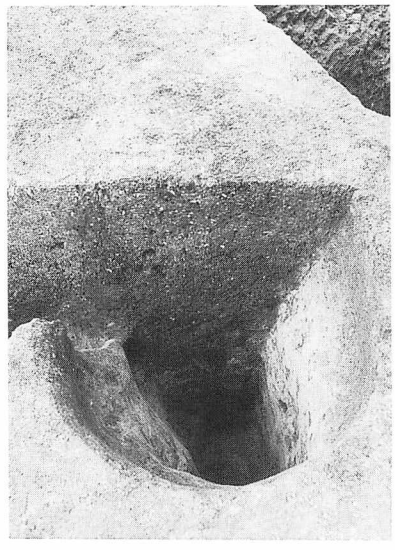
5　ＴＰ-75完掘（南から）



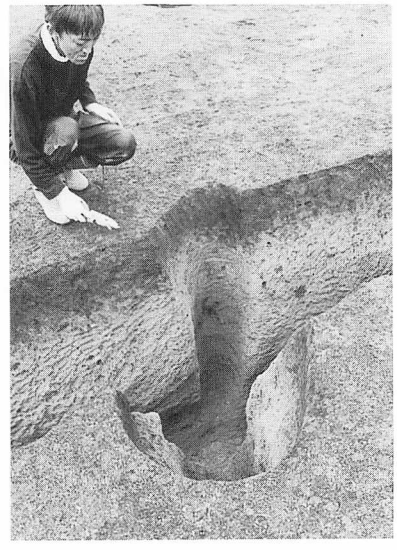
6　ＴＰ-76土層断面（北東から）



7　ＴＰ-76完掘（北東から）

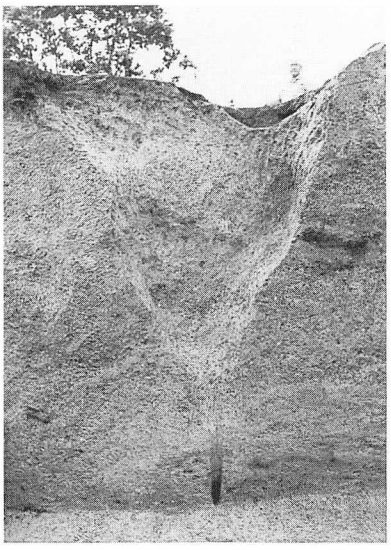


8　ＴＰ-78土層断面（南から）

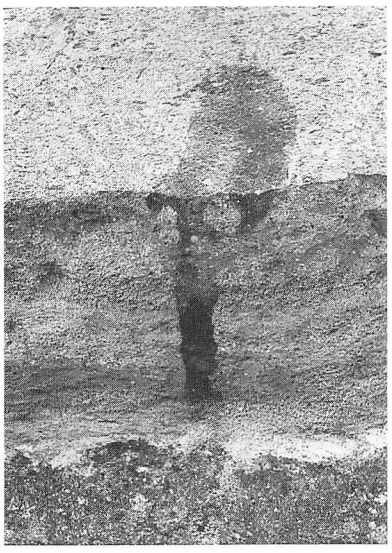


9　ＴＰ-78完掘（南東から）

1　ＴＰ-82土層断面（東から）

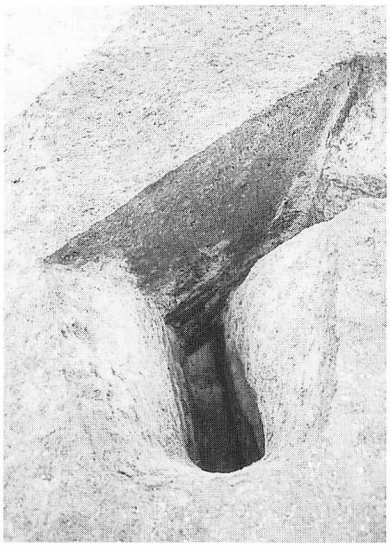


2　ＴＰ-82完掘（東から）

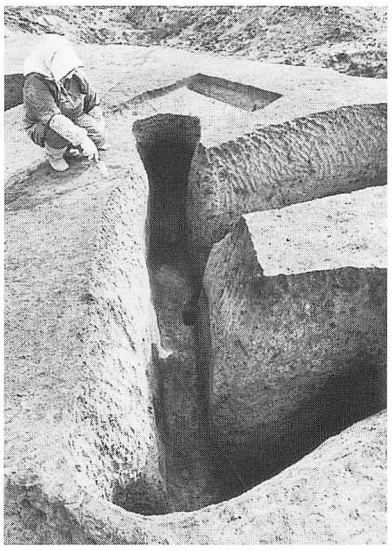


3　ＴＰ-85土層断面（北東から）

4　ＴＰ-85完掘（北東から）

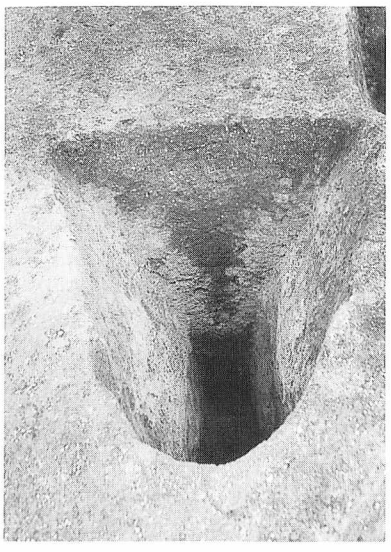


5　ＴＰ-88・89土層断面(南から）

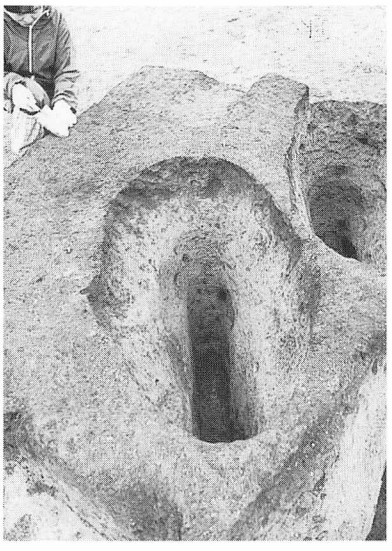


6　ＴＰ-88完掘（西から）

7　ＴＰ-89完掘（北から）

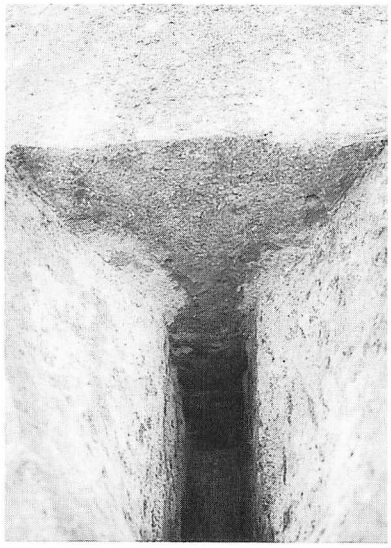


8　ＴＰ-91土層断面（南から）

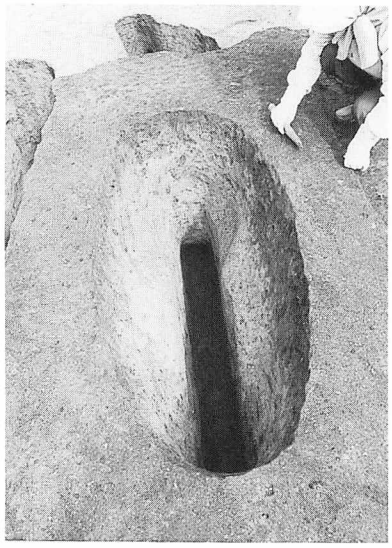


9　ＴＰ-91完掘（南から）

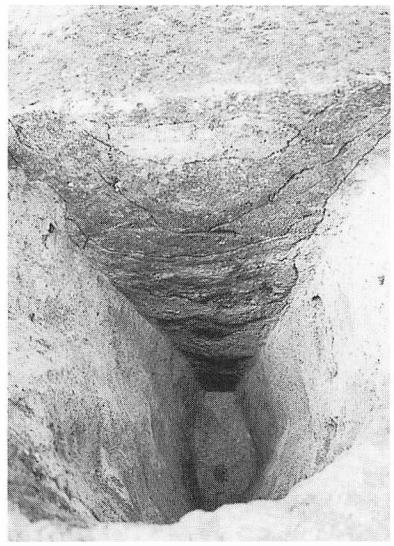
図版18



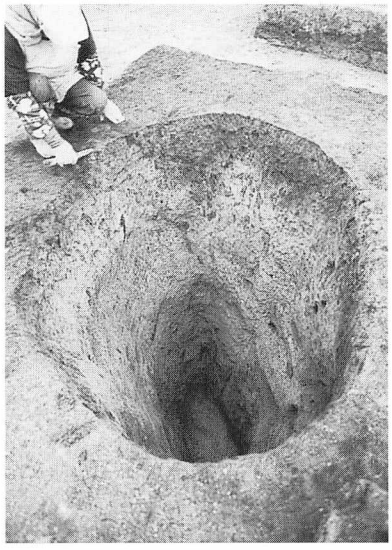
1　ＴＰ-97土層断面（南から）



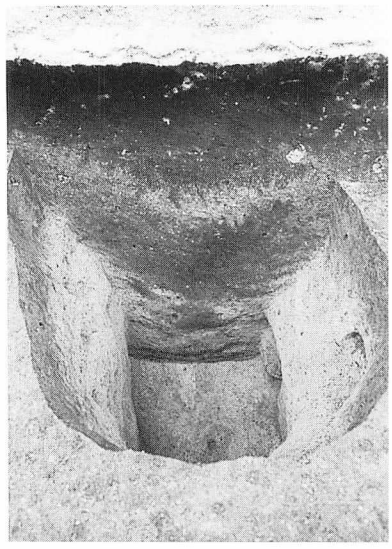
2　ＴＰ-97完掘（南から）



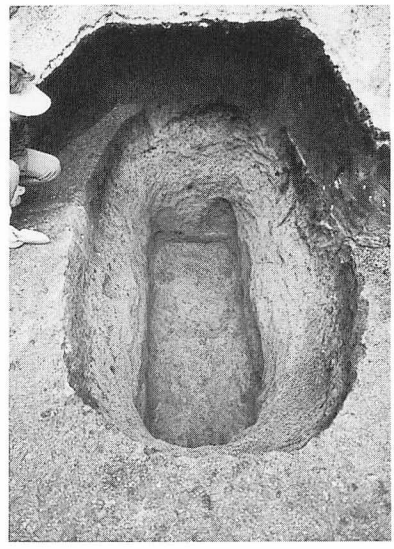
3　ＴＰ-99土層断面（南から）



4　ＴＰ-99完掘（南から）



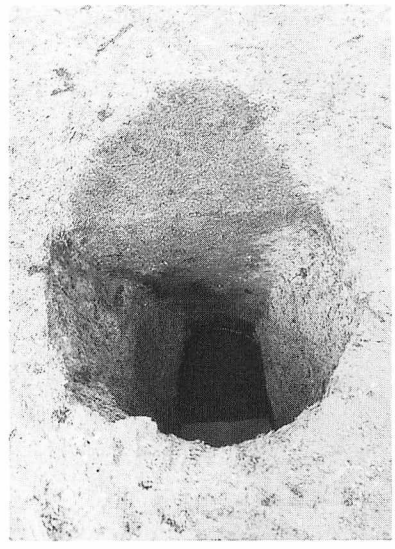
5　ＴＰ-100土層断面（南から）



6　ＴＰ-100完掘（南から）

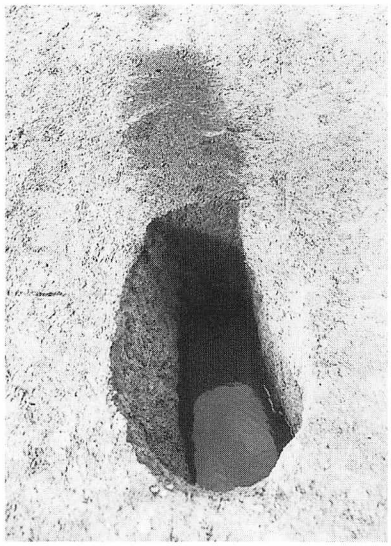
7　ＴＰ-102土層断面（南から）

8　ＴＰ-102完掘（南西から）

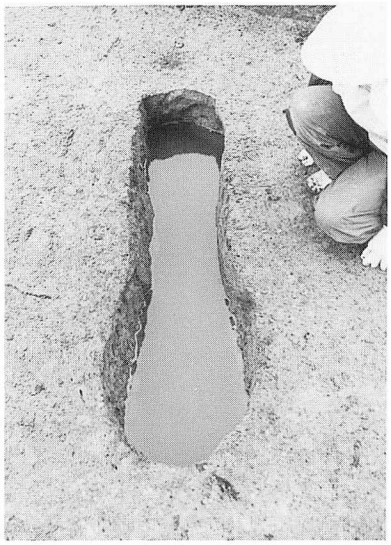


9　ＴＰ-103土層断面（南から）

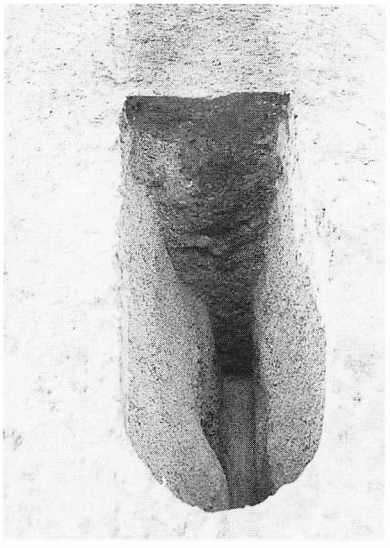
1　ＴＰ-103完掘（南から）



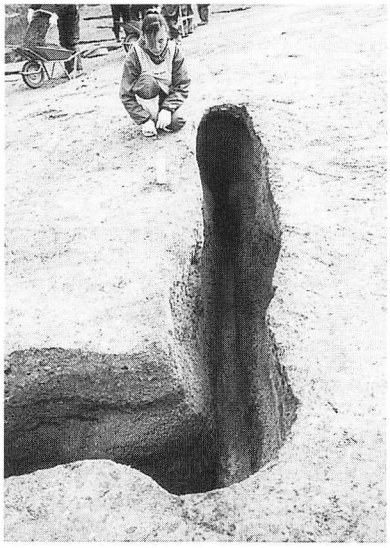
2　ＴＰ-104土層断面（南から）



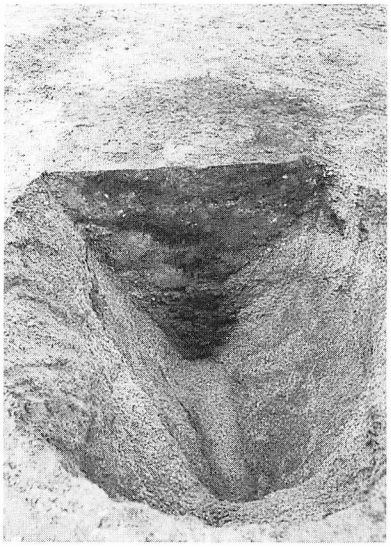
3　ＴＰ-104完掘（南から）



4　ＴＰ-108土層断面（東から）

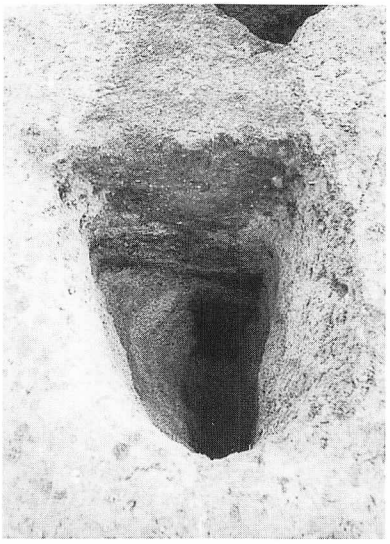


5　ＴＰ-108完掘（西から）



6　ＴＰ-111土層断面（南から）

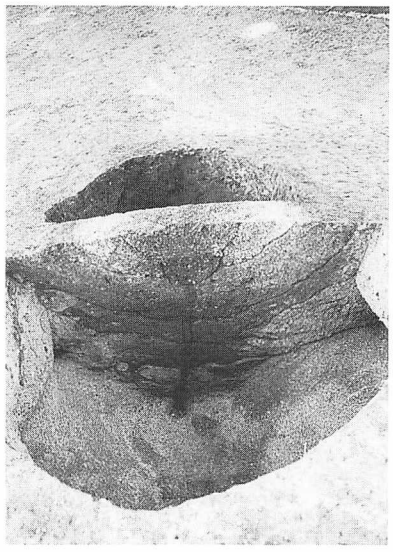
7　ＴＰ-111完掘（北から）



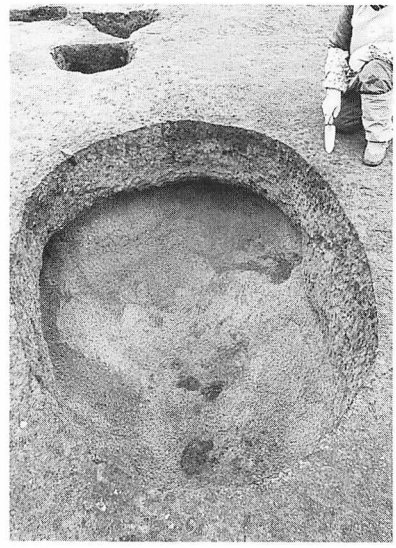
8　ＴＰ-113土層断面（北から）

9　ＴＰ-113完掘（南から）

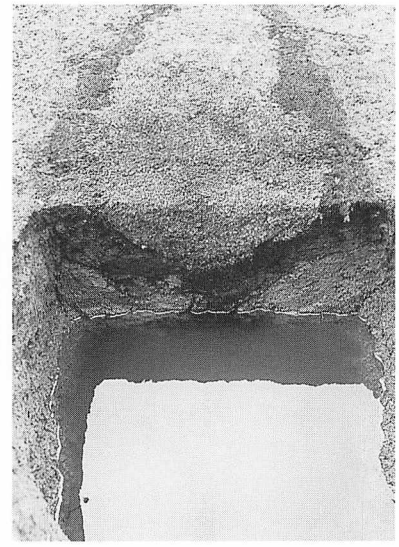
図版20



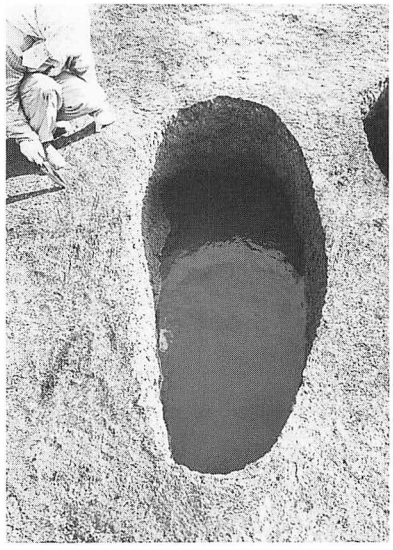
1　ＴＰ-114土層断面（南から）



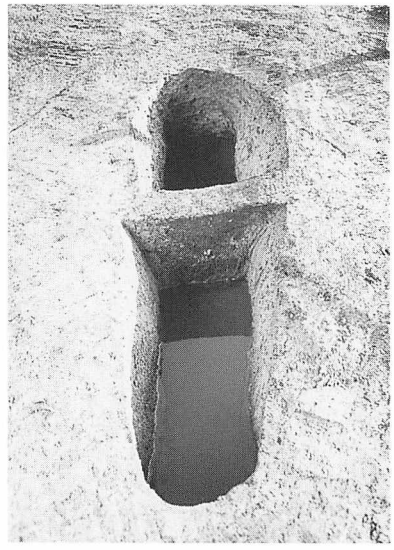
2　ＴＰ-114完掘（北から）



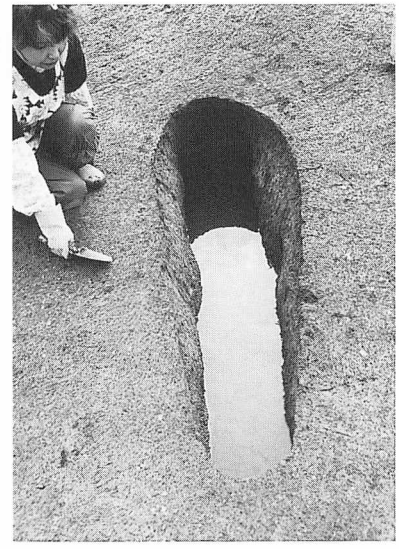
3　ＴＰ-121土層断面（南から）



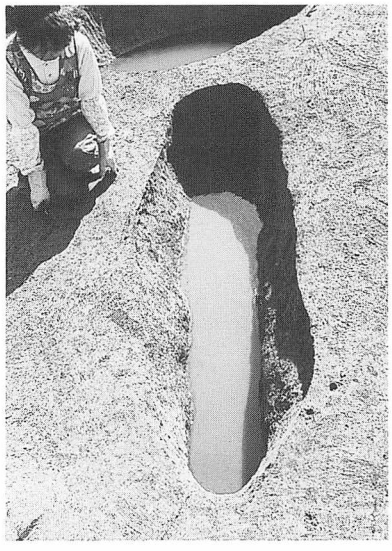
4　ＴＰ-121完掘（北から）



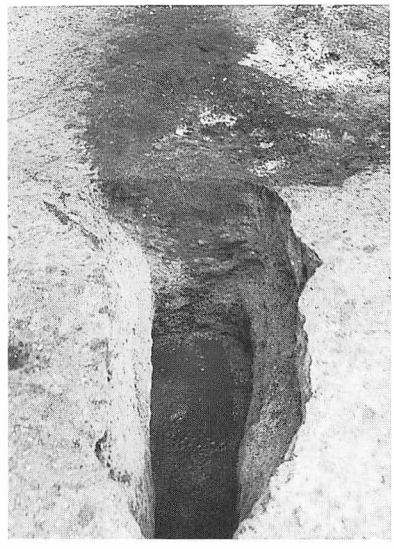
5　ＴＰ-125土層断面（北から）



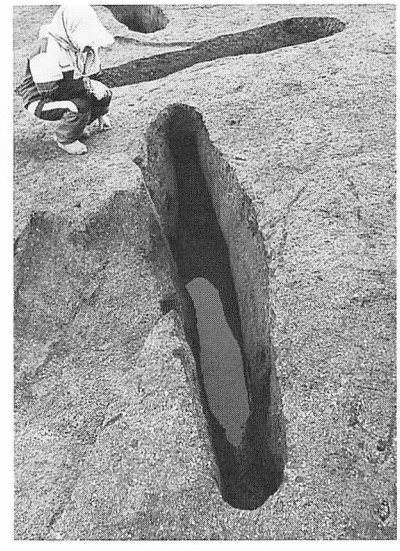
6　ＴＰ-125完掘（北から）



7　ＴＰ-127完掘（北から）

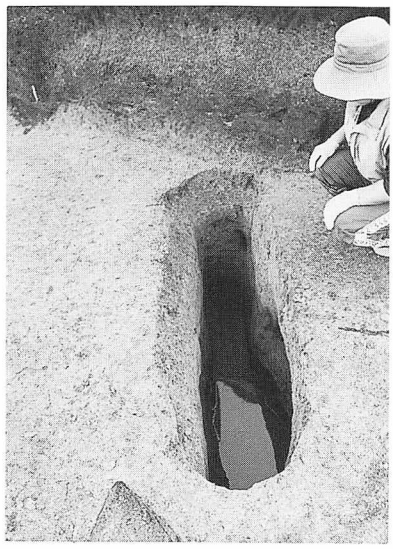


8　ＴＰ-128土層断面（南から）

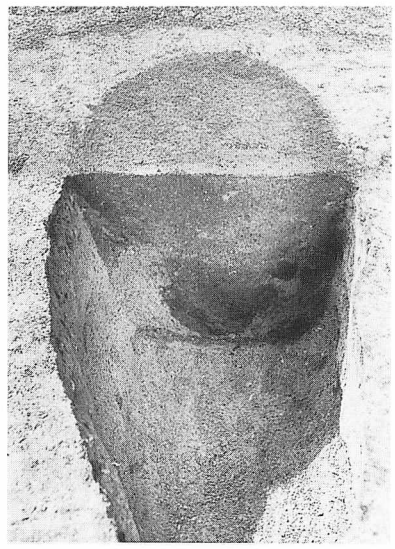


9　ＴＰ-128完掘（北から）

1　ＴＰ-130土層断面（北から）



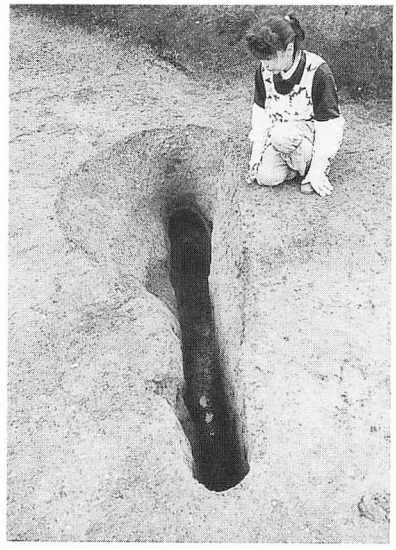
2　ＴＰ-130完掘（北から）



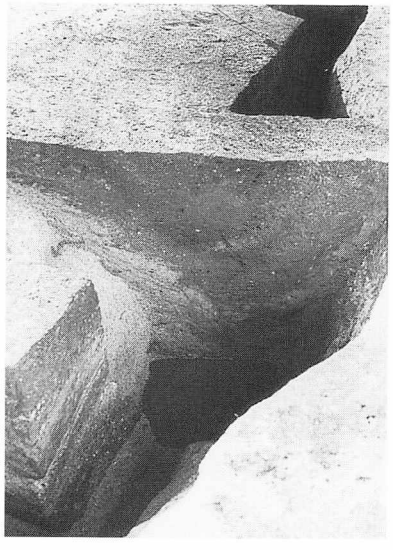
3　ＴＰ-131土層断面（北から）

4　ＴＰ-131完掘（北から）

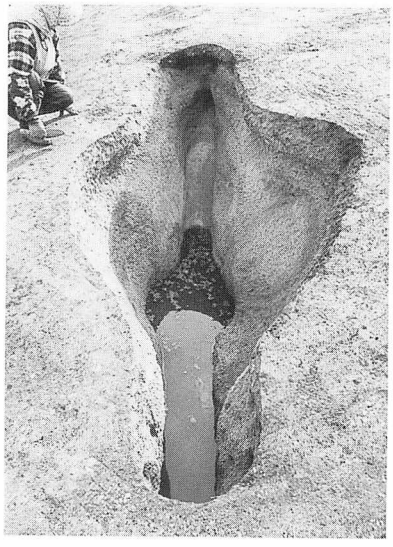
5　ＴＰ-132土層断面（北から）



6　ＴＰ-132完掘（北から）



7　ＴＰ-134土層断面（東から）

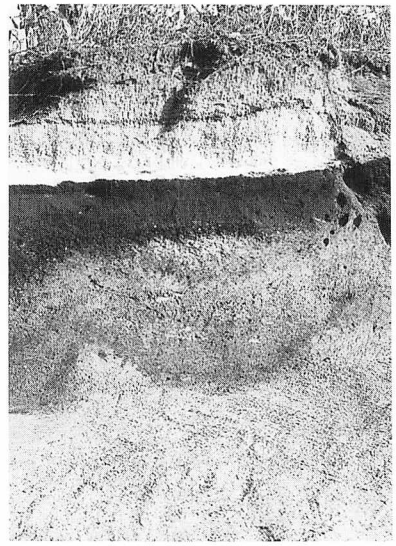


8　ＴＰ-134・169完掘(北西から)

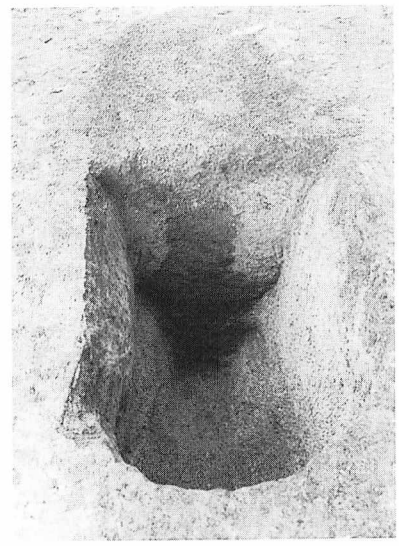
9　ＴＰ-135完掘（南から）

図版22

1　ＴＰ-136土層断面（西から）

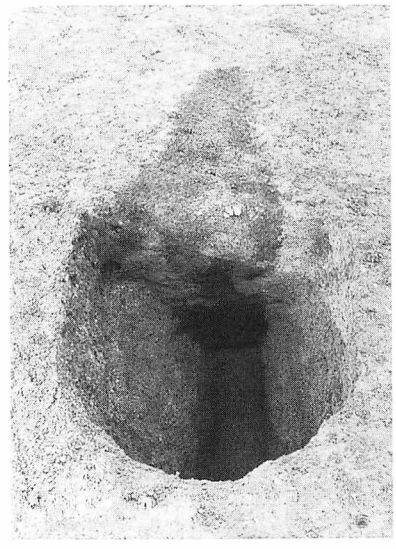


2　ＴＰ-137土層断面（西から）



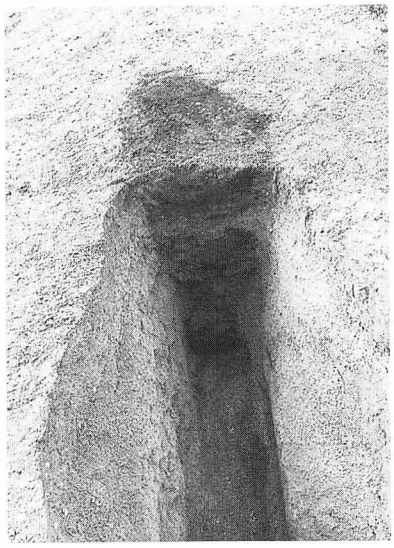
3　ＴＰ-138土層断面（南から）

4　ＴＰ-138完掘（北から）

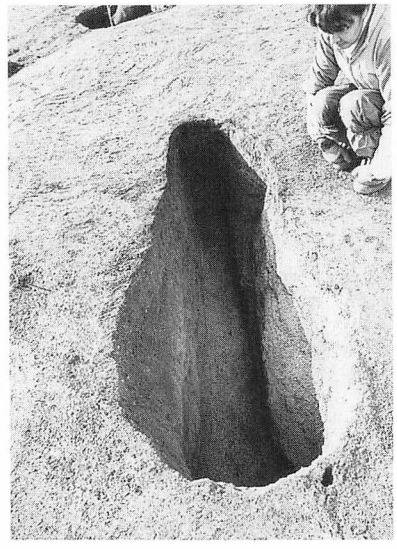


5　ＴＰ-139土層断面（南から）

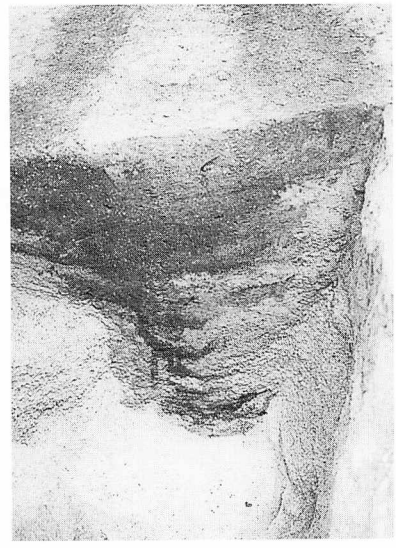
6　ＴＰ-139完掘（北から）



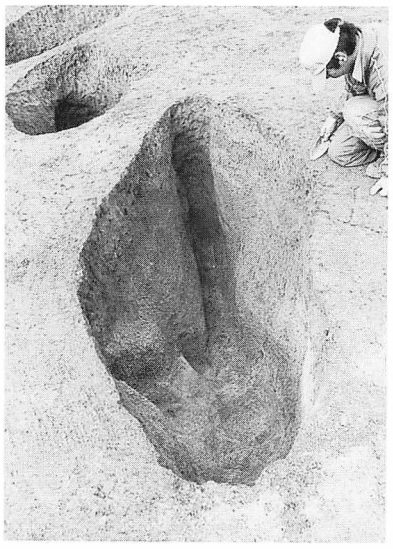
7　ＴＰ-140土層断面（東から）



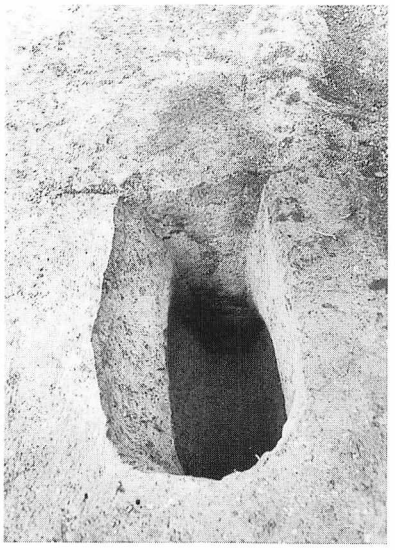
8　ＴＰ-140完掘（東から）



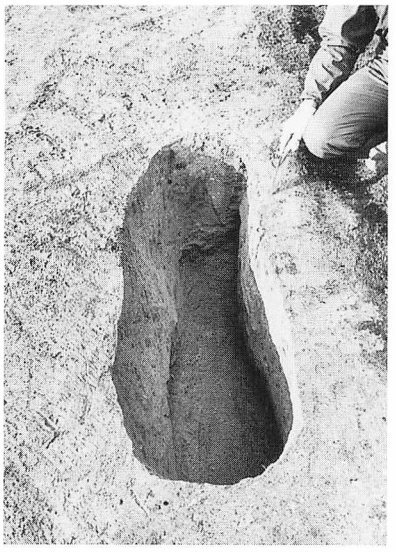
9　ＴＰ-141・158土層断面（南東から）



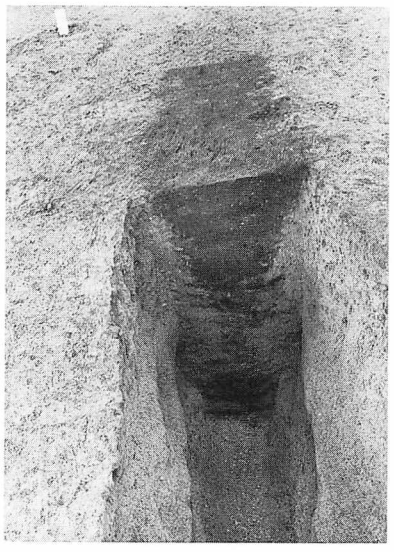
1　ＴＰ−141・158完掘（南東から）



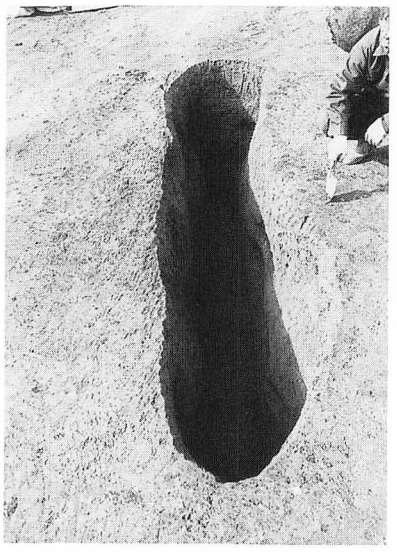
2　ＴＰ−142土層断面（南から）



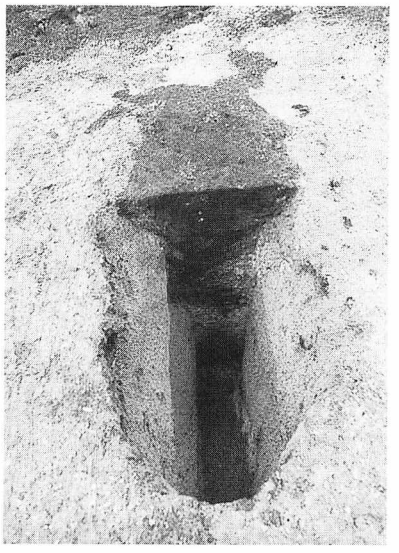
3　ＴＰ−142完掘（南から）



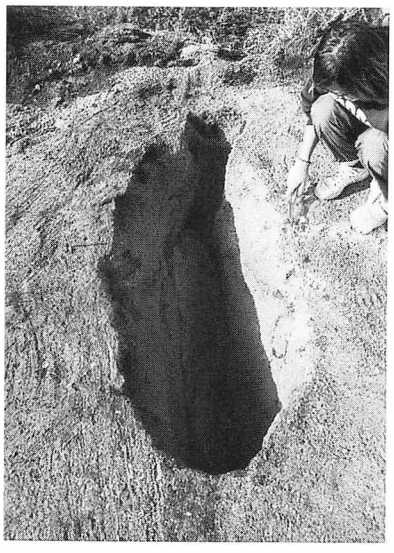
4　ＴＰ−143土層断面（南から）



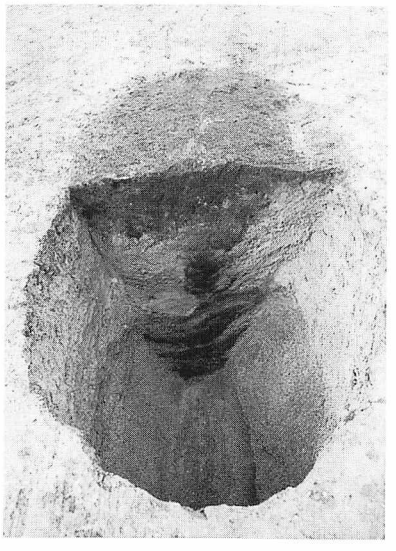
5　ＴＰ−143完掘（南東から）



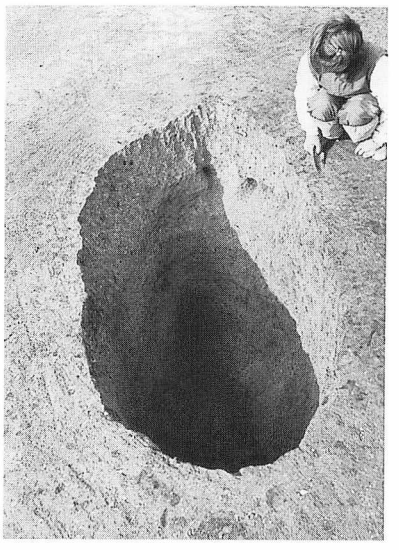
6　ＴＰ−144土層断面（南から）



7　ＴＰ−144完掘（南から）

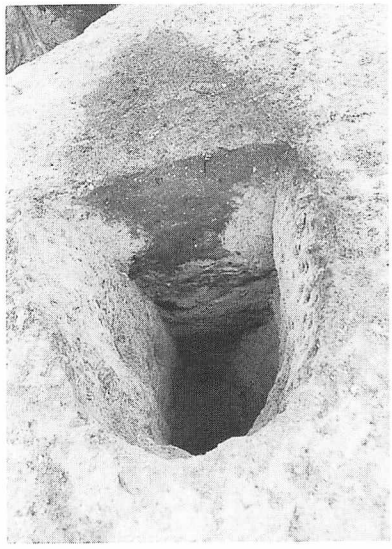


8　ＴＰ−145土層断面（南から）

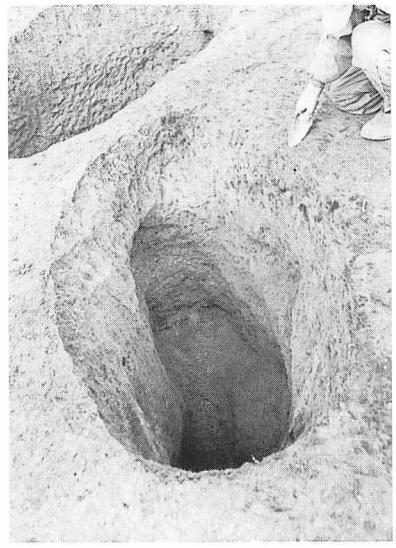


9　ＴＰ−145完掘（南から）

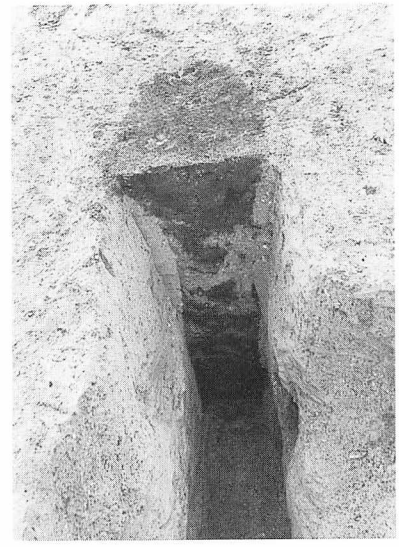
図版24



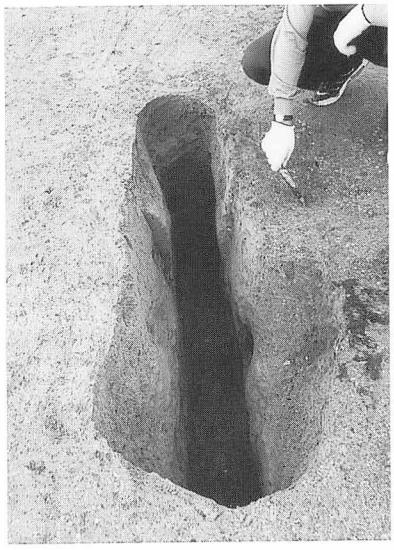
1　ＴＰ-146土層断面（東から）



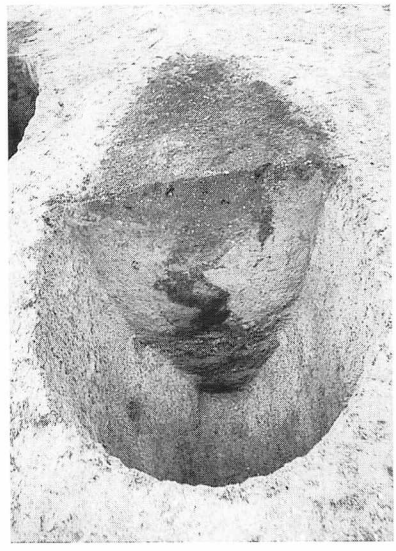
2　ＴＰ-146完掘（東から）



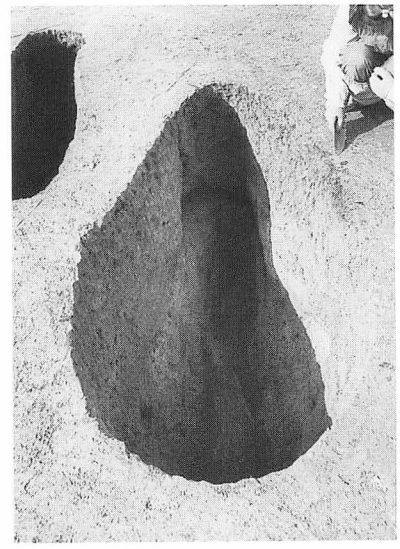
3　ＴＰ-147土層断面（南東から）



4　ＴＰ-147完掘（南東から）

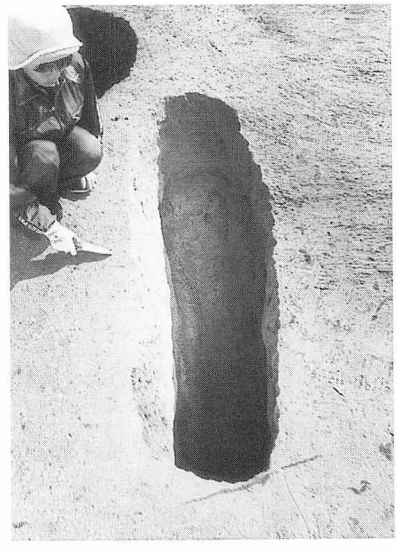


5　ＴＰ-148土層断面（南東から）



6　ＴＰ-148完掘（南東から）

7　ＴＰ-149土層断面（南東から）



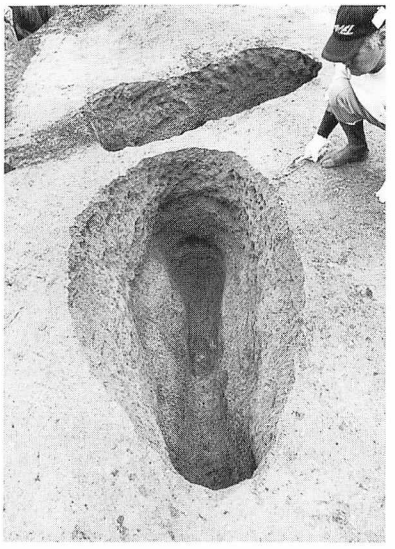
8　ＴＰ-149完掘（北西から）

9　ＴＰ-150完掘（東から）

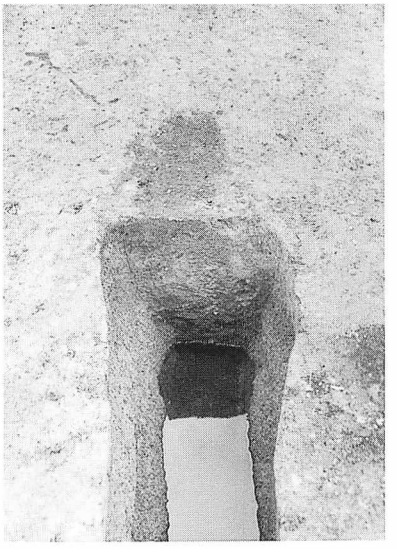
1　ＴＰ-150杭跡土層断面（南から）

2　ＴＰ-151完掘（北から）

3　ＴＰ-153土層断面（南から）



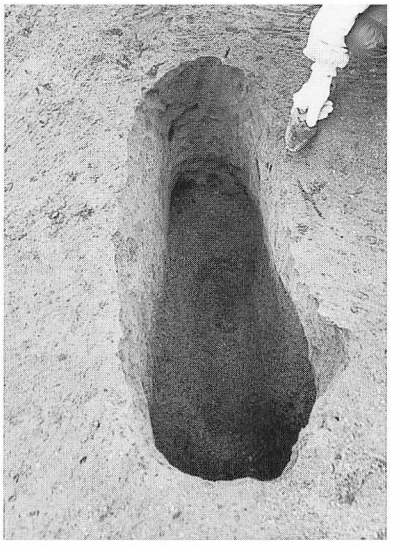
4　ＴＰ-153完掘（北から）



5　ＴＰ-159土層断面（南西から）

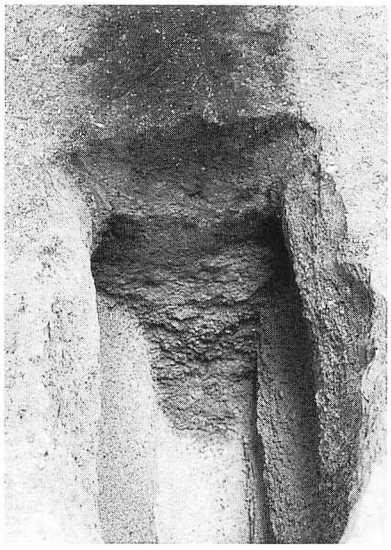
6　ＴＰ-159完掘（南西から）

7　ＴＰ-160土層断面（南から）

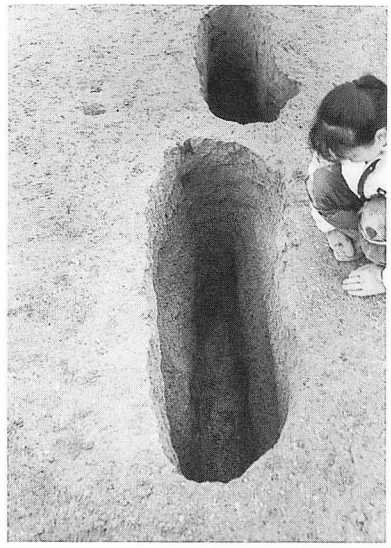


8　ＴＰ-160完掘（南から）

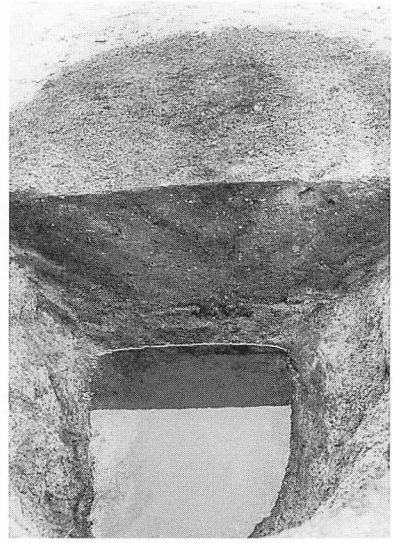
図版26



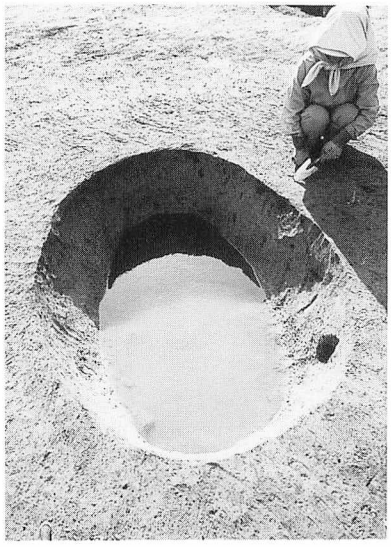
1　ＴＰ-161土層断面（南から）



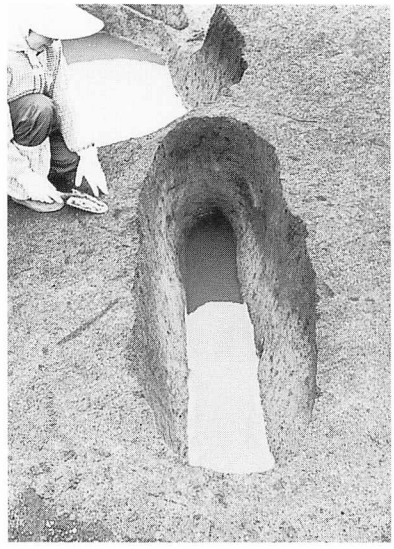
2　ＴＰ-161完掘（南から）



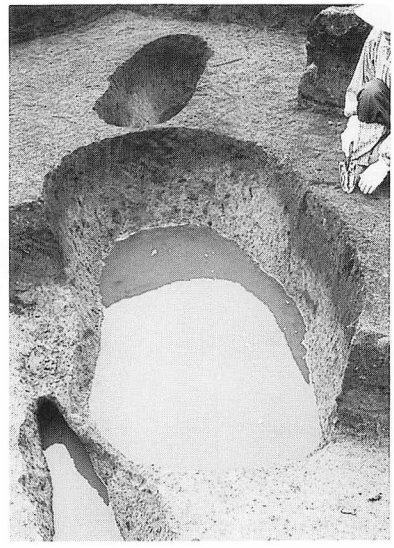
3　ＴＰ-165土層断面（南西から）



4　ＴＰ-165完掘（北から）

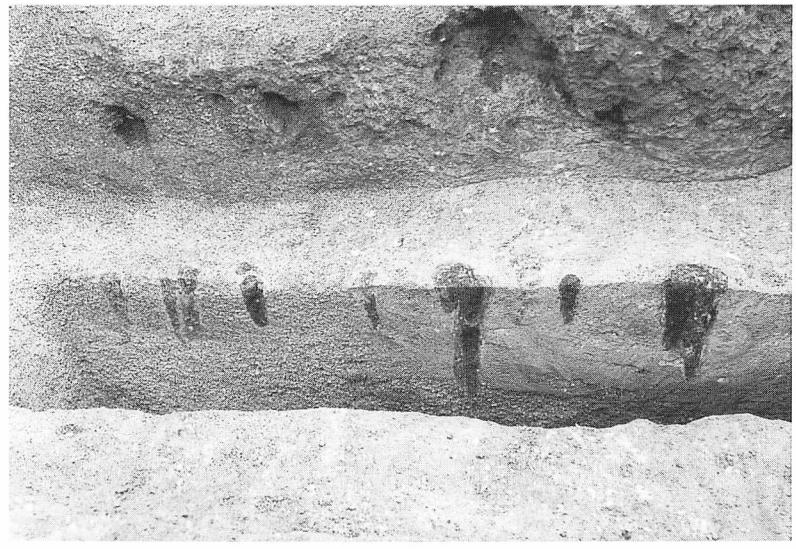


5　ＴＰ-167完掘（北から）



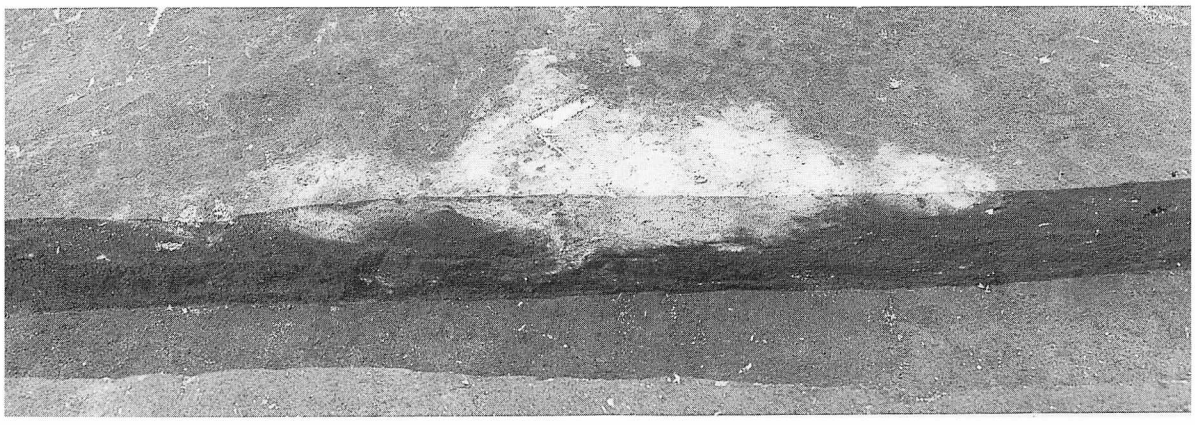
6　ＴＰ-168完掘（南から）

7　ＴＰ-170完掘（南から）



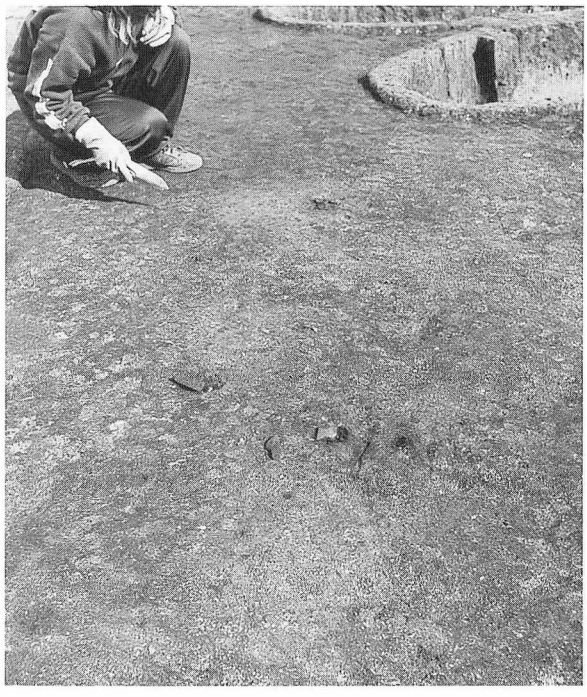
8　ＴＰ-170杭跡土層断面（南西から）

1　F－1検出（南東から）



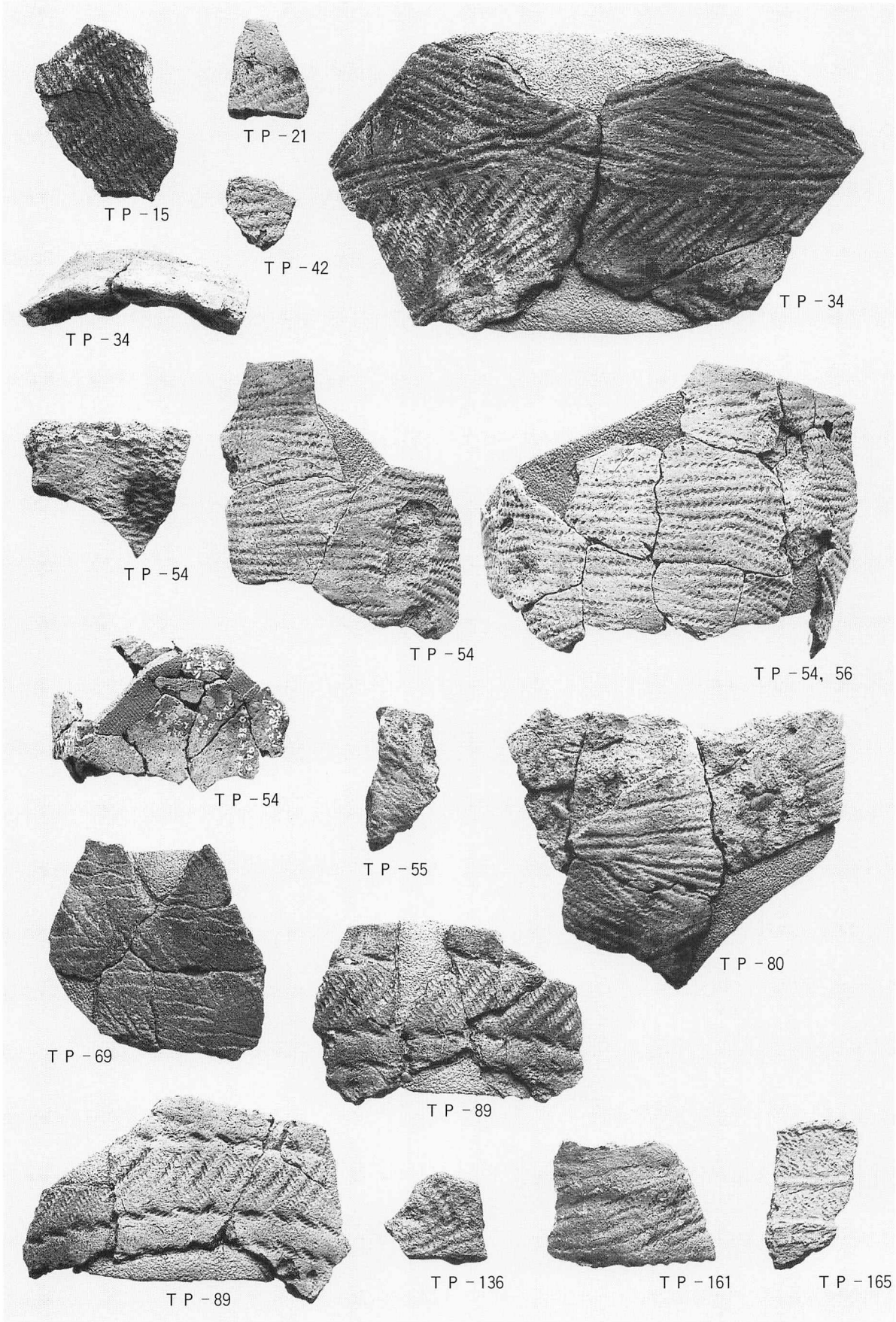
2　F－1土層断面（南東から）

3　F－5検出（西から）

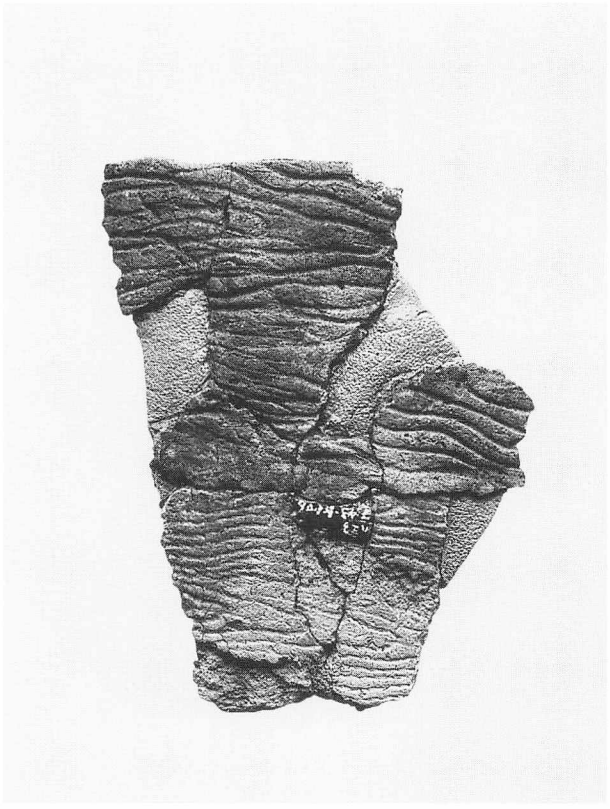


4　F－9・10・11検出（西から）

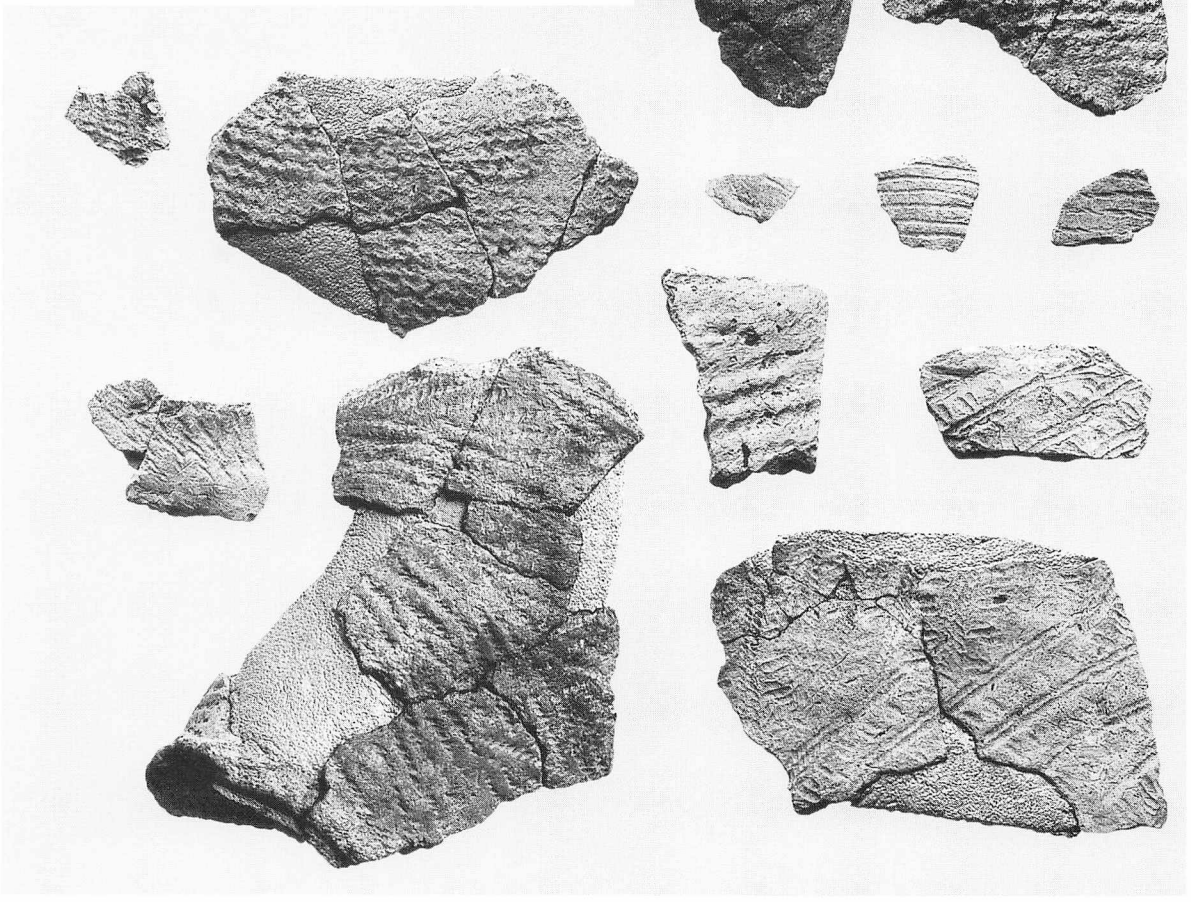
図版28



1　Tピット出土の土器

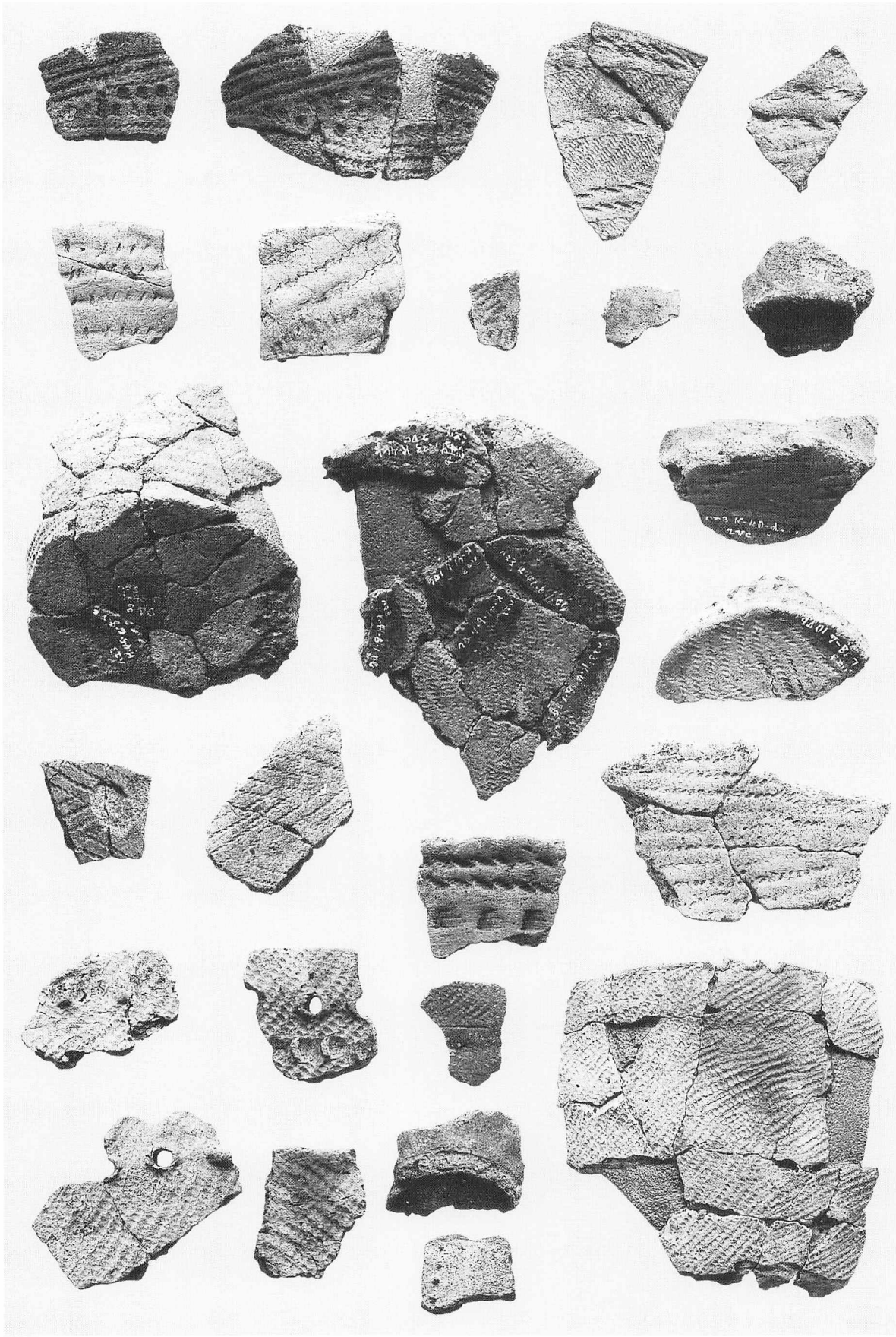


1　F-11出土の土器

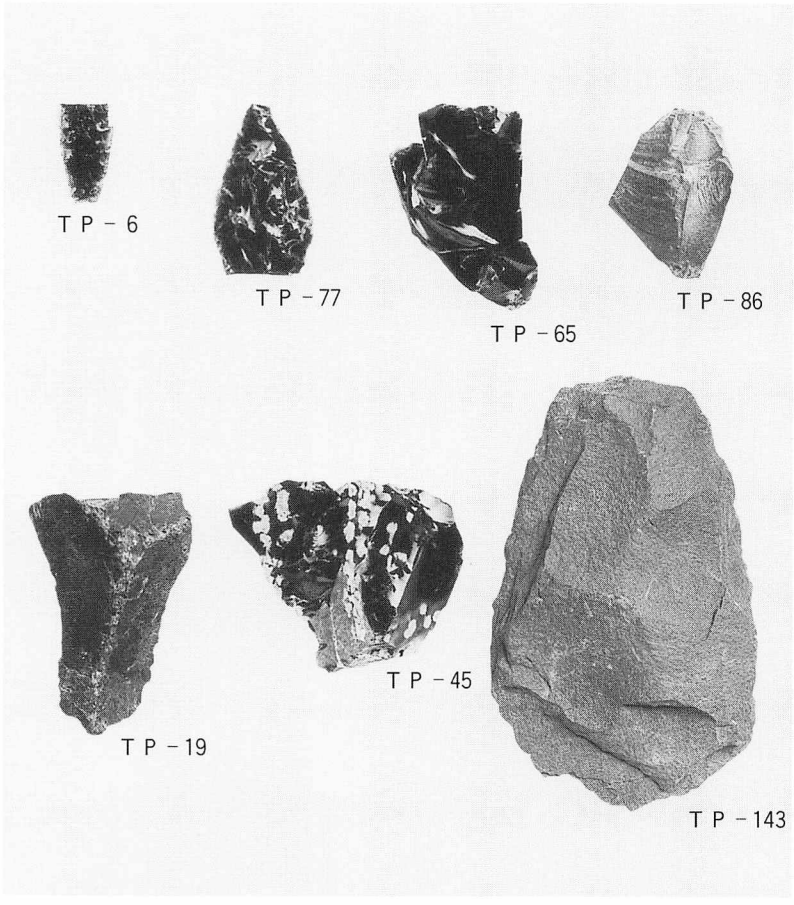


2　包含層出土の土器（1）

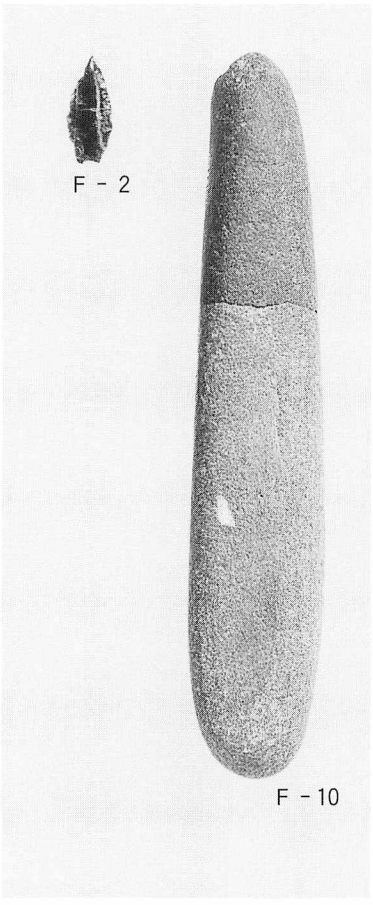
図版30



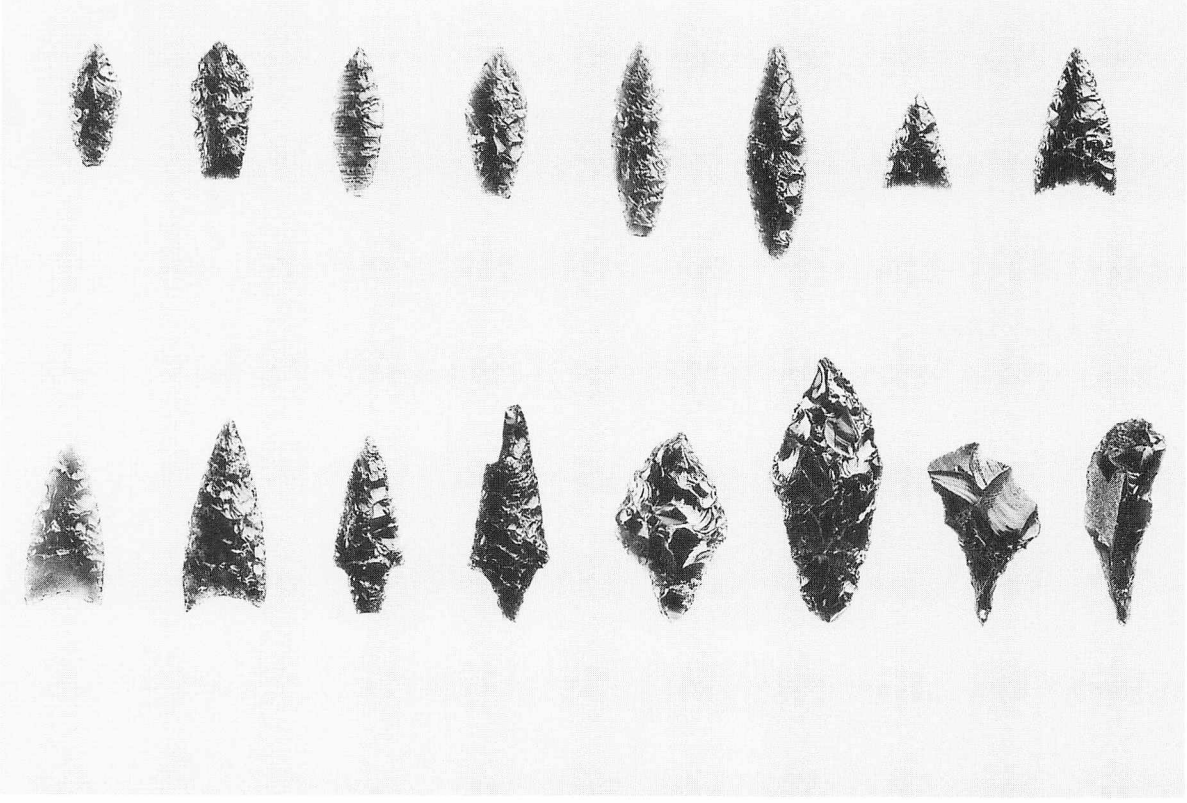
1　包含層出土の土器（２）



1　Ｔピット出土の石器

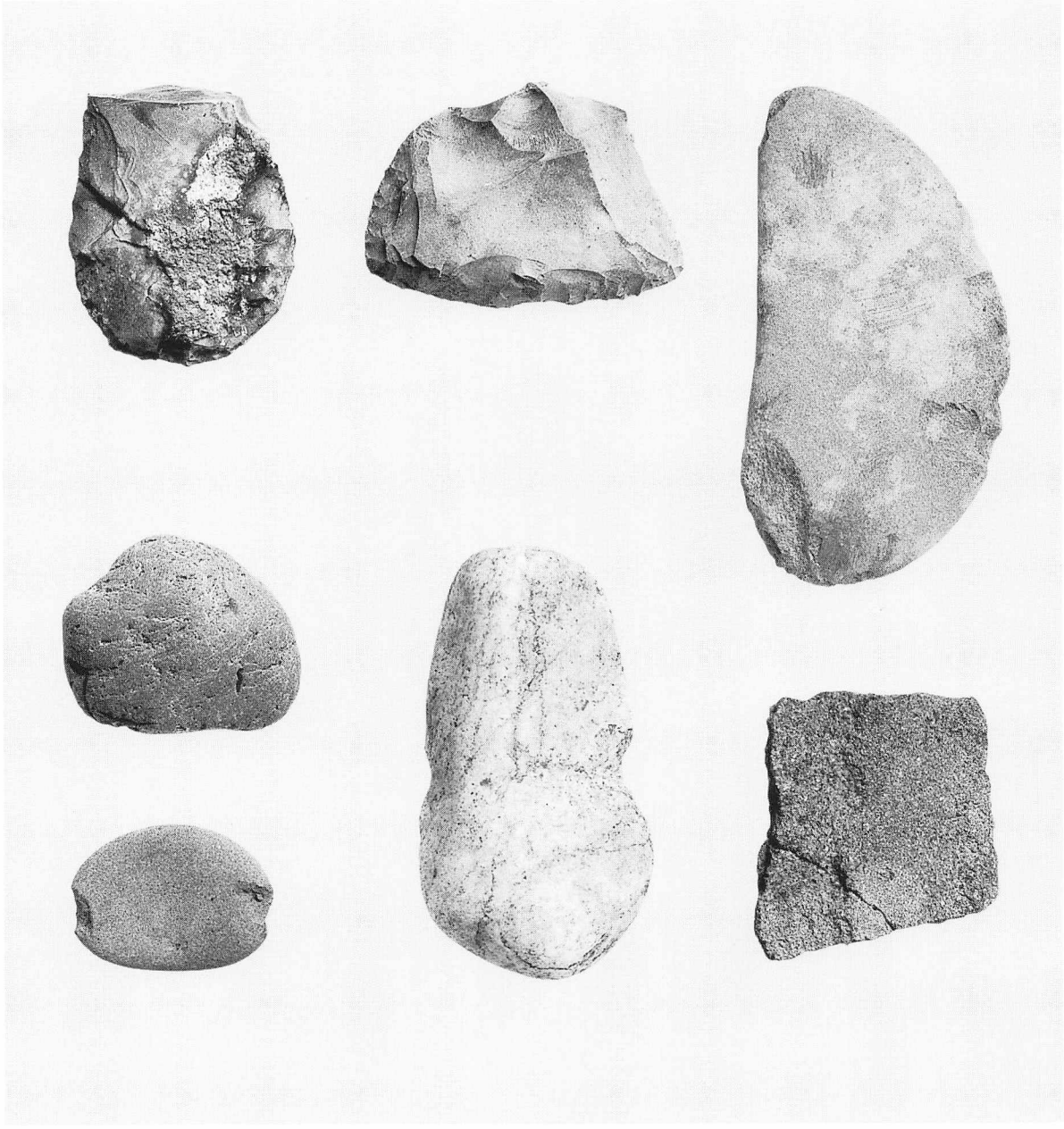


2　焼土出土の石器



3　包含層出土の石器（１）

図版32



1　包含層出土の石器（２）

引用・参考文献

赤石慎三　2002『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅷ』苫小牧市教育委員会

厚真町編　1986『厚真町史』厚真町

厚真村郷土研究会編　1956『厚真村古代史―村内に所在する先住民族の遺物―』同会・厚真村教育委員会』

厚真村広報委員会編　1956『厚真村史』厚真村

池田国昭・羽坂俊一・村瀬　正　1995「北海道勇払平野の完新統分布と地形発達」『地質調査所月報』第46巻第6号

池田　実・亀井喜久太郎　1976『厚真の旧地名を尋ねて』

犬養哲夫　1952「北海道の鹿とその興亡」『北方文化研究報告』7

今村啓爾　1983「陥穴（おとし穴）」『縄文文化の研究2　生業』雄山閣

大泉博嗣　1987「第2節　遺構の分類　落とし穴」『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』苫小牧市教育委員会

大嶋和雄　1991「地球温暖化の影響量評価とその対策」『地質ニース』445号

大泰司　統　2002「切り合うＴピット」『北海道考古学』38

大沼忠春　1986「施文原体の変遷―東釧路式土器」『季刊考古学』17　雄山閣

木村尚俊　1980「縄文早期」『北海道考古学講座』みやま書房

工藤肇・兵藤千秋ほか　2002『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅸ』苫小牧市教育委員会

河野広道　1972『続北方文化論』河野広道著作集Ⅱ　北海道出版企画センター

古原敏弘　1982『駒場7遺跡における考古学的調査』静内町教育委員会

小山正忠・竹原秀雄　1996『新版標準土色帖1996年版』

近藤　務・五十嵐八枝子・吉田充夫・赤松守雄　1984「北海道苫小牧市静川ボーリング・コアにみられる第四系」『第四紀研究』22

佐々木利和編・山田秀三監修　2000『北海道の地名―アイヌ語地名の研究―　別巻』草風館

佐藤一夫・工藤肇ほか　1986『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅰ』苫小牧市教育委員会

佐藤一夫・工藤肇ほか　1987『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』苫小牧市教育委員会

佐藤一夫・工藤肇ほか　1990『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』苫小牧市教育委員会

佐藤一夫・工藤肇ほか　1992『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』苫小牧市教育委員会

（財）北海道埋蔵文化財センター　1983『旭町1遺跡』北埋調報10

（財）北海道埋蔵文化財センター　2001『鵡川町　米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡』北埋調報153

（財）北海道埋蔵文化財センター　2002ａ『鵡川町　宮戸4遺跡』北埋調報168

（財）北海道埋蔵文化財センター　2002ｂ『白老町　虎杖浜2遺跡（2）』北埋調報172

（財）北海道埋蔵文化財センター　2003『鵡川町　米原4遺跡（2）・宮戸4遺跡（2）』北埋調報185

許　成基・山崎　誠・佐高裕之・中川昌巳・秋山泰祐・平野令緒　2001「支笏火山噴出層年代の再検討」『地球科学』55巻

田才雅彦　2001『豊川1遺跡』厚真町教育委員会

田才雅彦・宗像公司ほか　2002『米原5遺跡』鵡川町教育委員会

土肥研晶　1996『川端遺跡・川端2遺跡』由仁町教育委員会

戸刈賢二・土屋　篁　2000『北海道の石』北海道大学図書刊行会

苫小牧市編　1998『苫小牧市のあゆみ』苫小牧市

苫小牧市編　1975『苫小牧市史上巻』苫小牧市

永田方正　1984『初版　北海道蝦夷語地名解』復刻版　草風館
西田　茂　1993「ふたたび東釧路Ⅱ式土器について」『考古論集』潮見　浩先生退官記念論文集
西田　茂　1995「東釧路Ⅱ武土器について」『北海道考古学』31
西脇対名夫・宗像公司　2001『鯉沼２遺跡』厚真町教育委員会
北海道廳編　1918『北海道通史第一』
北海道編　1970『新北海道史　第二巻通説』北海道
ペドロジスト懇談会編　1984『土壌調査ハンドブック改訂版』
松浦武四郎著・吉田常吉編　1984『新版　蝦夷日誌（上)』時事通信社
松浦武四郎著・秋葉實解読　1985『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』北海道出版企画センター
宮夫靖夫　2000「苫東遺跡群における集落の様相」『苫小牧市埋蔵文化財センター所報』２
宮夫靖夫　2002『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅵ』苫小牧市教育委員会
宮夫靖夫・工藤肇ほか　2002ａ『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅶ』苫小牧市教育委員会
宮夫靖夫・工藤肇ほか　2002ｂ『苫小牧市東部工業地帯の遺跡群Ⅹ』苫小牧市教育委員会
森田知忠・遠藤香澄　1984「Ｔピット論」『北海道の研究１　考古篇Ⅰ』清文堂
山田秀三　1972『北海道の川の名』増補版　モレウ・ライブラリー
山田秀三　1988『アイヌ語地名資料集成』草風館
山内清男　1979『日本先史土器の縄立』先史考古学会

報告書抄録

ふりがな	あつまちょう　はまあつまさんいせき
書名	厚真町　浜厚真３遺跡
副書名	日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第186集
編著者名	遠藤香澄・鎌田　望・笠原　興・芝田直人・山中文雄
編集機関	㈶北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069-0832　北海道江別市西野幌685－１　ＴＥＬ011-386-3231
発行年月日	西暦2003年３月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
浜厚真３遺跡（はまあつまいせき）	北海道（ほっかいどう） 勇払郡（ゆうふつぐん） 字浜厚真（あざはまあつま） 525－１ ほか	01581	Ｊ-13-72	42° 36′ 36″	141° 51′ 37″	200207029 ～ 20021025	3,390	高規格道路建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浜厚真３遺跡	遺物包含地	縄文時代早期・後期	Ｔピット　173基 焼土　14か所 土坑　１基	縄文・続縄文時代の土器　780点 （東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅳ式、タプコプ式、御殿山式、後北式） 石器等　2,648点 （石鏃、石槍・ナイフ、石錐、スクレイパー、ピエス・エスキーユ、石核、石斧、すり石、たたき石、くぼみ石、石錘、砥石、礫、フレイク）	Ｔピット群

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第186集

厚真町　浜厚真３遺跡

—日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成15年３月26日

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832　江別市西野幌685番地1
☎011(386)3231　FAX011(386)3238
[E－mail] mail@domaibun. or. jp
[URL] http : //www. domaibun. or. jp
印　　刷　社会福祉法人　北海道リハビリー
〒061-1195　北広島市西の里507番地1
☎011(375)2116　FAX011(375)2115